れて背負ひ行くもの。匣の如くして脚あり。扉ありて開閉す。

おひきなうし　御引直衣【名】下襲の裾を長く引ける故にいふ。主上、上皇の、通常の御服なり。

おひげのちりをはらふ　拂二鬚塵一【文】諛び諂ふこと。「寇萊公、(準)、爲レ相。丁謂、參政知事。嘗會二食都堂一、羨染二公鬚一。謂起拂レ之。公正レ色曰、身爲二執政一、親爲二宰相一、拂レ鬚耶。謂慙」と事文類聚にあり。

おひて　追手【名】順風なり。追手の風。後より吹く風。

おびどき　帶解【名】女兒七歳の賀儀なり。吉方に向はしめて、附紐なき着物を着せ、帶を結ばしむ。また、「帶なほし」といひ、「紐解き」ともいふ。女兒の三歳を「髪置」、男子の五歳を「袴着」といふ。俗に、三つの祝、五つの祝、七つの祝といふ。

おひまくる　追捲【動ラ四】はげしく追ひ立つること。

おふ　追、逐【動ハ四】追は、逃るものをおふこと。追求。追窮。また過ぎたることをあとより思ふこと。追憶。追想。追懐。逐は、彼方へ物をおひ拂ふこと。驅逐。放逐。逐客。

おふつみやう　御佛名【名】十二月十九日より二十一日まで三日間、朝廷にて、三世の諸佛の名號を唱ふる公事。光仁天皇の寶龜五年より始まれり。

おふなおふな　隨分【副】身のほど。相應に。身のほどを盡して。力の限り。それ相應に。

おぺら　Opera【名】英語。わが國の演劇に同じ。

おほあらめのよろひ　大荒目の鎧【名】大荒目は、大荒間の義にて、鎧の札を、革二枚も三枚も重ね、鐵の札等も交へて厚くして、繊糸も太くして、荒く綴りたる鎧。故に、重くして、勝れて力量強き者ならでは、着難しとぞ。

おほいし　まさら　大石眞虎【名】尾州名古屋の人。畜に巧にして、その百人一首一夕話に畫ける繪は、有職家の珍とする所。天保四年四月歿す。年四十二。

おほいし　よしを　大石良雄【名】播州赤穗藩の老職なり。元祿十四年三月、藩主淺野長矩、江戸城中に於て吉良上野介義央を刃傷し、遂に大不敬の罪に坐して即日死を賜はり國除せらる。明年十二月十四日、良雄、同志四十七士と、吉良家を襲ひて仇を復し、明十六年二月四日死を賜はる。

おほいそ　こいそ　大磯、小磯【名】地名、相摸國中郡大磯町。小磯は東小磯、西小磯と分れて、共に大磯町の小字となれり。其海岸は、古これを、小餘綾の磯といへりき。小餘綾は、またコユルギともいへり。今は、これまた、大磯町に屬せり。明治二十九年までは、郡名をも淘綾といひき。

おほいまうちぎみ　大前君、大臣【名】太政官の長官にて左右大臣をいふ。大いは、大きの音便、まうちぎみは、まへつ君(前之君)にて、陛下の前に仕ふるものの義といふ。

おほうち　よしたか　大内義隆【名】義興の長子。義興既に中國を風靡して、義隆これを嗣ぎて、また撥亂の功を成し、名聲いよ〳〵重くなるに至りて、大に武事を忘りしかば、遂に家臣陶晴賢の爲に弑せらる。時に天文二十年九月なり。年四十五。

おほえ　まさふさ　大江匡房【名】匡衡の曾孫、信濃權守成衡の子。幼にして、書に通じ詩を賦し、神童の稱あり。初、關白藤原賴通に給事し、後に、後三條帝に擧用せられ、三代に師範として、堀河帝のとき、權中納言大宰權帥となり、正二位に累進し、天永二年大藏卿となりて薨ぜり。年七十一。江帥と稱す。博識を以て、藤原長房、伊房と世に三房と稱せらる。

おほえ　ちさと　大江千里【名】參議音人の子。延喜三年、兵部大丞となる。

おほえ　あさつな　大江朝綱【名】玉淵の子。音人の孫。村上帝の朝に仕へ、累進して參議兼備前美作等の守を經て、正四位下に至り、天德の初に卒せり。年七十二。祖父音人を江相公といふに對して、朝綱を後江相公といふ。相公は宰相の義。宰相は參議の唐名。

おほかうち　ひでつな　大河内秀綱【名】金兵衛と稱す。父信眞、德川家康に仕へて遠州神原の地を領せり。初め吉良義昭に隷し、義昭一向徒の亂に黨せる時これに從ひ、德川氏の攻むるところとなりて、出奔するに及び、秀綱、節義を守りて沈淪すること四十四年、晩に伊奈忠政に屬し、剃髪して休心と號し、元祿四年歿せり。年七十三。

おほかがみ　大鏡【名】文德天皇より、後一條天皇までの國文の歷史。帝王と大臣と部を分ちて記せり。作者は藤原爲業なりといふ。雲林院の菩提講に、翁二人來あひて、古物語をなせる體に書きなしたるものなり。

おほかげ　大鹿毛【名】馬の名。源義經の馬に大鹿毛あり。陸奥にて名を得たる逸物にて、藤原秀衡より義經におくりたるものとぞ。

おほくぼ　しぶつ　大窪詩佛【名】名は天民、詩聖堂、瘦梅などの號あり。常陸の人。江戸に出でゝ、詩人として、また、書家畫家として名ありき。天保八年歿せり。

おほくめ　大久目、大來目【名】くめのあたへを見よ。

おほけいづ　大系圖【名】書名。三十卷あり。西道智の著。卷首に、新編纂圖本朝尊卑分脈系譜雜類といへり。明曆年中の編集にて、洞院公定の「尊卑分脈」に基きて、諸家の系圖を增補集成したるものなり。

おほけなく 大氣なく 負氣無 【副】形容詞の副詞法なり。身分不相應に。過分に。

おほさかおやうばん 大阪定番 【名】大阪には、城代、定番、在番、加番、町奉行等あり。定番は二人あり。玉造口。京橋口の二ケ所を守る。役料三千俵にして、其の配下に、與力三十騎、同心百人宛あり。同心は、即、與力の下に使はるゝ卒。

おほしほこうそ 大鹽後素 【名】名は平八郎。大坂町奉行組の與力。王陽明派の學者。天保八年三月、一揆を起し、事成らずして遂に自殺す。年四十二。

おほしま 大島 【名】地名。伊豆七島の一にして、同國、西南方の海中にあり。東京より四十七里餘。

おほたきんじやう 太田錦城 【名】名は元貞、字は公幹、通稱は才佐といふ。錦城は其の號なり。加賀の人にて、前田侯の文學となれり。文政八年四月歿す。享年六十一。

おほたたん 太田覃 【名】南畝、蜀山人、四方赤良などの號あり。通稱直次郎。狂歌を以て著る。文政六年四月歿す。年七十五。

おほたによしたか 大谷吉隆 【名】盛治の子、姓は平氏、本名を吉繼といふ。豊後の人。初め石田三成に依りて秀吉に仕へ、能く秀吉の心を得たり。慶長五年、家康の東伐に從はんとし、途に三成に誘はれて謀に與せしめらる。吉隆其の成らざるを知れども、棄捨て難く、遂に關が原に故死せり。

おほつ 大津 【名】地名。近江國滋賀郡にある町。

おほつかうしやく 大塚孝綽 【名】通稱大助、田安家の世臣なり。寛政四年七月歿す。年七十四。松平樂翁の傅。

おほつきしうじ 大槻修二 【名】磐溪の子。如電と號し、東京に現在せり。故實に博通せるを以て名あり。

おほつきばんけい 大槻磐溪 【名】名は清崇、字は士廣、通稱平次。仙臺藩の儒者なり。幼にして顯敏に、長じて昌平黌に入る。才學一時に高し。明治十六年六月歿す。年七十八。

おほつきばんすゐ 大槻磐水 【名】名は茂質、玄澤と號せり。仙臺藩に仕へて侍醫となり、又幕命によりて蘭書を翻譯せり。實に、本邦蘭學者の祖なり。文政十年三月、享年七十一にて歿す。

おほつきばんり 大槻磐里 【名】名は茂幹、磐水の子、蘭學を學び、文化九年蕃書和解の命を蒙り、天文臺に奉仕す。天保八年十二月歿す。歳八十二。

おほつきふみひこ 大槻文彦 【名】文學博士。磐溪の子にして修二の弟なり。青海、廣日本文典の著者。

おほつのみや 大津宮 【名】天智天皇の宮なり。宮地は、近江國滋賀郡滋賀村大字南滋賀の邊ともいひ、また、大字錦織の邊ともいへり。この帝都たりしは、僅に拾年にして、天武帝は、大和國飛鳥淨見原に遷都あり。

おほつのみやのぎよう 大津宮の御宇 【名】天智天皇の御代。

おほて 大手、追手 【名】城の前門をいふ。裏手の方を搦手（カラメテ）といふ。表より迫めて裏手にて搦め取る意なりといへり。追大手（オフオホテ）の假名遣へども併用したり。

おほどかに 【副】大らかに。大樣（オホヤウ）に。大風（オホフウ）に。

おほとなぶら 大殿油 【名】燈火をいふ。

おほとのごもる 大殿籠 【動ラ四】おやすみになる。貴人を寢殿に入らせ給ふをいふ。

おほともくろぬし 大伴黒主 【名】貞觀中に、園城寺の別當となれり。六歌仙の一人なり。

おほとものみこ 大伴親王 【名】大伴は淳和天皇の御諱なり。

おほとものわうじ 大友皇子 【名】弘文天皇をいふ。

おほともべ 大伴部 【名】上古の武士の部族の名。長官を大伴連（オホトモノムラジ）といひ、天押日命の子孫これに當り、大伴部を率ゐて朝廷を守衛せり。

おほとり けいすけ 大鳥圭介 【名】徳幕府の臣なり。戊辰の役に榎本武揚と五稜廓に據れり。維新後、元老院議官、學習院長、華族女學校長となり、また清國特命全權公使たり。現に樞密顧問官男爵なり。

おほなかとみすけちか 大中臣輔親 【名】祭主能宣の子。父につぎて祭主となり、神祇伯に任ぜらる。長曆二年薨ず。年八十五。

おほなむちのかみ 大汝神、大巳貴神、大名持神 【名】大國主神、大物主神、八千戈神（ヤチホコノカミ）、葦原醜男神（アシハラシコヲノカミ）、顯國魂神（ウツシクニタマノカミ）、大國玉神などとも申しまつれり。須佐之男尊（スサノヲノミコト）の御子とも、六世の孫とも、申す。出雲にありて國土を經營して、皇孫瓊々杵尊に譲り奉られたり。

おほにはのむくのき 大庭の椋木 【句】紫宸殿の前の大庭の椋の木なり。平治物語の重盛と惡源太との合戰のところに「大庭の椋の木を中に立てゝ、左近の櫻、右近の橘を七八度までおひまはして」とあり。

おほにへ 大贄 【名】大嘗會（ダイジヤウエ）を見よ。

おほのかに 【副】大のさに。大ざかに。おほざかにを見よ。

おほばん 大番 【名】諸國より交番上京して、禁中を護衛し、洛中を警備する武士をいふ。大番頭令にて定めたる所。武家時代に至りても、尚ほ然り。大番役とも、大番衆ともいへり。

おほばらひ 大祓 【名】いにしへ、六月、十二月の晦日に、百官を朱雀門に會せしめて行ひし神事にして、半年間の罪穢

を祓ふ式。今も、皇室をはじめ、各神社に行はる。六月のを夏(ナ)越(ゴシ)の祓(ミナヅキバラヘ)ともいふ。

おほひえうつされたるうへののをか 大比叡移されたる上野の岡 【句】東京の上野の東叡山寛永寺は、近江の比叡山延暦寺に擬して建てられたればなり。

おほふな 大船 【名】地名。相模國鎌倉郡にあり。東海道鐵道と横須賀線との支點地。

おほまへつぎみ 大前君、大臣 【名】まへつぎみを見よ。

おほみいづ 大御稜威 【名】天子の御威勢をいふ。稜威は鋭き勢なり。

おほみき 大御酒 【名】大御(オホミ)は、やむことなき事物に添へて、敬ひいふ詞。

おほみたから 大御寶 【名】人民。百姓。

おほみてぶり 大御手風 【名】てぶりは風俗の意。

おほみや 大宮 【名】大きなる宮殿、また大后(オホキサキ)といふに同じく、皇太后宮をいへり。榮花物語に治安三年五月、大宮、土御門殿に、田植を御覽ぜられしよし記せる大宮は、藤原道長の女、皇太后彰子なり。

おほみやおもて 大宮表 【名】平安城の東にありて、南北に通せる大路、即ち大宮大路をいふ。

おほんなごり 御名殘 【名】おほんは大御(オホミ)の音便。なごりに同じ。

おほもり 大森 【名】武藏國荏原郡大森村。品川灣に臨める海濱。

おほやけざま 公樣 【名】おもてだちたる事。

おほやま 大山 【名】相模國大住郡にあり。山頂に縣社雨降神社あり。大山祇神を祀る。

おほやまつみ 大山積、大山津見、大山祇 【名】山を掌る神の御名。

おほゆか 大床 【名】廣廂をいふ。また、庇樣ともいへり。母屋(モヤ)の外に、一間通り差出でたる處をいふ。

おぼろかに 凡 【副】おろそかに、なほざりに。よい加減に。おぼろげに。

おぼろげに 朧氣に、朦朧に 【副】ぼんやりと。不分明に。たしかでなく。はつきりせずに。ありの動詞に合しては、朧げなりと活く。おぼろげの志は一通の心、なほざりの志などいふ意。

おぼろなり 朧、朦朧 【動ナ變】朧にてありの約。分明ならぬをいふ。

おほわだ たけき 大和田建樹 【名】伊豫宇和島の人。現に東京に住せり。謠曲通解日本大文學史等の著書あり。

おほわらば 大童 【名】大人の亂髮の狀をいふ。

おほゐがは 大井川 【名】東海道に有名なる大川なり。源を甲斐、信濃の國界なる白根山中に發し、駿河國の西を海に入る。

おほゐがは 大堰川 【名】丹波より山城に入れる川なり。嵐山の前を流る。下流を桂川といふ。

おほゐがはぎやうかうわかのじよ 大井川行幸和歌序 【名】大井川行幸は延喜七年九月十日、宇多法皇の御幸にして、日本紀略、醍醐天皇延喜七年の條に、「九月十日甲申、法皇召文人賦二眺望九詠之詩一」と見え、新拾遺集に、「延喜七年、大井河に行幸の時、序奉りて、泛秋水といへることをよめる、紀貫之云々」とあるこれなり。

おほゐのはいだい 大炊の廢帝 【名】諱は大炊。天武帝の孫、舍人親王の王子なり。天平寶字二年即位し、孝謙上皇に廢せられて淡路に遷さる。天平神護元年十月崩ず。壽三十三。淡路國三原郡淡路に葬る。世に淡路廢帝といふ。明治三年、淳仁天皇と諡す。

おほゐみかど 大炊御門 【名】平安城の郁芳門をいふ。また、其の表の道路を、大炊御門大路といふ。今の竹屋町なり。

おほゐみかどがはら 大炊御門河原 【名】地名。京都の大炊御門大路の加茂川に接したるところ。

おほをか ただすけ 大岡忠相 【名】越前守と稱す。德川八代將軍吉宗に擢かれて、山田奉行より普請奉行に轉じ、轉いで江戸町奉行となる。世に、其の明斷を稱せり。元文元年寺社奉行となり、寬延元年壹萬石を食みて諸侯に列し、奏者番を兼ぬ。寶曆元年致仕して卒せり。年七十五。

おんが 温雅 【名】おだやかにて品よきこと。詩文の評語などに用ふ。

おむかし 面向 【形】おもしろし。おかし。よろこばし。好ましし。

おんすう 温菘 【名】大根の一名。

おむろ 御室 【名】にんなじを見よ。

おんぎやうのじゆ 隱形の咒 【名】兩部派の語。咒文を唱へて、身を隱す法。

おんこじゆ 棋楠樹、水松 【名】木の名。アイヌ語にて、一位ともあららぎともいふ木。葉は、椎に似て柔く、豆の如き實を結ぶ。

おんこちしん 温故知新 【句】論語に「温レ故而知レ新、可二以爲一レ師矣一」。注に、温は尋繹なり。故は舊聞、新は新知、いふ心は、もと習ふことを復習すれば、新に得るところありとなり。また一說に、古き昔の事もしらべて、新しき今の事も知ることといもいふ。

おんこほせ 御問 【名】問ひの敬語なり。

おんばう 褞袍【名】綿入の衣。

おんへりう 御家流【名】おいへりうを見よ。

おんらい 恩賚【名】たまもの。

おんろん 音韻【名】語學の語。音とは、人の聲の、一氣に出でゝ單純なるもの。こゑ。韻とは其の音聲のひゞきをいふ。

おんをほどこしては、おもふなかれ、めぐみをうけては、わするるなかれ 施レ恩勿レ念、受レ惠勿レ忘【文】袁采曰く「古人、施レ人勿レ念、受レ施勿レ忘、滅二爲レ難事一」とあり。司馬溫公曰はく「受二人恩一而不レ忘者、其爲レ子必孝、爲レ臣必忠」。

おもてとかげ 表與レ影【句】形と影、呼と響との如く、相連結して離すべからざるにいふ。兩者離れざる者にたとふ。「親子は表と影との如し」。

おもてぶせ 面伏【名】不面目。譽を失ふ。おもぶせ。

おもてをふらず 面を振らず【句】側目(ワキメ)もせず。顏をそむけず。

おもにに、こづけ 重荷に小付【句】苦勞のある上に、また苦勞の生ずること。後撰集「年のかず、つまんとすなる、おもにには、いとどこづけを、こりもそへなん」。

おもひあがる 思上【動ラ四】我こそと自負すること。自慢する。おもひたかぶる。

おもひやすらふ 思休、思猶豫【動ハ四】思案して、躊躇するをいふ。やすらふを見よ。

おもふ 思、憶、念、想、惟、顧【動ハ四】思は、思案すること。慕ふこと。憶は、思出すこと。「憶昔」。念は、常に心にかけて思ひ居ること。想は、無形物を想ふ。想像。惟は、一心に思ふこと。恭惟。「伏惟」。顧は省みる思ふこと。

おもふどち、かいつらねて 思ふ同士掻い列ねて【句】親友と連れ立ちて。かいは、かきの音便にて、添はれるまでの詞。

おももち 面持【名】顏つき。樣子。

おやしらずこしらず 親知らず子知らず【名】越後西頸城郡の海岸に、俗に斯く稱する處あり。立山の裾、斷巖絕壁の下の波打際にて、こゝを通行する旅人の、ややもすれば、波にさらはるゝ故に、親子も、共に相かへり見る暇なしとの謂にて、此の稱ありとぞ。

おやにかかるとき、こにかかるをり 親に憑る時、子に憑る折【句】子が親に賴る時もあれば、親が子に賴る時もありとの意。

およぶすく 【動カ下二】智慧づく。大人(オトナ)らしくなる。ませる。

およびがてに 及難に【副】及びがたけに。及びさうもなくて。

おらぶ 叫【動ハ四】さけぶ。大ごゑによぶ。萬葉集に「さけびおらびて」などいふ詞見え、日本紀にも、叫、また、哀號の一字をおらぶとよめり。

おりたつたご 下立つ田子【句】田に下り立ちて耕作する農夫。

おりんぴや Olympia【名】古代の希臘の地名。

おろし 卸、卸【名】俗にお下(サガリ)といふ。貴人などに奉れるもの、其の用はてて、下(シモ)さまにさげたる食物などをいふ。「大饗の卸米」といへば、大饗に客人に奉りし米のおさがりなり。また、商品を問屋より小賣商に取り纏めて賣り渡すをいふ。

か

か 乎、邪、耶、歟【助】疑問、又は反語の意。又、詠歎の意を示す。

かあう 苛烕【名】まがつみ。むごたらしき災禍。呂覽「凶氣不レ入二身無一二苛烕一」。

かい 艾【名】老人をいふ。曲禮に「年五十曰レ艾」。艾老。

かいえき 改易【名】族籍を改め易ふる義といふ。德川時代の刑律の一なり。士は族籍を除き、家祿を沒して、素浪人となし、民には所拂ひとなして、家財を沒收す。

がいか 凱歌【名】かちどき。戰爭に勝ちて唱ふ歌。司馬法「得レ意則凱歌。示レ喜也」。

かいかい 僩僩【副、形】強壯なる貌。詩經「僩僩君子」。

かいかい 喈喈【副、形】なり物の調の合ふもと。太元樂「鐘磬喈喈」。又鳥のやはらぎなくれをもいふ。詩經「其鳴喈喈」。

かいかい 潰潰【副、形】水の盛に流るゝ狀。詩「淮水潰潰」。

がいがい 喈喈【副、形】犬の吠ゆる聲。猖猖、喤喤に同じ。

がいがい 皚皚【副、形】霜雪の白きをいふ。轉じて、總て、物の白きにいへり。杜甫の詩「崖沈谷沒、白皚皚」。

かいかがまる 搔屈【動ラ四】屈曲したるをりまがりたる身をかがめてある。搔は意をつよむる接頭語。

かいかふ 開閤【名】開き閉づる義より、世話をする役にいふ。宮中和歌所にこの職ありて、書物の出納及雜務を司りたり。又鎌倉幕府の侍所なるは、簿書を記錄し、文案を檢查することを司りたるが、引付衆の雜職なりき。

かいき 皆既【名】星學の語。日蝕、または月蝕の時、その日月の面の、殘らず暗くなるをいへり。

かいぎやく 諧謔【名】滑稽に同じ。おどけ。しやれ。晉書の顧愷之傳「愷之好二諧謔一、人多愛レ狎レ之」。

かいぐんたいふ 海軍大輔【名】明治五年二月廿八日兵部省を廢して、陸軍省海軍省を置き、其の長官を卿といひ、次官を大輔少輔といひき。

かいぐんれきし 海軍歷史【名】書名。勝安房の著。我が國海軍發達の歷史なり。

かいくわんぜい 海關稅【名】輸入の物品に對して課する稅をいふ。貿易港には、稅關ありて、出入の物貨を檢して、關稅を課す。

かいげん 改元【名】いにしへにては、帝王の代替りの年に、改めて元年を稱すること。後には、年號を改むることにいへり。

かいご 註誤【名】あやまりまごはすこと。漢書「相脅註レ誤

其民」。

かいこくへいだん 海國兵談【名】十六卷あり。林子平が外國に對する戰備を論じたるものにて、天明六年の自序あり。寬政三年出版す。水戰、陸戰、斥候、夜軍、人數扱、器械、糧米、地形、城制、城攻、城守、騎射、の事より、富國強兵策に論及せり。

がいさい 解菜【名】精進おち。開葷。開齋。

がいさいのうらみ 睚眦之怨【句】睚眦はにらむこと。ちよつとにらまれたほどの怨。僅少の怨。史記「睚眦之怨必報」。

かいさん 海參【名】いりこ。海鼠を乾したるもの。ほしこともいふ。

かいざん 改竄【名】竄も改め易ふるにて、文章などをあらためなほすにいふ。「改レ竄詩句」。

がいざん 崖山【名】地名、支那廣東省新會縣の南、鉅海中にあり。張世傑が、宋の幼帝を奉じて、忠死せる處。

かいし 丐子【名】乞食。丐兒。ものもらひ。東京にて「おたすけ」。

かいしのぎ 櫂鎬【名】鎬とは、太刀のみねと刃との間に、高く稜の立ちたる處。櫂鎬とは、この鎬に角を立てすして、丸みをつけ、舟の櫂の如く、扁みに少し肉をつけたるをいふ。貝鎬とかくは借字なりと安齋隨筆にいへり。

かいしん 介心【名】大きやかなる心。「君子介心」。

かいしやく 介錯【名】後見に同じく、介抱する者をいふ。則、附添人なり。また、切腹のとき、附添ひ居て、首を斬る人をもいふ。

かいじやく 海若【名】海神。西京賦に。「海若游二于洛一」。又、若とのみもいふ。莊子に「向レ若而歎」。

かいぜい 海澨【名】海邊の水際をいふ。江淹の詩に「且泛二桂湖水一映レ月遊二海澨一」。

がいせい 蓋世【名】一世に秀でたるもの。史記「項羽本紀」「力拔レ山氣蓋レ世」。また「蓋世之雄」など。

かいせいじよ 開成所【名】德川幕府の學校なり。安政二年、將軍家定の創めし學問所にして、初、洋學所と稱し、蘭書のみを教授したり。安政三年、蕃書調所と改め、文久二年、また、洋書調所と改稱し、翌年、更に開成所と改む。此時に至りては、英、佛、獨等の學、および、數學をも教授し、後には、理化學をも加へたり。明治元年、朝廷これを再興して、同二年南校と改稱し、もつぱら、洋學を講ずる所とし、諸藩に令して人材を選び、此の校に入れて、洋學を修めしむ。後六年、また、開成學校と稱し、十年、遂に、大學の一部となる。

がいせつ 剴切【名】ひつたり合ふこと。最も、適切なること。

と。「引證剴切」など。唐書の魏徵傳「二百餘奏、無下不二剴切一當二帝心一者上」。

かいぜん 介然 【副、形】 さびしきこと。獨り居る貌。獨行。老子「使二我介然一」。

がいぜん 慨然 【副、形】 いかにもなげかはしき貌。なげきて、志を奮ひ起す貌。後漢書陳蕃傳「慨然立二志一」。

がいせんもん 凱旋門 【名】 佛國巴里の凱旋門は、ナポレオン一世が、埃國オーステルリーツの戰捷の紀念として、築けるものにて、石造にして弓形をなし、四大柱にて、之を支へて、四方に往來を通ず。高五十メートルあり。凱旋は、戰勝ちて凱歌を唱うて師を旋すこと。

かいぜんばんり 階前萬里 【句】 御所の階の前が、萬里もありて、階下の人民が見えぬとの譬にて、下情の君に通ぜざるをいふ。

かいそく 開塞 【名】 開くと塞ぐとの意より、取捨の義に用ふ。「文開塞所宜」。

がいたい 駭態 【名】 (駭は痴なり)。愚なる樣子。

かいだう 海道 【名】 沿海地方を通ずる街道。東海道をいふ。「海道下り」。「武邊海道第一」。

かいたうふどき 海島風土記 【名】 書名なり。寫本、四册あり。佐藤行信、吉川秀道の撰。

かいたくし 開拓使 【名】 明治二年八月、蝦夷を改めて北海道と稱し、十二國と定め、之を管する爲に置きし官なり。今の北海道長官に同じ。

かいだて 垣楯 【名】 陣を張るとき、楯を垣の如く、つき並べたるをいふ。又、楯ならでも、つき並べて楯の如くしたるをもいへり。太平記船上合戰の條に「房舍の甍を破りて、かい楯にかけろ計なり」など見えたり。

かいづ 海津 【名】 地名。近江高島郡にあり。越前街道の西路。又、信濃埴科郡今の松代をも海津(具津)ともと呼びたり。

かいつれて 搔伴れて 【句】 それに伴ひて、又、いつしよになつて、などの意。かいは、搔きの音便にて、添はれるまでの語。

かいてう 介胄 【名】 よろひかぶと。具足。介甲。史記に「介胄之士」とあるは、甲胄をつけたる士にて、葉武者ならぬをいふ。

がいてい 剴悌 【名】 心だてのよきこと。詩經「剴悌君子」。

がいてい 孩提 【名】 孩は小きこと、提は手にさぐることにて、小兒の幼稚にして愛らしきをいふ。孟子盡心篇「孩提之童、無不知愛其親也」。

かいねり 搔練、皆練 【名】 衣服の裏表とも、練りたる絹にて製れるもの。色は種々ありといへり。冬より春にかけて

さる女の服なり。

かいばら あつのぶ 貝原篤信 【名】 益軒と號せし人。

かいびやく 開闢 【名】 天地の開けはじめ。

かいふ 開埠 【名】 埠頭。港。

がいふう 凱風、颽風 【名】 南の風をいふ。正韻「南風謂之凱風」。

がいぶん 涯分 【名、副】 名詞なるは、「分際」の義にて、「身分」、「身のほど」、「ほど」、「かぎり」、などの意。副詞なるは、「涯分、軍略を廻らして」、など、「力のかぎり」、「できうるかぎり」、などいふほどの意。

かいへいだん 海兵團 【名】 各鎭守府にありて、海軍各兵員を訓練する所なり。

かいもちひ 搔餅 【名】 (搔煉(カイネリ)の餅の意といふ)。伊勢貞丈の秋帥に「かひもちひは、今世ぼたもちといふものなり」といひ、中島廣足は「そばがき」なりといへり。

かいやうたう 海洋嶋 【名】 支那盛京省に屬せる小島。黃海の北部にして、威海衞の北、旅順口の東に當り、明治二十七、八年日清戰役の時、大海戰ありし所。

かいやりすつ 搔遣捨 【動タ下二】 打ち捨つるをいふ。書きたるものなどを、反古にするなどをいへり。

かいらう 艾老 (名) 年五十を艾といふ。すべて老人をいふに用ふ。

かいらう 偕老 【名】 老いを偕にする意にて、夫婦の契をいふ。詩經「輿子偕老」。

かいらうぎよ 偕老魚 【名】 蝦魚の別稱。海老魚。

かいらうどうけつ 偕老同穴 【名】 夫婦の契り。白樂天の詩句より出でたる語。又海中にある貝の名。

かいらくゑん 偕樂園 【名】 水戸にあり。烈公齊昭卿の設けられたる庭園なり。偕樂の字は、孟子の「古之人君與民偕樂、故能樂」とあるによれり。

かいり 海里 【句】 英語の Knot にて、海上の里數。凡そ六萬八百六十七英尺に當る。

かいりふ 介立 【名】 孤立。たすけなきこと。又、際立ちて、普通の物とは肩を比べざるをいふ。文選「不群而介立」。

かいろう Cairo 【名】 地名。埃及の首府にして、ナイル河の東岸にあり。アフリカ第一の都會。

かう 督 【名】 かみの音便。督は衞門府、兵衞府の長官なり。

かう 郊 【名】 支那の天地の祭の名。冬至に、天を南郊(マチノソト)に祭り、夏至に、地を北郊に祭るなどいへり。又、邑外をいふ。

かうい 好意 【名】 親切なる心。「好意を以て之を助く」。又親しむ意。「好意を表す」。

かうい 更衣 【名】 ころもがへ。また、天皇の御衣を更へさ

せ玉ふ便殿に出仕して更衣を掌れるより起りたる名にて、女御の次に位して、天皇に親侍するを女房をいふ。

かうい 縞衣 【名】白色の服、男子用。詩經「縞衣綦巾」。

がういつ 豪逸 【名】猛くすぐれて縦なるをいふ。

かうう 衡宇 【名】木を横へたる軒。又、粗末なる家。陶淵明が歸去來辭に「乃瞻衡宇、載欣載奔」。

かうがやまをぬくちから 項羽が山を抜く力 【句】支那の楚の項羽、漢の高祖と天下を爭ひしが、漢兵遂に項羽を垓下に圍みたり。羽、依りて、夜密に酒を飲み、歌うて曰く、「力抜山兮、氣蓋世。時不利兮、騅不逝。云云」。

かううる 【名】人名。伊太利國王ビクトルエマニエルを輔けて、其の統一を成さしめし名相なり。一八一〇年生れ、一八六一年歿す。

かうえき 交易 【名】物品と物品とを交へて、商をなすこと。「互市貿易」。また、往來する義にもいふ。公羊傳「臣交易爲言」。

かうえつ 校閲 【名】書籍文書などの誤りをしらぶること。

かうえん 講筵 【名】書物の講義をする席。「講筵を開く」は、生徒を集めて、書を講ずること。

かうか 絳霞 【名】色の赤き霞。春に、山の端の赤く照りて、棚引ける霞をいふ。唐集石の竹詩に「積雪初消葛綠華、東風吹動絳綃霞」。

がうが 整牙 【名】強硬にして、人の云ふことなど、聞き入れぬをいふ。唐書元結傳「能學整牙保宗而全家自號整鬼」。また、文辭の用ひかたの平易ならぬをもいふ。韓愈の進學解に「周誥殷盤、佶屈聱牙」とあり。佶屈も、整牙も、雖澁の貌にいへり。

かうかい 耿介 【名】節を守りて動かざること。心明かに執るところ堅くして、世俗と相容れざること。

かうかい 沆瀣 【名】海の氣、露の氣、また北方の夜半の氣などをいふ。嵇康の琴歌「餐沆瀣分帶朝霞、吻翩翩兮遊大遊」。

かうがい 梗概 【名】あらまし。概略。

かうかう 抗衡 【動サ變】抗は對抗、衡は車軛上の横木なり。相對して遜け下らざるをいふ。史記陸賈傳に「欲以區區之越與天子抗衡爲敵國」。

かうかう 耿耿 【副、形】光の鮮明なるをいふ。文選「秋河曙耿耿」。また、不安の狀。楚辭「夜耿耿而不寐兮」。

かうかう 硜硜 【副、形】小石の如く、せまくかたくるしき小人の狀をいふに用ふ。論語「硜硜然小人哉」。

かうかう 滔滔 【副、形】水の白く光る狀。史記「鬻乎滔滔」。

かうかう 皓皓 【副、形】明かなる貌。又白く清き貌。詩經「皎日皓皓」。また、天などの廣さをいふ。皓皓と同じ。

かうかう 皐皐 【副、形】頑固にて理を知らぬにいふ。詩經「皐皐訾訾」。また、明なるにいふ。孟子「皐皐廣廣」。

かうかう 暭暭 【副、形】明なる貌。昊天と同義にもいふ。孟子「暭暭如也」。

かうかう 皜皜 【副、形】潔白なる貌。

かうかう 浩浩 【副、形】水の廣々としたるをいふ。書經「浩滔滔」天」。

かうかう 交交 【副、形】小さき貌。詩經「交交黃鳥」。

かうかう 灝灝 【副、形】水面、地面などの大なる狀をいふ。

かうかう 杲杲 【副、形】日光の明なるをいふに用ふ。

かうかう 狡狡 【名】狡狗に同じく、小犬なり。淮南子「狡狡之死也云々」。

かうかう 昂昂 【副、形】志の高きをいふ。また、馬の行く貌。楚辭「昂昂若千里之駒」乎」。又、高く擧れる貌。衆を抜きたる貌。晉書「昂昂然若鶏群之在鶏群」。

かうかう 衡行 【名】横行に同じ。孟子、「一人衡行於天下」。

がうがう 敖敖 【副、形】長き貌。或はいふ、欣ばしき貌。詩經「碩人敖敖」。

がうがう 嗷嗷 【副、形】聲の騒がしきをいふに用ふ。詩經「哀鳴嗷嗷」。また、うらみ罵る聲。楚辭「聲嗷嗷以寂寂兮」。

がうがう 囂囂 【副、形】聲の騒がしき狀。やかましき狀。詩經「讒口囂囂」。

かうがうし 神神し 【形】かみがみしの音便。何となく尊き樣をいふ。神さびてある貌。

かうかつ 狡猾 【名】わるがしこきこと。狡獪に同じ。

かうかん 浩瀚 【名】廣大なる貌。「廣瀚なる書物」。

かうがん 抗顔 【名】強情。つれなきこと。

かうき 綱紀 【名】およそ、網器之を張るを綱といひ、之を理むるを紀といふ。故に國家を張皇經理する意に用ふ。詩經「勉勉我王綱紀四方」。又、綱は大づな、紀は小づななり。國家の法度にたとふ。「綱紀を張る」。

かうき 告歸 【名】暇を請うて、家に歸るをいふ。史記「高祖爲亭長、時常告歸之由」。

かうき 康熙 【名】清代の最初の年號にて、六十一年續けり。その元年は、わが後西院天皇の寛文三年に當る。

がうき 號旗 【名】信號旗の略。あひづの旗。

がうき 剛毅 【名】志の確乎たること。心のしつかりしたること。論語「剛毅木訥近仁」。

かうぎ 抗議 【名】他人の言動に異議を申しこむこと。

かうぎ 交誼 【名】交際のよしみ。親しき交り。

かうぎ 厚誼【名】親切にする。厚き親しみ。

かうぎ 巷議【名】ちまたの議論。世のうはさ。或は、政治の得失に對する、野に在る者の議論。

かうきしん 好奇心【名】物ずきの心。

かうきやう 孝經【名】書名。十三經の一。孔子が、其弟子曾參に教へたる孝道の大意を載せたる書。

かうきろく 孝義錄【名】書名。幕府の板にして、五十卷あり。寛政年間出版す。附錄に復讐傳を添へたり。

かうくわ 考課【名】支那にて、官吏を採用する試驗。漢の時代に始まる。

かうぐわ 高臥【名】自ら高しとして世を隱遁して居ること。晉書「匿違二朝旨一高臥東山一」。

かうくわい 高會【名】盛會に同じ。漢書「收二羽美人貨賄一置酒高會」。

かうくわん 行官【名】使者。

かうくわん 交驩【名】共々によろこび交りて、心を獲ること。

かうけ 江家【名】大江氏をいふ。むかし、菅家と共に相並びて、學者の家たりき。

かうけ 高家【名】武家にて、家筋のよきものを「大名、高家」と並べいへり。また、幕府の役名にて、禮式、接待などの役を勤むる家をいへり。吉良、畠山、武田、織田、六角、などの家柄の子孫、これを世襲したり。

かうげ 香華【名】僧家の語にて、佛に奉する香と花とをいふ。

かうけつ 耿潔【名】あきらかにきよし。清潔に同じ。

がうけつ 豪傑【名】智力、勇力の勝れたるをいふ。楚辭の注に「千人才曰二豪傑一」。また、「德千人者謂二之豪傑一」といひ、呂覽の注には「才過二百人一曰二豪傑一」などもいへり。

がうけつ 膏血【名】人體のあぶらと血。「人民の膏血を絞る」とは、租稅を重くして人民を苦しむるをいふ。

かうげんれいしよく 巧言令色【句】巧言は、もの言ひを好くすること。令色は、其の顏色をよくすること。愛敬を顏に見せて、口まへをよくするをいふ。論語「巧言令色鮮矣仁」。

かうこ 哮唬【名】虎の吼ゆる聲。

がうこ 虓虎【名】怒りほゆる虎。詩經「闞如二虓虎一」。

かうこうらい 高勾麗【名】こくらいともいふ。今の朝鮮の以前にありし一國なり。東明王名は朱蒙、國を建ててより七百五年、第二十八代寶藏王に至りて亡ぶ。我が紀元一千三百二十八年に當れり。當時、朝鮮は、高勾麗、新羅、百濟の三國鼎立なりしが、新羅之を一統して二百餘年を保ち、新羅亡びて高麗これに代り、次に李旦、高麗に代りて、今の朝鮮をもいへり。土佐日記「講師馬のはなむけす」で音便に、かうじとよむ。

かうし 考試【名】考課に同じ。

かうし 簫師【名】舟子をいふ。せんどう。かこ。

かうし 高士【名】流俗を放れて、志操の高潔なる人。

かうし 槁死【名】枯死に同じくして、飢死するをいふ。

かうし 嚆矢【名】かぶらや。又。古、支那の射法に、第一に此のかぶら矢を用ひしより、すべて、第一番なること。又、事のはじめの義に用ふ。「爲知三晉史之不爲二榮陽之嚆矢一」。

かうじ 講肄【名】武藝を講ずるをいふ。文選「講肄之場」。

かうじ 鏗爾【名】からりと響き渡る聲。琴瑟の聲、又、金石の響などにいふ。論語「鏗爾舍レ瑟」。

かうじ 好事【名】よろこぶべきこと。吉事。「好事多レ磨」。また、善行。「好事不レ出レ門」。

かうじ 勘事【名】かんじの音便。勘當。勘氣。

かうしそうにく 行尸走肉【句】人となりの謂劣にて無能なる者をいふ。死尸の行くが如く、死肉の走るが如く、無智、無能、無神經なるをいふなり。拾遺記に、「任末曰、人不レ學者、雖レ存、乃行尸走肉」。

かうしつ 膠漆【名】にかはと漆とにて附着せしごとく、離れざる親密をいふ。「膠漆之交」、「漆膠不レ曾」など。

かうしのつぼ 格子の坪【句】格子戸の桟の、裡組になりたる、其の一くぎりをいふ。即、一間一間を坪といふなり。

かうじんせいば 行人征馬【句】みなみをのぞめばを見よ。

かうしんのよ 庚申夜【名】庚申の日に當る夜。この夜は、信者は、三猿を祭り、寢ぬれば災ありとて、終夜寢れず。これを、庚申待ちといふ。

かうしやう 好尚【名】美術文學などの好み。高尚なる嗜好、たしなみ。

かうしやうす 翱翔【動】飛びかける。淮南子「翱翔四海之外」。

かうじやう 浩穰【名】用、餘ありて豐なるにいふ。前漢書「京師長安中浩穰」。されば、繁華なる地を「浩穰之區」などいひ、轉じて、事務の繁忙なるにいふことあり。

かうじやう 膏壤【名】膏はあぶら、壤はつちなり。すなはち、肥えたる地。史記「膏壤沃野千里」。

かうしやうぜんじ 興聖禪寺【名】佛德山興聖寶林禪寺といふ。山城國宇治郡宇治にあり。僧道元の開基にして、中興の祖を萬安とす。

かうしゆ 甲首【名】甲を着たる武者の首。雜兵ならぬもの の首。

かうじゆん 交詢【名】詢は信なり。されば、信實を以て交ること。親密に交ること。

かうじをかうじて、ぜんていをさふことなかれ 好事を行じて前程を問ふこと勿れ【文】支那の清獻公の座右銘に「行好事、莫問前程」。「よき行ひをなすに當りては、報を得んと思ふことなかれ。善行と見ば、直に行へ」との意。

かうずのひと 好事之人【句】陶淵明の詩中の語。何か事あれとまつ人。また、奇異なる者を好む人。骨董類古器類などを好む人。ものずき。

かうする 槁悴【名】草木の枯れかじけること。楚辭「草木搖落而時槁悴兮」。

かうする 交綏【名】敵味方共に、相引きに陣を引くこと。左傳「晉人從秦師於河曲交綏」。「こもごもしりぞく」と訓す。

かうせい 誥誓【名】言を以て誓ふをいふ。曰約束。誓言。荀子「誥誓不及五帝」。

かうせい 校正【名】印刷物の下ずりを、原稿と引き合せて、正すこと。

かうせき 考績【名】人の賢否と、事の得失とを考へ察することを。書經「三載考績、三考黜陟幽明」。

かうせふ 巧笑【名】媚び笑ふこと。おせじ笑ひ。詩經「巧笑倩兮、眉目盼兮」。

かうせふ 交睫【名】睫はまつげ。睫を交ふるは、眠ること。漢書「太后病三年、陛下不交睫解帶」。

がうぜん 濠塹【名】城郭の外にをいふ。

かうぜん 皓然【副、形】白き貌。列子「皓然疑雪」。

かうぜん 浩然【副、形】心の大なる貌。ゆつたりとして廣やかなる貌。孟子「然後、浩然有歸志」。

がうぜん 囂然【副、形】囂囂におなじく、かまびすしきこと。又、「ごうぜん」と讀めば、自得して慾なきかたちをいふに用ふ。

がうぜん 傲然【副、形】おごれる貌。自尊の貌。「傲然睥之」

がうぜんせい 鄉先生【名】儀禮の疏に「鄉有鄉學、取在鄉中之大夫爲大師、致仕之士爲少師、名曰鄉先生」とあり。士大夫の、仕を退きて、鄉に歸りて、子弟の教授をなすものをいふ。村夫子」。

かうぜんのき 浩然之氣【名】孟子より出でし語。一身の元氣の發。「我善養我浩然之氣、敢問何謂浩然之氣、曰、難言也。其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞天地之間」とあり」。

かうぜんり 高潮離【名】けいか(荊軻)を見よ。

がうそ 強訴【名】衆を賴みて、無理を通さんと、訴ふること。徒黨をくみて、訴ふること。

かうそく 高足【名】足の高きもの。文選「何不策高足」。轡じて、弟子中の俊材をいふ。「高足之弟子」。「門下之高足」。

かうそく 梗塞【名】ふさがりたること。「道路梗塞」。

かうぞく 寇賊【名】民人を虐げ、財物を掠めとる、わる者の群。あだし書經の注に、「群行功劫曰寇、殺人曰賊」。

がうそお 江帥【名】大江匡房、太宰權帥たりしことあるを以て、しかよべり。

かうたう 高踏【名】世事にかかはらず、我が意のまゝにすること。高くとまること。「高踏勇退」。左傳「使我高踏」。

かうたう 浩蕩【名】浩然に同じ。心のゆつたりしたるをいふ。楚辭「我心飛揚兮浩蕩」。また、水などの、廣大なる貌。

がうだつ 豪奪【名】掠め奪ふこと。侵掠。掠奪。略奪。漢書食貨志「不得豪奪菩民矣」。

かうちう 膠柱【名】柱はことぢなり、琴柱を膠にてつくれば、調子を變へ、また、變ふること能はず。故に、變化なきものをもおろべきものをも、同樣の律の下におかんとすること。きのきかぬこと。臨機應變の處置の出來ぬこと。杓子定規。「柱に膠しの惑を皷するが如し」。

かうちせつそく 巧遲拙速【句】次の語を見よ。

かうちば、せつそくにしかず、巧遲不レ如二拙速一【名】事をなすに遲疑せんは、たとひ巧なりとも、拙にして決行するものには、しかずとの義。

かうちん 交趾【名】國名。安南の北にあり。また、安南をもしかいひしことあり。華夷通商考に「交趾、一國の總名を交趾といふ。日本にては、此の國の中、廣南といふ處より來る船を、交趾船といふなり。安南といふも、交趾、東京の總稱と見えたり。云々」とあり。廣南、即、安南なり。

かうてい 孝悌【名】父母によく仕ふるを孝といひ、兄長に事ふるを悌といふ。論語「孝悌、爲レ仁之本歟」。

かうてい 扛鼎【名】力の強きこと。大力。強力。史記項羽本紀「力能扛レ鼎」。

かうてう 孝鳥【名】烏の異名、烏は三哺の孝とて、親鳥に報ゆといふより名づく。

かうてうつきて、りやうきうをさめらる 高鳥盡良弓藏【文】かうとしてりやうくにらるを見よ。

かうてん 昊天【名】單に「天」といふに同じ。周禮、「以二禮祀一祀二昊天一」、注に「天也」とあり。又、夏の天。

かうてん 皓天【名】昊天に同じ。

かうどう 狡童【名】みかけばかりにて實なき子。詩經「狡童有レ貌而無レ實」。

かうとうし、りやうくにらる 狡兎死、良狗烹【文】役に立つ間は用ひらるれど、その用かすめば、捨てらるゝをいふ。史記「狡兎死良狗烹、高鳥盡良弓藏、敵國破謀臣亡」。また、「野獸已盡獵狗烹」といふも同じ。

かうのひたたれ 香の直垂【名】香染の直垂なり。香染は、紅黒くして黄を帶びたる色をいふ。直垂の條を參照せよ。

かうの みちもり 河野通盛【名】通有の子。初に通治と稱せり。北條高時に屬し、驍勇を以てあらはれぬ。のち、足利尊氏に降りて伊豫の守護となる。貞治元年卒せり。

かうの みちあり 河野通有【名】孝靈天皇の皇子伊豫親王の後胤にて、通綱の子。伊豫の豪族にて、驍勇を以て知られ、膂力あり。對馬守に任ぜられ、弘安の役に奮戰して、元の一將を斃にし、首を闕下に獻ず。帝褒めて、永邑數所を賜へりと。

かうひ 考妣【名】考は死せる父、妣は死せる母なり。禮記に「生曰二父母一、死曰二考妣一」。

かうふ 巧婦【名】また、巧婦鳥ともいふ。「みそさゞい」(溝鷦鷯)なり。巧鳥。柔飛。巧雀。

かうふくじ 興福寺【名】大和國奈良市に在り。はじめ、中臣鎌足、山城國山科に精舍を設けて、山階寺といふ。のち、之を大倭飛鳥厩坂に移して、法光寺とも、厩坂寺ともいへり。その子、不比等、また、平城京に移す。これ、今の地なり。南圓堂あり。こは、弘仁四年、冬嗣が創建する所にして、八角寶珠形なり。

かうぶり 冠、爵【名】かんむり。かぶりもの。轉じて、官位をもいふ。

かうぼく 槁木【名】枯木に同じ。莊子「形固可レ使レ如二槁木一而心固可レ使レ如二死灰一矣」。

がうまい 豪邁【名】心つよく、勝れて、進取の氣に富むこと。志操の堅固にして勇敢なること。

かうみやうのきのぼり 高名の木上り【句】徒然草に見えたる人の異名。木に上るごとの巧みなるより名をとれるなるべし。

かうもく 綱目【名】綱と目と。綱は大ぐくりの箇條。目は、そのこわけ。おもなるわかち。

かうもん 衡門【名】かぶきもん。二本の柱を立て、上に一本の笠木をわたしてつくれる門。そまつなる門なるより、賤しき者のすまひをいふ。詩經「衡門之下、可二以棲遲一」。

かうもん 皐門【名】高き門をいふ。禮記に「天子皐門」。

がうもん 拷問【名】罪人をして實を白さしめん爲に、苦痛を與へて問ひ糺すこと。武家時代に用ひたる仕方。「水責火攻の拷問」。

かうやさん 高野山【名】金剛峰寺の山號。紀伊國伊都郡にあり。弘法大師の開基。

かうやてんわう 廣野天皇【名】稱德天皇を申す。大和國高野山陵に葬り奉りし故なり。

かうゆ 膏腴【名】土地の肥沃なること。文選蜀都賦「内廻要害於膏腴」。

かうより 紙捻、紙縒【名】かみよりの音便。「こより」ともいふ。「かんぜより」ともいふ。紙を細くよりて、絲の如くせるもの。

かうら 高良【名】社の名。山城國男山八幡宮の麓にある末社にて、上高良、下高良の二社に別れたり。

かうらい 高麗【名】「かうこうらい」と區別する爲にいふ。單に「こま」ともいふ。今の朝鮮の前に在りし國。太祖神聖王、名は建、國を建てしより四百五十六年、第三十四代恭讓王に至りて滅ぶ。わが紀元二三四年に當る。

かうらいべり 高麗縁【名】疊のへりに、白き綾に、雲形などを織り出したるを、つけたるもの。

かうらう 行潦【名】にはたづみを見よ。

かうらく 行樂【名】たのしみ。「三春之行樂」。
かうらくだう 康樂堂【名】はつしやうぬんのじふにだうを見よ。
かうらん 皐蘭【名】澤に生ずる蘭をいふ。楚辭「皐蘭被經兮」。
かうり 行李【名】あんりを見よ。
がうりき 强力【名】力の强さもの。又登山の案内人足をいふ。
がうりのさ、せんりのあやまりをいたす 毫釐差致千里之謬【文】始の少かなる違も、終りには大なる謬となるをいふ。禮記に「易曰、君子愼始、差若毫釐、繆以千里」。物事の始を愼むべきことを敎へたる語。
かうりやう 膏粱【名】(膏は肥肉をいひ、粱は粒の大なる穀)。美味。よき食物。うまいもの。孟子「膏粱之味」。
かうりようううんむをう 蛟龍雲霧を得【文】吳志に「劉備非二久屈爲一人用一者ト、恐蛟龍得二雲雨一、終非二池中物一」とあるより出でたる語にて、人傑の、時を得て、天下に雄飛するに譬ふ。蛟龍は蚪龍ともいひて、龍の一種。みづち。
かうりようのくい 亢龍之悔【句】易の「亢龍有レ悔」とあるに出づ。亢は高なり。人尊貴に至りて、戒愼せざれば、高きに昇り過ぎたる龍の如く、再び下落せざるべからざる悔あるをいへり、德なくして高位に上るを戒めたる語。
かうれい 伉儷【名】配偶に同じ。つれあひ。國語「棄二其伉儷一」。また、夫婦の間がらをいふ。「伉儷日睦」。
かうれん 孝廉【名】父母によく仕ふるを孝といひ、淸潔にして廉隅(カド)あるを廉といふ。漢時代の徵士の稱。漢書「初令二郡國擧二孝廉一人一」。
かうろ 膏露【名】甘露の一名。禮記「天故降二膏露一」。
かうろく 高祿【名】多くの官祿。よき知行。
かうろん 抗論【名】はりあひて論ずること。
かうろほう 香爐峰【名】支那の山名。白樂天の草堂記に「匡廬奇秀、甲二天下山一。山北峰曰二香爐峰一、峰北寺曰二遺愛寺一。介二峰寺間一、其境勝絕、又甲二廬山一」。同人の詩に「香爐峰雪撥レ簾看、遺愛寺鐘欹レ枕聽」。
かか 呵呵【感、副】からからと笑ふ貌。
かか 哥哥【代】支那の俗語。兄貴(アニキ)。また、他人を敬ひてもいふ。大哥、老哥、阿哥など。
ががが 峨峨【副、形】山の高き貌。岩山などのかど〳〵しく聳えたる貌。文選西京賦「華嶽峩峩」。
ががが 娥娥【副、形】美人の形容。嬋妍に同じ。「娥娥玉顏」。
かかいは、さいりうをえらばず 河海不レ擇二細流一【文】史の李斯傳に「河海不レ擇二細流一、故能就二其深一。王者不レ却二衆庶一、故能明二其德一」とありて、人を取るには、廣くすべきをいへり。

かがのちよ 加賀の千代【名】女俳家。加賀國松任の人。二十五歲にて夫を失ひ、尼となりて素園と號せり。俳諧をよくし、また書をよくせり。安永四年九月歿す。年七十四。
かがは かげき 香川景樹【名】近世の歌人にて、桂園、また東瑤亭と號す。因幡の鳥取の人。もと荒井氏。幼より敏才あり、十八歲の時、京都に出で、香川香柄の養子となり、和歌を以て、聲名一時に高かりき。天保十四年三月歿せり、年七十六。家集を桂園一枝といふ。
かかふ 襤褸【名】破れたる衣。ぼろ。
かかぶり 冠【名】「かんむり」に同じ。又、位。
かかみぐさ 鏡草【名】正月元日、禁中にて、鏡餠の上におきし大根の稱。春のかがみぐさともいふ。
かかみくら 鏡鞍【名】鞍の前後輪を一面に、銀もしくは眞鍮にて張り包み、山形のへりに、同じかれにて、覆輪をかけたるもの。
かかみのしゆく 鏡宿【名】地名。近江國蒲生郡鏡村。鏡山の北にあり。
かかみやま 鏡山【名】近江國蒲生郡にある山。古今集「鏡山、いざ立ちよりて、見てゆかむ、年經ぬる身は、老いやしぬると」。太平記東下りの條、「鏡の山はありとても、涙にくもりて見えわかず」。
かかん 可汗【名】支那の匈奴にて、王といふ義。Khan の宛字なり。また「カン」とも「カハン」とも「ハン」ともいふなり。
かかん 河漢【名】銀河。俗に、あまの川。
かかん 坷坎【名】坎坷。轗軻。かんかを見よ。
がかん 峨艦【名】大なる軍艦。峨々たる山の如き艦といふ意。
かがやかし 輝、羞【形】まばゆし。はづかし。めんぼくなし。
かかり 懸【名】蹴鞠の場を、懸りとも、鞠坪(マリツボ)ともいふ。竹圍を作り、その四隅に樹を植う。之を四本懸といふ。其の樹は、西北に松、西南に楓、東北に櫻、東南に柳なり。新古今集「最勝寺の櫻は、鞠の懸にて久しくなりにしを、其の木、年ふりて、風に倒れたるよし、聞き侍りしかば、男どもに仰せて、こと樹を其のあとに移し植ゑさせしとき、詠りて見はべりければ、あまたの年々、暮れにし春まで、立ち馴れけることなど、思ひ出でて詠み侍りける。藤原雅經朝臣。なれ〳〵て、見しは名殘の、春ぞとも、なごしらかはの、花の下陰」で。雅經

は、飛鳥井家の祖にして、此の家、代々蹴鞠の家たりき。

かき 嘉肴 【名】美しき草木。めでたき草木。詩經「山有二嘉卉一」。

かき 牙旗 【名】大將軍の旗。もと、天子出征の時の旗は、象牙にて竿上を飾りたり。これによりていふなり。

かぎ 嘉義 【名】臺灣の地と。彰化と臺南との中間にある市街なり。

かぎ 嘉儀 【名】賀儀に同じ。よろこびごと。いはひの式。

かきくどく 掻口説 【動ヵ四】くどくどに同じ。かきは接頭語。

かきたえ 掻絕 【副】絕えて。一向に。さらに。決して。

かきつばた 燕子花、杜若、馬蘭、劇草 【名】草の名。葉も花も、共に花菖蒲に似たり。ただ少し、大なり。初夏花を開く。二十四孝の淨瑠璃に「似たりや似たりや、あやめ、かきつばた」。

かきなす 掻垂、掻鳴 【動サ四】なすは、鳴らすの略にて、琴などを彈するをいふ。

かきのころも 柿の衣 【名】柿色の衣。山伏の服。太平記熊野落に「皆人は柿の衣になりて云々」。

かきのもと ひとまろ 柿本人麿 【名】藤原時代の歌人。その詠、萬葉集に出づ。持統文武の兩朝に仕へ、石見にて歿せり。されど、その詳なる傳は知るに由なし。山邊赤人と共に歌聖と稱せらる。

かきやう 佳境 【名】「佳境に入る」は、深く興味を覺えて我れを忘るゝこと。

かきよのくわん 河魚之患 【句】内部の腐敗、内幕の困難を云ふに用ふ。河魚の腐敗は、内よりして外に及ぼすよりいふといへり。左傳に「申叔展與二蓬無社一言、河魚腹疾如何」。

かぎりのたび 限りの旅 【句】はての旅。この世を限りの旅路といふ意にて、人の死にて行くをいふ。限りのかどで。

がく 萼 【名】花瓣を支ふる綠色の片にして、其の組織、葉の如く、花の諸機關を保護するもの。

かくあんなり 斯く有んなり 【句】「斯く有るなり」の音便。斯くの如くあるのである。

かくか 閣下 【代】高位、高官の人に對する尊稱。

がくがく 諤諤 【名】率直にして節を折ることなきをいふ。史記「千人之諾々不レ如二一士之諤諤一」。

かくかく 閣閣 【副、形】蛙聲の形容にいふ語。

かくかく 格格 【副、形】鳥の鳴く聲を形容する語。荊楚歲時記「有レ鳥如レ烏。先レ鷄而鳴。架架格格」。又、勤めて怠らぬ貌。

かくご 覺悟 【名】さめさとること。轉じては、ココロガマヘ、心構、決心。

かくかくのこう 赫赫功 【句】赫々は顯盛の貌。世に顯はれ輝くほどの功なり。荀子「無二惛々之事一者、無二赫赫之功一」。

かくき 客氣 【名】表面の勇氣。假勇。若氣の勇。眞ならぬ一時の勇氣。

かくこふばつ 確乎不拔 【句】堅固にして動すべからざるをいふ。易經「確乎其不レ可レ拔」。「確乎不拔之精神」。

かくごん 恪勤 【名】かくご。職務をよく勤むるをいふ。また、擾家以下貴顯の家人を、恪勤の侍とも、格勤の者ともいへり。また、武家にも、小侍所に、格勤といふ役ありて、營中に候して、雜役に服したるもの。これを「中居殿原」とも云ひし由、眞丈雜記にいへり。

かくさはず 隱はず 【句】隱さずといふに同じ。

かくしつ 鶴膝 【名】病の名。鶴膝風とて、膝の内外腫れ痛みて、漸く痩せ衰へ、鶴の脚の如くになる病といへり

かくじゆつこ 學術語 【名】學問の研究上に用ふる語。

かくじゆんす 恪遵 【動サ變】敬みてしたがふこと。

かくす 隱、潛、匿、藏 【動サ四】隱は、見えぬやうにするなり。「月隱レ雲」。潛は、水中にひそみかくるゝをいふ。「潛水器」。匿は、にげかくるゝなり。匿名。匿レ山。匿レ罪。藏は、しまひおくなり。「深藏而不レ示」。

かくち 客地 【名】鄉里を離れて客となり居る其の地。他鄉。

かくちく 角逐 【名】角は競ふこと。逐はまけじと爭ひ走ることと。即ち爭闘馳逐すること。競爭すること。

かぐつちのかみ 迦具土神 【名】火産靈神に同じ。火の神。されば、火災を「迦具土のあらび」などいへり。

かくどう 閣道 【名】樓閣に上る道。

かぐのせいうつるべからず 下愚の性移るべからず 【文】論語に「上智與二下愚一不レ移」。下愚の性の者は、如何に教戒しても、性を移すこと難きをいふ。

がくひ 岳飛 【名】宋の高宗帝の時の人にて、宋の帝室、漸く衰微せる時に、獨、孤忠をつくせし人なり。遂に佞人の讒にあひ、紹興十一年殺さる。

がくふ 岳父 【名】妻の父をいふ。しうと。

かくふ 圍 【動ハ四】かこふ、かこむに同じ。

かくぶつ 格物 【名】事物の道理を窮め盡すこと。大學に「止レ格レ物致レ知」。哲學を格物致知の學ともいふ。

かくぶつにふもん 格物入門 【名】漢文の理科の書。米國人テーラ氏著。清國同治七年の出版にて七卷あり。テーラ氏は、宣教師にて、わが國にも來りて、同志社に教鞭を取りしことあり。

がくぶぼく 岳武穆【名】宋の岳飛のこと。武穆は諡號なり。

かくまく 角膜【名】眼球中の一部分にて、最も外面の膜。

かくまふ 圍【動ハ四】かくむの延言。

かくむ 圍【動マ四】かこむに同じ。

かくめい 革命【名】支那にて、王者の起るや、命を天に受くとなす。故に、王者の代の革まるを、革命といふ。

がくやうろう 岳陽樓【名】樓は、其創め、詳かならず。西は洞庭湖を望み、南は君山を顧る。唐の開元年中、張說、此の地に守となり、時の才士と登臨賦咏せしより、其名世に著はれて、遂に名所たり。此地、江南西道巴陵郡岳州に屬す。岳州は、天岳山の陽にあれば、この名あり。

かぐやま 香山【名】天の香山ともいふ。大和國高市郡香久山村にある山。

かくりき 脚力【名】飛脚。

かくるい 鶴涙【名】鶴鳴と云に同じ。鶴聲は、高亮にして、八九里にもきこゆといふ。詩經「鶴鳴二于九皐一聲聞二于天一」。

かくろへ、ろてまつる 隱ろへ奉る【句】隱くろへは、かくれの延びたる詞。かくれて連れ申すなり。

がけ 崖、磯【名】山の岨の峙ちたる處。

かけい 夏畦【名】夏日に田を耕すこと。孟子に「脅ノ肩諂笑。病二于夏畦一」。

かけずけおさる 懸けず氣壓さる【句】徒然草に「品くだり、顏にくさげなる人にも立ち交りて、かけずけおさるゝこそ、本意なきわざなれ」とあり。懸けずは懸け合はぬにて、釣り合はぬを、ふ。氣壓さるは、壓倒せらるること。

かげども 山陽【名】山の南をいふ。これに反對に、山の北、すなはち、後の方を、山陰（背面）といふ。萬葉集「耳梨の、青菅山は、そともの、大御門に、よろしなべ、神さび立てり。名くはし、吉野の山は、かげともの、大御門ゆ、雲居にそ遠くありける」。

かけどり 賭鳥【名】射術に云ふ語。貞丈雜記に、空中を飛び行く鳥を馬上にて射とるをいふといへり。翔鳥とも書くは、空を飛び行く鳥なる故なるべけれど、さてはカケリドリといはでは違へり。これは、大方に當てたるなるべし。

かけまくも 掛まくも【句】「口にかけて言はむも」といふ意。「まく」は「む」の延音。

かけもの 賭物【名】賭事するとき、その勝ちたる方に出す品物。

かげん 家言【名】一家言に同じ。偏見。一家の見識。荀子「家言神學」。

かげん 家嚴【名】わが父をいふ。

がげん 雅言【名】みやびことば。また、俚言、方言に對して正しきことば。

かげゆ 勘解由使【名】げゆを見よ。

かげろふ 陽炎【名】かぎろひ。かげろひ。春の長閑（ノドカ）なる日に、空中に、ちらちらと煙の如く立ちのぼる氣をいふ。絲遊。野馬。萬葉集「東（ヒンガシ）の野に、炎（カギロヒ）の、立つ見えて、かへり見すれば、月傾きぬ」。又、かげろふのは、春、萌ゆ、夕などにかかる枕詞。

かげろふ 蜻蛉、蜉蝣【名】とんぼう。又、朝に生れて夕に死ぬといふ蜉蝣（フイウ）。徒然艸「かげろふの夕（ユフベ）をまち、夏の蟬の、春秋を知らぬもあるぞかし」。又、いさごむしの羽化せるもの。

かげろふ 陰、影【動ハ四】日月の影の、ひらめくこと、又、ほのめくこと。風雅集「夕月夜、かげろふ窓は涼しくて、軒のあやめに、風わたる見ゆ」。また、人などの影のさすをもいふ。平治物語「女房などぞ、かげろひ候ふらむ」。

かげろふにつき 蜻蛉日記【名】書名。入卷あり。右大將道綱の母の著。道綱の母は、藤原倫寧（トモヤス）の女にして、東三條攝政兼家の室なり。この日記は、兼家との贈答より、道綱の生れて二十歳に至るまでのことを記したるものにて、天曆八年より、天延二年までにわたれり。

かごことばかり 假言許【句】かごとは、假言にて、かこつく意より轉じて、少しばかりといふ意に用ふ。「いひわけまでに」、「ちよつとばかり」などいふほどの意。

かごとがまし 【形】虫などの鳴く聲が、恨みかこつ樣なるをいふ。源氏幻卷「つれづれと我が泣き暮す夏の日を、かごとがましき、虫の聲かな」。

かごん 下梱【名】下心。こころもち。梱は志の純一なるをいふ。

かさがけ 笠懸【名】騎射の式。綾蘭笠を竿にかけて、的にして、射るなり。馬場の中に大溝を堀り通し、其の中を馬を驅けて射る。遠笠懸、小笠懸の別あり。源頼朝、上野國新田莊にて、的射らしし時に、風に笠の吹きちりたるを射させられしに始まるといへり。

かさぎやま 笠置山【名】山城國相樂郡にあり。大和の添上郡に接す。山上に笠置寺あり。元弘元年、後醍醐天皇の行宮たり。

かささぎのわたせるはし 鳥鵲のわたせる橋【句】大内の御橋をいふと、眞淵翁いへり。新古今大伴家持「かささぎの、渡せる橋に、おくしもの、白きを見れば、夜そふけにける」。うじやくはしをわたすを見よ。

かさじま 笠島【名】相模國三浦郡にある島。又、陸前名取

郡の地。奥の細道「笠島や、いづこ、さつきのぬかり道」。

かさとり 笠取 【名】地名。山城國宇治郡、醍醐山の東にあり。

かさに 嵩 【副】彌(イヤ)が上(ウヘ)に襲ひ重なる貌にいふ。「かさにかかる」。「かさ(笠)に著る」など、おのが主、若くは、親などの威を假りて他人に臨むをいひ、又、おのが施したる恩をかさして其人に臨む時にも用ふ。

かざはや きんのり 風早公紀 【名】現に、從三位、子爵たり。

かざま 風間 【名】風のやみたる間をいふ。土佐日記に「祈りくる、かざまとおもふを、あやなくに、かもめさへだに、浪と見ゆらむ」。

かじかざは 鰍澤 【名】地名。甲斐國南巨摩郡の東北端にして甲府を去る四里許。富士川の西岸に位せり。

かしがまし 喧囂 【形】かしまし。かまびすし。古今俳諧歌「秋の野に、なまめきたてる、女郎花、あなかしがまし、花もひと時」。

かじく 萎 【動カ下二】疲れて勢なきをいひ、また、冷え縮むをもいへり。つかれかじくは、萎靡す、疲弊す、などの意。

かしこくも 畏、恐 【副】恐多くも。もつたいなくも。有がたくも。

かしこし 畏、恐、賢 【形】おそれ多し。有難し。もつたいなし。甚し。おそろし。貴し。怜悧なり。

かしこどころ 賢所 【名】宮中にありて、八咫鏡を安置せる所、即ち、温明殿、また、直に、八咫鏡をも申す。

かしこまり 畏 【名】禮儀。謝罪。勘當。勘氣。

かしこのぶんしふ 檜園文集 【名】中島廣足の文章を蒐輯したるものにて三卷あり。

かしはらじんぐう 橿原神宮 【名】大和國高市郡白橿村畝傍山の東南にあり。神武天皇の橿原宮の舊趾なりとして、明治二十三年に奉祀せるなり。官幣大社。

かしはらてんわう 柏原天皇 【名】桓武天皇を申す。御陵を柏原陵といふ。

かしはらのうねびのみや 橿原の畝火の宮 【名】神武天皇の宮なり。大和國高市郡白橿村、今の橿原神宮のある地、すなはち其の遺址なりといへり。

かしはらのてんわう 橿原の天皇 【名】神武天皇を申す。

かしひのみや 香椎宮 【名】筑前國糟屋郡香椎村にあり。神功皇后を祀れり。現今、官幣大社。

かじふ 家什 【名】食器、家具の類をいふ。史記の注に「什物謂常用者、其數非一、故云什」。

かじん 賈人 【名】商人。

かじやう 牙城 【名】城の本丸。本營。牙旗を建つるところの意より出づ。

かしやく 呵責、苛責 【名】せめさいなむこと。むごくいぢめること。せつかん。

かしゆ 雅趣 【名】雅致に同じ。みやびたるおもむき。風致。

かじよう 家乘 【名】家語ともいふ。家の記錄。

かしよく 稼穡 【名】農業。

かすが 春日 【名】京都の地名。一條大路と二條大路との間にある小路にて、今の丸太町。

かすがのつぼね 春日局 【名】德川家光の乳母。初め名を於福といふ。齋藤利三の女。英敏にして膽略あり。寛永六年命を奉じて京に入り、後水尾天皇に謁し、春日局の號を賜はり、爵二位を授けらる。二十年九月歿す。年六十五。

かすがやま 春日山 【名】大和にある山。三笠山に同じ。又越後國中頸城郡春日村字春日にある山。足利氏のとき、越後の守護上杉憲顯居る。天文十一年、上杉謙信、此に居を構へ、不識庵と號す。豎臣氏のとき、堀秀治居り、德川氏のとき、松平忠輝居たり。

かすがやま 霞 【名】霞に同じ。古今集「春のきる、霞の衣、ぬきを薄み、山風にこそ、亂らすべらなれ」。

かすかのつぼね 春日局 【名】德川家光の乳母。初め名を於福といふ。齋藤利三の女。英敏にして膽略あり。寛永六年命を奉じて京に入り、後水尾天皇に謁し、春日局の號を賜はり、爵二位を授けらる。二十年九月歿す。年六十五。

かすがやま 春日山 【名】大和にある山。三笠山に同じ。又越後國中頸城郡春日村字春日にある山。足利氏のとき、越後の守護上杉憲顯居る。天文十一年、上杉謙信、此に居を構へ、不識庵と號す。豎臣氏のとき、堀秀治居り、德川氏のとき、松平忠輝居たり。

かすはたらでそ、かへるべらなる 數は足らでぞ歸るべらなる 【句】古今集「北へ行く、雁ぞ鳴くなる、つれて來し、數は足らでぞ、かへるべらなる」。

かすみのほら 霞洞 【名】錄異記に「永平四年、利州刺史王承賞奏、長山楊謨洞在峭壁之中、有神仙、或三人或五人、服色黃、往々出見。詔改楊謨洞爲紫霞洞、置紫霞觀」とありて、仙人の住處なるより、やがて、仙洞御所、即ち上皇の御所に用ひたり。

かすみのころも 霞の衣 【名】ただ、霞といふに同じ。古今集「春のきる、霞の衣、ぬきを薄み、山風にこそ、亂らすべらなれ」。

かすゆざけ 糟湯酒 【名】酒の糟を湯にひたして煮たるもの。暖しきものの飲むもの。

かする 歌吹 【名】歌ひつ舞ひつして、樂器などを吹きならすこと。又、にぎやかなること。

かせい 賈生 【名】人名。名は誼。博聞強記にして、古今治亂の跡に明に、能く詩を誦し、文を屬す。漢の孝文皇帝に仕へて重ぜられしが、後長沙に貶せられ、吊屈原賦を作りて人口に膾炙す。後また、擧げられて梁の懷王の太傅となる。文帝の十二年卒す。くづげん參照せよ。

かせい 苛政 【名】殘酷なる政治。多額の租稅を人民より無理に出さしむる政。暴政。虐政。次の文を見よ。

かせい、とらよりもたけし 苛政猛二於虎一 【文】苛政の下に支配せられて、愁苦を見るは、むしろ虎の害にあうて速に

死するにしかすとの意。禮記に「孔子過二泰山側一。有下婦人哭二於墓一者上而哀。夫子式而聽レ之、使二子路問一レ之曰、子哭也、似下壹有二重憂一者上。答而曰然。昔者吾舅死於レ虎、吾夫又死焉。今吾子亦死焉。夫子曰、何爲不レ去也。曰無二苛政一。夫子曰、小子識レ之。苛政猛二於虎一也」。

かぜ、えだをならさず　風不レ鳴レ枝【文】世の太平なるをいふ。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ枝、雨不レ破レ塊」。

かせぎ　鹿【名】しかの古言。

かせぎ　鹿棚【名】動物などの侵入を防ぐために、丸太などをもて、矢來を作り構へたるもの。

かぜのつて　風傳【名】風說。風聞。かぜのたより。ほのかにききし噂。

かぜまちづき　風待月【名】六月は、炎暑の候なれば、涼風をまつ意より、六月の異名とす。

かせん　歌仙【名】和歌の名手。「六歌仙」、「三十六歌仙」等。

がぜん　俄然【副】にはかなる貌。

かぞ　父【名】家尊の音の略かといふ。かぞいろは父と母と。

かたい　夏臺【名】支那の古の獄の名。周にては圖土、殷にては羑里、夏にては鈞臺、秦にては囹圄といふ。その、夏の鈞臺の略。

かたいげん　假懸言【名】語學上の術語。動詞より成れる名詞をいふ。

かたうど　方人【名】かたひとの音便。味方。我を助くる人。賛成者。荷擔人。また、相對せる一方の人をいふことあり。歌合せの時、一方の人をいふ。

かたう　家道【名】家計。家政。通俗篇に「家道猶二云家私一」。俗に、しんしやう。

かたがた　方方【副】あれこれ。いろいろ。さまざま。取りまぜて。また代名詞に用ひたるは、「諸君」といふに同じ。

かたかな　片假名【名】佛教の盛なるにつれて、寫經、及、講演の筆記に、多額の漢字を使用する事の、甚しく不便なるより、その扁旁のみを取りて。何時となく、略符を作り出せり。これ。やがて片假名なり。

かたかはやぶり　片側破【名】剛情にして慓悍なるもの。頑固にして、理も非もなく、おのが主張を通さんとするもの。

かたがたに　方方【副】彼方此方に。彼れ是れと。

かたきこほりは、しもをふむよりいたる　履レ霜堅氷至【文】易經の坤の卦に出でたり。一朝にして忽ち堅氷の時候に至るには非ずして、霜を經て至るなりとの意。物事には。すべて次第あるをいへり。

かたぎぬ　肩衣【名】武家に用ひし禮服の名。素襖の袖を取り除けるものにて、襟と肩と背とのみにて袖なく、丈は腰までにて、下は半袴を着く。而して、其の上下とも、染色同じきを合せて、上下といふ。肩衣は、すなはち、其の上のみをいふ稱。上と下と、色の異るを、繼上下といふ。

かたくなくなひと　頑なる人【句】頑固なる人。偏屈なる人。片意地なる人。自念を固守して移り難き人。舊守家。

かたかけて　片懸て【副】其のもの、一部を、他の物に懸くるをいふ。「家居は松かげに片かけて」。また、全體ならず、聊かなるにもいへり。續後拾遺集「草の葉も、はや霜枯の、色見えて、外山かたかけ、冬は來にけり」。

かたしほ　堅鹽【名】ここりてて、堅き鹽。黒鹽。

かたそへて　片添へて【副】「かた懸けて」に同じく、一方によせ懸けたるをいふ。

かただ　堅田【名】地名。近江國滋賀郡堅田村。大津町の北方三里餘。湖岸に、浮御堂あり。堅田落雁は、近江八景の一なり。

かたたがへ　方違【名】昔他出する時に、天一神（ナカガミ）、若くは、太白神（ヒノカミ）の居る方、若くは金神にあたれる方を忌み、前夜、他の家に宿して、方角を違へて、出づるをいへり。

かたより　片更【名】一方のみかたより。新撰六帖「濱中に、潮風ばかり、音づれて、片便なる、蟹の宿かな」。

かたづ　堅唾【名】心を込めて力を入れたる時に口中にたまれる唾。「堅唾を飲んで」は、息を凝らして見まもる貌。

かたの　交野【名】地名。河内國河内郡、山田村、牧野村、川越村、牧方村あたりをいひし古名。櫻の名所たりき。新古今集に俊成「またや見む、交野のみ野の、櫻がり、花の雪ちる、春の曙」。

かだ　あづままろ　荷田東麿【名】春滿と書けり。羽倉氏。京都稻荷山の祠官、信詮の子。古學の復興に力を致せり。元文元年七月歿す。年六十八。

かだ　ありまろ　荷田在滿【名】東滿の姪にして、其の後を嗣ぐ。律令古實に明なり。寶暦元年八月歿す。年四十八。

かたはづく　不具付【動カ四】不具と爲ること。方丈記「身をそこなひ、かたはづけるもの、數を知らず」。

かたはらいたし　傍痛【形】傍にて見るも苦々し。笑止なり。見苦し。氣の毒なり。

かたびさし　傍廂【名】書名。齋藤彦麿の隨筆。

かたほ　片帆、偏帆【名】眞帆に對して、物の調はぬをいふ語。まほを見よ。

かたまし　奸【形】心のねぢけたること。

かたみ 形見【名】死人、又は、遠く離れし人の形の代りとして見るべきもの。紀念物。遺物。

かたみ 肩身【名】肩と身と。「かたみがせまい」は、世間に対して面目なき意。

かたみに 互に【副】相互にの古語。

かたん 荷擔【名】力を添へて助くること。加勢。

かたらはる 被談合【動ラ下二】かたらふを受身にいひたる句。「る」は受身の助動詞。談合（ダンガフ）せらるゝこと。味方に入れらるゝこと。また、「る」を敬語の助動詞とするときは、御相談になつたの意。

かたらひいる、談取、相談取【動ラ四】談らひて仲間にす。話をして承諾せさす。

かたりきこゆ 語り聞ゆ【動ヤ下二】御話し申す。きこゆを見よ。

かたりつぐがね 語繼ぐがね【句】がねを見よ。

かたりべ 語部【名】我が國、上古に、諸國にありて、奮事を記憶口誦せし部族。我が國古代の歴史は、これによりて傳へられたり。

かたゐ 乞食【名】こつじき。ものもらひ。

かたゐおきな 乞食翁【名】自ら卑下していふ語。又、他を罵りていふ語。

かち 徒、徒歩【名】乘物によらで足にて歩むこと。又、「かちざむらひ」の略。

かちつ 加秩【名】加祿に同じ。俸祿を增すこと。

かぢとり 楫取、舵取、檝師【名】楫を操りて船の方向を定むる者。船頭（センドウ）。音便に、かんどり。

かぢはら かげとき 梶原景時【名】平三と稱す。鎌倉景政の後なり。狹猾にして、口辯あり。源頼朝、石橋の山中に敗北せしとき、景時知つて之を發かず、遂に頼朝に降りて、頗る親任せられたり。正治元年、頼朝薨じて頼家嗣ぐ。三浦義村和田義盛等六十餘人、連署して、景時の讒佞を訴ふ。景時遂に罪を得て奔り、蘆名小次郎の爲めに、駿河に擊たれて死せり。

かぢはら かげすゑ 梶原景季【名】次を見よ。

かぢはら げんだ 梶原源太【名】名は景季。景時の子。左衛門尉となる。義經に從つて源義仲を討つとき、頼朝より駿馬磨墨（スルスミ）を賜はり、佐々木高綱と宇治川に先登を爭へり。後、父と共に死せり。

かちん 褐【名】かちともいふ。色目の名。藍を濃く染めて黑きほどにしたるをいふ。昔、播磨國飾磨（シカマ）の里にて、布をかち色にそめて出せり。之を「飾磨（シカマ）のかち」といへり。「かちんの直垂」などいへるは、此の布にて製れるなり。かちの音を

誤りて珍重せしなり。

かちゆぎ 步靱【名】和訓栞に「風俗通に、箭箙謂二之步一と見え、子寶が說に、今謂二之步叉一と見えたり」といへり。さらばただウツボをいふなるべし。

かちを、せんりのほかにけつす 決二於勝千里外一【文】ちうさくを、ゐあくのうちにめぐらすを見よ。

かつ 喝【名】怒れる聲。五代史「北兵何能爲二當陣上之喝一」。又、佐行變格にかけて、「喝す」の如く動詞として用ふ。「勵聲喝之」。

かつ 碣【名】けつを見よ。

かつ 且【接、副】その上に。なほ。それから。「修文且摩武」。一方から。方方には。一方には。源氏葵に「袖ゐろ、檜路とかつは、知りながら、おりたつ田子の、みづからぞうき」。

かつあい 割愛【名】別ろることの殘り惜しきを、强ひてもす。安房守たり。幕臣にしてその末期の人傑なり。維新の後、朝廷に仕へ、樞密顧問官正二位勳一等伯爵たり。明治三十二年一月薨ぜり。房を後に芳と改めたり。

かつう 且は【接】かつはの音便。義經記に「義朝の御末の子、牛若殿と申し候ふを、かつうはしろしめしてこそ候ふらめ」とあり。

かつがう 渴仰【名】ふかく仰ぎ望むこと。熱望すること。

かつがう 渴迎【名】切に待ち受けて迎ふること。

かつがつ 且且【副】十分ならざれども、先づといふほどの義。まづまづ。少しづつ。うすうす。ほのかに。一つづつ。わづかに。からうじて。一方から。

かつぎ 被衣【名】衣服の名。「きぬかつぎ」の略。女の外出するとき、顔を隱す爲に、頭の上より被るもの。製、常の衣の如くして、只、「えりかた」を、前へ三寸ばかり下げて、裁つといふ。

かつぎぬ 葛衾【名】葛は葛布の衣にて、夏用ふるもの、衾は毛衣にて、冬用ふるもの。共に隱者、處士などの服。史記司馬遷傳に「夏曰二葛衣一冬曰二麤裘一」。「一たび葛裘を易ふ」は一年を經たること。

かつぐ 擔【動カ四】荷物を肩にすること。

かづく 被【動カ四】かぶる。頭より覆ふ。

かづく 被【動カ下二】被らす。與ふ。かづけもの（纏頭（テントウ））は、褒美として與ふる品ものをいふ。

かづけもの 纏頭【名】かづくを見よ。

かつさい 喝采【名】褒め立つる時にあぐる聲をいふ。四座

記の註に「喝采北人鄙語。稱美之意」。「拍手喝采」は手をたゝき聲をあげてほむること。

かつさのかみたたきよ　上總守忠清【名】藤原氏なり。伊勢古市の人。初め、伊藤五と稱す。平清盛に事へ、右衞門尉より上總介となる。知盛に從ひて、賴政を宇治に攻め、また、富士川の陣の時、平維盛に從へり。平氏亡命の後、捕はれて京の六條河原に斬らる。

かつしよく　褐色【名】茶色をいふ。

かつすれども、たうせんのみづはのまず　渴不レ飮二盜泉水一【文】如何なる困難に逢ふとも、不義をせじとの意にいふ。また、潔白を證するに用ふ。盜泉は說苑に「邑名二勝母一。曾子不レ入。水名二盜泉一。孔子不レ飮。醜二其聲一也」とあるにいづ。陸機の詩に「渴不レ飮二盜泉水一。熱不レ休二惡木陰一」。

かつぜん　戛然【副、形】鏗、石など堅きものの打ちあふ聲。「右相當りて戛然たり」。

かつたあ　Cutter【名】脚船、快船などを謂ふ。端艇の一種。

かつとう　葛藤【名】糾着（モンチャク）、紛爭、などいふに同じ。もつれあふこと。あらそひすること。

かつみ　田字草、四葉菜、勝見【名】水草の名。菖蒲の類とも、蕗に類せるものとも、浮草なりともいへり。

かつら　桂【名】樹の名、即ち、女桂（メカツラ）。又「やぶにくけい」と稱し、男桂（ヲカツラ）ともいふは楓の類なり。其の根の皮は、肉桂（ニクケイ）といひて香氣あり。藥用とするもの。

かつらがはほしう　桂川甫周【名】名は國瑞。月池と號せり。醫を以て幕府に仕へ、法眼に叙せらる。また能く海外の事情に精しきを以て、拔擢せられて幕府の機務に與かれり。享和五年六月歿す。年五十九。

かづらきのたかね　葛城の高嶺【名】大和國、南葛城郡の葛城山。昔は金剛山より篠峰（シノミネ）に至る、南北一帶の山脈を總稱して云ひしが、今は、金剛山の北方に峙てる、一峰の單稱となれり。

かつらはらしんわう　葛原親王【名】桓武天皇の第三子。一品に進み、常陸の太守となり、式部卿に轉じ、太宰帥に任ぜられ、仁壽三年薨ず。其の後を、桓武平氏といふ。

かつをさく　釋レ褐【文】初めて仕途につくこと。褐は、毛布衣にて、賤者の服なり、釋は捨なり、粗服をすてて禮服を著する義なり。

がてん　合點【名】がつてんの略。歌などに點をかくこと。轉じて、同心すること。承諾すること。領會すること。會得すること。

かど　才【名】才學、才能をいふ。また、心の、一僻あるをもいふ。主角。

かとう　えなほ　加藤枝直【名】千陰の父。芳宜園と號す。通稱又兵衞。江戸町奉行南方與力たりき。加茂眞淵と交り厚く、致仕の後は、歌を咏じて風月を樂めり。故に歌を以て著はれ、門に入るもの頗る多かりき。天明五年八月歿す。年九十四。

かとう　きよまさ　加藤清正【名】幼名虎之助。尾張中村の人。秀吉に仕へて勇名あり。關が原の戰後、肥後全州に封ぜらる。慶長十六年卒す。年五十。子忠廣繼ぐ。國主の器なし。而して、其の子光正、また叛逆の徵あり。寛永九年、幕府遂に、其の罪狀を數へて、忠廣を出羽の庄內に流し、食料一萬石を賜ひ、光正を飛彈の高山に流せり。

かとう　さまのかみよしあき　加藤左馬頭嘉明【名】小字は孫六。三河の人。鎭守將軍藤原利仁の裔なり。賤が岳の役、七本槍の一たりき。征韓の役、東軍に屬して、三成の前鋒を挫き、其戰術の老巧なる、家康をして感歎措（おこ）かざらしめたり。後、會津四十萬石を食み、寛永八年九月卒す。年六十九。

かとう　ちかげ　加藤千蔭【名】橘姓を稱す。江戸の和學者にして、歌を善くし、また書を巧にせり。文化五年九月歿す。年七十五。著書の中、萬葉集略解、最も行はる。

かとう　ちなみ　加藤千浪【名】江戸の和學者にして、通稱を彌三郎といひ、荻園と號す。もとは陸奥の人なり。岸本由豆流の門に入りて學び、咏歌をよくし、又筆札を巧にせり。明治十年十一月十八日歿す。年五十八。

かとう　ひろゆき　加藤弘之【名】天保七年六月廿三日、但馬出石に生る。長じて佐久間象山に學び、明治の後、官途に就き、大學總長となる。二十一年五月、文學博士となり、華族に列せられて男爵を授けられ、現に貴族院議員宮中顧問官たり。

かどだ　門田【名】門に近き田。

かどづけ　門附【名】人の門口に立ちて音曲を奏し金錢を乞ひあるく者。

かどです　門出す【動佐變】旅立（カドダチ）す。出立す。

かどのをさ　看督長【名】檢非違使廳に屬して、姦盜追捕の爲に、諸國にも分遣せられしもの。赤き狩衣に白き布袴をつけ、白き杖を持てり。古實拾要に「これ檢非違使に附屬の官人なり云云。往古は、六十六人を選びて、一國に一人づゝ、諸國に分け遣はされしことなり。今の神社に閇神（カドモノカミ）とて、弓箭を帶せる形を設く。之を矢大臣といふ。是れすなはち、看督長なり」とあり。

かとりつく　加特力【名】英語の Catholic より來れる語。基督教の一派にて、羅馬法王の統制の下に弘教す。

かとり なひこ 楫取魚彦【名】本姓は伊能。下總香取の人。青藍、又、茅生庵とも號す。和歌、俳諧をよくし、また、歯を好む。加茂眞淵門の和學者なり。天明二年三月歿す。年六十。

かどわしんわう 葛井親王【名】桓武天皇の第十二子。三品に叙し、太宰帥に任ぜられたり。仁明帝の嘉祥三年四月薨す。

かなかじんしゆ カナカ人種【名】馬來人種の一部にして、南洋諸島一帯の土人を稱する名なり。臺灣土人も、この種族に屬せるものといへり。

かなざは 金澤【名】地名。武藏國久良岐郡の東南隅にあり。金澤八景は、洲崎晴嵐、瀬戸秋月、小泉夜雨、乙艸歸帆、稱名晩鐘、平瀉落雁、野島夕照、内川暮雪。

かなざは ゆきひこ 金澤敬彦【名】宮崎縣人。醫を業とす。明治の人。

かなだ 加拿太（Canadian）【名】地名。北亞米利加の北部に位して、英領たり。南は合衆國に接す。其の面積、實に歐洲全土よりも大なり。因にいふ、加奈太太平洋鐵道は、東は其東端ハリファックス府より、西は合衆國との界なるヴァンクヴァに至り、大陸を横斷して東西二大洋を連絡す。

かなづ 奏【動ヲ下二】掻き撫づの略。音樂を奏すること。又、舞を舞ふこと。

かなでぼんちゆうしんぐら 假名手本忠臣藏【名】戯曲の名。赤穂四十七士の復讐の顛末をもとゝして作れるもの。竹田出雲の作。

かなふ もろひら 加納諸平【名】遠州の人。夏目甕麿の子なり。和歌山の藩醫加納伊竹の養子となり、醫學を修め、傍ら、古學に志し、本居太平に教を受け詠歌に巧なり。かつて、藩命を奉じて、紀州名所圖繪を撰みたり。安政三年六月歿す。名五十二。餘玉集、枕草子註釋、萬葉名所集等の著あり。柿園詠草は其の家集。

かなへのなかなるひときれのにく 鼎の中なる一切の肉【句】管を以て天を闚ふに等しく、識見の至りて狹きたとへに用ふ。左傳「以レ指探レ鼎。雖レ未レ嘗二其全味一、亦足二以得一其一臠一」。

かなへをあぐ 鼎を扛ぐ【文】かうてい扛鼎を見よ。

かなまり 鋺【名】金にて作れる椀。

かなめいし 艱難目異誌【名】寛永年間の京都大地震のありさまを、かきたるもの。筆者不詳。

かなりあ 加奈利亞（Canary）【名】島の名。太平洋中のフォルチュナト（Fortunate）島中の小島。

かにかくに 歎に斯くに【副】兎に角にといふに同じ。

にもかくにも。さまざまに。

かね 料【テニハ】ために。其の料に。やうに。萬葉集「ますらをの弓末ふりおこし射つる矢を後見む人も語り次ぐがれ」。同「ますらをは名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがれ」。又名詞に添はりて、其の物として設けそなふる名をあらはす接尾辭。「后がれ」「婿がれ」。

かねあきらしんわう 兼明親王【名】醍醐帝の十一子。延喜二十年、源姓を賜はりて臣下に列し、天祿二年左大臣となる。貞元二年また親王にかへり、二品中務卿となり、後一品に進む。永延元年薨ず。年七十四。中書王貝平親王に對して、前中書王と稱す。中書は、中務の唐名なり。親王、藤原氏に擯を奪はれ、龜山の麓にて莊を營みて隱遁し、菟裘賦を作りて憂憤の氣を托せり。けだし、菟裘は、魯の隱公が、菟裘の地に居を營みて、老を送りし故事に擬せしなり。事は左傳に見ゆ。

かねうりきちじ 金賣吉次【名】名は未春。京都の兩替商なり。奥州に行くとき牛若丸を誘ひ、之を藤原秀衡のもとに伴へり。後に義經に召されて士となり、堀彌太郎光景と名乘り、戰功ありきといふ。

かねごと 豫言【名】豫て言ひ置ける言。約束しおく言葉。

かねにわたす 曲に渡す【句】直角に渡すをいふ。前方に向つて眞直にわたすこと。源平盛衰記「かれにわたして過ちすな」。

かのう 獨木舟【名】大きなる木のうちを刳り抜きて造りたる船。うつろぶね。

かのけ 狩野家【名】足利時代に起りたる畫家、正信の子孫をいふ。

かのかは 狩野川【名】伊豆國天城山（アマギ）より發し、駿河國沼津驛を海に入る川。

かのこまだらに 鹿の子斑に【副】鹿の子の毛の如く斑文あるをいふ。伊勢物語「時しらぬ、山は富士の嶺、いつとてか、鹿の子まだらに雪のふるらむ」。

かの、しぼちが、むかひのつりぶね 彼の新發意が迎の釣舟【句】源氏物語明石の卷「渚にささやかなる舟よせて、人二三人ばかり、この度の御宿をさして來。何人ならむといへば、明石の浦より、さきのかみしぼちの、御船よそひて參れる云云」。源氏の君、須磨の風雨に惱み給へるをりから、明石の入道、船よそひして迎へ奉れるをいふなり。しぼちは、前播磨守明石人道といふもの。

かのしよりりたり 彼黍離々【文】詩經に出づ。黍はキビ。離々は、穗の、みのりて垂れたる貌。

かのたんいう 狩野探幽【名】畫人。狩野家中興の祖た

り。名は守信。剃髪して探幽齋、また白蓮子と號す。孝信の子。宮內卿法印に叙せらる。慶長十七年、德川家康に、駿府に謁し、爾來寵を受け、元和元年、江戸鍛冶橋外に邸宅を賜はる。世に鍛冶橋狩野と稱す。延寶二年十月歿す。年七十三。

かのまさのぶ　狩野正信【名】畫家狩野派の祖。相州小田原の人。大炊助と稱す。足利義教、義政に仕へ、畫を以て食邑五千貫を賜はる。天文十八年四月歿す。年九十七。始め如拙に就きて學びたりと、又、小栗宗丹に就きたりともいふ。

かのもとのぶ　狩野元信【名】狩野氏二世の畫家たり。正信の子。大炊助と稱し、剃髪して法眼に叙せられ、永仙、また玉川と號す。世に、古法眼といふ。足利義政、義澄、義稙、義晴に歴仕す。畫は、ほとんど神に入る。狩野永納は、土佐光信（元信の妻の父なり）、釋雪舟、および、元信を稱して、本朝畫家の三傑と稱せり。永祿二年十月歿す。年八十四。

かはきた　おんざん　河北溫山【名】島原の藩士。名は重喜、字は義卿。儒學を以て、藩の參政にあげらる。溫山文集三卷あり。

かはく　河伯【名】河神なり。

かはぐち　ちゆうじゆ　河口長孺【名】字は孺卿。三省と號す。水戸の藩儒なり。臺灣紀事、征韓偉略の著あり。天保五年歿す。年六十三。

かはご　皮子、皮籠【名】皮の箱なり。葛籠（つづら）、行李などの類。

かばしま　こうれい　樺島公禮【名】字は世儀。石梁、また萬年と號す。紀如來の門下にして、久留米侯の儒官となる。文政十年十二月歿す。年六十餘。

かはお　ひでのり　川路聖謨【名】幕府旗下の士。文化九年、十六才の時、支配勘定留守役となりてより、奈良、大坂町奉行などを經て、勘定奉行となる。嘉永安政年間頗る外事に執掌せり。然れども擊肘寡累、遂に其志を果さず。明治元年三月、憂憤、遭るに由なく自殺して死せり。年七十二。

かはだ　がう　川田剛【名】字は毅卿、甕江と號す。備中阿賀崎の人。藤森天山、安井息軒等に學び、最、經書に明かに、また、文章を巧にせり。明治の初年、修史局一等編纂官となり、後、宮內省に出仕し、大學教授を兼ね、ついで文學博士となれり。明治二十九年二月二日、病みて歿す。

かはづすけやす　河津祐泰【名】本姓は工藤。父の時、伊東を冒し、又、河津莊を食みしによりて姓とせり。勇力を以て聞ゆ。父祐親工藤祐經と采地の事につきて宿怨あり、嘗に嫉視せり。賴朝の謫せられて伊豆にありし時、伊東氏の族、賴朝を迎へて富士野に獵せしことありしが、祐經、その家僮八幡某に命じて、歸途赤澤山に要擊せしむるに遇ひ、射殺さ

る。その子十郎及び五郎は、曾我氏に養はれて、その姓を冒せり。

工藤家次
- 祐家（伊東）
  - 祐親
    - 河津 祐泰
      - 十郎
      - 五郎
    - 祐清
  - 祐次―祐經

かはなかじま　川中島【名】地名。信濃國にあり。高井、水內、埴科、更科の四郡に亘り、千曲（チクマサイカハ）、犀川の間にあり。天文年間より永祿に亘りて、上杉、武田二氏の、武を爭ひし所にして、著名の古戰場なり。

かばのくわんじや　蒲冠者【名】源範賴をいふ。冠者は、元服して冠を加へたる、若者の稱。蒲は、遠州の蒲御厨とて、範賴が生ひ立ちし地なり。

かはほり　蝙蝠【名】かうもり。動物の名。また、開きたる形の、蝙蝠の翅に似たるより、扇をもいへり。

かはむらずゐけん　河村瑞軒【名】通稱平太夫。瑞軒は號なり。伊勢度會郡の人。性敏捷にして頗る機智に富めり。寛永七年江戸に出で、遂に身を興して、富巨萬を累ぬるに至れり。元祿十二年六月歿す。年八十三。

かはやま　すけのり　樺山資紀【名】薩鹿兒島藩士。維新の際にも戰功あり。海軍、內務、文部等に大臣たりしことあり。現に從二位勳一等功二級伯爵海軍大將たり。

かはらけ　土器【名】瓦筥の義。釉藥をかけぬ土燒の燕器の總名。又、其の製の杯をいふ。

かはらぬすまひは、ひと、あらたまりぬ　變らぬ住居は人改りぬ【文】徒然艸の語なり。後漢書の「思二其人一至二其鄉一、其處存、其人亡」。とあるより出づ。

かはらのおほみや　河原の大宮【名】近衞帝の后藤原多子（マヌ）の坐せし、鷹司の下、近衞通の東の宮所を、近衞河原の大宮と呼べり。多子は、右府公能の女にして、賴長の養女となる。後、また二條帝に召されしかば、世に二代后といふ。

かはらのさだいじん　河原左大臣【名】源融なり。嵯峨帝の第十七子にて、弘仁五年、源姓を賜る。從一位左大臣に陞りて、寛平七年八月、七十四歳にして薨ず。河原院を、東六條に營み、庭に鹽竈の景をうつして、一世の豪奢を極めたり。世に河原左大臣と稱す。

かはらのまど、なはのとぼそ　瓦窓繩樞、甕牖繩樞【句】貧家の狀を形容したる語。とぼそは、此にては、戸の意。賈誼の過秦論に「陳涉、甕牖繩樞之子、氓隷之人也」。

かはらもの　河原者【名】德川幕府時代に、芝居者、非人、

機多などを、總べていへる稱。

かはらふ 變 【動ハ四】 變るの延びたる詞。萬葉集「朝日てる、さだの岡べに、なく鳥の、夜なき變らふ、この年ごろを」。

かはる 代、變、更、易、替 【動ラ四】 代ほ、同じほどのものが代るなり。「子代ノ父」。變は、移りかはること。「變遷」。更は、改まるなり。「更ノ衣」。易は、此物と彼物と易るなり。「交易」。替は、廢已なり。彼にかふるに此を以てして前とはがらりとかはるなり。

かはをそ 川獺、水獺 【名】 獸の名。水邊に住みて魚を食とす。形狐に似たり。かはうそともいふ。

かひ 甲斐 【名】 國の名。名義に就きては、本居宣長は、山の峽（カヒ）といふ義より出でたる稱なるべしといへり。

がび 蛾眉 【名】 蛾は蠶なり。其の眉細くして長く曲れり。よりて、美人の眉の麗はしきにたとへていふ。詩經に「螓首蛾眉、巧笑倩兮美目盼兮」。また、支那の地名にもあり。がびさんを見よ。

かひかねもきこえぬところ 貝鐘も聞えぬ處 【句】 名寺大刹なき地。貝も鐘も、共に、寺にて吹き鳴らすものなれば、いへり。

かひたん 加比丹、甲必丹 【名】 幕府時代に、和蘭（オランダ）の商船の長をいへり。蘭語の Capitein の轉。

かひがねをさやにもみしが 甲斐が嶺を爽にも見しが 【句】 古今集の東歌に「かひがねを、さやにも見しが、けゝれなく、よこほりふせる、さやの中山」。見しがは、見たきものなりと希求する意。けけれなくは、心無くなり。甲斐の山を見むとするに、心なく、佐夜の中山が横ばりて見えぬことよとなり。

がびさん 峨眉山 【名】 支那にある山の名。四川省嘉定州の眉縣の南百里にあり。

かひばらえきけん 貝原益軒 【名】 名は篤信、久兵衛と稱す。また、損軒とも號す。筑前の人、世々福岡侯に仕へ、父寛齋のとき、醫を業とせり。益軒は、明曆中京に出でゝ、松永尺五、山崎闇齋、木下順庵等につきて學べり。溫厚恭謙、博學を以て自ら傲らず、實に古今の德家なり。其の著、百有餘、みな實用を本とし、國字を用ひて兒童婦女といへども讀み易からしめたり。正德四年歿す。年八十五。

かひをけ 貝桶 【名】 むかし、貝合（カヒアハセ）とて、女小兒の、蛤の貝を打ち合せ、多く合せたるものを勝としたる遊戲ありしなり。其の蛤貝を入れ置く桶にて、通例一尺二寸、薄板にて六角に造り、徑一尺あり。

かぶ 歌舞 【名】 我が邦歌舞の起原は、太古に始まり、神武帝は、之を軍陣に用ひて士氣を鼓舞し、崇神帝は、神宴に之を奏して神人を調和したまへり。されば、上古に、粂舞、隼人舞、倭舞、神樂などの稱あり。又當時、樂器としては、和琴、笛ぐらゐなりけむを、後に至りては、漢土の吳國の樂を傳へ、厩戸皇子、最好みて佛の供養に用ひしより、いよ〳〵盛に行はれ、次いでまた、隋唐の樂も入り來れり。

かふ 買、市、沽 【動ハ四】 買は、「出曰賣、入曰買」といひて、買ひ取ることなり。沽はうるともかふとも訓む。出來合ひ物、粗惡なる品を、つひ買うて來るなり。市は賣り買ひすること。

がふ 樂府 【名】 漢詩の一體なり。その始めは、漢書禮樂志に「武帝、郊祀の禮を定め、樂府を立てゝ、李延年を協律都尉（樂を司る官）と爲し、司馬相如等の作れる詩賦をとり、律呂を論じて、八音の調に和す」と見えたり。この事、哀帝の時に至りて罷められしが、後世、その調に習ひて作りたる詩を、樂府といへり。

がふきん 合巹 【名】 婚禮に杯を交ふるをいふ。巹は一の瓠を二つに分ちて作りたる酒器にて、婚姻の席に、男女各一片を執りて酒を飲むに用ふ。禮記「婦至、婿揖、婦以入、共牢而食合巹而飲、三々も共牢とは二つの牲を二人して食ふこと。

がふし 合子 【名】 ぬなかがふしを見よ。

がふじうれんかう 合從連衡 【句】 從は縱にて、たて也、衡は橫なり。縱に合せ橫に連ぬる義。支那戰國時代に於ける諸侯の同盟締結にて、關東の諸國連合するを合從といひ、關中の諸國合同するを連衡といへり。史記「天下方務二於合從連衡一以二攻伐一爲レ賢」。

かふしやは 甲子夜話 【名】 書名。二百七十卷あり。肥前國平戸の城主松浦靜山の隨筆雜錄なり。靜山、名は清、壹岐守と稱し、漢學を好くしたり。天保十二年六月歿す。年八十二。

かぶつ 下物 【名】 飲酒の時の肴。世說に「有二如レ此下物一斗不レ足レ多也」。

かぶらや 鏑矢 【名】 鏃（ヤジリ）の名。鳴鏑（ナリカブラ）ともいふ。木にて、蕪の如き形に造り、三方に穴をあけて中を空にし、射れば、穴に風の入りて響を發するやうにしたるもの。

かぶえつ 甲越 【名】 甲越の兵、甲越の軍などいふは、足利の季世における、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信の兩勇を指したり。

かべ 漢辨 【名】 地名。和名抄に「安藝國漢辨郡」とあり。今の、可部町及中原村なり。

かべいつを 加部嚴夫 【名】 國學者。大國隆正の門人なり。石見の人。

がへう 餓莩 【名】 飢ゑて、途上に斃れ死ぬる者をいふ。孟子に「野有二餓莩一」。

かへさ 還方、歸方 【名】かへるさまなり。歸るさき、歸りがけ、などの意。

かべにみみあり、てんにくちあり 壁に耳有り、天に口有り 【文】世の諺なり。姚元崇の口誡に「多言多失、多事多害。聲繁則淫、音希則大。室本無ㇾ暗。垣亦有ㇾ耳。何言者天聽なるに出でたるか。

かべのなかよりもとめいでたりけんふみ 壁の中より求め出でたりけん書 【句】孝經をいふ。孔安國が古文孝經の序に「魯恭王使ㇾ人壞ㇾ夫子講堂。於壁中石函ニ得ニ古文孝經二十二卷ニ」とあるによれり。

かへりまうし 返申 【名】神佛に祈りし事の成就して後に、御禮の爲に參詣すること。又散命の返事を奏聞すること。

かへりみすれば 返見爲れば 【句】ふりかへりみること。

かへりみてたをいふ 顧みて他をいふ 【文】そしらぬ顏して話をよそに紛らすをいふ。

かぼ 嘉謨 【名】國家を治むるよき手段方法。嘉猷も同じ。

かほをかしていさむ 顏を干して諫む 【文】面と對ひて直接に諫むること。

がまう 鵝毛 【名】鵝鳥の毛。雪の異名に用ふ。

かまく 感 【動カ下ニ】感ずる心に染みて思ばる。

かまくら 鎌倉 【名】相摸鎌倉郡鎌倉町。賴朝以來源家の根據地にして、北條氏、足利氏、皆緣故ありし地。鶴岡八幡宮および、護良親王を祀れる鎌倉宮あり。

かまくらのたいしやう 鎌倉の大將 【名】源賴朝をいふ。

かまだえいきち 鎌田榮吉 【名】舊和歌山藩の人。慶應義塾の出身にして、鹿兒島造士館教頭、大分縣中學校、師範學校長となり、明治二十七年衆議院議員となりしが、今は慶應義塾の塾長たり。

かまだじごうまさよし 鎌田次郎正清 【名】藤原秀鄕の裔。相模の人。また、政家ともいふ。源義朝の臣なり。

かまだひやうゑ 鎌田兵衛 【名】鎌田正清を見よ。

がまふうちさと 蒲生氏鄕 【名】小字は忠三郎。飛驒守と稱せり。其の先は、田原藤太秀鄕に出づ。織田信長、豐臣秀吉に仕へて、會津百萬石に封ぜらる。雄才あり。爲に、秀吉に忌まれ、遂に、文祿四年、大坂に毒殺せらるといふ。年四十。

がまふくんぺい 蒲生君平 【名】名は秀實。修靜庵と號す。下野の人。慷慨家なり。古帝陵の頽廢せるを慨し、これをさぐりて山陵志を纂せり。文化十七年七月歿す。年四十六。

かみ 神 【名】靈ありて、形なく、幽冥界にありて、無上自在のはたらきをなすもの。また、死後の魂を祀れるもの。また、不思議にして測り知るべからぬもの。また、鳴神即ち雷をもいふ。

かみがき 神垣 【名】神社の忌垣、玉垣、瑞垣など同じ。周圍の垣。

かみがた 上方 【名】地方より五畿內邊をいへる稱。

かみがこ 紙子 【名】厚紙をもみて、着物に縫へるもの。

かみさうじ 紙障子 【名】紙にて貼りたる障子にて、後世の衝立やうのもの。衣類などかけたるも、狹衣物語に見ゆ。

かみさぶ 神閑 【動ハ上二】かんさぶともいふ。古めきたり。奇しく凄し。がうがうし。神めきたり。

かみしも 上下 【名】かたぎぬを見よ。

かみなりのつぼ 雷鳴壺 【名】襲芳舍をいふ。內裏の一殿にして、梅壺の北にあり。つぼ參照。

かみのつかひ 神使 【名】神々の、各々特にその使とするといふ動物の稱。即ち、伊勢神宮の猿、春日の鹿、八幡の鳩、熊野の烏、稻荷の狐、松尾の龜、諏訪の蛇などの類なり。もとより、俗說にして採るに足らず。

かみはひれいをうけず 神は非禮を享けず 【文】性理字義に「神不ㇾ歆ニ非禮ニ、鬼不ㇾ犯ニ非族ニ」。

かんいう 姦雄 【名】姦智にたけたる人物。孔子家語「少正卯、人之姦雄也」

がんえん 顏淵 【名】孔子の弟子。名は回。孔門三千人中の秀才なりしが、不幸短命にて、三十一歲にて歿せり。

かんおう 感應 【名】信心の、神佛に通ずるをいふ。感通ともいふに同じ。「誠意、終有ニ天神之感應ニ」。

かんおうじ 感應寺 【名】東京市下谷區谷中共同墓地の南にあり。初は、日蓮宗に屬し感應寺と號せしが、元祿年間、故ありて改宗して天台宗となり、寺號をも天王寺と改めたり。

かんおん 漢音 【名】支那の隋以前に、その北部に最も行はれし音をいふ。しかして、南部の吳を中心とせる地に行はれし吳音といひ、宋以來の發音を唐音といへり。

かんか 軻軻 【名】人の、志を得ざること、不遇なること。坎坷、齟齬、坎壈、意、皆同じ。かんかふぐうを見よ。

かんが 閑雅 【名】人の容姿の品よきこと。ゆかしく、しとやかなること。

かんかう 漢高 【名】漢の高祖をいふ。劉氏、名は邦。前漢初代の帝王。

かんかう 間行 【名】忍びありき。こみちよりゆくこと。微行。

かんかく 扞格 【名】かたくして中に入りがたきこと。又、當りさからふこと。禮記「則扞格而不ㇾ勝」。

かんかだう 含嘉堂 【名】はつしやうゐんのじふにだうを見よ。

かんかん 坎坎【副、形】喜ぶこと。爾雅釋訓「坎坎喜也」

かんかん 侃侃【副形】喜びたのしむこと。論語「冉有子貢侃侃如也」。

かんかふぐう 轗軻不遇【句】轗軻も不遇も共に志を得ざるをいふ語。廣韻に「轗軻不ㇾ遇也。車行不ㇾ利曰ニ轗軻一。故人不ㇾ得ㇾ志、亦謂ニ之轗軻一。」。かんかを見よ。

かんきうじゆうさう 汗牛充棟【句】書物のたくはへ多きにたとふ。柳宗元の文に「陸文通之書、處則充ㇾ棟、出則汗ㇾ牛」。

かんぎたいふ 諫議大夫【名】支那の官名。天子を諫むることを職とす。唐の職官志に「正五位上、掌ニ侍從、贊相、規諫、諷諭一」。

かんきやうじん 鉗狂人【名】書名。一卷あり。本居宣長が、藤井貞幹の衡日發を論破せるもの。

かんきよ 閒居【名】退きて、靜にくらすこと。あそびてくらすこと。仕事なくて、暇でをること。論語「小人閒居爲ニ不善一」。

がんくつのし 巖穴士【名】隱遁者をいふ。史記「巖穴之士趨舍有ㇾ時」。

かんくわ 干戈【名】戰に用ふる干と戈となり。轉じて、戰爭のことにいふ。「干戈に訴ふ」など。詩經「干戈戚揚」。

がんくわい 顏回【名】がんえんを見よ。

かんくわんりうり 間關流離【句】艱難して、さまよひありくこと。又、漢書「士死傷略盡、馳入ニ宮門一、間關至ニ漸臺一」の注に「間關、崎嶇輾轉貌」。

かんくわん 酣豢【名】酒に耽り樂む酣といひ、犬羊を養ふを豢といふ。酒をのみ肉を食ひて逸居すること。

かんげき 感激【名】感動して意氣を引き立つること。出師表「於是、感激許ニ先帝一以ニ驅馳一」。

かんけつ 汗血【名】汗を血の如くになすとの意にて、非常の勞力をいふ。後漢書の注に「汗血謂ニ勞也一」。

かんけん 寒喧【名】寒暖に同じ。「寒喧を叙す」は、時候のあいさつすること。

かんこう 桓公【名】支那戰國春秋の世の五霸の一人。くわんちう參照。

かんこう 鉗口、箝口【名】緘口。口を塞ぐこと。漢書「君自閉ニ塞天下之口一而曰ニ益ㇾ愚一」。

がんこうせうなり 眼孔小也【文】識見の狹小なるをいふ。書言故事に「宋太祖、嘗與ニ趙普一言ニ桑維翰一。普曰、使ニ維翰在一ニ陛下又不ㇾ用、雖ニ愛ㇾ錢。上曰、苟用ニ其長一、當ㇾ護ニ其短一。措大眼孔小。賜ニ與十萬貫一則塞ニ破屋子一矣」。

かんこくくわん 函谷關【名】支那の地名。長安の四、四百里にあり。括地志に「函谷在ニ陝州桃林縣西南十二里一。秦函谷關也」。

かんこくのけいめい 函谷の鷄鳴【句】孟嘗君の故事なり。齊の人孟嘗君が、秦の昭王の許に質たりしが、逃れて國に歸る。時に夜深し。途に函谷關あり。關の法、鷄鳴を聞きて後、始めて人を通す。時に、孟嘗君が常に養へる三千の客中に、鷄鳴を能くするものありて、鷄の聲をまねたるに、これに催されて近家の鷄悉く鳴く。すなはち無事に通過して追捕を免るゝことを得たり。史記にくはし。

かんこどり 諫鼓鳥【名】鳥の名。常に深山に棲み、形鵄（トビ）に似て、鳩ばかりの大さなりといふ。古今集に「たちこちの、たづきも知らぬ山中に、覺束なくも、呼子鳥かな」とある呼子鳥は、是の鳥なり。俳句などにて物さびしきものにして詠めり。一名、郭公鳥（カクコウドリ）。ツヽドリ。フヽドリ。

かんさう 諫諍【名】まのあたり其非を擧げて人を諫むること。

かんさつ 簡札【名】手紙。むかし、竹を以て編みしゆゑ、しかいふなり。

かんさつ 監察【名】人の所業を見張り、しらぶるをいふ。目付に同じ。

かんさつぎよし 監察御史【名】支那の官名。六典に「監察御史掌ニ分ニ察百僚一巡ニ按郡縣一糾ニ舉刑獄一肅ニ淸邦憲一」。

かんざはていかん 神澤貞幹【名】通稱與兵衛。北蝸、また、吐口と號す。大坂の人。雜學者にして、俳諧をよくし、詩文にも長ぜり。其蝸翁草、續翁草、ちりひぢ等を著はす。寛政七年三月歿す。年八十六。

がんざんのくも 雁山の雲【句】ぜ〳〵とほどとほしを見よ。

かんし 敢志【名】必死に同じ。後漢書注に「敢志謂ニ果敢而死者一」。

がんしかくん 顏氏家訓【名】北齊の顏之推の著にして、二十卷あり。之推、字は介、琅琊臨沂の人。隋の開皇中に死せり。別に文集三十卷あり。

かんじさんおんかう 漢字三音考【名】書名。一卷あり。本居宣長の著にして、漢字の音について、論辨したるもの。

がんしするの 顏之推【名】顏氏家訓を見よ。

かんしん 寒心【名】ぞつとして膽を冷やすこと。戰國策に「秦王之暴而積怨于燕、足ㇾ爲ニ寒心一」で。

かんしん 廿心【名】心にうまく思ふこと。おもふぞんぶんにすること。

かんじん 函人【名】具足を造る人。

がんしんけい 顏眞卿【名】支那唐の世の人。字は、清臣、

瑯琊臨沂の人。顔師古二十五世の從孫。書法に巧なり。安祿山の亂に、首として勤王を唱へ、後終に李希烈の爲に殺さる。

かんしや 檻車 【名】四方を板にて圍ひし車にて、罪人を載するに用ふ。

かんじや 間者 【名】敵のまはしもの。間牒。

かんじやう 感狀 【名】賞狀。武家時代に、軍功を賞すとて、大將より臣下に賜はりし書つけ。

かんぢやう 函丈 【名】師の席をいふ。禮記「若非二飮食之客一則布二席於函丈一」とあるに出づ。師におくる書信に、函丈とかくもこの故なり。坐右、几下などいふに同じ。

かんじやう 干城 【名】干は扞にて、禦ぐなり。國家のふせぎの意にて、大將などをいひ、また軍人社會一般をもいふ。詩經「赳赳武夫公侯干城」。

がんしやうだう 含章堂 【名】はつしやうねんのしふにだうを見よ。

かんしやうばくや 干將莫邪 【名】支那古代の、名劍の名。

かんじやうせい 感受性 【名】內界外界の刺激によりて感動する性質をいふ。

かんじよ 漢書 【名】支那の歷史の名。前漢書、後漢書を合していふ。前漢書は、後漢扶風の人班固の撰せるものにて、前漢十二代の歷史。後漢書は、宋人范曄の著にて、後漢二十代の歷史。

かんしよく 寒食 【名】冬至を去ること一百五日、疾風甚雨あり。これをいふと、荊楚歲時記にいへり。又、支那にては、此の日、火を焚かずして、冷食す。これは、晉の時、介子推といふもの、功ありて賞せられざるを恨み、山に隱れたるを、出でしめんとて、その山を焚きしに、そのまゝ燒死したりしかば、王哀みて、此の日は、人民をして火を絕たしめたるに起るといへり。

かんせい 汗青 【名】史冊に同じ。古へ、竹に文字を書せし時代に、竹の油をぬきたるものを、いひしなり。それをやがて、書冊の義にいへり。文天祥の詩「留二取丹心一照二汗青一」。

かんせい 坎井 【名】古くして水の腐りたる井。莊子「子獨不レ聞二夫坎井之鼃一」。

かんせい 陷穽、陷阱 【名】おとしあな。

かんせい 箝制 【名】おさへつけて自由に働かさぬこと。壓制などいふに同じ。

かんせう 罕少 【名】少きこと。罕なること。

かんせつ 間接 【名】ちよくせつを見よ。

かんせん 檻泉 【名】盛に水の出づる泉。詩經「騷沸檻泉」。

かんせんでん 甘泉殿 【名】漢の武帝の寵姬李夫人の住みし宮殿。

かんそ 寒素 【名】貧素に同じ。甚しく貧しきこと。

かんたいし 韓退之 【名】支那中唐の、有名なる文章家。名は愈、鄧州南陽の人。六經百家の學に博通し、唐の德宗に仕へて、監察御史となり、憲宗の朝に表を奉りて佛骨を論ぜしため、潮州刺史に貶せられ、後、赦されて朝に歸り、吏部侍郎を以て卒せり。昌黎文集あり。

かんだう 勘當 【名】罪を勘考して刑罰に當つること。轉じて、君父の意に叶はずして追ひ出さるゝをいふ。書言字考に「本朝俗爲二君父擯斥一曰二勘當一」。

かんだちめ 上達部 【名】公卿といふに同じ。大臣、大中納言三位以上の人をいふ、又、參議は、四位たりとも之に入る。

かんたんのまくら 邯鄲の枕 【句】ろせいが、いつするのゆめを見よ。

がんだら 鍵駄羅、鍵陀衛 【名】いにしへ、北天竺にありし國にて、今アフガニスタンのカブル河の流域に當るベンナツルは、その國のありし所なり。

かんち 逭逐 【名】逐ひ歸すこと。烈しく逐ひ拂ふこと。

かむちやつか 東察加 【名】地名。Kamtchatka の宛字にて、千島の北に連る半島にて、露領なり。

かんでんかうひつ 閑田耕筆 【名】書名。伴蒿蹊の隨筆。

その續篇を閑田次筆といふ。閑田は、著者の號なり。

かんでんもんざう 閑田文草 【名】五卷。伴蒿蹊の文集。

かんとく 竿牘 【名】簡牘に同じ。てがみ。

かんどり 楫取 【名】かぢとりの音便。

かんなう、ちにまみる 肝腦塗レ地 【文】なぶり殺しにせらるゝこと。又、慘殺せられて頭體を全うせざること。又、慘酷な目に遇はせらるゝこと。漢書「使二天下人民肝腦塗レ地父子暴二骨中野一」。

かんながら 惟神、隨神 【副】神の御心のまゝに。神の御心として。神のまゝにて。

かんなづき 神無月 【名】十月の異名。かみなづきの音便。

かんのちやうたらがためし 漢の張湯が例 【句】ちやうたうを見よ。

がんば 簡馬 【名】簡は閱に同じく、兵馬を閱すること。周禮春官「太田之禮、簡レ衆也」の疏に「簡、閱也。謂レ閱二其車徒之數一也」。

かん、はつをいれず 間不レ容レ髮 【文】利害の別るるとき、一髮を入るる隙もなきこと。枚乘の「其出不レ出、間不レ容レ髮」。

かんばのらう 汗馬の勞 【句】戰功のことなり。征戰の時に、馬疾馳すれば汗いづ。故に、然かいふ。史記の蕭相國世家

に「蕭何未ㇾ嘗有ニ汗馬之勞一」。

かんぱん 甲板 【名】汽船の最も上部にて、一面に板を張りつめたる所。

かんばら 蒲原 【名】地名。駿河國庵原郡にある東海道の一驛。古城趾あり。永祿年間小田原の北條綱重之に據りしが、武田晴信、大軍を以て來り襲ひ、城遂に陷れり。

がんぴ 雁皮 【名】灌木の名。葉は互生して、形南天に似たり。其皮を以て漉きたる紙を、雁皮紙といふ。潤くなめらかなり。

かんぴし 韓非子 【名】書名。韓の諸公子韓非の著。刑名の學の祖といはる。

かんぺい 簡兵 【名】兵を檢閲すること。

かんぼく 翰墨 【名】文筆といふに同じ。「翰墨を事とす」など。

かんぼちや 柬埔寨 【名】暹羅の東南の地。暹羅に屬す。

かんぽんしし よ 監本四書 【名】唐版の四書なり。四書とは大學、中庸、論語、孟子、をいふ。監本とは、支那唐の代に、國子監にて校正したる官版の義。

かんやうきう 咸陽宮 【名】秦の始皇帝が作りし宮殿。

かんよ 乾淤 【名】干あがりたる泥沙。

かんらん 瀏覽 【名】熱帶に産する植物の名。其實は食物

とし、また、藥用とす。核は堅くして彫刻すべし。

かんりん 翰林 【名】學の林といふに同じ。文林ともいひ、學者社會をいふ。猶、次を見よ。

かんりんゐん 翰林院 【名】大學堂なり。今日は、皇帝の敕裁にして、北京にあり。秘閣、玉堂、芸蓼などの異名あり。事物起原によるに、唐の太宗の時、北門學士をおき、明帝のとき、改めて翰林侍詔といひ、開元二十六年翰林學士といふ。これ、その始なりと。

かんろ 甘露 【名】甘雨ともいひ、天より降れば、祥瑞なりとせり。白虎通の注に「甘露者美露也。降則物無ニ不ㇾ盛者一也」。支那の古代には、名君出でて善政を布けば、天、之に感じて、此をふらすものとせり。

かむろぎ、かむろみ 神漏岐、神漏美 【名】皇祖の男女の神といふ意にて、高皇産靈神、神皇産靈神の二神を申す。或は、神漏美命は、天照大御神を申すこともあり。

かんろく 干祿 【名】仕へを求むること。論語に「子張學ニ干祿一」。

かんやに、たみのはだへをおぼす 寒夜に民の肌を思す 【文】續古事談に『帝王は、人を憐み民をはぐくむ心おはしますべきなり。然れば、一條院は、極寒の夜は、御衣を押しのけておはしましければ、上東門院、「など斯くせさせ給ふぞ」と問ひ奉り給ひければ「日本國の人民寒からむに、脫れ、暖にて寢たること、無慙のことなり」とぞ仰せられける。延喜の御門も、寒く冴ゆる夜は、御衣をぬさて、夜御殿より投げ出し給ひけりといひ傳へたり』。また、後鳥羽帝の御製に「衣を寒み、園のふすまの、冴ゆるにも、わらやの風を、思ひこそやれ」。

かんをんのさふ 閑院左府 【名】左大臣藤原冬嗣。閑院の第に住居したればいふ。左府は、左大臣の唐名。

かんをんのみや、しがうじげん 閑院宮諡號事件 【句】光格天皇の御生父典仁親王に、太上天皇の尊號を奉らんとしたまひし旨を德川幕府に下せしが、幕府、命を奉ぜずして止みき。此時の論爭をいへり。其の明年、親王薨じたまひしによりて、自在王院と諡し玉へり。

かめのかがみ 龜の鑑 【名】あづまの龜の鑑を見よ。

かめやま 龜山 【名】地名。伊勢國鈴鹿郡役所のある地。

かめやまどの 龜山殿 【名】山城國葛野郡の大井川に臨める離宮にして、はじめ後嵯峨上皇、檀林寺の廢墟に御造營ありて仙洞としたまひしが、龜山天皇、亦〻〻を仙居としたまへり。

かめゐ なんめい 龜井南冥 【名】名は魯、字は道載、南冥は號なり、筑前の人。山縣周南の門に遊び、大に徂徠學を主張す。文化十一年歿す。年七十二。

かも なほえ 加茂直兄 【名】松田氏。藤園と號す。京都加茂の縣主にして、正四位下伊豫守に叙せらる。安政三年七十二にて歿す。言葉の直路の著あり。

かも すゑたか 加茂季鷹 【名】京都加茂社の祠官。正四位下安房守に叙せらる。雲錦亭と號す。後、江戸に來り、加藤千蔭等と交る。和歌に長じ、また、狂歌をよくして、名聲大に鳴り。其門に入る者、甚だ多く、上は貴公子より、下は俳優の如きに及べりしといふ。天保十三年九月歿す。年九十一。

かも ちやうめい 鴨長明 【名】代代加茂社の氏人なり。長明、禁中に仕へて、從五位下に叙せられ、和歌管絃の道に精しきを以て、後鳥上皇の寵を得、和歌所の寄人にあげらる。されど、加茂社の祠官たらんことを請ひて、許されざりしを不快におもひ、剃髮して、名を、蓮胤と改め、日野山の方丈に隱る。歿年、詳ならず。或は、建保四年、六十三にて寂せりといふ。

かものけいば 加茂の競馬 【句】五月五日、山城の上下加茂神社に行はるる競馬をいふ。堀河帝の時、始まるといへり。これ、往古、內裡の豐樂院にありし騎射の式のかたみなりといふ。

かも まぶち 加茂眞淵 【名】國學四大人の一人。遠州敷

知郡伊場村の人。(アリタヤ)縣居と號せり。通稱は岡部衛士。荷田春滿に學び、學成りて、江戸に門を開く。田安家に聘ぜられて寵遇殊に厚かりき。わが古學の復興は、實に翁の力による。明和六年歿す。年七十三。

かもん 勘文 【名】むかし、天文博士が、天象を見て、人事の吉凶を勘へて、天皇に奉れる案書。

がもん 衙門 【名】政廳の入り口。又、今、支那にて、役所の義。「總理衙門」。

かや 呵也 【感】といきをつくこと。

かやうくわん 河陽館 【名】河陽は、山城國乙訓郡山崎の別稱。嵯峨天皇、離宮をここに置きて、河陽宮(カヤノミヤ)と號し玉へるよりいふ。

がよちやう 鴈輿丁 【名】御輿を舁くもの。延喜式に「凡供奉行幸鴈輿丁者、鴈別二十二人。(十二人擎二御輿一、自餘執二前後綱一)」。

からあや 唐綾 【名】支那より渡れる綾織なるべしといへり。また、今の綸子なりともいへり。之を以て鎧を威すには、綾を、革ほどの厚さに、折り疊みてするなり。

からうた 詩、唐詩 【名】わが國の歌に對して漢詩をいふ。

からかね 唐金 【名】青銅をいふ。その製法唐より傳はりし故、かくいふ。銅の十に、鉛五分一乃至七分三を交ふ。

からかば 辛川 【名】備前國津高郡の地名。

からかば 唐皮 【名】平家重代の鎧の名、虎の革をもて威したる故に、唐皮と名けしよし、盛衰記に見えたり。

からくさ 唐草、纏枝 【名】蔓草の、うづまきたるが如き模樣をいふ。

からころも 唐衣 【名、枕】支那風に仕立し衣をいふ。又、うるはしき衣。又、衣といふより、きる、たつ、ひも、馴るなどの枕詞とす。

からさきのまつ 唐崎の松 【名】近江國滋賀郡滋賀村の湖濱にある老松。唐崎の一つ松と呼べり。

からさきみやうじん 唐崎明神 【名】唐崎の松下なる一小祠をいふ。

からすのかしらしろくなる 烏頭白くなる 【文】支那戰國の時、燕の太子丹といふもの、秦に質となりしが、秦、禮せざりしかば、歸を求めしに、秦王曰はく、烏頭白く、馬角を生ずるを待て歸さんといふ。太子、則ち天を仰いで歎じたるに、烏頭白く馬角を生じたるもの現はれたり。秦王、大に驚きて、丹を歸せりと史記に見えたり。後撰集「山烏、頭し白く、なりにけり、我が歸るべき、時や來ねらむ」。

からつ 唐津 【名】肥前東松浦郡唐津町。佐賀縣に屬せり。此の地、豐臣氏の時より、正保年間までは、寺澤氏の治所た

り。文化十四年、小笠原長昌、徙りて、以來、其の世襲地たり。唐津燒及石炭を産出す。

からはな 寶相花 【名】寒國に生ずる蔓草にして、葉間より蔓を生じ、小花を開く。

からびつ 唐櫃 【名】長持の四方に脚をつけたるやうの櫃。

からぶみごころ 漢籍心 【名】支那の書物などにて陶冶せられたる心をいふ。支那風の心。

からまつ 唐松、新羅松、落葉松 【名】松の一種。五葉にして、其の裏白くして小し。

がらん 伽藍 【名】梵語。精舍と譯す。寺。

からめて 搦手 【名】おほてを見よ。

からものがたり 唐物語 【名】書名。二卷あり。大和物語に對して、唐土の事實を國文に譯したるもの。著者詳ならず。

からもん 唐門 【名】門の名。唐の制をうつして作れるよりの名。

からもも 唐桃 【名】杏をいふ。桃の一種。生長せるは四五尺、花は紅白色にして、其の瓣に單複あり。

からやう 唐樣 【名】日本流の書風に對して。支那の書風をいふ。

かりがね 雁 【名】雁(カリ)が音(ネ)にて、雁の鳴く聲をいふ語なるが、轉じて、ただ、雁といふ意にて用ふ。秋分に、寒地より來り、春分に、また北方に歸る。古今集に「春霞、立つを見捨てて、ゆくかりは、花なき里に、住みやならへる」。また、その鳴く聲の、船の櫓の音に似たるより、白氏文集に「秋雁櫓聲來」の句あり。夫木集にも「かりがねは、みふねの山や、越えつらむ、かちかけたりと、天つ聲する」。

かりくら 狩坐 【名】狩をする場所。また、爭ひて狩をするをもいふ、即、狩猟の義。

かりごもの 刈菰の 【枕】刈りたる菰は、亂れ易きもの故、亂るの枕詞とす。

かりそく 苅除く 【動カ下二】苅りのぞく。かり拂ふ。

かりそめに 苟且、苟、假初 【副】ちよつと。假に。おろそかに。「假初の事」は、「一寸した事」。

かりばかま 狩袴 【名】差貫(サシヌキ)の如きものにて、布にて製る。

かりふおるにあ California 【名】地名。北米合衆國の西方海岸の地。

かりのたまづさ 雁の玉章 【句】漢の蘇武、匈奴に使して捕へられ、幽せられて歸るをえず。匈奴、漢と和して後も、なほ蘇武死せりとして歸さざりしが、漢の昭帝、すなはち、匈奴にいひけるやう、上林のうちに、雁を射たりしに、足に書あり。これ武が書簡なり。されば、生存せるや、必せり。直に歸すべしといふ。是により武、還ることを得たりといふこ

と後漢書に見ゆ。

かりや ゑさぶろう 狩谷棭齋 【名】名は望之、字は卿雲、通稱津輕屋三右衞門。國學者なり。天保六年七月歿す。年六十。

かりようびんが 迦陵頻迦 【名】佛典に見またる鳥の名。極樂淨土に居て、鳴く聲美しき鳥なりといふ。

かるかや 苅萱 【名】刈り取りたる萱。また、秋の七草の一。

かるしまのあきらのみや 輕島の明の宮 【名】豐明宮（トヨノアカリ）ともいふ。應神天皇の宮にして、其の跡は、大和國高市郡白橿村大字大輕の中に在り。

かるべがは 輕部川 【名】備中國高梁川、一名大川を、輕部の宿の名によりていふ。

かるね 加累 【名】他人に禍を及ぼすこと。他人に迷惑をかけること。他人を罪のまきぞへにすること。荀子「殘賊加累」。

かるゐざは 輕井澤 【名】地名。信濃國北佐久郡にある一小邑。土地高燥なるを以て、夏時の避暑地に適す。東方に、碓氷嶺あり。

かれい 嘉禮 【名】吉禮に同じ。また、手厚き禮にもいふ。周禮「以嘉禮親萬民」。

かれいひ 乾飯、餉、糒、餼 【名】干したる飯。むかし、旅行などに携帶せしもの。伊勢物語「木の蔭におり居てかれいひ食ひけり」。之を湯に入れてやはらかにすることをほとばすといふ。又、辨當。

かれん 可憐 【名】哀憐に同じ、あはれなること。また、可愛の義にて、愛らしきにもいふ。「可憐の少女」。

かれん 嫁奩 【名】嫁入道具。嫁入荷物。嫁入箪笥。

かろく 家祿 【名】武家時代に、家に傳はれる祿。

かろく 加祿 【名】地行をますこと。領地をますこと。加增。加秩。

き 簋 【名】祭祀のとき供物を盛る器。內圓く、外方にして、量一斗二升を入るべしと。周禮に「凡祭祀共二簋簋」。

き 驥 【名】馬の一種。千里の馬。駿足の馬。轉じて、才能の勝れたるものを稱するに用ふ。

き 朞 【名】匝る意。年、月の一周すること。朞年。朞月。

ぎ 曦 【名】旭日。朝日。朝暾。

ぎ 艤 【名】船を取りよそふこと、即、出帆の準備すること。

きあつ 氣壓 【名】空氣の、物を壓する力、即、空氣濃厚なれば、その力も從ひて強大となる。

きいう 杞憂 【名】むかし、支那の杞といへる國に、一人の愚者あり、天地の崩るゝことなきかとて憂へしに、又その憂を憂へし人ありきといふこと、列子に見えたり。それよりして、「いらぬ心配」、「取越苦勞」などの意にいふ。「杞憂を抱く」、「杞人之憂」。

きいん 徽音 【名】美音に同じ。詩經「大姒嗣二徽音一」。

きう 器宇 【名】人物の、器量又は品性。「器宇宏遠」。

きうあい 宮娃 【名】宮中に仕へたる美人。劉得仁の詩に「白髮宮娃不レ解レ悲」。

きうか 九夏 【名】夏季九十日間の稱。「九夏三伏之候」。

きうかう 躬行 【名】身自ら行ふこと。大載記「躬行者、政治之始也」。「躬行實踐」。

きうかう 仇香 【名】德川時代の官職の名にて、代官の代りをなせるもの。

きうかうはおふこさなかれ 窮寇勿レ追 【文】漢書趙光の傳に、「此窮寇不レ可レ追也。緩レ之則走不レ顧。急レ之則還致レ死」。少しもゆるみなしに他を苦むるを惡しとする意に云。

きうかつ 裘葛 【名】裘は、冬の衣、葛は夏の衣。故に「一たび、裘葛を易ふ」は、一年を經たるを。猶、かつきうを見よ。

きうき 窮鬼 【名】びんぼうがみ。

きうきう 休休 【名、副、形】節儉。また、心のゆつたりしたること。書經「其心休休焉」。又、こゝろに道を樂しみて閑かに安らかなる貌。詩經「艮心休休」。

きうぎふのいちまう 九牛一毛 【句】多大なる物に對するその極少部分をいふ。禪林句集に「四海一滴、九牛一毛（イチゲ）」。

きうくん 舊勳 【名】以前になしたる勳功。「憶二父祖之舊勳一愛レ之」。

きうくわいのちやう 九廻腸 【句】憂悶の烈しきこと。心腸九回も廻轉するかと思ふほど悶え憂ふること。司馬遷の書に「腸一日而九廻」。

きうさいやう 救荒【名】不作の歳に施す救助。

きうしきわん 嗅官【名】五官の一にして、鼻のこと。生理學心理學に用ふる語。

きうしわん 九官【名】九人目の男の子をいふ支那の俗語。

きうしわん 鳩灌【名】鳥の名。鸜鵒の類にて、人語をなす。

きうしわん 舊貫【名】舊制に同じ。論語に「魯人爲二長府一、閔子騫曰仍二舊貫一、如レ之何必改レ之。」注に貫は事なりと。また舊領地。

きうけつ 宮闕【名】天子の御所。禁闕。九重。雲居。

きうけつ 九穴【名】人體中の九箇の穴。口、兩耳、兩眼、兩鼻孔、二便孔、これなり。

きうげん 九原【名】黄泉に同じ。禮記に「從二先大夫于九原一。」注に、晉の卿大夫の墓は九原にありと。されば九原はもと地名なれど、轉用せるなり。

きうこ 舊故【名】ふるきなじみ。舊知、舊友に同じ。

きうこんさう 球根草【名】植物學の語。根の球形をなす植物。

きうこのそん 九五尊【句】天子のこと。九五之位ともいふ。易經履卦の疏に「以剛處中得二其正位一居二九五之尊一。是剛中正履二帝位一也。」

きうさ 賤者、下男【名】京都にて、下男をいふこと。

きうさい 九采【名】支那九州の牧(官名)なり。それを采ことは、其の州の美物を采りて天子に貢するを以てなり。禮記「九采之國、應門之外、北面東上。」

きうさく 窮策【名】苦しまぎれの策略。苦しさの餘りの策畧。せっぱつまりの方法。下策。「窮策を思ひつく。」

きうじたるる 執牛耳【句】支那にて、盟には、牛耳を用ひ、年者、これを執り、尊者、これに泣むを禮としたり。されど牛耳を執るを以て、盟を主ることゝなり。轉じて、文壇、結會などに、領袖の義に用ふ。

きうし 九死【名】殆ど死すべき境合。「九死一生の境合。」

きうしき 舊識【名】舊故、舊知に同じ。

きうしつ 髹漆【名】髹は髹に同じ、漆を塗ることをいふ。また赤みがかつた漆。

きうしふ 舊習【名】ふるき習俗。昔よりの習慣。

きうじん 玉人【名】玉すり。玉を作る人。

きうじんのこうだいつきにかく 九仞之功虧二一簣一【文】仞は八尺、簣は土を盛るモッコ、フゴ。九仞ほどの山を築くに一簣の土を缺けば完全に爲すことを能はざるの意にて、積年の勞も一失の爲に敗るゝに喩へたり。書經「厥攸、圮、試、不レ勤。不レ終。細行、終累二大德一。九仞功虧二一簣一。」

きうせき 休戚【名】喜憂、安危に同じ。

きうせん 九泉【名】よみぢ。黄泉。九原に同じ。

きうそかくつてねこをかむ 窮鼠却噛レ猫【文】必死の兎。「窮寇勿レ追」と同意。鹽鐵論に「死不二再生一、窮鼠齧レ猫。」

きうたい 窮指大【名】指大は大事を謀指する義にて、其の材を貸めていへるにて、窮士といはむが如し。すなはち、第したる窮士。貧乏書生。書言故事「窮指大眼孔小、與二鍵十箇一、則塞二破屋子一矣。」

きうたいのひげ 舊苔の鬚【句】古くむしたる岩の苔を、人の鬚に見たていふ。きはれてはがせんりうのかみをくしけづるを見よ。

きうていたいりよりおもし 九鼎大呂より重し【文】非常に大切なること。價値の貴だ高きこと。史記の平原君傳に「毛先生一至レ楚、而使二趙重一於九鼎大呂一、毛先生以二三寸之舌一、強於百萬之師一。」註に「九鼎大呂は國の寶器、正殿に大呂は周廟の大鐘といへり。

きうてうふところにいる 窮鳥懷に入る【文】顔氏家訓に「窮鳥入レ懷、仁人所レ憫。」とあり。人の窘困して來り倚るに譬ふ。

きうてん 九天【名】九方の天なり。淮南子「天有二九野一、中央曰二鈞天一、東方曰二蒼天一、東北方曰二變天一、北方曰二玄天一、西北方曰二幽天一、西方曰二昊天一、西南方曰二朱天一、南方曰二炎天一、東南方曰二陽天一。」また、單に天の意にもいふ。「賦二與纖花一悉二九天一」の如し。

きうてん 舊典【名】古き記錄。古文書。古典。

きうぼくのきん 九牧之金【句】九牧は、支那上古の官名にて、九州の長官を牧といふ。初め、舜、天下を分ちて十二州としが、禹、改めて九州とし、天下の美銅を鑄めて、九鼎を作りて、九州に象れり。是れよりして、天下の金の意に用ふ。

きうぼくふんど 朽木糞土【句】論語に「宰予晝寢。子曰朽木不レ可レ雕也。糞土之牆不レ可レ杇也。於レ予何誅。」とあるより、手入れすべからざる物の義に用ふ。談苑「今讀書、繇之後、如二朽木糞土一矣、雖レ欲二澄治一之、已不レ可二奈何一。」

きうん 氣運、機運【名】きざし。いきほひ。なり。運命。「改革之氣運到來。」

きうめい 休命【名】よき運命。休は美、美命といふに同じ。易「順二天休命一。」

きうもん 糾問、糺問【名】とひただすこと。糺察、詰問、吟味に同じ。

きうらふ 舊臘【名】昨年の臘月(十二月)をいふ。また客臘ともいふ。

きうり 窮理【名】事物の理を奥深く究むるをいふ。格物に同じ。窮理學は物理學。

きうりう 穹窿 【名】蒼天(ソラ)。梁簡文帝の詩に「天圏復穹窿」と。周必天の詩に「草堂對二穹窿一」。

きえがてに 消難に 【副】消えがたげに。消えがたさうに。消えかぬる意。偖に消えきらぬ意。狭衣物語「御前の方を見入れたまへれば、御殿油きえがてに、またたきて」。草庵集「さゆる夜に、あたりの霜は、つれなくて、消えがてになる、圃の埋火」。

きえん 氣焰 【名】盛なるものいひの勢ひをたとへていふ。「氣焰萬丈不レ可レ當」。

きえん 棄捐 【名】他を惠むために財を抛つこと。義捐に同じ。また、足利氏の頃、徳政とて、人民の債權者をして、強ひて貸金を捐てしめしこと。債務者は、これによりて辨償の義務を免かれたり。この時、將軍自身負債者となりては、此の令を施きしかば、名は徳政といひて實は暴政なりき。

きか 麾下 【名】大將の旗の下。轉じて、大將の近侍の士をいふ。旗下。麾下。

きか 貴下 【代】同輩に對し、敬ひて用ふる代名詞。重に文書の上に用ふ。

きか 机下 【名】文書の往復上に用ひて宛名の脇にかき、その人の机のもとにまゐらする義にて、尊敬を表はす語。

ぎが 巍峨 【名】山の高く聳えたること。巍巍に同じ。

きがい 氣慨 【名】道ならぬことを慨きて、容易に屈せぬ氣象。意地。意氣。意氣地。いきごみ。

きかいくわんらん 氣海觀瀾 【名】支那にて出版せし理化學の書名。わが國にても、明治の初年には、學校教科書としことあり。

きかう 寄稿 【名】詩文等の原稿を、新聞雜誌に寄すること。

きかう 紀行 【名】旅行日記。

きかう 紀綱 【名】かうきを見よ。

きかく 犄角 【名】鹿を捕ふるに、其の前を繞ぐる角と云ひ、後を絆ぐを犄といふ、依りて、前後より敵を夾撃する意に用ひ、又、兩者相助け合ひて、敵に備ふるをいふ。「爲二犄角之陣一」。

きかじん 旗人下 【名】支那にて滿洲人の特稱に用ふ。

きがはらけ 黄土器毛 【名】馬の毛色の名。白に黄色を帶びたる色をいふ。

きかん 龜鑑 【名】手本とすべき善き例。かめのかがみを見よ。

きかん 旗艦 【名】司令長官の乘込める軍艦。

きかん 祁寒 【名】大寒に同じ。

きき 敧器 【名】支那にて、座右に置きて、勸戒となす器。家誌「孔子觀二於周廟一有二敧器一焉。使二子路取一水試之一、滿則覆、中則正、虛則敧」。

きき 紀、記 【名】紀は日本書紀、記は古事記を略していふに用ふ。「紀記二典を案ずるに」など。

きき 忌諱 【名】畏避に同じ。いみさくべきこと。漢書「鄙人不レ知二忌諱一」。「忌諱に觸る」は、機嫌を損ずること。

きき 翬翬 【副、形】高く飛ぶ狀。

きき 嘻嘻 【副、形】笑ふ聲。易經「婦子嘻々」。

きき 規規 【副、形】小さなる狀。莊子「規規然若喪二父母一」。

きき 危機 【名】危害の將に及ばんとする場合。「危機一髪」。南史に「貧賤常思二富貴一、富貴必踐二危機一、今日思爲二丹從布衣一不可得也」。

きぎ 危疑 【名】あやぶみ疑ふこと。びくびくする。危悞と。

きぎ 魏禧 【名】清の寧都の人。字は永叔、魏叔子ともいへり。清朝有數の學者。康熙十九年卒す。年七十。

ぎぎ 巍巍 【副、形】高く大なる狀。論語「巍々乎、舜禹之有二天下一也」。巍然に同じ。

ききやう 鬼享 【名】宗廟の祭。周禮「以二路鼓一鼓二鬼享一」。

ききよ 箕踞 【名】箕座に同じ。兩脚をいだし、箕形の如く踞ること。史記「倚柱而笑、箕踞以罵」。

ぎぎよく 岐嶷 【名】幼者の狀貌の卓異なること。詩經「誕實匍匐、克岐克嶷」。

柳條をまげて箕を製することをなし、自然に見習ひて之に習はんとするよりいふ。

きぎす 雉子 【名】きぎしともいふ。雉の古言なり。

きぎつぐひともかたりつぐがね 聞繼ぐ人も語り繼ぐがね 【句】萬葉集大伴家持の歌に「ますらをは、名をしたつえし、後の世に、聞きつぐ人も、語りつぐがね」。聞きつたへたる人も、亦語り傳ふるやうに、丈夫たるものは、大名を爲すべしとの意。がねは料にの意。

きききふそんばうのとき 危急存亡之秋 【句】あやふき場合。九死一生なごいふと同じく、一身、一家、或は一國の急に切迫せし場合をいふ。諸葛孔明出師表に「益州疲弊矣、此危急存亡之秋也」。

ききもおいては、どばにおける 騏驥も老いては、駑馬に劣る 【文】英才俊物(スグレタルヒト)も老衰しては、役に立たずとの意。史記「騏驥盛壯之時、一日而馳二千里一、至二其衰老也一、駑馬先レ之」。

ききよく 棊局【名】棊盤。

ぎきよく 戯曲【名】淨瑠璃院本、演劇脚本の類にして、聲律節譜を主とし、之を樂器に伴はしめて、劇場に演ずるに適せしむるを主としたるもの。英語ドラマの譯語。

ききよらい 歸去來兮【句】陶潛が歸去來辭に「歸去來兮。田園將蕪。胡不歸」。來は助辭にて、「歸りなん、いざ」と訓ず。喜びて歸るには「歎歸去來ニ而歸」などいふ。

きく 崎嶇【名、形、副】山路の平ならざる貌。また、之を踏めば困難を感ずるを以て、困難の義にも用ひ、又、直ちに、山路の意にも用ふ。

きく 聞、聽【動力四】聞は、彼方より聞ゆること。聽は、此方より注意してきくこと。

きくいく 鞠育【名】子を撫育すること。鞠養。

きくいちもんじ 菊一文字【名】後鳥羽天皇の、朝親ら、鍛工をして作らしめ玉へる太刀にて、銘に、一輪の菊花を打てり。きくづくりの太刀ともいふ。

きくがさね 菊重、菊襲【名】衣服の襲の名。表は白にて、裏の蘇芳なるもの。

きくがは 菊川【名】地名。遠江國榛原郡にあり。

きくきう 鞠躬【名】十分に敬意を表せる狀。論語「入ニ公門ニ鞠躬如」。又轉じて、大に身を勞すること。「鞠躬盡力」。

きくじん 鞫訊【名】罪人の犯したる罪條を責めただすこと。

きくぢんのはう 麴塵の袍【名】山鳩色といふ染色にて、黄に青色を帶ぶ。かりやすと、紫草とにて染め、紋は、桐と鳳凰と竹となるも、又、唐草と尾長鳥となるもあり。桃花蘂葉に「賭弓、臨時の祭、莚坐、朝覲後の出御に着御の由なり云々」と見えたり。

きくちさんけい 菊池三溪【名】名は純、字は子顯。紀州の人。漢學者にして歷史に精し。國史略を著せり。明治二十年歿す。年七十三。

きくちようさい 菊池容齋【名】有名の畫家。名は武保、南朝の忠臣肥後守武時の後なり。年十八の時、高田圓乘の門に入り、狩野派の畫を習ひ、途に新機軸を出して一家を成せり。その著、前賢故實は故實家の參とする所。八十八歲の時、米國博覽會より賞牌を受く。明治十一年六月歿す。年九十一。

きくとぢ 菊綴【名】直垂などの縫目の綻びぬやう、縫留のところに、組緒を菊の花のかたちの如くして綴ぢつけたるもの、直垂には袖付けのところ、長絹には襟付けと端袖の付け根とにありて、其他、各定まりたる場所あり。素袍には紋の上に細き革にてつく。

きくのえん 菊の宴【名】重陽の宴ともいふ。陰曆九月九日、觀菊の御宴あり。即ち此の日、主上、南殿に御して、群臣に菊の御酒を賜ふ。また、上達部より始めて、其の道の人ども、詩歌を講ずる等の事あり。

きくのきせわた 菊着綿【名】重陽の節の前夜に、菊に着せて、其の香を移しおく菊の花形の綿。白菊には白を用ひ、黄菊には黄に染めたるを用ふ。

きくもん 鞫問【名】鞫訊に同じ。

きくわ 奇禍【名】意外の禍。思ひもかけぬ禍害。されば、寃罪など受けしを「奇禍に罹る」などいふ。

きくわ 歸化【名】外國の人が、其の國籍を脫して、他國の人民に編籍すること。歸化人。

きくわく 揮霍【名】手を揮すを揮といひ、手を反すを霍といふ。また、他物を揮去ること。また、あちらこちらに廣がりまはりて、一杯になること。陸機の文賦に、「紛紜揮霍、形難レ爲レ狀」。

きくわん 奇觀【名】珍らしき見物。狀がはりたる見もの。「千古之奇觀」。「宇宙之奇觀」。

きくわおくべし 奇貨可レ居【文】奇貨、時を俟つて之を販げば、大なる利益あり、故に、買うて貯へおくべしとの義。轉じては、よき機會の義に用ふ。語は史記呂不韋傳に見ゆ。

きけい 奇計【名】奇謀、奇策などに同じ。また、詭計ともかく。謀に詭道を用ふること。

ぎげい 技藝【名】わざとげいと。技術。技能。技工。

ぎけいき 義經記【名】書名。源義經の一代を記したる物語體の本。著者詳ならず。元祿十年の刊行。

ぎげき 技擊【名】擊劍の作法にて打つこと。荀子の注に「齊人以ニ勇力ニ擊ニ斬敵ニ者、號爲ニ技擊ニ」。

きけつ 剞劂【名】剞は、彫刻に用ふる曲刀、劂は、同じく曲鑿なり。版木を刻ること。版刻り。

きけつ 詭譎【名】奇譎、機譎。また、詐譎などいふ、皆同じ意にて、いつはること。その言語、變化常なくして、正しからざること。

きげつ 期月【名】約束の月。

ぎけつ 魏闕【名】大きなる門。皇居の門。淮南子「魏闕之高」。

きげん 危言【名】高言といふに同じ。禮記に「民言不ニ危言ニ」。

きげん 機嫌【名】佛典の語にて、譏嫌とあるを正しとす。人の好まぬことを伺ひ知ること。また、轉じては、不快な去りて愉快なる狀にあることにいひ、また、氣分、樣子などの義に用ふ。

きご 寄語【名】口上を言ひ遣ること。「寄語す」は、「物申す」といふが如し。

きご 綺語【名】虚飾多く、まことの無くして、人の心を惑はしむる言。大藏法數に「綺語者、謂下乖二背眞實一巧二飾言辭一、令中人好樂上也」。

ぎこう 義公【名】徳川光圀の諡號。

きこうし 貴公子【名】華族など、身分の高き家の男子。公達。

きこえ 聞【名】風聞。傳說。評判。取り沙汰。噂。

きこく 枳殻【名】灌木の名。蜜柑の木に似て小さく、夏時白花を開き實を結ぶ。干して藥劑とす。痰に功驗ありと。枳殻とカラタチとを同物とするは誤れり。

きこくし 鬼谷子【名】支那戰國時代の人。六國合從を說きし蘇秦の師にて、鬼谷に隱れ居りしかば、鬼谷先生といふこと。一說に、鬼谷は王翊といふ人なりと。

きこしめす 聞召【動サ四】聞く、飮む、食ふ、治む等の意に用ふる敬語。

きこしをす 聞食【動サ四】前のに同じ。

きこつ 鬻骸【名】齟齬に同じ。くひちがふこと。

きこつ 氣骨【名】俠骨に同じ。正義を守りて屈せざる氣象。

きこのいきほひ 騎虎之勢【句】事に當りて手を下したるが、中止せんと思へど、中止すること能はざるにいふ。行きがゝり上、やめるにやめられぬこと。隋書、「大事已然、騎虎之勢不レ得レ下勉レ之」。

きごみ 被籠、着込、衷甲【名】上着（うはぎ）の下に着込む鎧の一種。鎖帷子（クサリカタビラ）などいふもの。

きこん 氣根【名】根氣といふに同じ。堪へ忍ぶ氣性。精力。

きこゆ 聞【動ヤ下二】物事の耳に入るをいふ。また、「申し上ぐる」、「奉る」などの敬語に用ひらる。「しかじかと聞ゆ」、「語りきこゆ」、「待ちきこゆ」など。

きざ 簀座【名】簀蓆を見よ。

きしう 箕箒【名】塵取りとはうき。史記高祖本紀「願爲二季箕箒妾一」とあるは、妻とせられよの義。

きさがた 象潟【名】羽後國由利郡象潟村にありし湖水にして、風光、松島にも劣らぬ名區たりしかども、今は田甫と化し去れり。

きざみ 段【名】段階、等級などいふ意。

きざん 義山【名】人名。李氏にて、唐代の詩人なり。その隨筆たる雜纂といふ書に、殺風景のものとて、清泉に足を濯ぐ、花上に褌をさらす、山を背にして櫻を起つる、琴を燒きて鶴を煮る、花に對して茶を吸るなどいふことを擧げたり。

きし 棋子【名】將棋の駒。

きし 跪跂【名】ちんば。足の一方不具なること。國語「跪跂畢行」。

きし 毀梓【名】版木を毀すことなり。古は版木の材は梓なりし故に、版木を梓といへり。「上梓」は版木に彫ること。

ぎしきくわん 儀式官【名】禁中の儀式を掌る官人をいふ。

きしせんめい 旗幟鮮明【句】旗色のはつきりしたること。主義の明なること。公然と意見を立てゝ事に當ること。

き、しづかならむことほつすれど、かぜやまず 樹欲レ靜而風不レ止、子欲養而親不レ待【文】韓詩外傳に出づ。

きしていば 譏刺詆罵【句】そしりののしること。

きしべう 箕子廟【名】箕子の靈廟なり。箕子は、朝鮮の始祖にして、周の武王の時に此に封ぜられて、始めて、國を朝鮮と號し、都を平壤に奠む。

きしん 鬼神【名】支那にて、死者の神さなれるにいふ。禮記に「列二于鬼神一」とあり。また、一種想像の靈物にもいひ、又、すべて、神といふ意にも用ふ。

きしん 寄進【名】神社佛閣などに、金錢物品を納むること。寄附に同じ。

きじん 畸人【名】奇人に同じ。人に異なりたる行爲ある人をいふ。莊子「敢問二畸人一」。

きしやうだう 暉章堂【名】はつしやうねんのにふにだうを見よ。

きしやうもん 起請文【名】神佛にかけての誓ひぶみ。誓文。契約文。

きしよう 記誦【名】古文章等を記臆し誦讀するをいふ。

きずゐ 氣隨【名】きまゝといふに同じく、自分の思ふ儘にするをいふ。我儘の振舞。

ぎせい 犧牲【名】いけにへともいふ。獸を、生ながら神に供ふるをいふ。轉じては、或る人のの爲に、わが身を捨つるにいふ。「身を犧牲に供す」など、へり。

きせん 喜撰【名】僧なり。傳詳ならず。弘仁の比の人、山城宇治郡に、喜撰が嶽といふあり。此の僧のすめる跡なりと傳ふ。六歌仙の一人たれども、古今集の「我が庵は、都の辰巳、しかぞ住む、世をうぢ山と、人はいふなり」の歌と、玉葉集に一首の歌とあるのみにて、他にその詠歌傳はらず。

きぜん 危然【副、形】嚴正なる貌をいふ。莊子に「危然處二其所一」。

きぜん 喟然【副、形】嘆は歎く意。論語「夫子喟然歎」。

ぎぜん 巍然【副、形】高くけはしきをいふ。山などの高く聳えたること。巍巍。文選「巍然獨存」。

きせんがたけ 喜撰ケ嶽【名】山城國宇治郡に在る一小

峯。喜撰法師の住みし地なればかくいふとか。きせん、及び、みやこのたつみを見よ。

きせわた 着綿 【名】 きくのきせわたを見よ。

ぎそう 議奏 【名】 武家時代に、幕府の奏聞を、傳奏より聞きとりて、天皇に、直接に御取次申す役をいふ。

きそく 騏足 【名】 駿馬の足をいふ。轉じて、よきうでまへ。されば、人の、高き官位に上ることを得て、十分に才能をあらはすを、「騏足を伸す」などいふ。蜀志「龐士元、非二百里之才一也。使レ處二治中別駕之任一、始嘗展二其騏足一耳」。

きそくす 氣色す 【動佐變】 樣子をする。おもてをする。徒然草「夷は弓ひくすべしらず、佛法しりたるきそくし、連歌し、管絃をたしなみあへり」。

きそどの 木曾殿 【名】 源義仲をいふ。

きそのかけはし 木曾の棧 【名】 信濃國西筑摩郡にあり。今の棧は、上松驛の北半里、駒ヶ根村大字宮掛にあり。尾州公の架せしもの。古の棧は、その位置異り、同村字立町にて、國道より右折し、溪流に沿ひて、山を登ること半里、懸崖對峙して、自然の橋梁を爲す處、すなはち、其の舊趾なりといふ。

きそのみさか 木曾の御阪 【名】 きりぬたうげを見よ。

きたい 鬼胎 【名】 恐しく思ふを「鬼胎を抱く」などいへり。

きたいふふし 義太夫節 【名】 淨瑠璃の一派にして、大薩摩節より分れたるもの。竹本義太夫これを創む。義太夫初代は、元祿の頃の人、また、これに豊竹といふ一家あり。

きたう 詭道 【名】 詭りて、他人の耳目を惑はす道。孫子に「兵者詭道也」。

きたく 季諾 【名】 季布といふ人の一諾は、百斤よりも重しと、楚人の云へるより、約束の堅きにいふ。唐詩選「季布無二三諾一」。

きたしらかはのみや 北白川宮 【名】 能仁親王。伏見宮邦家親王の子。上野の輪王寺宮を嗣ぎて、公現法親王と稱し、戊辰の役に、彰義隊に擁せらる。明治三年獨逸留學、五年北白川宮を嗣ぐ。九年陸軍少佐となり、累進して中將となり、二十八年近衛師團長として臺灣に航し、疾を得て薨ず。大將に陞せられ、國葬を以て、東京の豊島岡に葬られたり。

きたの 北野 【名】 京都市上京區の西北にある地名。村上帝の天德三年、菅原道眞の靈を此に祀る。後に天滿天神、北野天神、或は靈廟、菅廟と稱して、世の尊崇あつし。故に、菅公をさして、單に北野といへり。

きたのかた 北の方 【名】 貴人の妻をいふ。

きたん 忌憚 【名】 いみ憚る。ふんりよ。中庸「無レ所二忌憚一也」。

きたむらぎざん 北村季吟 【名】 俳諧名助、拾穗軒、湖月亭などの號あり。近江の人。初は蘆庵と號して醫を業とし、後に玉津島の祝となる。國文の學に長じ、また、安原貞室、松永貞德等に就きて俳諧を學べり。幕府に召されて歌學所に出仕し、再昌院法印に叙せらる。寶永（德川六代家宣）二年六月歿す。年八十二。八代集抄、萬葉拾穗抄、伊勢物語拾穗抄、枕の册子春曙抄、源氏物語湖月抄、なほこの外その著甚多し。

きたやまどの 北山殿 【名】 今の山城國葛野郡の金閣寺をいふ。此の地、もと西園寺公繼の山莊にして、傍に一院ありしを、公種の時に、足利義滿購ひて金閣を築き、後に寺となして、鹿苑寺と稱せり。衣笠山の西麓にあり。應永十五年三月、後小松帝、ここに幸し給ふ。駐輦十餘日にして、饗獻その他諸儀の盛なること、前古無比といへり。

きちかうのはな 桔梗の花 【名】 草の名。葉の周圍に細きぎざみあり。秋の頃、五瓣の花、莖の末に咲く。花は綠なるも白きもありて、蕾の時は尖りたる筒の如し。俗にキキヤウといふ。またアリノヒフキまたアサガホなどの異名あり。

きちじやう 吉上、吉祥 【名】 貞丈雜記「馬部。吉祥の事云々、馬部は厩の舍人の別號なるべし。厩の中間にて、馬の口取などするものなり。吉祥、また吉上とも書くなり。是は皆假の字なり。愚按には、黃仕丁なるべし。黃色は、無位の者の服色なり。仕丁は召し使はるゝ者のことなり。無位にて、黃色の狩衣着る下部の者のことゝなるべし」。

きちゆう 羈中 【名】 旅行中をいふ。きりよ參照。

きつかうでん 乞巧奠 【名】 また、きかうでんともいふ。七夕祭の事なり。もと支那の俗說にて、七月七日の夜、牽牛織女の二星、相會すと稱してこれを祭れるなり。歌などに婦女の其の業に巧ならんことを願ふ由多くよめり。わが國にては、天平勝寶七年より始り、宮中にても、當夜、清涼殿の庭にて祭られしなり。

きつかはもとはる 吉川元春 【名】 毛利元就の第二子。吉川興經の養子となる。弘治、永祿の際、凡そ、軍事ある毎に、弟の小早川隆景と共に、元就の先鋒となりて、向ふところ破らざるなし。世に、之を兩川と呼べり。後に、秀吉の天下を左右するに至りて、其の下風に立つを欲せず、秀吉の征韓の役に促されて、漸く立ちて、名護屋の行營に至りしが、病を發し、天正十四年、遂に陣中に卒す。年五十七。

きづがは 木津川 【名】 源を伊賀山中に發し、山城相樂郡木津の邊より、綴喜、久世の兩郡を經て淀川に入る。

きつきげ 黃桃花毛 【名】 白くして、黃赤色を帶びたる毛色をいふ。「黃桃花毛の馬」など。

きつくつ 佶倔 【名】 強くこはきなり。強健なること。また、

物の角ばりたること。

きつすゐ 吃水 【名】艤體の水に沒するだけの深さをいふ。

きつすゐゐん 吉水院 【名】大和國吉野山にあり。後醍醐帝の行在所なりき。されば、吉野宮はこゝにすべかりしを、土地狹ければさて他に宮造して、こゝは村社に列せられ、吉水神社といふ。

きつぜん 屹然 【副、形】山などの高く峙つこと。

きつたん 詰旦 【名】詰朝に同じ。左傳に「詰旦請ㇾ見」とあり。

きつたん 吉旦 【名】吉日、吉辰などいふに同じ。よきひ、いはひび等をいふ。

きつてう 詰朝 【名】字書に「平旦也」とあり。夜の明けになれ、即ち、あさ。つとめて。左傳「詰朝相見」。

きつねのうたがひ 狐の疑 【句】狐疑の訓讀なり。疑生じて決しがたきを狐疑といふ。狐は道ゆくにも、左右を顧み、其の性、疑念深きものなればいふとぞ。楚辭に「心猶豫而狐疑兮」。吳子に「用兵之害猶豫最大、三軍之災生ニ於狐疑一」とあり。

きてい 旗亭 【名】料理店。旅人宿。または、酒樓をいふ。文選西都賦「旗亭五重」。靈異記「詣ニ旗亭一貰ㇾ酒」。

ぎてき 儀狄 【名】人名。支那の夏時代の頃の人にて、酒を作り始めたりといふ。戰國策に「昔者天女令ニ儀狄作ㇾ酒」。

きてつ 蟻垤 【名】蟻の塔ともいふ。ありづか。字書に「蛭、蟻封也」。

きてん 機轉、氣轉 【名】心のはたらき。氣のきくこと。機敏なること。

きでんたい 紀傳體 【名】歷史の一體。司馬遷の史記にはじまれり。本紀、列傳、その他、各部門の別を立てて記すもの。編年體、紀事本末體に對する名。

きでんだう 紀傳道 【名】だいがくれうを見よ。

きど 屹度 【副】きつとの音略なり。確に、しかと、必ず。

きどう 悸動 【名】むねのどきどきすること。驚愕の甚しき意。

ぎどうさんし 儀同三司 【名】官名。三司は三公にて、三公に同じほどの義、准大臣をいふ。猶、つぎを見よ。

ぎどうさんしのはは 儀同三司の母 【句】藤原伊周の母なり。伊周は、寬弘二年、大臣の下、大納言の上に列せられ、同五年准大臣に任ぜられしかば、自ら、儀同三司と號せり。道隆公の室にて、高階成忠の女なり。文事に通達して、男子を壓倒すと稱せられね。

きどく 奇特 【名】所爲の普通と異りて、賞すべくあるをいふ。なほ、美德といはんが如し。また、感心の意に用ひて「奇

特に存する」などいふ。

きどぐち 木戸口 【名】城戸口をかくも正しくす。城の門なり。一のきど、二のきど。轉じては、通路の門、又、見世物、芝居などの出入口をいふ。

きどくみん 紀德民 【名】細井氏、紀はその姓、字は世馨、平洲、また如來山人と號す。尾州侯の儒官なり。また、米澤侯の賓師となり、其の國にあること一年、敎化大に行はる。故を以て、鷹山深く之を重んず。享和元年六月、江戸の尾州邸に歿す。年七十四。

きどたかすけ 木戸孝允 【名】舊長洲藩士。本姓は小田。幼にして桂氏に養はれ、桂小五郎と稱せり。維新の際の功臣たり。明治十年五月薨ず。年四十二。正二位を贈らる。今の木戸侯爵孝正の先代なり。

きによりてうをもとむ 緣ㇾ木而求ㇾ魚 【文】物事の出來得べからざるに喩へていふ。孟子に「猶ニ緣ㇾ木而求ㇾ魚也一」。

きぬがさじやう 衣笠城 【名】相模國三浦郡衣笠村衣笠にあり。康平年間、三浦爲通始めて此に居城し、爲繼、義繼、義明に至るまで、相繼さて居たり。治承四年八月、賴朝義兵を擧ぐる時、三浦の一族之に應ぜり。平氏の被官畠山重忠、河越重賴、江戸重長等、此の城を攻めし時、義明の子義澄以下の一族皆脫れ、義明獨留りて戰死す。

きぬがは 鬼怒川、鬼奴川、衣川、絹川 【名】下野國谷郡衣沼より發し、南流して下總に入り利根川に合す。

きぬざ 絹座 【名】しちざを見よ。

きぬた 砧 【名】衣板の略にて、衣にすゝき布を打つ木の臺。石にても作る。「砧の響」など。

きぬい 歸寧 【名】家に歸りて、父母の安否を訪ふこと。左傳「杞伯姬來歸寧也」。詩經「歸ニ寧父母一」。

きのう 機能 【名】身體の內にある各部機關の、活動する能力をいふ。

きのかは 紀の川 【名】紀伊の川ともいふ。源を大和の大臺原山に發し、和歌山の西北に至りて海に入る。上流は吉野川なり。

きのくにや ぶんざゑもん 紀國屋文左衛門 【名】幼名文吉、五十嵐氏。紀州の人なり。氣宇快濶にして、細行を修めず、最も奇計を喜び、心算に妙あり。十八の年、東海、風波大に起り、船舶江戸を出でず、江戸の柑子、大に其の價を增したり。すなはち、時機失ふべからずとなし、柑子數千箱を大舶に載せ、逆浪を蹴て紀州を發し、終に九死を冒して江戸に入り、巨萬の利を得たり。然れども、固より財利を屑とせず、自ら曰はく、我半生にして巨萬の金を博せり。又正に半生に

之を散ずべきなりとて、即、家者を事とし、遂に家道頗る衰へ、享保十九年四月、六十六歳にして歿す。俳諧を其角に學びて千山といひ、佳句多し。世に、紀文大盡といふ。

きのした じゅんあん　木下順庵【名】徳川時代の儒者。名は貞幹。京都の人。錦小路に住し、松永昌三の門に學び、遂に幕府の儒官に召さる。元祿十一年十二月歿す。年七十八。

きのした ちやうせう　木下長嘯【名】名は勝俊。肥後守家定の長子。豊臣秀吉と姻戚、若狹小濱城主たり。慶長五年、大坂の兵起れるとき、伏見城にありて去就を決せず。然して小濱の留守は東軍に抗せり。亂平きて封を奪はれ、京都東山の靈山に潜居し、長嘯子と號す。また大原野に居て、天哉翁と號し、和歌を弄び風月を友とせり。慶安三年六月歿す。年八十一。大成院と諡す。

きのめたうげ　木目峠【名】越前府條郡と、敦賀郡との界に屹立す。登り一里十四町。嶺上は、西方の近江道なり。

きのをさ　城の長【名】城の大將。

きは　際、分際【名】端。境目。かぎり。ほとり。あたり。そば。傍。ほど。時。をり。身分。分際。

きはう　鬼方【名】遠方をいふ。詩經「覃二及鬼方一」。國の名、易經「高宗伐二鬼方一」。また、佛家、陰陽家は、惡神の住む方とし、鬼門ともいふ。

きはう　既望【名】陰曆十六日の夜の月をいふ。前赤壁賦「壬戌之秋七月既望、蘇子與レ客泛レ舟、遊二於赤壁之下一」。

きばう　企望【名】志し願ふ意。

きばうほう　喜望峰【名】地名。南亞弗利加の南端ケイプコロニイの西南の岬角なり。此の地、初は和蘭に屬せしが、今は英領たり。次項參照。

きばうほうのいただきなるあふぎしこじん　喜望峰の頂を仰ぎし古人【句】西曆一四八六年西班牙人バアソロミユテイアズ(Bartholomeu Tiaz)が、始めて喜望峰を發見せしをいふ。四班牙王ジョン二世、すなはち其の地に喜望(Cape of good hope)の名を命ぜしなり。

きはく　毅魄【名】猛けく強き丈夫のたましひをいふ。

きはせを　紀長谷雄【名】眞葛の子。生れて穎悟、菅原道眞に學べり。諸官を經て、醍醐帝の延喜中、從三位中納言に進み、十二年薨ず。年六十八。

きはまる　極、窮、究【動ラ四】極は至極の義にて、行きつまりて、其の先なきをいふ。窮も極に同じ。轉じて、困窮の意にもいふ。究は、字書に深也、竟也、盡也。

きはん　軌範【名】方則なり。尚書の序「示二人主一以二軌範一」。また、模範、師範の意。

きはめつくす　極め盡す【句】殘るかたなく盡すをいふ。

きはれては、かぜ、しんりうのかみをくしけづり、こほりさえては、なみ、きうたいのひげをあらふ　氣霽風梳二新柳髮一、氷消浪洗二舊苔鬚一【文】都良香の聯句なり。良香、上句を得て、下句を案じ煩ひつゝ、羅城門を過ぎけるに、樓上に聲ありて、下句を附けたるよし、十訓抄などに見えたり。此の句、和漢朗詠に出づ。

きび　騏尾【名】千里の馬の尾のことにて、先覺者に從ふことを「驥尾に附す」などいふ。史記「顔淵雖二篤學一附二驥尾一而行益彰」。

きび　機微【名】氣運の變化する兆。きざし。

きびつのみや　吉備津宮【名】備前國津高郡一宮村に、縣社吉備津彦神社あり。また、備中國賀陽郡眞金村に、國幣中社吉備津彦神社あり。共に崇神帝の將軍吉備津彦命を祀る。兩社相距ること、十町に過ぎず。

きびのくに　吉備國【名】備前、備中、備後、美作をいにしへ、吉備國といへり。

きびのなかやま　吉備中山【名】茶臼山、鯉山とも稱す。備中國賀陽郡吉備津神社の後丘にして、吉備津彦命の山陵なり。きびつのみや參照。

きびはに【副】をさなくかよわくて。增鏡「院いまだきびはにおはしましければ」。

きび　吉備眞吉備【名】本姓下道、元正帝の靈龜二年遣唐留學生となる。時に年二十四。唐にありて經史を修め、衆藝に該渉せり。天平七年歸朝す。孝謙帝東宮のとき、侍講たり。恩寵甚だ渥し。天平勝寶四年遣唐副使となり、還りて正四位下太宰大貳に陞り、次第に進みて正二位右大臣となる。光仁帝の寶龜六年薨ず。年八十三。著す所、私敎類聚三十八條あり。

きふきふ　岌岌【副、形】危くして安からざる貌。孟子「天下殆哉、岌岌乎」。また、高き貌にもいふ。後漢書「高二吾冠之岌岌一」。

きふきふ　汲汲【副、形】切迫したる貌。忙はしき貌。こせこせすること。漢書「少二嗜欲一不レ汲二汲於富貴一不レ戚二戚於貧賤一」。

きふきふによりつりやう　急急如律令【句】呪文の末に唱ふる語。速に去りて滯らざれと、惡靈におほする意といふ。

きふく　歸服【名】歸順、降參、降服に同じ。つきしたがふこと。まつらふこと。

きぶく　忌服【名】いみごもくことなり。もとは、服のみにて、黑き衣服を着るをいひ、其の衣をもいひしが、後に、忌ごもいふ事生じたり。父母の忌五十日、服十三ヶ月。祖父母忌三十日、服百五十日。兄弟忌二十日、服九十日。この間は神事に關におはしましければ」。

すれば穢るとせり。又、公職などに携さはるものは闕勤す。

きふけつ 泣血 【名】非常に悲むことにて、なみだの出づること血の如しの意。禮記「泣血三年」。

きふじ 給仕 【名】かたはらにおきてつかふ童。

きぶしやう 氣無性 【名】氣のひきたゝねをいふ。

きふぜん 翕然 【副、形】翕は合なり。盛なり。衆人、口を合せて和する意。晉書「朝野翕然謂二之一世偶門一」。

きふそつ 急猝 【名】倉卒。急速。俄突。俄か。

きふたをおふ 負笈 【句】笈は書筴なり。師のあとに從ふことの厚きをいふ。史記「蘇秦負レ笈從レ師不レ遠二千里一」。また、轉じて遊學する意にいふ。

きへい 疑兵 【名】敵に、わが兵數の夥しく見ゆるやうにすること。少數の兵を、多數なりと疑はしむること。史記「韓信乃益爲二疑兵一」。

きへいしう 紀平洲 【名】尾州侯の儒官。細井氏、名は徳民、尾州平洲村の人。諸弟を教育し、講業の盛なること、殆ど虚日なかりき。かたはら詩畫をよくせり。享和元年六月二十九日歿す。年七十四。著書多し。

きべん 詭辯 【名】詐りの辯舌をいふ。巧に詐をいふを「詭辯を弄す」などいふ。

きへゆく 來經行 【動力四】きへつゝゆく。年月すぐゆく。古事記「やすみし、わがせほきみあらたまのとしがきふれば、あらたまの月は、來經ゆく」。

きほ 蹋歩 【名】半歩をいふ。足をあぐるを蹋といふ。

きほ 軌模 【名】法式をいふ。文選「陳二三皇之軌模一」。

きぼ 規模 【名】規は圓を正す器。模は書の下取りなり。よりて制を立て範を垂るゝ義とす。漢書「雖二日不レ暇レ給、規模弘遠矣」。又、ほまれ。宗五大双紙「織物も云云、きぼにて候ふ。公方樣御服給ひ候ふを、久しく着候ふを、きぼと申し候ふ。私にても、主人給ひ候ふ小袖同前」。

きほふ 競 【動八四】きそふに同じ。負けじと互に爭ふ。

きみ、きみたらずとも、しんは、しんたらざるべからず 君雖レ不レ君、臣不レ可レ以不レ臣 【文】孔安國古文孝經の序文に見えたり。君は君の德に缺くる所ありとも、臣は臣の義を盡くせとなり。

きみざはがた 君澤形 【名】船の名。安政年中露西亞人が、伊豆國戸田港にて造れる船をシコナ號と名け、後に、幕府に獻ぜり。これを君澤形と稱せり。また、其の造船に關係せし本邦人が、幕府の命を受けて造りし船をも君澤形と稱して、第一より第三までありき。

きみつ 機密 【名】機事の秘密をいふ。漢書の劉向傳に「深留二聖思一、審二固機密一」。

きみまさで、けぶりたえにし 君まさで煙絶えにし 【句】古今集哀傷部に、紀貫之の歌に「河原院のおほいまうちぎみの身まかりて後、かの家に、まかりてありけるに、鹽竈といふ處のさまをつくれりけるを見てよめる」と、はしがきありて「君まさで煙絶えにし、しほがまの、うらさびしくも、見えわたるかな」とあり。

きん 釣 【名】支那にて用ひし目方の名なり。字典に「三十斤爲二一釣一」とあり。わが約千斤にあたる。

きんいぎよくしよく 錦衣玉食 【句】衣麗食奢をいふと、宋史の注にあり。宋史李薦傳に「薦雖レ在二山林一、其文有二錦衣玉食一」。

きんいこうし 金衣公子 【名】鶯の異名なり。天寶遺事に「明皇於二禁苑中一見二黄鶯一呼爲二金衣公子一」とあるに本づく。

きんう 金烏 【名】日なり。きよくさを見よ。

きんえふしふ 金葉集 【名】歌集。十卷あり。崇德院の御代、白川院の院宣をもて撰ましめられたるもの。撰者は前木工頭源俊頼。

きんえき 禁掖 【名】掖は宮闕の掖の小門なり。轉じて、天子の御すまひを申す。禁中に同じ。

ぎんが、きうてんよりおつ 銀河九天より落つ 【文】うたがふらくは、これぎんがきうてんよりおつを見よ。

きんかく 金革 【名】兵器をいふ。金は戈兵の屬、革は甲冑の屬、之を製する材料よりいふ。漢書「罷下不レ習二金革之事一」。

きんかくこう 金角港 【名】露領浦鹽斯德（ウラジオストック）の別名なり。

きんかくじ 金閣寺 【名】もと足利義滿の別業なりしを、義滿の死後に、寺としたるもの。鹿苑寺と號す。柱壁塗るに金箔を以てす。故に、世呼びて金閣寺といふ。

きんき 金氣 【名】金は秋の氣、又西の方位。秋は、西方の氣なり。故に、秋冷の意にいふ。「金氣迫レ肌」。

きんきん 欣欣 【副、形】春色の貌。詩經の傳に「欣欣樂也」とあり。

ぎんぎん 斷斷 【副、形】はぐきを現はして笑ふをいふ。史記「斷斷如也」。又、あらそふ貌。

きんきん 欽欽 【副、形】人をして樂しむるをいふ。詩經に「鼓鐘欽欽」とあり。

ぎんぎん 闇闇 【副、形】中正なるさま。ちやんとしたる狀。論語「子在二鄉黨一闇闇如也」。

きんくわぎよくでう 金科玉條 【名】科も條も、法律をいふ。金と玉とは、珍重すべき意にて添ふ。鄧析子新「懿律嘉量、金科玉條云々」。

きんくわさん 金華山 【名】陸前國牡鹿郡にあり。牡鹿半

島の極端、海中に屹立せる一島嶼にして、鮎川村に屬す。山腹に黄金山神社あり。なほこがねはなさくの條を見よ。

きんけつ　禁闕【名】禁裡、禁中などに云に同じ。皇居をいふ。

きんこ　禁錮【名】刑の名。一室に閉ち込むること。支那にては、仕進の道を塞き止むるをいふ。晉書「謝安被レ召歷年不レ至、禁錮終身」に。

きんこうし　金公子【名】鶯の異名。金衣公子の略、きんいこうしを見よ。

きんこくのはな　金谷の花【句】金谷は、晉の石崇の別莊の名。崇、字は季倫、一日賓客を金谷に會し、花宴を開きて詩を賦す。詩成らざれば、罰として、酒三杯を飲ましむ。金谷の罰杯とて、有名なる話なり。なんろうのつきを參照せよ。

きんこしだん　近古史談【名】書名。大槻磐溪の著にして、近古の史談を、漢文に綴りおるもの、上下二卷あり。

きんこん　禁閫【名】閫はシキミ、門戸の下に横たへたる木。禁閫は、禁中の門といふが如し。「禁閫に達文をかかげらる」など。

きんさ　欽差【名】勅使をいふ。勅定を欽定といふ。正字通に「御使曰二欽命一俗曰二欽差一」。明初より用ひたり。欽差大臣は、特命全權大使といふに同じ。

きんさく　緊捉【名】きびしくとらふること。

きんざん　金山【名】支那の山名。鎭江府城西北江中にあり。

きんしう　錦繡【名】立派なる服をいふ。「身に錦繡を纏ふ」など。

きんしゆく　窘蹙【名】窮迫なり。苦しむこと。

きんじき　禁色【名】夏山雜談に、「禁色とは、制禁ありて着用を許さざる染色なり。織物も、又おのづから禁色あり。近世、菓に雹（アラレ）の紋（ウヘ）の袴を、禁色といひならはせり。禁色は、袍の深紫、深紅等、また、紫梔染、蘇芳染をもいふ」。

きんじやく　金絲雀【名】鳥の名、カナリヤ。

きんしつ、わせず　琴瑟不和【文】夫婦の和合せざるに譬ふ。

きんしん　岑參【名】支那南陽の人なり。詩に巧なり。其の詩、唐詩選に見ゆ。後、賊亂に遭ひて死せり。

きんしんしうちやう　錦心繡腸【句】俗事を思はずして、風流韻事に長ずる人の心をいふ。唐書李白傳の注に「才藻富贍の辭をいふ」と。

きんしや　巾車【名】幕ある車。また、一說に、巾は飾なり。僕に命じて、其の車を巾せしむるなりと。また、衣を載する車。周禮春官「序官巾車」の注に「巾猶レ衣也」。また、車を司る官。西京賦の注に、「巾車主レ車官也」。

きんじやうたうち　金城湯地【名】城郭の堅固なるをいふ。金にて作れる城、熱湯を湛へたる堅の意。

きんじゆ　近衆、近習【名】近臣をいふ。後漢書の注に「近衆、天子所二親幸一者也」。

きんせいそうご　近世叢語【名】書名。角田簡著、八卷あり。近世の義人烈士の逸事叢話をのせたるもの。

きんしやう　讂鐘【名】新に鐘を鑄る時は、其の成るに當りて、牲を殺し血を取りて、その釁、即、すきまにぬるをいふ。

きんしよう　擒縱【名】捕ふることとゆるすこと。「擒縱自在」。「七縱七擒」など。

きんせいきじんでん　近世畸人傳【名】書名。伴蒿溪著、五卷あり。鴻儒碩學、孝貞義烈より、詩人文人などに至るまで、百餘家の傳記をのせたり。

きんせきぶん　金石文【名】碑文をいふ。

きんせきのまじはり　金石交【句】朋友間の情誼の厚きをいふ。金石の堅固にして破れざるが如きなり。漢書「自以爲與二漢王一爲二金石交一」。

きんせん　欽羨【名】その人を欽敬して羨むこと。其の人の行爲を感賞する餘り、羨ましく思ふこと。文選「使二人欽羨不一レ能レ已」。

きんぜん　昕然【副、形】欣然に同じ。笑ふ貌。司馬相如傳「昕然而笑」。

きんたい　襟帶【名】山を以て圍み遶さるること帶の如きをいふ。王勃滕王閣序「襟三江而帶二五湖一」。「山河襟帶之地」など。

きんたいりやうぶのをしへ　金胎兩部の教【句】眞言宗にいはゆる金剛界（コンガウ）、胎藏界の兩部なり。すなはち、眞言宗の教のこと。

きんたうのかため　金湯之固【句】「金城湯地の固」の略なり。

きんだち　公達【名】古實拾要に「攝家、淸華家の、然るべき公卿をさして公達と稱す。上達部とは、三位以上をいふなり」。大方に、身分高きの男子をさしてもいふ。

きんちう　衾裯【名】衾は、ふすま、裯は、ひとへぶすま、即ち、夜具の類をいふ。夜着て寢るもの。

きんちゆう　衾幬【名】衾裯に同じ。幬は帳なり。

きんてい　欽定【名】勅により定むること。

きんぱ　金波【名】月光の映じてきらきらする波。漢書「月穆穆以金波」。

きんぴみせう　禁秘御抄【名】書名。三卷ありて、順德院の御撰なり。禁中の故實をつまびらかにしるさせたまへるもの。

きんぷくりん　金覆輪【名】黄覆輪ともいふ。覆輪とは、何物にても、細く緣（ヘリ）を取りたるものをいふ。金覆輪の鞍といへ

ば、金の細き薄金にて、鞍の山形の端を飾りたるなり。銀にてするを、白覆輪といふ。角覆輪といふもあり。

きんぽ 窘歩 【名】 急歩に同じ。はや足。離騒「捷径以窘歩」。

きんめい 欽明 【名】 欽は敬なり。天子に關する事にいふ字。欽明は、明かなるを敬ひいふ。書經「欽明文思安安」。

きむらしげなり 木村重成 【名】 長門守と稱す。重茲の子。父罪ありや死するや、母懐にして近江國に匿る。幼より大阪に適きて、右府秀頼に仕ふ。大阪の役起るに及びて、秀頼を補佐して、大に東軍を窘む。人皆、重成の遠謀剛勇に驚く。夏の役起るや、大業遂に成り難きを察し、奮闘して死す。年二十一。

きんらん 金襴 【名】 織物の名。錦の一種にして緯に平金絲を織り交ぜて、模様を現せるもの。

きんらんのまじはり 金蘭之交 【句】 友人間の交りの親密なるをいふ。「易經に「二人同レ心其利斷レ金、同心之言其臭如レ蘭」。「金蘭之契」といふも同じ。

きもつき けんかう 肝付兼行 【名】 鹿兒島縣の人、現に海軍水路部長海軍少將たり。

ぎやう 伎癢 【名】 俗に「腕がむづ〳〵する」といふ意。「伎癢不レ能レ死レ言」。

きやうえき 疆場 【名】 田の畔。大界を疆、小界を場といふ。詩經「疆場翼翼」。また、邊土、邊國をいふ。左傳「疆場之事鎭守二其一一」。

きやうえん 竟宴 【名】 物事を爲し竟へたる喜びの酒宴。書を誦じ終へたる時など。「日本紀竟宴の歌」など。

きやうかい 境界 【名】 さかひ、また、眼、鼻、耳、舌、身、意に接觸する四圍の事物すべてをいふ。

きやうかう 強梗 【名】 楊子法言に「梗猛也」。廣雅に「梗強也」とあり。たけくしてつよきをいふ。

ぎやうかう 行幸 【名】 みゆきを見よ。

きやうかたびら 經帷子 【名】 死者を葬むる時、着する衣。

きやうかん 狂簡 【名】 志の大にして、物事に簡略なるをいふ。論語「吾黨之小子狂簡、斐然成レ章、不レ知レ所二以裁一レ之」。

きやうがん 強顔 【名】 厚顔に同じ。あつかましきこと。羞を知らざること。劉向新序「大笑曰、此天下之強顔女子也」。

ぎやうき 行基 【名】 高僧の名。姓高志、和泉國高鳥郡の人。佛教弘通の爲、四方に遊歷し、其の方便として、道を開き橋を架して、民の便を謀れり。天平二十一年正月、大菩薩の號を賜り、同二月寂す。年八十二。

きやうく 狂酗 【名】 醉狂といふに同じ。檮文に「以レ酒爲レ凶曰レ酗」。醉ひて狂氣の如くなるものをいふ。

ぎやうぐわんじ 行願寺 【名】 京都一條新町の西、寺町の革堂をいふ。此の寺、寶永三年火災に罹り、今は寺町通り竹屋町に移されたり。

きやうくわん 鄕關 【名】 生れたる土地、鄕里に同じ。「男子立レ志出二鄕關一」など。

きやうくわん 鄕貫 【名】 鄕里に於ける戸籍上の貫族にて、すなはち、身分のもと。唐書の選擧志に「自レ今一叅二有司一、以二鄕貫三代名諱一、送二中書門下一」。

ぎやうけい 行啓 【名】 みゆきを見よ。

きやうげん 鄕愿 【名】 愚は謹厚。一鄕稱して愚となす者。即ち世俗に、謹厚と稱せらるゝもの。論語「鄕愿德之賊也」。

きやうさく 景迹 【名】 ケイセキの吳音。行迹。經歷。身持。行。

きやうざん 匡山 【名】 支那江西省にあり。洞庭湖と鄱陽湖との間の山。

ぎやうし 凝視 【名】 眼を凝して見つむること。注目。注視などに同じ。

きやうせい 匡正 【名】 物事を正すをいふ。改良などの意。匡も正なり。

ぎやうせい 行政 【名】 國家を統治せんが爲に、諸般の政務を施行するをいふ。又その官省を行政府といふ。

ぎやうせいほふ 行政法 【名】 官府の、人民に對する行動、および、官府と官府との關係につきて規定せる法。

きやうだう 嚮導 【名】 道案内なり。

きやうちう 筐中 【名】 筐はハコ、箱のうち。

ぎやうぢうざぐわ 行住坐臥 【句】 行く事と、止まる事と、すわる事と、臥す事との意にて、立居振舞をいふ。起居動作。

ぎやうてい 凝定 【名】 凝は水結なり。こり固まりて、一の形を結成するをいふ。

ぎやうてん 仰天 【名】 甚しく驚くこと。身をそらす貌。

きやうでん 享殿 【名】 神を祀る殿。享は獻なり。また、祭なり。

ぎやうとく 行德 【名】 地名。下總東葛飾郡にあり。利根川の支流なる江戸川に沿ひ、有名なる行德鹽を産する地。

きやうどのばつせい、ろかうをもうがつここあたはず 彊弩末勢不レ能レ穿二魯縞一 【文】 魯國にて産する縞は、至つて薄きに、勢衰ふる時は、彊弩にても、之を穿つこと能はずといふにて、非常の勢力あるものにても、力極まる時は、微弱の者にもかなはざる意。三國志「所謂彊弩之末勢、不レ能レ穿二魯縞一者也」。

きやうはう 裸裸 【名】 むつき。（今日稱するは轉じたるなり。

り)。産衣なり。されば、幼稚といふ意にも用ふ。襁は小兒を負ふに用ふる布、褓は小兒の被なり。列子「人生有レ不レ見二日月一不レ免二襁褓一者」。

きやうねん 行年 【名】享年と同意に用ひらる。重なりし年の數なり。國語「行年五十矣」。

きやうりん 杏林 【名】杏はあんずなり。神仙傳「廬山有二杏林一(ナリ)董奉故里」。董奉がこれによりて、生を保ちし故事より、醫師をいふ。

きやくしゆ 逆修 【名】佛法の語にして、逆に冥福を修するをいふ。すなはち、少者死して、老者其の後世を弔ふ如き、または、豫修ともいひて、死なぬ前に、みづから、死後の冥福を祈るなど。

きやくにさり、じゆんにまもる 逆取順守 【文】道理に逆ひて取りしものなれど、道理に順うて守るをいふ。史記「湯武逆取而以レ順守レ之」。

きよ 窺窬 【名】また覬覦ともかく。上位を冀望するをいふ。左傳に「民服二事其上一而下無二覬覦一」。覗ひ伺ふにもいふ。「國家を窺窬す」は、國を奪はんとねらふなり。

きよういへい 義勇兵 【名】普通の徴兵規則に因らずして、國民の中より、有志者の團體を作り、みづから進んで、國家の干城となる兵の名稱。

きよういう 許由 【名】人の名。支那の堯といふ帝は、九人の皇子ありしかど、天下は、一人の天下に非ず、非器のものには傳ふべきにあらずとて、箕山の隱者許由が、賢なるを聞き、尋ね出して、位を傳へむとしけるに、許由は、斯る富貴尊榮の事を聞きて、耳を汚されたりとて、潁川にその耳を洗ひけるを、同じ箕山の巢父といふもの、水を飼はむとて牛を牽きて來れるが、許由が耳を洗へる所以を聞き、さやうに汚れたる水は、牛にも飼はじとて牽き去れりといふこと、史記の伯夷傳、また、莊子などにも見えたり。

きようかく 胸膈 【名】むね。宇書に「胸膈、心脾之間」。

きようきふ 供給 【名】需要に對する語。供も給も、ともに、備ふる意。足らしむる意。國語「足二以供一給神祇一」。

きようきよう 蛩蛩 【名】獸の名。山海經「北海内有二蛩蛩一」爲。狀如レ馬。名曰二蛩蛩一」。

きようきよう 洶洶 【副、形】騒がしき水音。文選の注に「洶洶磕磕皆水聲也」とあり。また、物事の騒がしきにいふ。「物情洶洶たり」など。

きようきよう 詡詡 【副、形】聲の騒がしきをいふ。荀子「君子不レ爲二小人一詡詡」。

きようきよう 兢兢 【副、形】びくくくすること。詩經「戰戰兢兢如レ臨二深淵一如レ履二薄氷一」。

きようきよう 矜矜 【副、形】しつかりして落ちつきたる樣。詩經「矜矜兢兢」。

きようしき 矜式 【矜】矜は敬なり。式は法なり。敬ひ法るをいふ。孟子「使二諸大夫國人一皆有レ所二矜式一」。

きようしん 凶讖 【名】吉兆の反對にて、惡しきしるし。わるい辻占(ツヂウラ)。

きようしゆ 拱手 【名】手を拱(コマ)ぬきて、禮をすること。禮記に「遭二先生一于道一趨而進、正立拱手」。また、何の爲すこともなくて在るをもいへり。

きようぜん 蛩然 【副、形】足音。人の來る足音をいふ。

きようちやう 供張、供帳 【名】供具設張の意にて、幕を張り、道具を供へて、客をまつこと。

きようりふ 嶷立 【名】高く峻く立つ貌。山などの高きにいふ。

きようがう 倨傲 【名】傲慢のこと。おごり高ぶるをいふ。

きようかつ 虚喝 【名】虚勢を張りて威すこと。戰國策「惑疑虚喝」。

きようき 獻欷 【名】すすりなき。悲泣の狀にいふ語。後漢書馮衍傳に「忠臣過二故墟一而獻欷」。また、懼るゝ貌。

きようす 亟す 【動サ變】誅すに同じ。書經「亟二殛于羽山一」。

きよく 曲 【名】曲直の曲は、不正の意。音樂、歌謡の曲は、曲節の意にして、節、調子などをいひ、また、手品、曲馬などの技曲をいひ、轉じては、興味の意にもいへり。「曲がない」など。

きよくえふしふ 玉葉集 【名】歌集。二十卷あり。花園天皇の正和二年、伏見院の勅を奉じ、藤原爲兼の撰せるもの。

きよくがくあせい 曲學阿世 【句】學說を曲解して、世俗の意に阿附するをいふ。史記「公孫弘務二正學一以言、無二曲學以阿レ世」。

きよくくわう 玉觥 【名】玉の杯なり。梅堯臣の詩に「安知如二今有一樂事一能使レ女奚走二玉觥一」。

きよくけつ 玉玦 【名】玦は環の如くにして、缺くる所ある佩玉、即おびたま。史記に「范增數以レ手循レ玦示二項羽一」。

きよくざんくづる 玉山崩る 【文】玉山は、人品の高潔なるに譬ふ。其の體の、酒に醉ひて頽るるをいふ。世說「叔夜之爲レ人、岸々若二孤松之獨立一。其醉也瑰然若二玉山之將レ頽」。

きよくすゐのえん 曲水の宴 【名】いにしへ、三月三日に、文人等流水の邊に居て、水上より盃を流し、己が前を流れ過ぎざるに先だちて詩を賦し、其の盃を取りて酒を飲む、一種の遊び。我が國にては、顯宗帝の朝より始まれり。支那にては、周の世よりと公事根源に出でたり。

きよくせき　跼蹐【名】てんにせくくまりちにぬきあしすを見よ。

きよくせきともにやく　玉石倶焚【文】善惡の別なく、禍に罹るをいふ。書經「火炎二崑岡一玉石倶焚」。

きよくだい　玉臺【名】高堂などいふと同義、先方の人を敬ひて云ふ語。

きよくてい　曲亭【名】馬琴の別號。馬琴、曲亭を作りて、そこにて稗史を作り、妻子と雖も入ることを許さざりき。

きよくと　玉兎【名】月の異稱。韓琮の詩「金烏長飛玉兎走、青蛉長青古無有」。

きよくわい　渠魁【名】渠は巨に同じく、大の意。惡人の首領をいふ。書經「殲二其渠魁一脅從罔治」。

きよくはく　玉帛【名】玉は、桓圭、信圭、躬圭、穀圭、蒲璧の五玉にて、諸侯五爵の執るもの。帛は、玄、纁、黃の三帛にて、附庸國の執るもの。「奉二玉帛一」など

きよくひつ　曲筆【名】直筆の反對。無きものを、有るやうに言ひ曲げて書きなすをいふ。

きよくへん　玉篇【名】書名。支那の梁の大同年間に於ける顧野王の原著にして、和訓を施したるもの。凡べて二十卷あり。

きよくわ　漁火【名】いさり火。漁舟にて、魚を集めんがために焚く篝火をいふ。

きよくわん　玉盌【名】玉にて作れる椀。晉志の甘寧傳に「孫權特賜二米酒衆殺一寧先以二銀盌一酌レ酒自飲二兩盌一」。

きよしう　去就【名】身の進退を定むること。もとは、惡を去り、善に就くをいひしがうつれるなり。

きよにくとなる　魚肉と爲る【句】史記「樊噲曰、人方爲二刀俎一我爲二魚肉一」で、また「爲二秦所一レ魚肉一也」でなどありて、他に呑噬せらるることをいふ。

きよしたいふ　御史大夫【名】官名。唐書百官志「大夫一人、正二品、掌以二刑法典章一糾中百官之罪惡上」。

きよしん　巨浸【名】大澤をいふ。

きよしゆ　居守【名】留守に同じ。

きよじうがいげん　馭戎慨言【名】書名。四卷あり。中古以來、我が國に入れる、朝鮮、支那の事物の、是非善惡を辨じて、尊內卑外を說きたるもの。本居宣長の著。

きよぜん　居然【副、形】自安の貌。不動の貌。安然に居る意。

きよたい　魚袋【名】束帶の時、石帶の、右の腰にあたるところに着けて帶ぶるものにて、魚の形したるものを紐にてつく。參議以上は、鍍金製、四位以下は銀製なり。

きよちよせきし　遽篠戚施【名】遽篠は、俯すことを能はざる疾、僂人をいふ。轉じて、性惡なる者は、敎誨すべからざるにいふ。爾雅に「遽篠口柔也。戚施面柔也」と。注に「口柔之人、覩二人顏色一常不レ伏。面柔之人、常俯似レ之、亦以名云々」。

きよはく　巨擘【名】大指のこと。それよりして、第一等の人物などの意に用ふ。孟子「吾必以二仲子一爲二巨擘一焉」。

きよはくぎよく　遽伯玉【名】名は瑗、衛の大夫にて、孔子の門人。

きよはら　たけひら　清原武衡【名】武則の子、將軍五郎と稱す。出羽の豪族にて、白河天皇の永保三年、姪家衡と金澤棚によりて、源義家に抗し、終に柵陷りて、義家の弟義光に就きて降を請ひしが、許されずして斬らる。

きよふくにばらむらる　魚腹に葬らる【句】水に投じて死することを。楚辭「寧赴二常流一而葬二乎江魚腹中一耳」。

きよふのり　漁父之利【句】いつぱうのあらそひを見よ。

きよみがた　清見潟【名】駿州庵原郡興津の濱岸をいふ。三保の松原と相對して、東海屈指の勝地。大字清見寺門のあるところ、古の清見が關の址なりといふ。

きよみづでら　清水寺【名】京都洛東の高地にあり。清水の觀音といふ。山號は音羽山。瀑布あり、音羽の瀧といふ。

きよみはらのみや　淨見原宮【名】大和國高市郡上居にあり。天武帝の宮なり。

きよもと　清元【名】音曲の名。清元延壽太夫を以て、此の派の祖とせり。俗稱を岡村吉五郎といひ、寬政六年、宮本延壽齋の門に入り、爾後數度の改名あり、文化十一年、清元延壽太夫と稱し、文政八年五月人に刺されて死す。

きよりう　御柳【名】樹の名。支那渡來の樹にして、葉の形は檜の葉に似て細く、枝また細くして多く垂る。花は穗の形して、蔘の花に似たり。

きよりうち　居留地【名】開港場などにて、外國人の居留する一區域の地。

きよりんがかり　魚鱗構【名】陣法の名。源平盛衰記二十九の卷の平家落城所々軍の條に「樋口は、魚鱗の戰とて、先を細に中大に、あだかも魚の鱗を並べたるやうに、馬の鼻を立て並ぶ」とあるにて、その要を知られたり。

きよれいのじん　魚麗之陣【名】陣法の名。隊伍の形圓くして、微しく長く、群魚の、附麗して進むが如き陣法。左傳に「爲二魚麗之陣一」。

きら　綺羅【名】うるはしき衣服。また、全盛、權勢などの意にもいふ。

きらきらしく　煌煌【副】形容詞の副詞法なり。光りきらめく狀にいひ、また嚴重なるにもいふ。端麗にも嚴麗にも。

きらびやかに 壯麗【副】煌(キラ)めきて美しきにいふ語。

きらぼし 煌星【名】星のきらゝくと燿くにいふ。多人數美服に列座して、燦爛たる狀などの形容に、きら星の如く居並ぶなど。

きりがやつ 桐が谷【名】櫻の一種にして、一枝に八重も一重も雜りて咲く。蕊は尤も長くして、花淡紅なり。また、異名を「八重一重」とも「くるまがへし」ともいへり。もと鎌倉桐が谷より出づれば名づくとぞ。

きりしまやま 霧島山【名】日向と大隅との國堺にありて東西二嶽に分れたり。天孫降臨の地といひ傳ふる山なり。

ぎりしや Greek 希臘【名】歐洲の一國、羅馬の榮えし以前に、繁盛を極めし國なり。

きりつ 規律【名】きまり。規則。取締。

きりつぼ 桐壺【名】淑景舍(シゲイシャ)をいふ。內裏の一殿にして、溫明殿の北、梨壺と北舍との間にあり。つぼを參照せよ。

きりにきる 頻々、寸斷【句】しきりにしきる。「きりにきつて痛む」など。又、すだ〳〵に切る意にいふは、寸斷の義。

きりふのや 切文の矢【句】切文は、矢羽の斑文にて、鷹の尾羽の、黑きところと白きところと、段々になれるをいふ。其の羽を以て矧ぎたる矢。

きりんじ 麒麟兒【名】佳兒を稱する語。「顧和總角有清操、旌叔重之曰、此吾家之麒麟兒、興二吾家一者必此子也」と。また、藝術などに勝れたる人をもいふ。

きりめ 切目【名】紀伊國日高郡切目村、熊野本宮に近きところ、王子社あり。熊野王子權現社は、攝津東生郡より、熊野に至るまで九十九所ありて、切目最もあらはる。

きりもの 權臣、寵臣【名】きりびとといふも同じ。君の寵を受けて、勢ある人をいふ。平家物語「院中のきりものに、西光法師といふものあり」。盛衰記「當時は鎌倉殿のきり人にて、御氣色よき女房なり」。

ぎりやう 技倆【名】うでまへ。人の智計あるをいふ。

きりよ 羈旅、【名】旅行に同じ。たび。

きりをもつてちをさす 錐を以て地を指す【文】くだをもつてつてんをのぞくを見よ。

きれど 切戶【名】丹後國與謝郡吉津村(ナガス)大字文殊の智恩寺の境地と、天橋立の長洲と、一小海峽をなせるところ、之を文殊の切戶といふ。古くは久志之渡(クシノト)、九世戶(クセト)、久世の渡(クセワタリ)などいひしが、今は、切戶または喜瀨戶といふ。智恩院の境內に文殊堂あり。切戶の文殊とて名高し。

きれん 祇連【名】匈奴の方言にして、天をいふ。

きろくじよ 記錄所【名】禁中に置かれて、諸國の莊園、および訴訟をも沙汰せり。其の後、後醍醐天皇元弘三年、また、記錄所を興して訴訟を勘へしむ。北朝にも、後光嚴院の時に、此の沙汰あり。後小松帝の頃までは、なほ其の政行はれしかども、遂に絕えたり。

きろにこくきうす 岐路に哭泣す【句】せんしにひたんすを見よ。

きわう 既往【名】帝範下に「欲レ悔二於既往一、唯愼二於將來一」とあり。過去のこと。

きわうはいさめず 既往不レ諫【文】論語「既往不レ可レ諫、來者猶可レ追」。前條と同義。

きゐ 奇偉【名】人よりも勝れて逞ましきをいふ。吳志「形貌奇偉」。

きをまなぶは、きのたぐひ 驥を學ぶは驥の類【句】驥は名馬。普通の馬にても、驥を學びて、千里を行かんとするは、即驥の類の意にて、善行の習ふべきをいひし諺。

ぎをんしやうじや 祇園精舍【名】印度の寺の名。釋迦が法を說きし遺跡にして、もと祇陀太子の園なりしかば、祇園といひ、後に、須達長者、其の園を請ひて寺としたるものぞ。精舍は寺をいふ。釋氏要覽に「藝文類集云、非レ由二其舍一、勢由二精練行者所一レ居也」。平家物語に「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」とあるは、即、鐘聲の遠く廣く響けども、手にも取られず、目にも見ねばを、人間諸行のはかなきにたとへたるなり。

く

ぐあん　愚案【名】愚考に同じ。自己の考をば謙遜していふ語。

くう　區宇【名】かぎられたる場所。境界。區劃。さかひ。しきり。晉書「表二提類一而分二區宇一」。

ぐうい　嵎夷【名】支那の東方の地名。禹貢に「嵎夷既畧」。

ぐうい　寓意【名】他の者になぞらへて、其の意をほのめかすこと。

くうかい　空海【名】弘法大師の名。讃岐の人。唐に留學して、佛典、書法、音韻などの學の蘊奥を極め、大同年中歸朝して眞言宗を創む。また、あまねく諸藝に通じ、國民を教化せしこと、甚大なり。

くうかん　空間【名】すべて物質界を包括したる、前後左右上下の、窮まりなき所をいふ。また、物と物との間隙をもいふ。

くうくう　空空【副、形】何もなきこと。空虛なること。呂覽「空々乎其不レ爲レ巧故也」。又、人の思慮なきを云ふに用ふ。

ぐうげん　寓言【名】寓意ある言。莊子「寓言十九、藉レ外論レ之」の郭注に「寄二之他人一則十言而九見レ信」。

ぐうご　偶語【名】相對して語ること。又、相聚りてよしあしを批評すること。史記「偶語者棄市」。

ぐうし　耦刺【名】耦は二人をいふ。二人しちがへて死ぬること。

ぐうしん　耦進【名】二人相竝び、進むこと。

ぐうしよ　寓書【名】書簡をよすること。左傳「子產寓二書於子西一」。

くうすゐ　空翠【名】空の色の綠をいふ。

ぐうぜん　偶然【副】ゆくりなく。はからず。不圖(フト)。意外に。列子「范氏之黨以爲二偶然一」。

くうだん　空談【名】むだばなし。無益なる談。

ぐうちう　隅中【名】日中日のある所。淮南子に「日至二于衡陽一是謂二之隅中一」。

くうちうろうかく　空中樓閣【句】空中にある樓閣の義にて、ありうべからざること。空想。「空中に樓閣を畫くが如し」は空想に耽ること。

ぐうもく　寓目【名】目をつくること。見ること。左傳「得臣與寓レ目焉」。

ぐうもく　隅目【名】目に角を立てて見ること。文選西京賦「隅目高眶」。

くぎやう　公卿【名】攝政、關白、大臣を公といひ、大中納言、三位以上を卿といふ。されば、三位以上の人達を公卿と稱す。ただし參議は、四位たりとも公卿のうちなり。それより下、四位五位などの昇殿を許されたるを殿上人といふ。

くく　姁姁【副、形】やはらぎ睦むこと。史記淮陰侯傳に「言語姁姁」。

くく　拘拘【名、副、形】のびざる貌。莊子「將下以レ予爲中此拘拘上」。また、醜からぬ貌。淮南子「夫以レ我爲二此拘拘一邪」。

くく　詡詡【副、形】說文に「詡、大言也」。漢書の注に「北方人謂二媚好一爲レ詡」。快ささうに語りつ笑ひつする貌。柳子厚墓誌銘に「詡詡强笑語以相取下」。

くく　呴呴【名、副、形】少少の惠の、氣息を以て物を[illegible]むるが如きをいふ。韓退之の原道に「呴呴爲レ仁子子爲レ義」。

くく　瞿瞿【副、形】目を見張ること。つつめいそしむこと。節儉なること。また、それと反對に、しまりなきこと。

くく　區區【副、形】少さきこと。微少なること。文選「奈何以二區區漁陽一而結二怨天子一」。また、愛すること。廣雅釋訓「區區、愛也」。また、志を得て滿足する貌。呂覽「區區焉相樂也」。

くぐつ　竹器【名】笆(ザル)の類なり。葉、または、竹を、絲にて編みたる袋。神中抄「くぐつとは、藁にて袋のやうにあみたるものなり。それに、藻などをもいるるなり」。

くぐつ　傀儡子【名】くわいらいを見よ。

くげ　公家【名】こうけとも訓む。朝家。おほやけ。朝廷。武家の世となりては、其の公家に直接に仕ふる臣下、即「公家衆」の略にもいへり。

くげう　公曉【名】源賴家の第二子。幼名善哉。賴家の害に遇ふや、是れを、實朝、義時が所爲となし、常に復讐せんと欲す。公曉既に鶴ケ岡の別當たり。實朝右大臣拜賀の禮を鎌倉八幡社に行ふに當り、之を殺し、三浦義村に依りて將軍たらむとす。義時、政子の命と稱し、人を遣して之を殺せり。

くげ　苦言【名】口に苦くても身に利ある言。戰國策に「苦言藥也、甘言疾也」。

ぐご　供御【名】主上の御膳部。

ぐこう、やまをうつす　愚公移レ山【文】成功を永遠に期して、智巧を用ひず、倦まず撓まずして事に從ふたとへ。列子に、昔北山に愚公といふ者あり。年九十許の頃、山の寨りて迂迴せる所に居りしを以て、山を移さんとしけるに、人あり、之を笑ひければ、子子孫孫相繼がば、遂には成功せんと答へしよし見ゆ。

くごふ　口業【名】佛教の十惡の中の、妄語、綺語、惡口、兩舌の類、すべて言語より起る惡行をいふ。

くさあはせ　草合【名】闘草にて、草を合せくらべて勝負を

決する遊戯。いにしへ、五月五日に、此の遊ありたり。

くさずり 草摺、甲裳、腰鎖【名】鎧の腰に垂るる短き裾。

くさづつみ【枕】草をしきて臥すことにて、さる時は蟻などの寄り來るものなれば、ありにかけ、また、草の中には恙といふ惡蟲も居るよりして、これをいはふことゝにて、病あらせずにもかけていふ。

くさなぎのつるぎ 草薙劍【名】さんしゆのじんきを見よ

くさまくら 草枕【枕】旅寢をいふ。古は、旅にては草を結びて枕とせし故にいふ。その心にて、旅の枕詞としても用ふ。

くさむすび 草結【名】草創の意にて、先立ちて事を始むるをいふ。また、草合せをもいへり。

くさよりいでてくさにこそいれ 草より出でて草にこそ入れ【句】「武藏野は、月の入るべき、山もなし、草より出でゝ、草にこそ入れ」といふ古歌あり。此は、古き俳諧の附合なるべしといへり。

くじ 公事【名】朝廷に行はるる政事、その他の儀式一切をいふ。

くしがたのあな 櫛形の穴【名】清涼殿の晝御座（ヒノオマシ）と、鬼の間との隔の柱を挾みて、櫛形の穴あり、之を櫛形の穴といふ。

くしげづる 梳【動ラ四】櫛にて髮をかすこと。

くじふのしゆんくわう 九十の春光【句】春三ヶ月間。

ぐしん 具臣【名】員數に具はるだけの臣にて、役に立たぬこと。論語「今由與ㇾ求也可ㇾ謂二具臣一」。

ぐじやう 具狀【名】やうすを申上ぐること。

ぐしゆん 虞舜【名】帝舜有虞氏をいふ。堯帝の讓をうけて天子の位に上る。

くしゆ 酬酒【名】酒に醉ひて狂ひ怒るをいふ。

ぐしよ 虞初【名】支那にて、小說をいふ。

くす 屈【動サ變】氣折れすること。氣分のひきたたぬこと。屈の音の咯せられて活用せしもの。

ぐす 具す【動サ變】取り揃ふ。伴ふ。召使ふ。引き連れ行く。

くすのきまさしげ 楠正成【名】南朝の忠臣にて、橘諸兄の裔。世々、河內國金剛山の西に居たり。後醍醐天皇に笠置に召されてより、一族勤王に盡瘁し、延元元年湊川に戰死せり。明治に至り從一位を贈らる。其靈を祀れる湊川神社は別格官幣社たり。

くすのきまさすゑ 楠正季【名】七郎帶刀と稱す。正成の弟。正成と共に湊川にて戰死せり。

くすのきまさつら 楠正行【名】世に小楠公と稱す。正成の子。正平二年四條畷に戰死。年二十三。明治に至り、別格官幣社に祭られ、社號を四條畷神社といふ。

くすのきまさのり 楠正儀【名】正行の弟。南朝に仕へ、また北朝に降り、兩朝の媾和を計りしが、行はれず、再、南朝に仕へたり。その終ふる所を詳にせず。

くずば 葛葉【名】くずかづらの葉。風に吹かるる時は、裏がへる故に、かへる意の序語に用ふ。拾遺集「風はやみ、峯の葛ばの、さもすれば、あやかり易き、人の心か」。

くずばな 葛花【名】くずは蔓草なり。葉は、小豆などの葉に似て、花も亦豆の如し。色、紫、赤なり。根より葛粉を生ず。大和の吉野産をもて最良とせり。

くずばな 葛花【名】書名なり。市川鶴鳴の「末我廼比禮」につきて、本居宣長の反駁せしものにて、二卷あり。葛花は藥艸なれば、之をもて漢學者の醉醒を洗ひ醒さむの意にて命名せしものなりと。猶まがのびれを見よ。

ぐぜい 虞芮【名】殷、周時代の二國の名、今の陝州府平陸縣と、馮翊縣となりと。

ぐせん 具饌【名】料理を揃へることと。また轉じて、料理をいふ。

くぜん 懼然【名】驚き怪む貌。禮記「懼然失ㇾ席」。

くぜん 矍然【名】懼然に同じ。莊子「瞿然而喜曰云々」。よろこぶ貌をも、忙しき貌をもいふ。

ぐぜん 具然【名】自ら滿足すル貌。荀子「今學曾未ㇾ如二貝貲一則欲ㇾ爲二人師一」。

くぜど 久世渡【名】地名なり。きれどを見よ。

くそ 苦楚【名】楚は荊の類をいふ。よりて、困難辛苦は楚（シモト）の中に在るが如きに喩へて、艱難することにいふ。

ぐそく 具足【名】諸道具をいひ、また、甲冑をもいふ。

ぐそくす 具足す【動サ變】足り調ふ。引連れ行く。太平記「我を具足して御所へ參らぬ」。

くだい 句題【名】歌の題の一種。歌または詩中の一句を題として歌を作る時の題。

くたう 狗盜【名】鼠賊に同じ。ごせどろぼう。

くだかけ 鷄【名】鷄の別名。伊勢物語「くだかけの、まだきに鳴きて、せなをやりつる」。

くだくだし【形】厭はしきほど多くある。くどい。冗長、冗煩の義。

くだたま 管玉【名】まがたまを見よ。

くだらかはなり 百濟河成【名】本姓は餘。其の先は百濟の人。畫をよくし、また、武事に長けたり。仁明帝の承和中に、百濟の朝臣の姓を賜はり、從五位下安藝介となる。仁

諒三年八月卒す。

くだをもてんをのぞく 用管闚天【句】莊子秋水篇に「是直以レ管闚レ天、用レ錐指レ地也。不二亦小一乎」。識見の小なるをいふ。「よしのすゐから天井をのぞく」も、これより出でたる俗諺なり。

くち 驅馳【名】牛馬を驅りて馳せしむること。轉じて、諸處に奔走し廻るをいふ。

くちあみもちもち 口網諸持【句】土佐日記「人々の口あみも、もろもちにて、此の海べに荷ひ出せる歌」とあるは、辛うじて泳み出せる歌の意なり。口網は曳網の口の左右につけたる網の名。海中に引き延へ置きて、海士共多勢にて、引き荷ひ出すものなれば、容易からぬ意より譬へていへり。

ぐち 愚衷【名】我が心の中さいふ意。謙遜していふなり。

くちぎたなし 口穢【形】もの言ひの、罵る如く聞えて賤しきこと。

くちずさぶ 口號【動は四】吟ずる。口にいひすさぶ。嘯く。

くちさし 口敏、口利、口疾【形】口巧者。口まめ。言葉のいひまはしの上手なるもの。

くちにみつありて、はらにけんあり 口に蜜ありて腹に劍あり【句】事文類聚別集に「李林甫爲レ相、凡才望功業出二其右一、及爲レ上所レ厚。勢位將レ逼者、必有レ計出レ之。尤忌二文學之士一。或陽與レ之善、陷以二甘言一。世謂二李林甫一口有レ蜜腹有レ劍」。

くちばのおりもの 朽葉の織物【名】朽葉色の織物。朽葉色とは、黄に赤みある色。

くちびるほろびて、はさむし 脣亡齒寒【句】脣と齒とは相隣れるものゆゑ、隣國亡ぶれば其の國も危しの意にいふ。左傳「晉齊脣之脣也。脣亡齒寒、君所レ知也。不レ救何爲」。

ぐつう 弘通【名】佛典の語。佛教の、廣く世間に廣まること。

くつかけ 沓懸【名】信濃國筑摩郡駒ヶ根村の中の地名。

くつがた 鴎尾【名】宮殿、棟の兩端、樽風の上にある大瓦。靴履（クワクツ）の如き形なれば名づく。また、さびの尾にも似たれば、此の字を宛つ。故に、さびのをともいふ。

くつき 崛起【名】丘陵等の高まりたるをいふ。轉じて、不意に起り立つこと。「崛二起東國一振レ威」。

くつきやう 屈竟【名】究竟に同じ。最もすぐれたるをいふ。「屈強の武者」。「屈竟の逸物」。次の語の轉訛。

くつきやう 倔強【名】わちけもの、わがままものをいふ。字典に「梗戻貌」とあり。強一に彊に作る。史記「欲レ以二新造未レ集之越一倔レ彊於此」とあるは、服從せざるをいふなり。

くつげん 屈原【名】人の名。名は平、楚の同族なり。楚の懷王に仕へて寵あり、後に讒を以て黜けられ、不平やるかたなく、遂に、汨羅（ベキラ）に投じて死せり。史記の屈原傳に「自二屈平沈二汨羅一後百有餘年、漢有二賈生一（トイフモノアリ）、爲二長沙王太傅一過二湘水一投レ書以弔二屈原一」とあり

くつご 口籠【名】牛馬の口に銜めて人をかまはぬやうにするもの。

くつせつ 屈折【名】折れ屈まること。折れかへること。「光線の屈折」。

くつぜん 崛然【副】特起せる狀。急に高き貌。說文に「山短高也」。

くつたく 屈託【名】事物に思ひつきて、心の屈することを。懊惱におなじ。

くつほる 頽【動ラ四】くづるに同じ。

くつろぐ 寛【動カ四】ゆるゆるすること。座を亂すこと。やすむこと。

くづをる 崩折【動ラ下ニ】氣落ちす。落膽す。臆す。ひるむ。また、損じ衰ふる意にいふこともありて、くづほるると同義に用ふ。

くつをとぶらふきよ 弔屈之擧【句】楚の屈原が五月五日に汨羅に投じて死せしかば、後世の人、每歲、此の日、身を水中に浮べて、屈原の靈を慰弔するをいふ。

くつをへだてて、かゆきをかく 隔レ靴搔レ痒【句】物の本體を得ぬにたとふ。己の意のままにならぬこと。趣意の徹底せぬこと。俗にいふ「かゆい所に手のとどかぬ」なり。續傳燈錄に「寧陵安福子勝章曰、上堂更或拈二掃敲一床、太似二隔レ靴抓レ癢」。

くでうどののかい 九條殿の遺誡【句】書名。群書類從中にも收めたり。九條殿は、右大臣藤原師輔。忠平の子。

くどう 句讀【名】文中にて言詞の切れたる所を句といひ、句の中を更に分ちて、點などをつけて、讀み易くしたるを讀といふ。韻會舉要に「凡經書成レ文、語絕處謂二之句一、語未レ絕而點三分之一以便二誦詠一、謂二之讀一。今秘書省校書式、句凡絕則點二於字之旁一、讀分則點二於字之間一」。轉じて、訓方、素讀などの意に用ふ。「習二句讀一」。

くどう すけつね 工藤祐經【名】伊東祐次の子。賴朝に仕へて左衛門尉となり、寵遇あり。采地の事につきて河津氏と怨を結び、遂に祐泰を殺せしかば、建久四年、祐泰の遺子曾我十郎五郎兄弟の爲めに討たる。

くどく 口說【動カ四】口にて說きつくる。頻にいふ。頻になげく。「搔き口說く」も同じき意。

くどんのをしへ 矍曇の敎【名】印度の刹帝利（シャトリヤ）種族の姓

を畳墨（コジョウ）といひ、釋迦は、この種族の人なれば、佛教を畳墨の敎といふ。

くないきやう 宮内卿 【名】 人名。後鳥羽天皇の宮女なり。巨勢宗岐の外孫にして、右京大夫帥光の女。和歌を以て世に名あり。また畫をよくす。餘に和歌の推敲に心を苦め、遂に早世せり。元暦年中の人。

くなじり 國後 【名】 千島國國後郡千島列島の最南方にある島。蝦夷が島に最近く、古くより本島に交通せり。

くにくのはかりごと 苦肉之計 【句】 身命を抛ちて敵に油斷させる謀。敵を詐かん爲に自ら大將と激論などして身體を傷けて、伴りて敵に降ることなど。

くにしのぶひと 國偲ぶ人 【句】 國を思ふ人。故郷を戀ふる人。

くにちよ 國千代 【名】 駿河大納言德川忠長の幼名。

くにのかみ 國守 【名】 國守（コクシュ）。また、大名をさしていふこともあり。

くにのみやさもびこしんわう 久邇宮朝彦親王 【名】 伏見宮貞敬親王の子。仁孝帝の猶子となり、奈良の一乘院に入りて、尊應法親王と稱し、天保十四年京都の青蓮院に入りて尊融と稱し、また、天台の座主となる。維新の後に、伊勢神宮の祭主に任ぜられ、明治二十四年十月薨ず。

くにまき 國見 【名】 住むべき國を求めさがすこと。

くにみおなきに、ふうきなるはは、つ 邦無レ道富貴恥 【文】 論語に出づ。

くにもちたいみやう 國持大名 【名】 諸侯の、一國、もしくは數國を所領せるもの。

くにやぶれてさんがあり、しろはるにしてさうもくふかし。 國破山河在、城春草木深 【文】 杜子美の詩の句なり。

くにをうる 賣レ國 【句】 私利の爲に國家の衰滅を忘るること。史記「鄭人或賣二其國於秦一」。「賣國奴」とは反覆の臣をいひ、また、國家に不利を致して私利を事とするものをもいふ。

くぬぎ 櫪、椚、櫟 【名】 樹の名。高二三丈に至り、葉は栗に似たり。材堅ければ薪炭とす。

くのうざん 久能山 【名】 駿河國安倍郡にあり。靜岡を去る三里ばかり。別格官幣久能神社あり。德川家康を祀る。元和三年、まづ、家康の遺骸を此に葬り、後に日光山には移せりなり。

くば 玖波 【名】 地名。安藝國佐伯郡にあり。嚴島と相對せる港。

くばう 公方 【名】 朝家をいふ。また、足利義滿の頃より征夷大將軍の僭稱となれり。

くはがた 鍬形 【名】 兜の正面に、左右に分れて、二本の角の如く立ちたるものをいふ。鍬形は、慈姑形（クワキ）の略轉にて、慈姑の葉を側面より見たる如き形なればいふとぞ。

くはな 桑名 【名】 伊勢國桑名郡桑名町。揖斐川の河口にあり。白川樂翁公の後なる松平氏、十一萬石の城下にして、今なほ繁盛なり。

くびかせ 頸枷、盤枷、頸械 【名】 かせばかしの轉。かしは、鐵、または木にて作り、罪人などの體に加へて、自由ならしめぬやうするもの。頸にあるを頸枷といひ、手にあるを桎梏（アシカセ）といひ、足にあるを械（桎）（テカセ）といふ。されば、頸かせに械字を用ふるは誤なり。

くひぜ 株 【名】 かぶ。木のきりかぶ。

くひな 水雞、秧雞 【名】 形雞の雛の成長したるものに似たり。鳴聲人の戸を叩くに似たるより、其の鳴くを、たゝくといへり。

くふう 工夫 【名】 考へめぐらすこと。

ぐふたいてんのあだ 俱不戴天仇 【句】 くんぶのあだとはともにてんをいただかざるを見よ。

くほ 矩步 【名】 規矩にはめたる歩み方。後漢書馬援傳に出づ。李善注に「矩步者回旋皆中二規矩一也」とあり。

くぼさ 利 【名】 利益。まうけ。

くぼんじやうど 九品淨土 【名】 西方彌陀の淨土の名にて、淨土とは、四趣五濁の穢惡なきを以ていふ。九品は、極樂往生相の等級にして、上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生の九は級なり。

くまがは 球磨川 【名】 肥後國にある川なり。九州第一の急流にして、其の源を五家庄、および江代、市房、白髮などの山中に發し、人吉を過ぎて八代灣に注ぐ。富士、最上と、我が國三大急流といはる。此の川は、寛文四年人吉の住商林正盛、はじめて船路を開きたりといふ。

くまがひなほいへ 熊谷直家 【名】 小太郎と稱す。直實の子。壽永三年宇治川の戰に、父と共に義經の手にあり。一の谷の戰に父と共に先登せり。賴朝かつて小山政光に對ひて、直家は本朝無双の勇士なりと評せりきとぞ。

くまがひなほざね 熊谷直實 【名】 平貞盛の後なり。武藏國熊谷に住して氏とす。賴朝起るに及び、平氏を去りてこれに歸す。壽永の役に、當に義經の手にあり。亂果てて鎌倉に居る。建久三年姨夫久下直光と地界を爭ふことあり、遂に京に入り、新黑谷の源空に投じて名を蓮生と更め僧となる。承久二年九月歿す。手を小太郎直家といふ。

くまざは はくけい 熊澤伯繼【名】一字は了介、また、了海ともいふ。蕃山、息遊軒等の號あり。中江藤樹の門に入りて、王陽明の學を修め。備前岡山侯に仕へて、大に治績あり。元祿四年八月歿す。享年七十三。

くまそ 熊襲【名】昔時九州に在りて朝命に從はざりし蠻賊。今の薩摩、大隅、日向の地を本據とせりき

くまなく 隅無く【副】陰(カゲ)なく。殘るところなく。かくるゝところなく。

くまのかはのしりざや 熊の皮の尻鞘【名】しりざやを見よ。

くまのさんざん 熊野三山【名】紀州熊野の本宮、新宮、那智の三座をいふ。また、三所權現(ゴンゲン)とも稱し、本宮と新宮とを兩所權現ともいふ。(權現は其の條を見よ)たゞし、是れ皆、神佛混合時代の稱呼にして、今は本宮を熊野座神社と稱し、國幣中社なり。祭神は家都御子命。

くまもとのらん 熊本の亂【名】明治九年十月廿四日、大野鐵平、加屋霽堅、上野謙吉等兵を起して敬神黨と稱し、熊本鎭台を攻む。翌日鎭台兵之を討ち、三人戰死し、餘黨平ぐ。所謂熊本の亂なり。

くみ 胡頽子【名】木の名。灌木にして高六七尺、葉は互生して、面、深綠に、背、褐色或は白色なり。冬の末開花して香あり。實は長さ五分許、熟すれば赤くして、食ふべし。仲夏に熟するものと秋に熟するものとあり。

くんいうどうき 薰猶同器【句】薰は香草、猶は臭草なり。よりて善人と惡人とを一處に居る意に用ふ。家語に「顏淵曰、薰猶不二同レ器而藏。堯桀不二共レ國而治一」。又、左傳に「一薰一蕕十年尙有レ臭」とあり。

くんかう 軍港【名】海軍の根擧港なり。相據の橫須賀、安藝の吳、丹後の舞鶴、肥前の佐世保、膽振の室蘭等なり。

くんけん 郡縣【名】ぐんけんを見よ。

くんこ 訓詁【名】訓は字義、詁は句意なり。字義に「訓詁ほ古今の言に通じて、其の義を明にするなり」とあり。

くんさのりう 裙釵之流【句】裙は下裳なり、婦人の裳に用ふ。釵はかんざしなり。よりて、婦女子の如き人物をいふ義にて、柔弱男子を指していふ。

ぐんさん 軍産【名】軍用金。

くんし 君子【名】才德の衆に勝れたるもの。論語「聖人吾不二得而見一之矣、得レ見二君子一者斯可矣」。

ぐんじ 郡司【名】昔、郡を治めし官なり。太領(カミ)、少領(スケ)、主政(ジョウ)、主帳(サクワン)の四職ありき。

くんしこく 君子國【名】後漢書東夷傳に「東方有二君子不死國一」。これ、我が國をさせるなりといへり。國人の恭謙敦厚なるを褒めたる稱なりと。

くんしへうへん 君子豹變【句】善に移ること、豹の皮毛の變じて文をなすに譬ふ。易經「君子豹變、小人革レ面」。後世之になりて、豹變を說を變ずる義に用ふ。

くんしんすゐぎよ 君臣水魚【句】魚の水に於けるが如く、君臣の間の惰好密なるをいふ。蜀志諸葛傳に「先主遂詣亮、凡三往乃見。因屏二人與計事一、善之。於是、情好日密。關羽張飛等不レ悅。先主曰、孤之有二孔明一、猶二魚之有一レ水。願勿復言一云々」。

ぐんしよるゐじう 群書類從【名】書名。正續合せて六百三十五卷あり。塙保己一が、古來の記錄雜書千二百七十三種を類別編纂せしものなり。

くんず 訓ず【動佐變】漢字の意味を釋くこと。又、漢字に和語をあてて讀むこと。

くんせん 薰染【名】感化の意に用ふ。

くんたう 薰陶【名】火の物を薰し、陶の器を作る如く、德を以て誘導しつつ、人物を造り成す事。すなはち、感化教育すること。宋史に「今大善教其子弟一者、必延二名德之士一、使二與レ之處一、以薰陶成性也」。

ぐんだん 軍團【名】いにしへ、我國にて、諸國に置かれし兵隊。正丁(二十一歲より六十一歲まで)の中より撰びて軍事を習はしめ、大毅、小毅、校尉等の官ありて之を統ぶ。事ありて將軍出陣するときは、之に從ふ。其の兵士は、また、衞士(エジ)防人(サキモリ)の役にも充つ。

ぐんない 郡內【名】甲斐國郡內より織り出す絹の織物をいふ。今日は、主に夜具布團の表などに用ふ。

ぐん、のにふすときは、ひがん、つらをみだる 軍野に伏んとさは雁飛列を亂る【文】孫子に「鳥起者伏也」とあるより出づ。

ぐんぴん 群品【名】多くの物。又、多數の人。品は衆庶の義。

くんぷのあだとは、ともにてんをいただかず 君父の仇とは俱に天を戴かず【文】君たり父たる人の仇は、報ぜずには已まぬの意。禮記に「君父仇俱不戴天」。

ぐんやうをかつて、まうこをせむ 驅二群羊一攻二猛虎一【文】弱國を集めて強國を攻むる義にて、到底力及ばざることをいふ。戰國策「爲レ從者、無レ以異二於驅一群羊一而攻二猛虎一也。夫虎之與レ羊不レ格明矣」。

ぐんりやう 郡領【名】古の、郡の大領と少領とをいふ。ぐんじを見よ。

くんろう 勳位【名】軍事上の勳功ありしものの賜はる位。

くゐぢのはし 久米路の橋【名】むかし、役小角(エンノ)といふ

行者あり、大利の葛城より金峯山に岩橋を架けむとて、諸神に架けしむるに、葛城の一言主神、形醜さを愧ぢて、晝は役に就かず。行者怒りて神を咒縛せしにより、橋半にして止みぬといひ傳へたる俗説によりて、「久米の石橋中絶ゆ」など、總べて中絶することにいへり。後撰集「葛城や、久米路に渡す、岩號の中々にても、歸りぬるかな」。又、「久米のいはばしともいふ。

くめのあたへ　久米直【名】直は姓の名。久米は軍人の部屬にて、其の祖天津久米命、天孫降臨の御伴を仕へ奉り、其子孫なる大久米命は、神武天皇に仕へ奉りてより、爾來、其の子孫、代々朝廷の守衞に當れり。

くめのさらやま　久米の佐良山【名】美作國久米南條郡の中央にある更山なり。古今集「みまさかの、くめのさら山さらさらに、昔の人の、こひしきやなぞ」。

くめべ　久米部、來目部【名】上古の武士の部族の名。其長官を久米直といひ、天津久米命の子孫、其の任にあたれり。

くめもとぶみ　久米幹文【名】本姓は石川、名は幸三郎、水廻舍と號す。常陸國水戸の人。平田鐵胤、本居内遠の門に學び、國典に通じ、歌文に巧なり。敬神愛國の志最も深く、曾て水戸烈公の知遇を受け、小石川の官邸にありて、大に國事に盡瘁せり。明治の初、教部省に出仕し、十五年東京大學の講師第一高等中學の教授となり、明治二十七年十一月歿す。年六十七。

くもがくる　雲隱【動ラ下二】月などの雲に隱るること。また、人の死ぬること。萬葉集「留めえぬ命にしあれば、數妙の、家ゆは出でて、雲がくれにき」。又、俗に、人の踪跡をくらますこと。

くもすけ　雲助【名】いにしへ、驛路に漂泊して、到るところ、繼立の人夫となるを生業とせし賤民の稱。

くもなかくしそといさめけむいこまのたけ　雲な隱しそと禁めけむ生駒の嶽【句】伊勢物語に「君があたり、見つつを居らむ、生駒山、雲な隱しそ、雨は降るとも」。此の歌、新古今集にも出でたり。いさむは禁止の意。けむは過去の想像にいふ助動詞。生駒山は、大和河内の國界にある山。

くものい　蜘網【名】蜘蛛の巢をいふ。

くもはしれいによこたはりて　雲は秦嶺に横りて【句】唐の韓退之が、憲宗皇帝の佛骨を宮中に迎へらるるを諫めて、潮州の刺史に貶せられ、途に、藍關に至り、姪孫湘に賦示したる詩中の句なり。秦嶺は京より潮州に至る間にある山の名。詩は「一封朝奏九重天、夕貶潮州路八千。欲爲聖明除弊事、肯將衰朽惜殘年。雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前。知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊」。

くもは、ばとうよりしやうず　雲は馬頭より生ず【句】山の高きを形容したる詩の句。李太白の送二友人入一レ蜀の詩に「見説蠶叢路、崎嶇不レ易レ行、山從二人面一起、雲傍二馬頭一生」云々。

くもるのみやくるま　雲居の御車【名】禁中の御車。

くゆ　苦窳【名】苦、又、一に、樞にも作る。ゆがめること。窳は器のきずなり。史記「器不二苦窳一」。

くゆ　崩【動ヤ下二】崩るに同じ。

くゆらかす　薫【動サ四】烟を立つること。ふすぼらすこと。「烟草をくゆらす」など。

くゆる　薫【動ラ四】燃えて烟の立つこと。ふすぼること。

くらうおんざうし　九郎御曹子【名】源義經をいふ。曹子は部屋をいひ、轉じて、貴公子の部屋住なるをいふ敬稱。

くらげ　海月、水母【名】海産の動物。泥海に生ず。色紅紫なるも透明なるもありて、鱗、骨、眼、口、手、足、無く、腹下に糸の如きものあり、潮に從ひ海面に浮ぶ。裂して乾せば白色となり食ふべし。

ぐらすごう　蘇格蘭【名】スコットランドの地名なり。ジエイムス、ワットは、此の地の大學にありて、蒸氣機を造り出せるなり。

くらつぼ　鞍坪【名】鞍の前輪、後輪の中間、人の尻を据うるところ。

くらま　鞍馬【名】京都の北方、丹後との國境に聳えたる山。山腹に鞍馬寺あり。

くらんど　藏人【名】また、くらうど。藏人所の官人。なほ次條を見よ。

くらんどどころ　藏人所【名】又、くらうどどころ。嵯峨天皇の弘仁元年、置かれて、藤原冬嗣、および、巨勢野足を以て其の長官とし、代りて群議を聽かしめしに始まる。寛平九年、別當一人を置き、藤原時平を以て任す。爾來、公卿の上首を以てこれにあつ。別當の次に、頭二人あり。一は辨官より兼ね（頭辨）、一は近衞中將より兼ね（頭中將）、殿上大小の事務を掌る。頭、最重職にして四位相當官なり。次に五位の藏人三人、六位の藏人四人あり。此五位六位を職事官といふ。禁中の細務供膳を掌る。次に、また非藏人あり。瀧口も、これに屬す。後、藏人所の權、ますます重く、少納言、侍從などの、親近の官は、皆其の職を失ふに至り、大寶の制一變せり。

くらまやま　位山【名】山の名。飛彈國大野郡山の口村にあり。いにしへ、御調の料として、此の山の水松を獻上せしとき、爵を賜ひて、一位の木と稱せられ、山を位山と號せられたるなりとぞ。さて、歌などには、多く位階の意に詠みなせ

風雅集に、前大納言實教の歌「老の身に、今ひと坂の、位山、登らぬにても、くるしかりけり」。また、水戸光圀の歌に「くらゐ山、登るもくるし、老の身は、麓の里ぞ、住みよかりける」などあり。

くらゐをすべる　遜ン位【句】天子の御位を降りさせ給ふをいふ。

くりげ　栗毛、騮【名】馬の毛色の、赭赤色にして、鬣の黒きもの。「栗毛の駒に金覆輪の鞍おきて」など。

くりつけつど　Cricket【名】一種の毬遊び。木球を、長き柄の檀木の如きものにて打ちて、鐵線を曲げて作れる小門を通らしめて、勝負を爭ふ遊戯。

くりはまじけん　久里濱事件【名】嘉永六年亞米利加合衆國水師提督ペリー、相摸國三浦郡久里濱に上陸し、互市を求めたる事柄を指す。

くりみあのたたかひ【名】Crimeaは、露西亞領の地名にして、黒海を隔てて、土耳古に對せる半島なり。この戰は、露國と土國との衝突なり。十九世紀の中頃、歐洲にては、ナポレオン三世、佛國の帝位に即き、英國と同盟して、露國の勢を挫きたるに當りて、露帝ニコラス一世は、英佛同盟の、到底久持せざるべきを察し、此の機に乘じて、其の希望せる南侵策を實行せむと欲し、一八五三年、大使を土耳古に遣し、土國の領内なる希臘教徒の保護權を得んことを要求せり。然るに、土國は、英國の後援を頼みて之を拒絶せしかば、露國は、直に戰を宣して、兵を土國に向けたり。之をクリミヤ戰爭の發端となす。而して、其の結果は、英佛二國聯合して土國を援け、艦隊を黒海に集めて、等しく露國に當りしかば、露國遂に大敗して、和を媾ぜり。

くりがた　栗形【名】刀劍の鞘の口に近き方に、その形、半圓にして、下緒を通すべき孔あるものをつく、これをいふ。その形、栗の實に似たるより、此の名あり。

くる　痟癭【名】病名。俗にいふ、せむし。列子に「見一痟癭者」。

くるすの　栗栖野【名】地名。山城國宇治郡栗栖なり。

くるまがへし　車返【名】地名。駿河國駿東郡にあり。

くれたけ　呉竹【名】呉國より渡れりといふ竹の名。淡竹の類。葉細く、黄潤にして、長さ數尺に過ぎず。多く庭に植う。杖、格子などに作る。くれたけの、節、節、世、などにかけていふ枕詞とす。

くれなばなげの　暮れなば無氣の【名】古今集雜性法師「いざけふは、春の山べに、まじりなむ、暮れなばなげの、花の蔭かは」。なげは、無氣の意より轉じて、ナホザリなどの意に用ひならへり。この歌も「ナホザリの花の蔭かは常には願ひてもゆかぬ意。又「なげの御筆ぞがひにも」など。

ぐれん　紅蓮【名】地獄に、八熱地獄、八寒地獄といふあり。八寒は、頻部陀地獄、尼剌部地獄、頻嗶陀地獄、嗢々婆地獄、虎々婆地獄、嗢鉢羅地獄、鉢特摩地獄、摩訶鉢特摩地獄、是なり。鉢特摩地獄、すなはち紅蓮地獄にして、摩訶鉢特摩地獄、すなはち大紅蓮地獄なり。なほけうくわんを見よ。

くろかすげ　黒糟毛【名】馬の毛色の灰色にして、黒き差毛あるものをいふ。

くろかはおどし　黒革威【名】黒き染革を細く裁ちて、おどしたる鎧。

くろかは　はるむら　黒川春村【名】人名。號を蕚園といひ、始め、古學を狩谷掖齋に學び、遂に一家をなす。慶應二年歿す。年六十九。

くろきのごしよ　黒木の御所【名】皮を削らず、野生のままの材木にて建てたる御殿。粗末なる建築の御所。

くろくは　黒鍬、畔鍬【名】田畑を耕すを業とするものをいふ。また、德川氏の頃、一種の卑き役を勤むるものをいひき。土方の類なり。後に目付の配下となりて、黒鍬組、黒鍬の者などいへり。

くろだ　じよする　黒田如水【名】名は孝高、通稱官兵衛。播磨の人、豊臣秀吉に仕へて、豊前中津の城主となる。薙髪して、如水といふ。慶長九年三月歿す。年五十九。

くろどのごしよ　黒戸御所【名】清涼殿の北にある間。徒然草に「黒戸は小松の帝、位に即かせ給ひて、昔、ただ人におはしましし時、まさなごとせさせたまひしを、忘れ給はで、常にいとなませたまひける間なり。御かま木にすすけたれば、黒戸といふとぞ」。拾芥抄に「在清涼殿北、瀧口戸西」と見ゆ。

くろばのや　黒羽の矢【名】矢羽の總體に黒き矢。

くわ　騅【名】よき馬。駿馬に同じ。騅騮。

くわい　魁【名】かしら。頭取。きよくわいを見よ。

くわいあんのみやこ　槐安の都【句】槐安國の都にて、淳于棼が夢に見たる蟻の國の都なり。異聞錄に「淳于棼家居廣陵ニ。宅南有ニ古槐樹一。棼醉臥其下ニ。夢ニ二使者ヲ曰、槐安國王奉邀ヘ。棼隨使入ニ穴中一、見ニ榱題ノ曰大槐安國ト。其王曰、吾南柯郡政事不レ理。風卿爲守。理之。棼至レ郡凡二十載、使ニ送歸一。後因尋ニ古槐下穴一、洞然明朗。可ニ容一レ榻。有ニ一大蟻一、乃王也。又尋ニ一穴一、直上南柯。即棼所守之郡也」。

ぐわいう　臥遊【名】繪畫の山水を見て樂しむこと。名畫記に「宋ノ宗炳常歎曰、老病俱至。名山恐難ニ遍遊一、澄ニ懐觀ニ道。臥以遊之。凡所歷遊、皆圖於壁、坐臥向之」。

くわえい　華英【名】色の目ざましく、光り輝くをいふ。文

選「屢離華英」。また、人物の勝れたるものをいふ。

くわいか 怪訝 【名】 あやしみいぶかること。不思議に思ふこと。「怪訝の至りに堪へず」など。

ぐわいかう 外交 【名】 境外の交際。國語「凡厚二其外交一而勉レ之、以報二其德一」。又、外國との交際。「外交術」は外國と交際する法。

くわいがん 魁岸 【名】 體軀大きく、容貌の猛くすぐれたるをいふ。前漢書の江充傳に「爲レ人魁岸」とある註に「岸者有二廉稜一、如二崖岸一形」。

くわいく 化育 【名】 教へ育つること。物をつくり成すこと。

くわいくわ 會課 【名】 集會の規約。

くわいぐわ 繪畫 【名】 我が國の繪畫に就ては、海外交通以前のことは、傳説なければ、詳ならずといへども、他の文化の度より推して、上古よりありしことは疑ふべからず。降て雄略帝七年、百濟より畫工白加を奉り、また、當時韓人辰貴といふもの、我が國に在りて、畫を能くし、武烈帝これに首の姓を賜ふ。推古紀などにも、河内の畫師、黄書の繪師、山背の畫師、簀秦の畫師、楢原の畫師などいふ名見えたり。今日殘れる繪畫の、最古なるものとす。

くわいくわん 快觀 【名】 人世を愉快なりと感ずる觀念。また、おもしろしと見らるるもの。

くわいけい 會計 【名】 出納の計算。孟子「孔子嘗爲二委吏一、曰會計當而已矣」。

くわいけいざん 會稽山 【名】 吳越の戰のとき、越王勾踐の籠れりし山。今、浙江省紹興府會稽縣に在り。

くわいけいのはぢ 會稽の耻 【句】 ゑつわうくわいけいにくだるを見よ。

くわいくわい 噲噲 【副、形】 快快に同じく、樂しき狀。詩經「噲噲其正」。

ぐわいけうのきん 外敎の禁 【句】 てんしゆけうのきんを見よ。

くわいご 魁梧 【名】 壯大の意。史記「其人、計魁梧奇異」。

ぐわいしん 外臣 【名】 外國の臣。儀禮「他國之臣則曰二外臣一」。

くわいしや 膾炙 【名】 なますと燒肉とにて、美味なれば、人口に乘る食物なり。よりて、普く人の口の端に上る事を「人口に膾炙す」といふ。孟子「膾炙與二羊棗一孰美。孟子曰、膾炙哉」。

くわいぜん 隤然 【副、形】 すらりとしたるをいふ。易の繫辭「夫乾坤隤然、示二人簡一矣」。

ぐわいそん 外孫 【名】 己が女の、他家に嫁ぎて生める孫をいふ。神皇正統記「義氏は義時が外孫なれば」。

くわいてんのちから 回天之力 【句】 天は、君に象りて、君の心を挽回するをいふ。事類全書に「張元素諫三太宗修二洛陽宮一。魏徵歎曰、張公論レ事有二回天之力一、可レ謂二仁人之言一。其利博哉」。また、國家或は朝廷の衰へたるを、回復するをいふ。

くわいふく 恢復 【名】 もとの姿にかへること。

くわいもん 槐門 【名】 大臣の異稱。周禮に「面二三槐一三公位焉」とあるに出づ。

くわいらい 傀儡 【名】 人形。くぐつ。列子に記す所によれば、周の穆王の時に、巧人に偃師といふものありて、木人を作りて、能く歌舞せしむ。王すなはち、盛姬と、之をみる。舞終り、木人、目を瞬し、手を以て王の左右を招く。王怒り、偃師を殺さんとす。偃師、懼れて之を壞す。皆、丹墨膠漆の爲す所なりきと。これけだし、傀儡の始なり。其、人形を使ふものを、傀儡師といふ。

くわいれい 瑰麗 【名】 文字、語句などの美しきをいふ。「詞藻瑰麗」など。

くわいろくのさい 回祿の災 【句】 火災をいふ。回祿は火の神。左傳「子產禳二于玄冥回祿一」。

くわいゐ 魁偉 【名】 魁は大、偉は奇なり。身大卓異にして、倫に秀づるをいふ。後漢書「容貌魁偉」。

くわういん、やのごとく、じせつ、ながるるがごとし 光陰矢の如く、時節流るるが如し 【文】 山谷の詩に「光陰過レ箭疾」。顔氏家訓に、「光陰可レ惜、譬二諸逝水一」とあるなどより出でたる諺なり。光は日、陰は月をいひ、合せて、歲時のことさす。

くわうかい 黃海 【名】 支那山東省と朝鮮黃海道との間なる海をいふ。明治二十七年九月、日淸艦隊の激戰ありし所。淸音にホアンハイとよぶ。

くわうかう 皇考 【名】 禮記に「父曰二皇考一」とあり。明の英宗の時より、一般士民の用ふることを禁じ、帝王の父をのみいふ。

くわうきんのぞく 黃巾賊 【名】 後漢の靈帝の末年、鉅鹿の張角といふもの、妖術を敎授し、衆を集むること十三萬、一時俱に蜂起せしが、其の兵衆、皆黃巾をつけしより、此の名あり。

くわうくわう 遑遑 【副、形】 おちつかざる貌。心のそは〳〵する貌。孟子「孔子三月無レ君則遑遑如也」。

くわうくわう 皇皇 【副、形】 著明なる貌。麗はしき貌。國語「天道皇皇」。楚辭「褰皇皇既降」。また、遑遑と同義にも用ふ。

くわうくわう 煌煌 【副、形】 光のきらきらするさま。「昱彩

煌煌」。

くわうくわん 曠官 【名】官吏が職務を曠(ムナ)しくして、事務の挙らざるをいふ。經書「莫レ曠二庶官一」。

くわうけい 光景 【名】風光。景色。楚辭「借二光景一以往來」。

くわうこう 黄口 【名】雀の雛は、口黄なる故にいふ。轉じて、小兒の事。又、青二才。淮南子「古伐レ國、不レ殺二黄口一、不レ獲二二毛一」。

くわうこつ 恍惚 【副、形】微妙測られざるにいふ。老子「道之爲レ物惟恍惟惚云々」。また、うつとりしたる貌。ぼれぼれとしたる貌。すべて、物事に氣を奪はれてぼんやりしたる狀にいふ

くわうじつびさう 曠日彌久 【句】曠は空(ムナシ)、彌は亘(ワタル)なり。空しく時日を廢するもの久しきに亘ること。漢書「曠日十年」。

くわうしやう 曠敞 【名】地高くして、廣々したる所。

くわうしよへいがひつじ 黄初平が羊 【句】蒙求に神仙傳を引きて、いはく「黄初平(ノナリ)中谿人。平十五。家使レ牧レ羊。有二道士一見二其真謹一、便將(ル)至二金華山石室中一。四十餘年不二復念一レ家。其兄初起索レ之、不レ得レ見。後見二市有一道士一善卜一、乃就レ占レ之。道士曰、金華山中有二牧羊兒一、是卿弟、非邪。初起即隨二道士一尋見。兄弟悲喜。問二羊何在一。初平曰、近在二山東一。初起往視、了不レ見レ羊、但見二白石無數一。還曰、無レ羊。初平(ノトキ)

くわうせい 廣斥 【名】廣き干潟(ヒガタ)。尚書禹貢の注に「廣漠而斥鹵」とあり。斥鹵は鹹地なり。

くわうせきこう 黄石公 【名】秦の頃の隱士。張良が、兵法を傳はりし人なりと。

くわせん 黄泉 【名】冥途。よみぢ。文選「下有二陳死人一、香香如レ生」。

くわうぜん 怳然 【副、形】ぼんやりすると。恍に通じ用ふ。

くわうそ 皇祖 【名】皇室の御先祖。また、天皇の御祖父に當らせらるる天皇。祖は玉篇に「父之父也。又、先祖始祖、通謂二之祖一」。

くわうたう 荒唐 【名】ほら。よりどころなき大言。莊子曜文に「謂下廣大無二域畔一者上也」。註文に「唐、大言也」。

くわうだう 皇堂 【名】墳穴、墳墓などに同じ。

くわうてい 皇帝 【名】支那の天子の號。秦に始まる。

くわうはく 黄白 【名】錢をいふ。黄は金、白は銀。史記「侯夏之幣、金爲二三品一、或黄或白或赤云々」。

くわうふうせいげつ 光風霽月 【句】心の清くすみたるを譬へいふ。書言故事「宋朝濂溪先生、周惇頤字茂叔、道州春陵人。黄魯直曰、春陵周茂叔、人品甚高、胸中洒落、如二光風霽月一」。

くわうぶのち 荒蕪の地 【句】草茂りて荒れはてたる地。

くわうべつ 皇別 【名】(こうべつ)を見よ。

くわうぼう 廣袤 【名】廣はひろさ、袤は長さをいふ。また、「東西曰レ廣、南北曰レ袤」ともいへり。

くわうほぜん 皇甫冉 【名】唐の詩人。十才にして文を屬せりといふ。

くわうみやうくわうごう 光明皇后 【名】聖武天皇の皇后、安宿媛と申す。深く佛法を信じ、悲田、施藥二院をおきて、餓者、病者を救ひ玉へり。

くわうやう 混濩 洸漾 【名】水の深く廣き貌。白樂天の詩に「影浸二南山一寄混濩、波沈二西日一紅漾淪」。漾淪も、また水の深廣なる狀をいふ。

くわうらうのみち 黄老の道 【句】黄帝と老子と說きし道をいふ。即、無爲自然を貴ぶ道なり。

くわうりやうのつかひ 荒涼の使 【句】荒涼はすさまじく色もつやもなきことの使者。取りとめなき使者。ぼんやりしたる使者。

くわうがのみづのすみたる 黄河の水の清みたる 【句】支那の黄河は、河水常に濁れり。然れども、瑞祥あれば、清むといひならはしたり。

くわうぜんるゐへき 堭塹壘壁 【名】城の濠(ホリ)、および、土手。

くわかうせき 花崗石 【名】白色にして黒斑ある石なり。攝津國武庫郡御影村より産出するを以て、御影石(ミカゲイシ)の名あり。

くわがく 科學 【名】有物有則によりて研究する學問をいふ。哲學に對せる稱にして、哲學を形而上の學といひ、科學を形而下の學とす。

ぐわかい 瓦解 【名】破壞の甚しきこと。瓦の碎けし如く、いかんともすべからざるをいふ。

くわかくのあらそひ 蝸角の爭 【句】「蝸牛角上の爭」ともいふ。小事につきてのあらそひ。つまらぬ爭。莊子「有下國二於蝸之左角一者上、曰二觸氏一。有二國於蝸之右角一者上、曰二蠻氏一。時相與爭レ地而戰。伏尸數萬、逐レ北旬有五日而後反」。

ぐわがふ 瓦合 【名】破瓦の相合ふ如く、聚め合すとも完全ならぬものをいふ。よせあつめもの。史記「陳涉起二匹夫一、驅二瓦合適戍一、旬月以王レ楚」。

くわかん　果敢【名】事を行ふに、てきはきすること。決斷に同じ。

くわき　果毅【名】決斷に富み、しっかりとして強きこと。書經「其尙二果毅一」。

くわぎう　蝸牛【名】莊子の注「蝸虫有二兩角一、俗謂二之蝸牛一」。くわぎうのあらそひ參照。

くわきふ　火急【名】極めて急なる時にいふ。迅速の義。劉說の詩「州符昨夜急如レ火、馬蹄踏レ月趨二官衙一」。

くわくくわい　郭隗【名】支那戰國時代の燕の人。昭王に仕ふ。嘗て昭王に曰く「古之人君、以二千金一有レ求二千里馬一者上、馬已死矣、買二其骨五百金一而歸、不二期年一而千里馬至者三。今王必欲レ致レ士、先從レ隗始」と。王之を優遇して師事せり。

ぐわさきよく　畫局【名】繪畫を取扱ふ役所。繪所。

くわさきよし　花御史【名】紅梅をいふ。白花紫蒂の梅なり。王荊公之を愛して花御史といひしより始まる。

くわくくわう　霍光【名】四漢の宣帝に仕へ、大司馬大將軍となる。皷立を行ひしかば、後世皷立を謀ることを「霍光を學ぶ」などいひ習へり。

くわくさく　畫策【名】謀計に同じ。策を立つること。史記「常爲二畫策臣一」。

くわくしき　郭子儀【名】唐の名臣なり。德宗尊びて尙父といふ。唐室、子儀を以て安危をなすこと三十年に及ぶと。

くわくしん　郭振【名】唐初の詩人にて、武后に用ひらる。

くわくしやう　鶴氅【名】ゆきはがまうににてゐる。

くわくしやく　矍鑠【名】老いて盛なるをいふ。後漢書馬援傳に「援即披レ甲跨レ馬出。帝見曰、矍鑠哉、此翁」。

くわくせい　廓清【名】さつぱりとはらひ清むること。後漢書陳蕃傳「慨然有下廓二清天下一心上」。

くわくぜん　確然【副、形】皮と骨との離るる音。莊子養生篇「砉然嚮然、奏レ刀騞然」。

くわくたくだ　郭橐駝【名】支那古代の植木師にて、背肉隆起して橐に似たる故、人、よんでいへりと。

くわくちうさう　攫蟲草【名】草の葉などが、あたかも、動物のごとき働をなして、蠅などの昆虫を捕攫して、自分の養分となす植物にして、はびちこく、まうせんごけ、むしなし、たぬきも、虫とりすみれ、うつぼかつら、など稱する草は、皆この攫蟲草なり

くわくん　寡君【代】他邦の人にむかひておのが君をいふ稱。

くわくよくのぢん　鶴翼の陣【名】陣法の名。鶴の羽翼をひろげたる如く、横に布く陣取なり。唐の太宗の文に「躬擐二甲冑一親當二矢石一、夕對二魚麗之陣一、朝臨二鶴翼之圍一」。

くわさい　火災【名】火災に同じ。火事をいふ。公羊傳の注に「大者曰レ災、小者曰レ火」。

くわじふじつ　華而不實【句】言ふことが行ふことにすぐることこと。甘きことのみいひて實行の伴はざること。左傳「華而不レ實、怨之所レ聚也」。

くわじん　寡人【代】主君自らおのれをいふ稱。孟子「寡人之於國也云々」。

くわしや　化者【名】死者をいふ。莊「爲二化者一無レ使二土親一膚」。

ぐわしやう　畫匠【名】畫工に同じ。

くわしよく　火食【名】物を煮て食ふこと。史記「教二民火食一」。

くわしよく　華食【名】美食すること。紫閨の異方法竝論に「其民華食而脂肥」。

くわしよくのてん　華燭の典【句】婚姻の式をいふ。

くわしよのゆめ　華胥の夢【句】快き夢、または、快き眠の義に用ふ。黃帝が、夢に華胥の國に遊びたる故事による。即、列氏に「黃帝晝二天下之不レ治、竭二聰明一、竭二智力一、勞然肌色虧損、晉然五情爽惑。於レ是放二萬機一、退而閒居五十九旬之間、齋レ心服レ形三月不レ親二政事一、晝寢、而夢遊二於華胥氏國一。其國無二師長一、自然而已。其民無二嗜欲一、自然而已。不レ知レ樂

生不レ知レ悪レ死。故無二夭傷一。不レ知レ親レ己、不レ知レ疎レ物。故無二愛憎一。乗レ空如レ履レ實、寝レ虚若レ處レ牀。雲霧不レ硋二其視一、雷霆不レ動二其聽一。神行而已。黄帝既寤、悟然自得曰、今知二至道不一レ可二以レ情求一。吾二十有八年而天下大治。幾若二華胥氏國一。而帝登遐」。

くわしよのわう 華胥の王 【句】 華胥の國の王の義より、眠ることをいふ。即ち、睡眠中の人と爲るの義。前の條を見よ。

くわぜん 果然 【副】 後さで十分のこと。果して。案の如く。莊子「腹猶果然」。

ぐわぜん 瓦全 【名】 いたづらに生き永らふること。三國志「魏宗室景皓曰、大丈夫寧爲レ玉碎、不二爲レ瓦全一」。

ぐわせん 瓦磚 【名】 (磚は甎に同じ)。かはら。後漢書の列女傳曹世叔妻内助訓「古者生レ女三日、臥二之牀下一弄二之瓦磚一而齋告焉」。

くわちゆう 華冑 【名】 華族をいふ。冑は後の義にて、華族の後裔(ハ)といふ意なり。左傳に「是四嶽之冑也」とある註に「裔遠、冑後也」と見えたり。

くわつけい 活計 【名】 生計に同じ。くらしむき。白居易の詩「莫レ厭二家貧活計微一」。

くわつのう 括嚢 【名】 ふくろの口を閉ぢること。口を閉ぢてゐるにたとふ。易經「括レ嚢无レ咎无レ譽、蓋言レ謹也」。

くわつぽ 濶歩 【名】 鷹揚なる態度にて歩むこと。

くわつもく 刮目 【名】 刮は摩、目を拭ふこと。目をこすりてよく見ること、吳志呂蒙傳に「士別三日、當二刮目相看一」。

くわでんのくつ 瓜田の履 【句】 瓜を盗むかとの疑を避くる爲に瓜田には履を入れずとの故事より、疑を受くべき態度にいふ。列女傳「經二瓜田一不レ納レ履、過二李園一不レ整レ冠」。

くわと 蝌蚪 【名】 蝦蟇子なり。俗にオタマジヤクシといふ。李時珍いはく「蝌蚪狀如二河豚一、頭圓身上青黑色。始出有レ尾無レ足。稍大則足生、尾脱。治二疥瘡一又可レ染二鬢髪一」。古代の文字は之に似たる貌なる故、蝌蚪の文といふ。

くわとのしよ 蝌蚪の書 【句】 古代の文字は、其形より蝌蚪文字といふ。よりて、古代の書籍をいふ。

くわとうぐち 火燈口 【名】 石燈籠の火ぶくろをいふ。また、別に瓦燈口(グワトウグチ)といふあり。架燈口(カトウグチ)ともいひて、壁などに弓形に作れる出入口にて燈籠などを吊すところ。

ぐわはいかうせき 瓦盃羽觴 【句】 瓦の杯に藥のむしろといふ意にて、貧賤の狀なり。

ぐわはく 畫博 【名】 繪畫の達人を尊びて博士の義にていふ。

くわふくはあざなへるなはのごとし 禍福は糾へる縄のごとし 【文】 禍と福とは、かはるがはる來るものにて、福ありとも賴むに足らず、悲ありとも憂ふるに及ばずとの意。鶡冠子に「禍與レ福如二糾縄一」。また、史記の賈誼傳に「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏云云、禍之與レ福、何異二糾縄一」とあり。あざなふは、縒り合はすこと。

くわぶつ 貨物 【名】 すべて、貴きものをいふ。周禮「其貢二貨物一」の注に、龜具なりとあり。今は、荷物の義にのみいふ。

くわふん 花粉 【名】 花の雄蘂の粉にて、葯、熟して裂くれば、吐出せられて、生殖作用を行ふ。

くわほ 華舗 【名】 立派なる店。

ぐわへい 畫餅 【名】 むだになること。畫きたる餅は、食ふこと能はれば譬とす。魏志「如二畫レ地作レ餅。不レ可レ啖也」。

くわへう 華表 【名】 すべて、家の外飾をいふ。文選「故其華表則鏤々檻々」。我國にては、鳥居のことに用ふ。

くわへき 和壁 【名】 卞和氏の璧の故事より出で、貴き璧をいふ。文選「趙氏有二和璧一」。

くわまん 花幔 【名】 幔は幕なり。櫻花の咲きつづきたるを形容していふ。

くわん 鸛 【名】 鶴の一種なり。こうのとり。

くわんえいじ 寛永寺 【名】 東叡山寛永寺をいふ。東京上野の公園内にあり。天台宗なり。徳川三代家光の、寛永年中に、京都の比叡山延暦寺に擬して立つ。天海僧正開祖たり。

くわんえいのみゆき 寛永の御幸 【句】 寛永三年秋、前將軍秀忠、將軍家光上洛して二條城にあり。九月六日後水尾帝二條城に行幸ありて十日還幸なる。而して、十三日、秀忠太政大臣を、家光左大臣を拜す。

くわんおん 觀音 【名】 觀世音菩薩なり。慈悲を守りて、能く人を救ふといへり。千手觀音、十一面觀音、如意輪觀音、馬頭觀音などさまざまあり。

くわんおんざき 觀音崎 【名】 相摸國三浦郡の東方に斗出したる岬なり。房州の富津の鼻と相對して、東京灣の咽喉たり。

くわんおんじ 觀音寺 【名】 筑前國筑紫郡水城村大字觀音寺にある寺にして、天智帝の創建なり。太宰府の舊址、また此にあり。

くわんか 鰥寡 【名】 老いて妻なきを鰥(ヤモヲ)といひ、老いて夫なきを寡(ヤモメ)といふ。又、いづれをもやもめともいふ。

くわんが 管窺 【名】 清國海軍人の官名。わが經長に當る。

ぐわんかい 忨悔 【名】 貪慾なるをいふ。左傳「忨レ歲而悔レ日」の注に「忨も共に貪也」とあり。

くわんかう 貫高 【名】 人名。史記張耳陳餘傳に「貫高・趙午

者、設耳之客也。及三耳之子敖立、高祖甚悔、慢之。貫高趙午等爲レ殺二高祖一。王不レ聽云々」と見えたり。

くわんかう 還幸 【名】 天子の、外より還り給ふこと。

くわんかく 丱角 【名】 總角に同じ。あげまきと訓ず。童兒の髮のいひ方なり。よりて、童兒のことにいふ。

くわんがい、あひのぞむ 冠蓋相望 【文】 前車は、後車の冠蓋を望み、後車は、前車の冠蓋を望むことにて、行車の、あとよりあとよりと、ひきつゞきて、斷間なき意にいふ。戰國策に「韓使二使者求ル救於秦一、冠蓋相望也」。

くわんきふ 緩急 【名】 危急に同じ。急の字に重きを置く一種の用法なり。史記「生レ子不レ生レ男、緩急無レ可レ使者一」。

くわんくわう 觀光 【名】 他國の光華を視察すること。易經「觀二國之光一」。また、轉じて、他國の風光を見ることにもいふ。

くわんくわん 桓桓 【形、副】 武き貌。詩經「桓桓武王保二有其志一」。

くわんくわん 欵欵 【副、形】 忠誠にしてまごころある貌。また、緩々として寬やかなる貌。司馬遷の報二任少卿一書に「欲レ效二其欵欵之愚一」。杜甫の詩に「點レ水蜻蜓欵欵飛」。

くわんけ 官家 【名】 公家に同じ。もと、帝室の稱。爾雅「五帝以二天下一爲レ官、三王以二天下一爲レ家」。

くわんげつけう 觀月橋 【名】 伏見町の東南隅にあり。奈良街道の淀川に架せる橋なり。

ぐわんこ 紈袴 【名】 氷紈(シロネリノキヌ)の袴にて、貴顯の子弟の袴なり。故に、貴族の子弟を紈袴子、紈袴者などいふ。漢書「出與二王許子弟一爲レ群、在二綺襦紈袴之間一」。

くわんこつだつたい 換骨脫體 【句】 他の趣向を取り、之を一轉して、新しき詞藻を作り出す法。例へば、白樂天の詩「臨レ風抄秋樹、對レ酒長年身、醉貌如二霜葉一、雖レ紅不二是春一」を蘇東坡が「兒童誤喜朱顏在、一笑那知是酒紅」とせる類なり。紅きも春に在らずの意を、紅きも兒童にあらずとしたれど、何れも酒紅といふを主眼とせり。

ぐわんこのと 紈袴之徒 【句】 ぐわんこを見よ。

くわんざんをしやう 關山和尚 【名】 信濃國高梨村の人にして、法を大燈國師に受け、京都妙心寺に住して、後光嚴天皇延文五年十二月、享年八十四を以て寂す。安政二年三月、放無量國師の諡を賜れり。

くわんし 管子 【名】 書名。二十四卷八十六篇あり。齊の管仲の作る所。

くわんじ 莞爾 【副、形】 小笑の貌。喜ぶ意に、につこり笑ふ貌。論語「夫子莞爾而笑」。

くわんしう 完聚 【名】 城郭を完全にして人民を聚むること。左傳「大叔完聚」。

くわんじかう 冠辭考 【名】 書名。十卷ありて、枕詞の解釋をなせるもの。加茂眞淵の著。

くわんしん 歡心 【名】 ありがたがる。ありがたく思ふ。孝經「故得二萬國歡心一以事二其先王一」と。後世、「歡心を得る」は、氣に入りとなりて信用せらるるにいふ。

くわんしや、とのごとし 觀者如堵 【文】 堵は墻なり。見物人の多くして、墻の如くに列べるをいふ。晉書「京師人士、聞二其姿容一、觀者如レ堵」。

くわんじやうし 管城子 【名】 筆の異名。秦の蒙恬といふ人、筆を製して、管城公に封ぜられしよりいふよし、韓退之の毛穎傳に見えたり。

くわんじゆじ さゑもんのかみみつより 勸修寺左衛門督光賴 【名】 ふぢはらみつよりを見よ。

くわんじゆじないだいじん 勸修寺內大臣 【句】 藤原高藤なり。ふぢはらみつよりを見よ。

くわんせいのさんきじん 寬政の三畸人 【句】 蒲生君平、林子平、高山彥九郞の三人をいふ。

くわんせいのさんすけ 寬政の三介 【名】 柴野彥輔(栗山)、古賀彌助(精里)、尾藤良助(二洲)の三儒官なり。

くわんぜおん 觀世音 【名】 くわんおんを見よ。

くわんぜん 驩然 【副、形】 うれしき貌。よろこばしき狀。

ぐわんそ 紈素 【名】 絹地の扇面をいふ。

くわんそう 盥漱 【名】 手を洗ひ口をすゝぐこと。

くわんたい 管帶 【名】 清國海軍人の官名。艦隊司令副官の如きもの。

くわんたい 桓魋 【名】 宋の司馬向魋なり。桓公よりいでし故にかくいふ。嘗て、孔子を殺さんとしたる人。

くわんたいのくに、へんじて、さじんとなる 冠帶變じて左衽となる 【文】 衣冠束帶の正しき風俗が、左衽の蠻風となるをいふなり。

くわんちう 管仲 【名】 支那戰國の齊の相、初め士官(刑官)に囚はれしが、桓公にあげられて相となり、遂に諸侯を糾合して、桓公をして霸業を成さしむ。管子二十卷の著あり。

ぐわんちうよう 阮仲容 【名】 阮咸を見よ。

くわんちやう 灌頂 【名】 佛道にて香水を頂に灑く儀式にして、始めて受戒する時にも、また、修道の上進するときにもあることなり。其の初めて受戒のときにするものを、結緣(ケチエン)の灌頂といへり。

くわんちやうのたき 灌頂の瀧 【名】 阿波國勝浦郡高鉾村の藤川山にあり。高さ四十八丈幅九尺。一名を御來迎(ゴライガウ)の瀧ともいへり。

くわんとう 關東 【名】 古くは、近江國逢坂關より東を關東

といひ、足柄坂より以東を坂東といひしが、後には箱根の關より東を關東と稱するに至れり。すなはち、關東八州とは、武藏、相摸、安房、上總、下總、常陸、上野、下野をいふ。

くわんとのしつ　環堵の室【句】狹き家。堵は、字書に「垣也、一丈爲レ板、五板爲レ堵」とあり。韓詩外傳に「原憲居二環堵之室一、茨以二蓬蒿一」。

くわんねん　觀念【名】佛語。一心餘事を思はず、悟道を念ずるをいふ。史記に「谷しげければ、西は晴れたり。觀念のたより無きにしもあらず」とあるは、佛說に、西方に淨土ありて、阿彌陀佛ありといふによりて、西の方の晴れたるは、佛道修行の便宜なきにあらずとの意なり。

くわんのんぎやう　觀音經【名】法華經の八の卷なる觀音菩薩普門品第二十五の一ㇺを分けて、觀音經といふなり。

くわんぱうのまじはり　管鮑の交【句】朋友の情誼の厚きをいふ。史記「管仲、少時與二鮑叔牙一游。鮑叔終善遇レ之。管仲曰、生レ我者父母。知レ我者鮑子也。鮑叔既進、管仲以レ身下レ之。天下多二管仲之賢一而少二鮑叔之知レ人」とあるよりいふ。

くわんばく　關白【名】せっくわんを見よ。

くわんぷ　官符【名】太政官より發する下文をいふ。

くわんぶつゑ　灌佛會【名】陰曆四月八日釋迦佛誕生の日にその像に香水を注ぐ佛會なり。佛生會ともいふ。ここは、佛の生れたる時に、天龍下りて水を灌ぎたりといふに起る。わが國にては、推古天皇の時より始まるといへり。

くわんぺいのまつりごと　寬平の政【句】宇多天皇の御政治。寬平は時の年號なり。

くわんぺき　完璧【名】きず無き玉をいふ。すべて、完全したるものにいふ。文章の疵なきを、完璧など、ほめていふ。

くわんべん　冠冕【名】冠と冕と。又、これは人君の著するものの意より。首領の義に用ふ。往昉の書「晉中興以來、六世名德、爲二海內冠冕一」。

くわんまう　灌莽【名】草の深く茂れるをいふ。

くわんまん　緩慢【名】ゆるやかなること。ゆつくりしたること。手ぬるきこと。書經の疏に「寬弘者失二於緩慢一」。

くわんむりやうじゆきやう　觀無量壽經【名】また、單に、觀經ともいふ。佛典。無量壽は、即阿彌陀の本義なり。觀經に、阿彌陀の眞相を說きて「光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」といへり。仍して、其衆生を攝取する慈悲の心の開け出でたる姿を、觀音菩薩といふとぞ。

くわんもん　貫文【名】中古に、分錢の法さて、永樂錢を以て知行高を稱したりき。すなはち、一貫文の地は、凡そ十石に當れり。

くわんよう　寬容【名】心ひろくして人を容るること。ゆるやかなる容貌。

くわんろく　觀勒【名】推古天皇の十年、曆本を持して來朝したる百濟の僧。

くわんをおほひて、ことさだまる　蓋棺事定【文】死して後に至りて、始めて、其の人物事業の善惡の定まるをいふ。生前中に人物を判定することの難きにいふ。晉書「丈夫蓋レ棺事方定」。

くわらん　和鸞【名】鈴。馬車につくるもの。樂器に用ふるもの。荀子「和鸞之聲」。

くわりう　花柳【名】遊女。又、狹斜の巷。李白の詩「昔在二長安一醉二花柳一」。

くわりんせん　火輪船【名】蒸氣船。

ぐわりやう　臥龍【名】臥したる龍の義にて、起てば必ず爲す所あるをいひ、有爲の人物の、時を得ずして野に在るに譬ふ。蜀志「諸葛孔明臥龍也」。

ぐわりようてんせい　畫龍點睛【句】事を行うて、完全に爲しとぐるをいふ。龍を畫きて最後に緊要の眼を入るることを忘れざるをいふ。水衡記「張僧繇于二金陵安樂寺一畫二四龍于壁一、不レ點レ睛。每曰、點レ之即飛去。人以爲レ誕。因點二其一須一。果電破レ壁、一龍乘レ雲上レ天」と。

くわれう　過料【名】罪科の償として出す金。罰金に同じ。

くわろ　蝸廬【名】小さき家を、蝸虫の殼に譬へていふ。魏志「結二草廬於河間一、號二蝸牛廬一」。

げ

け 食、饌 【名】 食物をいふ。御饌（みけ）。朝食（あさげ）、夕食（ゆふげ）など。

け 笥 【名】 食物をいるゝ器。萬葉集「家にあれば、笥に盛る飯を云々」。檜笥（くわひ）、麻笥（をけ）の笥、皆同じ。

げ 偈 【名】 梵語、カタの轉化。頌の義に當れり。佛家にて、讃美に用ふる一種の詩。「正信偈（シャウシンゲ）」など。

けい 警 【名】 警蹕に同じ。貴人通行の時の先拂ひをいふ。

けい 刑 【名】 犯罪人に科する刑罰。法律上の制裁。「刑措不レ用三十餘年」。わが古代には、笞、杖、徒、流、死の五種あり。今は、懲役、徒刑、絞罪、禁錮、禁獄、及、罰金、監藏等なり。

けい 經 【名】 經書の略。けいぎ參照。

けい 系 【名】 血族、連絡、一屬、一團、或は、棲所を同じくするものにいふ。「系統」。「系圖」。「山系」。

けい 型 【名】 いがた。かた。摸型。紙型。「鑄型（イガタ）に入れて燒く」など。

けいあん 慶安 【名】 奉公人などの日入れをするもの。雇人請宿ともいふ。もと、大和慶安といふ人の始めしより、普通名詞となる。

けいいん 京尹 【名】 京兆尹の略。京都所司代と、支那の京兆尹と、職掌の似たるより、所司代の唐名として用ふ。

けいうんりん 倪雲林 【名】 元の倪讃の號。字は元鎮、博學にして好古の癖あり。詩、および、畫に巧みなり。

けいえい 經營 【名】 物を度りて營み作るをいふ。詩經に「經ニ始靈臺一、經レ之營レ之」。又、たゞ營み作る意にいふ。又、をさめ、いとなむ意にも用ふ。「經ニ營四方一」。けいめいを見よ。

けいか 荊軻 【名】 人の名。衛の人、讀書擊劍を好めり。燕の太子丹の爲に、秦に使して秦王を刺さむとして果さず、遂に秦の宮殿中に殺さる。軻營て、燕に在りて、善く筑を擊つもの高漸離を愛し、共に酒を飲みては筑を擊たしめて放歌す。軻死して後、高漸離は姓名を變じ、筑を匣中に藏して、人のために庸（やと）はる。一日、主の爲に、始めて筑を擊ち、其の技、遂に秦の始皇に聞えて召見せらる。すなはち、近く進みて筑を擧げて秦皇を擊つ。中らずして、遂に誅せらる。

けいがい 磬咳 【名】 咳は、せき、しはぶきのこと。「接ニ磬咳一」は、其の人に接して、談話を聽きたること、又、たゞ、接したることなどに、敬ひていふ。

けいがん 啓龕 【名】 龕は、塔下の室にて廚子（ずし）の類。開扉、また、開帳などいふに同じ。

けいぎ 經義 【名】 經書の意義。經書とは、支那古聖人の人道を說ける書にして、四書五經の類をいふ。

けいきよく 荊棘 【名】 いばら。又、いばらの茂りたる地。又困難なる場合。こみ入りたる事がら。

けいくわつ 契闊 【名】 遠く隔る義。久しく相見ず消息せぬこと。詩經「死生契闊與レ子成レ說」。

けいくわん 挂冠 【名】 官を辭すること。後漢書「解レ冠挂ニ東都城門一。將ニ家屬一浮レ海客ニ於遼東一」。

けいけい 耿耿 【副、形】 心に思ひつゞけて忘れざるをいふ。詩經「耿耿不レ寐」。また、星のきらきらしきを光るをもいふ。

げいげい 鯨鯢 【名】 大魚にて、小魚を呑み食ふより、首惡、巨魁などにたとへいふ。左傳「古者明王伐ニ不敬一、取ニ其鯨鯢一而封レ之」。鯨は、をぐぢら、鯢はめぐぢら。

けいけん 經驗 【名】 觀察、又、實地の經歷試驗に依りて、事物の性質を明にするをいふ。ためし。又、俗に、おぼえ。

けいこ 稽古 【名】 古を稽（かんが）ふる意にて、古今の治亂興廢の理を辨へ知ること。「稽古の君にましませり」。又、學問などすることをもいふ。書經「稽ニ古堯典一」。又、練習の意にも用ふ。

けいこうとなるとも、ぎうごとなるなかれ 雞口と爲るとも牛後と爲ること勿れ 【文】 假令、小なる者の頭（かしら）となるとも、大なる者なりとも、他の後にはつくなの意。史記の蘇秦傳に「蘇秦說ニ韓宣惠王一曰、臣聞諺語曰、寧爲ニ雞口一無爲ニ牛後一、今西面交レ臂而臣ニ事秦一、何異ニ牛後一乎。夫

以ニ大王之賢一、挾ニ強韓之兵一、而有ニ牛後之名一、臣竊爲ニ大王一羞レ之」。

けいざいがく 經濟學 【名】 理財學に同じ。一國一家の財政を賑ぶる爲に、金銀の用法等に就きて、研究する學。

けいし 屐子 【名】 昔に行はれし足駄。枕草紙「高きけいしなどへはきたれば、ゆゆしく高し」。

けいしう、すでにすぐ、ばんぢようのやま 輕舟已過萬重山 【文】 唐詩選に「朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不レ住。輕舟已過萬重山」。李白の詩なり。

けいじやう 形而上 【名】 無形の者をさす。形而上學など用ふ。易經「形而上者謂ニ之道一。形而下者謂ニ之器一」。

けいしやう うんがく 卿相雲客 【名】 貞丈雜記に「公卿、また、卿相ともいふなり。また、月卿ともいふ。殿上人をば雲客ともいふなり」。また、故實拾要に「公卿を月卿といふは、三位以上を月に譬へ、殿上人を雲客といふは、雲は譬へていふよし見えたり。

けいしゆ 稽首 【名】 ぬかづく。周禮九拜の條「稽首」の注に「拜頭至ニ地也一」とあり。

けいしゆくや 嵇叔夜 【名】 晉の人。竹林七賢の一にて、名を康といふ。性遺遇不羣にして、魏の宗室と婚し、中散大夫と爲る。

けいしよ 經書【名】けいぎを見よ。

けいしょう 敬稱【名】他人を敬ひていふ稱。例せば、「陛下」は君に對する敬稱、「學兄」「貴君」などは、同輩に對する敬稱。

けいせき 景迹【名】推察さいふほどの意。「一事を申さば、餘の事は御景迹あるべし」など。

けいせつのこう 螢雪の功【句】勤勉勞苦をつみて、學業を成すをいふ。「螢雪の功をつみ、錦を衣て鄉に歸る」など。晉の車胤孫康の故事に出づ。晉書「車胤字武子、幼恭勤博覽、貧不二常得一レ油、夏月以二練囊一盛二數十螢火一照レ書讀レ之、以レ夜繼レ日。後官至二尚書郎一」。「孫康少清介、交游不レ雜、家貧無レ油、嘗映レ雪讀レ書。後官至二御史大夫一」。

けいだつ 閨闥【名】宮中の小門。

けいちやう 傾聽【名】耳を傾けて、一心に聽くこと。

けいちう 契冲【名】人の名。俗姓は下川。幼にして僧となり、空心さいへり、後に難波の東、高津に、圓珠院を結びて居る。古學の復興に勤め、水戸光圀に知られ、萬葉代匠記を著して進る。元祿十四年正月歿す。年六十二。

けいてい 逕庭、徑庭【名】遠隔せる貌。相去ることの遠きをいふ。カケハナレ、カケタガヒなどの意、莊子「太有二逕庭一不レ近二人情一」。

けいてい、かきにせめぐ 兄弟鬩レ墻【文】「兄弟鬩墻、外禦二其侮一」と詩經に見ゆ。內はもめはしても、外の侮りに遭へば、力を協せて禦ぐ意。

けいてうのいん 京兆尹【名】官名。前漢の時初めて置かる。京師の守護職にして、わが德川時代の所司代の如きもの。

けいでん 圭田【名】圭は潔なり。其の收穫を以て、祭祀に奉する爲めの田をいふ。孟子に「卿以下必有二圭田一、圭田五十畝」。

けいど 經度【名】ねどを見よ。

けいどうばん 溪洞蠻【名】支那南方の蠻夷の名、峒丁なり。

けいどく 煢獨【名】困窮して、たよりなき獨身者。（煢は困悴せるをいひ、獨は孤獨をいふ）。孟子「哿矣富人、哀此煢獨（イナカ シノ）」。

げいは 鯢波【名】ときのこゑ。鯢は雌くぢら。海底に出入する時、汐、盛に鳴りて、大に水聲あり。事苑に曰く、「常以五月二就レ岸生二數萬子一、至二八月一引レ子還レ海。鼓波成レ雷、噴水成レ雨云々」。よりて、之を軍勢の聲にたとふるなり。

けいはく 輕薄【名】輕跳浮薄の義。人情の薄きをいふ。

けいはつ 啓發【名】教導開發の意。されば、師の恩を「啓發の恩」ともいへり。論語「不レ憤不レ啓。不レ悱不レ發」。

けいはふ 刑法【名】犯罪、及刑罰に關せる法律。

けいび 警備【名】あらかじめ警戒して、變事に備ふるをいふ。

けいぶん 奎文【名】文章のこと。奎は、二十八宿の一にて、文章を掌る星の名なればいふ。援神經「奎主二文章一」。

けいぼ 敬慕【名】うやまひしたふこと。えらいとおもひて慕ふこと。

けいめい 經營【名】仕度、準備、用意、仕事など、すべて設け營むにいふ。めいは、營の字音の轉。

けいめい 警衛【名】貴人の通行に御供して非常に備ふるをいへり。めいは衛の字音の轉。

けいりん 經綸【名】國家を治め整ふるをいふ。易經「君子以經綸」。

げいりん 藝林【名】學藝に秀でたるものの社會。學藝社會。魏書「屬二意藝林一」。

けいりんはちだう 鷄林八道【句】雞林は、もと新羅を謂ひしより起りて、今は朝鮮全體を指すに至れり。東國通鑑「新羅脫解王九年春三月、王夜聞二金城西始林間有二鷄聲一、遲明遣二瓠公一視レ之、有二金色小櫝一、掛二樹枝一、白鷄鳴二於下一。開レ之有二小男兒一在二其中一。（中畧）有二雞怪一、改二始林一名二雞林一。因以爲二國號一」とあり、八道は、江原、慶尙、平安、黃海、京畿、忠淸、全羅の八道なり。

けいるゐ 係累【名】繫累の義。孟子「係二累其子弟一」て後世妻子眷屬の煩の意に用ふ。ほだし。

けいれん 痙攣【名】病狀にいふ語。筋のひきつること。

けいろく 雞肋【名】さして有用にはあらねど、また棄つるは惜しさの義。後漢書楊修傳に「操平二漢中一、欲レ還討二劉備一、而不レ得レ進。欲レ守レ之、又難レ爲レ功。操出レ教唯曰二雞肋一而已。外曹莫二能曉一。修獨曰、夫雞肋食レ之則無レ所レ得。棄レ之則如レ可レ惜。公歸計決矣。操於レ此廼レ師」とあり。

けいゐ 經緯【名】經は織物のたて絲、緯は橫絲にて、相錯綜して文をなす。たてぬき。左傳「禮、上下之紀、天地之經緯也」。

けいゑんいつし 桂園一枝【名】書名。香川景樹の家集なり。纏歌學全書に收めたり。

けいをおふ 荊を負ふ【句】荊は木の枝にて、笞となすべきもの。されば、罪を負ふ者にいへり。「廉頗荊を負ひ、肉相如の家に至る」など

けう 轎【名】かご。韻會に「竹輿也」とあり。

けう 稀有【名】まれにあることをいふこと。めづらしきこと。「稀有のことなり」など。「稀有に」は、副詞。

けうあく 梟惡【名】殘忍酷惡なるをいふ。

けうあん 教案 【名】箇々の教材を、教授時間の全體に配當し、以て諸學科の教授目的を達せむがために、纏め、定めたる、教授の順序方法を記載せるもの、即ち、教授の草案。

げうき 澆季 【名】澆は薄なり。人情の薄き季の世の意。道德の衰へたる末世の義。任妨の序「宋末艱虞百王澆季（ナリ）」。

けうきよ 僑居 【名】寄留してをること。旅宿にをること。一時の假住居。魏書「既是崇近、何緣復僑ニ居趙郡一」。

けうくわんぢごく 叫喚地獄 【名】佛說に八熱地獄といふあり。等活、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無限をいふ。叫喚、大叫喚の地獄に陷りたるものは、うめきさけぶさいへり。ぐれん參照。

けうしゆ 梟首 【名】首を木上に懸くること。わが國の武家時代に、獄門にさらすさいひしものこれなり。史記「皆梟首」。

げうそ 翹楚 【名】すぐれもの。楚は雜薪中の尤も翹々としてすぐれたるものなり。よりて、衆人に卓出せる者の稱とす。詩經に「翹翹錯新（タル）。言刈ニ其楚一」。とあるに出づ。

げうちやう 曉暢 【名】物事に通達するをいふ。

げうのこの、げうならぬやうに 堯の子の、堯ならぬ樣に 【句】堯の子丹朱、愚にして父に肖す。故に此の句あるなり。

けうめい 僑命 【名】墻は詐なり、託なり。かこつけいふこと。「神の命を矯む」といふはいつはりて、神にかこつけていふ意。

げうめい 驍名 【名】驍勇の名聲なり。勇武なりとの聞（キコエ）。

けうやう 孝養 【名】孝行さいふに同じ。父母に能く事ふるをいふ。たゞし、父母の生存中のみならず、其の死後をよく吊ふをもいひ、轉じては、他人の後生を追善するをもいへり。平家物語「たゞ、我を、都のうちにて、住みはてさせよ。其れは、今生後生のけうやうにてあらむずるぞ」。同書の熊谷が平敦盛を討つところ「直實が手にかけ奉りて、後の御孝養をも仕り候はむ」。

げき 外記 【名】太政官の官にて、詔書、奏文を勘造し、記錄を掌る職。大少あり。

げきしゆ 鷁首 【名】淮南子「龍頭鷁首」の注に「鷁大鳥也。畫二其象一著二船頭一。故曰二鷁首一」とありて、よく風に堪ふる鳥なりとて、船の首につく。「龍頭鷁首の船」などいふ。

げきぜつ 缺舌 【名】百舌鳥の囀る義。もずは惡聲なる故、言語澁滯するにいふ。また、外國の言葉を賤しめていふ語。「南蠻缺舌」など。

げきたん 激湍 【名】急流をいふ。水の岩などに激する處。

げきぢやう 劇場 【名】芝居に同じ。演劇の場所なり。

げきりん 逆鱗 【名】支那にて、天子を龍にたとへて、龍顏

などいふ語もありて、天子の怒を逆鱗ともいふなり。龍の喉の下に、逆に生じたる鱗ありて、これに觸るれば怒るといへる傳說あるによれり。

げきりよ 逆旅 【名】旅舍をいふ。逆は迎也とありて、旅人を迎ふる意。莊子「陽子之ノ宋、宿ニ於逆旅一」。

けけれなく 心無く 【副】東國にて、心をけけれさいひしよしにて、古今集に甲斐歌さて「甲斐が嶺を、さやにも見しが、けけれなく、横ほりふせる、佐夜の中山」さいふ歌を載せたり。甲斐の山を、はつきりと見たいさ思ふに、其の中間に、佐夜の中山が横たはり伏して居て、見ることが出來ぬ。さてさて、中山は、心無き山よさの意なり。

けさ 袈裟 【名】梵語。迦羅沙曳の略にして、僧服のこと。

けし 罌粟 【名】草の名。秋、種を下す、夏に至りて美しき花を開き、實を結ぶ。其の外包、小兒の髮の中央に、輪の如くに、毛を殘したるに似たり。けしばうずの名も、これより起れり。實は粟に似たり。醉劑の原料とす。

けしう 異しう、怪しう 【副】異しくの音便にて、普通に異りたること。あやしく。不都合に。

けしき 氣色 【名】けはひ、ありさま。また、顏色、風景などにいふ。

けしん 化身 【名】佛典の語。形をかへて、假に生れたるもの。生れがはり。「釋迦の化身」など。

けしよう 顯證 【名】字音の音略なり。あらはなること。まばゆきこと。

げじよう 下乘 【名】乘打を禁ずること。車馬などの、乘物のままにて入るを禁じたるところにて下ること。神社の境前に「皇族下乘」など建てたり。

げだつどうさうのはふい 解脫幢相の法衣 【句】解脫は、世の俗念を脫して知見を得る法衣。幢相は無垢衣、蓮華衣とも稱して、俗慾の塵に染まぬ意にていふ法衣。佛家の語。

げぢ 下知 【名】命令、指揮などいふ意。令ニ下知一の義。

けちえんに 揭焉に 【副】いちじるしく。いやちこに。靈驗あらたかにさはやかに。

けつ 碣 【名】はかのいしを見よ。

けつえき 闕腋 【名】けつてきと訓む。袍の一種。中古の武官の服。腋のあきたるものなり。

けつえん 揭焉 【副】高くあがる貌。文選「揭焉以嶷々」。猶、けちえんにを見よ。

けつえん 結緣 【名】けちえんとも訓む。佛典の語にて、未來に、同樓することを得るため、佛と緣を結ぶこと。

けつき 血氣 【名】少年の時などの、盛なる氣をいふ。はやり氣なり。客氣に同じ。論語「若時血氣未ニ定一」。

げつぎう 月宮 【名】月界にある宮殿なり。唐の玄宗皇帝、ある夜、夢中に月界に遊び、天人の音樂を聞きて、みづから、霓裳羽衣の曲を作れりといひ傳ふ。

けつきよ 拮据 【名】字書に「口足爲レ事曰二拮据一」とあり。て、能く働くをいふ。「拮据黽勉」など。

げつくわもん 月華門 【名】内裡のうちの一門にして、紫宸殿の西面の門なり。右近衛の陣といふ。

けつくわん 闕官 【名】缺けたる官。あきたる司。

けつけつ 子子 【副、形】單獨、孤獨の貌。闕尹子「其所謂聖人之道、胡子子然爾云々」。

けつさい 潔齋 【名】ものいみ。齋戒といふに同じく、神佛など祭る時に、身心を清め、飲食を愼みて、穢に觸るるを忌むこと。「精進潔齋」など。

げつし 孽子 【名】正腹の子ならぬ者、即、庶子をいふ。孟子に「獨孤臣孽子、其操心也危、其慮患也深。故達」とあり。孤臣は遠臣なり。

けつじん 劂人 【名】彫刻する人。版木師。

けつじよう 結繩 【名】上古文字未だあらざりし時代に、繩を結びてシルシとせり。「結繩之政」。

けつしよ 闕所 【名】武家時代に、犯罪人に施したる附加刑にて、其の田畝、宅地、家財、土地を没收するをいふ。

けつしよく 血食 【名】支那にて神を祭ること。先祖の祭。祭りには、生血ある牲牢をすすむる故にいふ。國語「求下殘二我社稷宗廟一以爲二平原、弗レ使二血食一」。

けつしよく 月蝕 【名】地球の、日光を遮蔽するより生ずる月面の現象にして、其の蝕痕は、即、地球の陰翳なり。

げつぜつ 缺舌 【名】げきつぜを見よ。

けつぜん 子然 【副、形】孑孑、子子然に同じ。孤立の貌。

けつたい 結體 【名】文字のくみたてなどをいふ。

げつたん 月旦 【名】月の朔日なり。また、人物を品評する義に用ふ。後漢書許邵傳に「初、邵、與二從兄靖一俱有二高名一。共覈二論鄉黨人物一、毎月輒更二其品題一。故汝南俗有二月旦評一焉」。

けつだんじよ 決斷所 【名】昔德川幕府の時に、訴訟を決斷する所。京都の二條城内にあり。

けつろ 血路 【名】敵に圍まれたるとき、一方の逃道を切り開く其の逃道をいふ。

げてん 外典 【名】ないてんを見よ。

けなげに 健氣に 【副】尋常に異りて、かひがひしきをいふ。神妙に、殊勝に、などの意にもいへり。

けにくし 氣憎 【形】憎き狀をいふ。

げにげにし 實にし 【形】うべうべし。誠らし。

けにん 家人 【名】其家に隷從して仕ふるもの。家來。

けねん 懸念 【名】心配。きがかり。關心。動詞として用ふるときには、左行變格に活かす。

けのあらもの 毛麤物 【名】毛のこはく大なる獸。毛の柔かく小なる獸を毛柔物といふ。

けのにごもの 毛柔物 【名】前條を見よ。

けはひ 氣色 【名】然見ゆるきざしをいふ。樣子、けしき、そぶり、などの意。

けひやさぶらうたいふ 氣比彌三郎大夫 【名】名は氏治。氣比神社の大宮司なり。尊良親王に、金崎城に殉ず。

けびのやしろ 氣比社 【名】氣比神社は、越前國敦賀郡敦賀町にあり。伊奢沙別命、日本武命、帶中津彦命、息長帶姫命、譽田別命、尊姫命、武内宿禰の七神を祀る。現今官幣大社たり。

けびるし 撿非違使 【名】非違非法を檢斷する廳なり。はじめ。嵯峨帝、衛門尉をして檢非違使を兼ねしむ。もと、非違を檢斷するは、彈正臺の職なり。然るに、淳和帝の天長中に一局となし、別當、佐、尉、志の四部官をおく。後には、衛府の職たりし追捕、彈正臺の任たりし糺彈、刑部省の裁斷、京職の訴訟まで、悉く此の使廳の手に歸して、權勢甚盛ひたり。

けふかく 脅嚇 【名】おどすこと。おびやかすこと。

けふかく 俠客 【名】俠士ともいふ。男だてともいふも同じ。

けふこずば、あすはゆきぞ、ふりなまし 今日來ずば明日は雪こそ降りなまし 【文】古今集に業平の歌「今日こずば、明日は雪こそ、ふりなまし、消えずはありとも、花と見ましや」。

けふじやう 夾城 【名】通鑑綱目に曰く、「於二路州城下一更築二長城一、内以防二奔突一、外以拒二援兵一。謂二之夾塞一、堅而守レ之」。城郭の外圍に、更に城を築くをいふ。

けふのいくひのたりひに 今日の生日の足日に 【副】今日の結構なる日。生日は良き日の義、足日も、不足なき日の義にて、日を褒めていふ語。祝詞式「八十日波在禮登毛、今日能生日能足日爾」。

げべん 外辨 【名】朝廷にて、即位、其の他、節會などに、主として事を執るものを内辨といひ、内辨を輔けて事を執るものを外辨といふ。承明門によりて、内外を分つ。

げん 愿 【名】謹直なるをいふ。

げんいうゐん 嚴有院 【名】德川四代將軍家綱の諡號。

けんが 犬牙 【名】犬の齒をいふ。

けんがあひせいす 犬牙相制 【文】境土交錯せること犬牙の如くにて、正しく相當らず、互に控制するをいふ。史記孝文紀に「高帝封二王子弟一地犬牙相制」。

けんかい 狷介 【名】節を固く執りて、聊も不義の行をなす

こなく、人を容るゝ心の狹きをいふ。

けんかう 健嚢 【名】 武器を袋に入れて、收めて用ひざること。又、武器を收むるものをもいふ。禮記「名レ之曰二健嚢一」。

けんかう 乾綱 【名】 政治の大權をいふ。天綱ともいふ。「中古乾綱紐を解く」は、中世、武家の手に政權の歸して、大權弛廢せるをいふなり。

けんかう 權衡 【名】 權は、秤の錘なり。衡は秤の竿なり。合せて秤(ハカリ)の事とす。又、秤は、平均によりて目方を知るもの故、平均、釣あひの義に用ふ。

げんかうしやくしよ 元亨釋書 【名】 書物の名。三十卷。推古天皇以來七百餘年間の、佛道に關したる事を悉く記せり。東福寺虎關和尚の作。

げんかうは、くんしのすうき 言行者君子之樞機 【文】 易の繫辭傳の文。樞は戶のくるゝにて、戶の開閉これによる。機は、弩のひきがねなり。弩の張弛これによる。故に事の要を樞機といふ。

けんかく 研覈 【名】 研究して明かにすること。文選「溫レ故知レ新、研二覈是非一」。

けんがのべん 懸河の辯 【句】 辯舌の爽なること、水の流るゝ如きなり。雄辨をいふ。晉書「大尉王衍曰、聽二郭象語一、如二懸レ河瀉一レ水而不レ竭」。

げんかん 阮咸 【名】 人名。字は仲容。竹林の七賢の一人なり。性酒を好み家甚だ貧し。舊俗、七月七日に曝衣の習あり。咸が親族、皆富みしかば錦衣を曝せるに、咸獨り長竿を庭中に立て犢鼻褌を曝して、我未だ俗を脫すること能はずと曰へり。

けんきやう 牽强 【名】 强ひてひきつくるをいふ。俗にコジツケルといふ。常に「牽强附會」と連用して用ひらる。

けんぎ 權宜 【名】 計のよろしきなり。權は權謀の權なり。

けんきよく 建極 【名】 國家をはじむること。書經の洪範に「皇建二其有極一」とある疏に、「人君爲二民之主一、大自立、其有二中之道一」と見えたり。

げんぎよは、くんしのすうき 言語は君子の樞機 【文】 げんかうはくんしのすうきを見よ。

けんくわい 喧喙 【名】 さわがしき。かまびすしき貌。

けんくわしよくぶつ 顯花植物 【名】 雌雄兩蕊、又は、その一つを有する花開き、種子を生ずる植物を總べていふ。是に反して、花を持たず、胞子を生ずるを隱花植物といふ。

けんくわい 嶮晦 【名】 嶮くして暗きをいふ。文の主旨などの解しにくきを、「嶮晦の文」などいふ。

げんくわん 玄關 【名】 玄妙の域に入る門。この意より、禪家の門口をいふ。今は、普通の家にもいふ。頭陀寺碑文「玄關幽感而迭通」。

けんげう 檢校 【名】 盲人の官名。總て、盲人にして、琵琶管絃の歌曲、及鍼治、按摩等を業とする者に賜ひし官名なり。檢校(法師に準ず)、勾當(法眼法橋に準ず)、座頭、衆分等に分ち、更に、其上を總ぶるに總檢校、總錄といふものありき。

けんけん 拳拳 【名、副】 忠勤をはげむ貌。忠直なる貌。その事を、一心に心にかくること。司馬遷の書、「拳拳之忠」。

けんけん 眷眷 【名、副】 かへりみる貌。あはれと目をかくること。史記「綈袍眷眷故人之情」。

けんけん 蹇蹇 【副】 足の步行出來ざる貌。物事に難み苦しむ貌。

けんげん 建言 【名】 意見を上に對して云ふこと。建白に同じ。

けんけん 涓涓 【副、形】 水の流るゝ貌。孔子家語「涓涓不レ塞、爲レ江爲レ河。」

げんげん 元元 【名】 黎元と同じく、庶民をいふ。元は、もと、善人の義。元元は、一々といふが如く、衆多なるをいふ。戰國策「制二海內一子二元元一」。

げんこう 元后 【名】(元は大の義。后は、古、君と通じ用ひたり)。大君の意にて、天子をいふ。書經に「汝終陟二元后一」と見えたり。

けんさ 賢佐 【名】 賢明なる輔佐の臣をいふ。

けんさい 歉歲 【名】 凶年。穀物の實らざる歲をいふ。

げんざうさんざう 玄奘三藏 【名】 玄奘は、唐代の僧。印度に入り、十三年を經て、貞觀七年歸唐す。太宗勅して、弘福寺に佛經を翻譯せしむ。三藏とは、經、論、律に通ぜる人の稱。

けんさん 研鑽 【名】 研磨といふに同じ。研究すること。

けんざん 驗算 【名】 算術にて、運算をなし得たる結果の正否をためす法。

けんざんのいた 見參の板 【名】 鳴板ともいふ。淸涼殿にあり。板一枚を釘付にせずして、人の踏むに當りて音あらしめ、昇殿の時に、人に知らしむる爲のものなり。禁秘抄弘廂の條「北有二荒海障子一。南方手長足長、北面障子、綱代屛繪也。二間與二上御局一之際、昆明池障子(アリ)云々。南の切妻有二鳴板一、號二見參板一」。

げんざんみ 源三位 【名】 源賴政をいふ。

けんざんやき 乾山燒 【名】 ながたけんざんを見よ。

げんし 玄旨 【名】 細川藤孝の法名なり。

げんし 元子 【名】 皇太子をいふ。また、天子の御子を、廣くいふこともあり。書經「王雖レ小元子哉」。

げんしかうろく 言志行錄 【名】 書名。四卷あり。佐藤一齋の語を錄せるもの。

げんじさん 元次山 【名】 支那武昌の人。名は結。唐の道州

の刺史となり、惠政あり。民、石を立てて頌す。卒して禮部侍郎を贈らる。

げんしじだい　原始時代【名】人類の、始めて地球上に現出せし時代をいふ。

げんじのたいしやうのすまのうら　源氏の大將の須磨の浦【句】源氏の大將は、源氏物語の主人公たる光源氏の君なり。故ありて須磨に流され給ひ、そこにて、夢に、父桐壺帝に遇ひ奉れるよしは、源氏物語明石の卷に「心にもあらずうちまどろみ給ふ。かたじけなき御座所なれば、ただより居給へるに、故院、唯おはしましさながら立ち給ひて、など、かくあしき處にはものするぞとて、御手をとりて引き立て給ふ。住吉の神の導き給ふままに、はや船出して、この浦をさりぬとの給はす云々」と見えたり。

げんじものがたり　源氏物語【名】書名。全篇五十四帖あり。桐壺帝の皇子源氏の君といふを主人公として、其の生涯を寫し出したる小說なり。ただし其のうち、後の十帖は、宇治十帖と稱し、源氏の息なる薫大將の事に係れり。作者は紫式部。

けんしやう　勸賞【名】功を賞して官など授くるをいふ。

げんしやうだう　顯章堂【名】はつしやうねんのじふにだうを見よ。

けんせき　阮籍【名】人名。竹林七賢の一人。心に適ほざる友あれば、白眼を以て迎へ、心に適へる友あれば、青眼を以て見し人。晉書「阮籍字嗣宗。不レ拘二禮敎一、能爲二青白之眼一。對レ之。及二嵇喜來弔一、籍爲二白眼一。喜不レ懌而退。喜弟康聞レ之、乃齎レ酒挾レ琴造焉。籍大悅、乃見二青眼一也」とあり。

けんせき　賢哲【名】賢聖の障子【名】紫宸殿に立てたる障子、支那の聖賢の像を、一間に四人づつ三十二人畫けり。北の方に南向に立つ。

けんしゆ　黔首【名】人民をいふ。史紀始皇本紀に「分二天下一、以爲二三十六郡一、郡置二守尉監一、更名レ民曰二黔首一」。說文に「黔、黎也。秦謂レ民爲二黔首一。謂二黑色一也。周謂二之黎民一。一說、黑巾蒙レ首。故謂二黔首一」とあり。

げんしゆ　元首【名】君をいふ。人の身體に於ける、頭首の如きに譬へてなり。書經「元首明哉。股肱良哉。庶事康哉」。

けんせい　牽制【名】引きつけて、自由にせしめぬこと。

げんせい　元政【名】深草元政をいふ。俗名石井源八郎、妙子、不可思議、また、草山と號す。剃髮して、元政上人といふ。寛文八年寂す。年四十六。深草の瑞光寺に葬る。

げんせき　言責【名】言語に、責任を有すること。孟子「有二言責一者。不レ得二其言一則去」とあるは、諫官の職に在る如きもの。又、「言責なし」は、言ひしことを實行せざるにいふ。

けんぜん　泫然【名】淚のはら〳〵と落つること。

けんぞく　眷族【名】六等親以外の同族。また、僕婢などをもいふ。

げんだ　龜鼉【名】龜の、甚だ大きなるもの。「龜鼉蛟龍」などと熟用す。

けんたい　獻替【名】可を進め、否を廢つる義。世說「陶公疾篤、都無二獻替之言一」。

げんたう　現當【名】佛典の語。現在と當來との義。この世及び、あの世。

けんたん　健啖【名】大食するをいふ。爾雅の注「健二啖細魚一」。

けんちう　絹紬【名】織物の名。ふとおりといふに類したるものにて、支那より舶來したるもの。天鵞糸にておれり。

けんちやう　儉仗【名】古の官名。太宰府、鎭守府等の判官。

げんちゆうよう　阮仲容【名】げんなんを見よ。

けんてき　涓滴【名】しづく。水の小滴。水のしたたり。

けんせきがあをきまなこ　阮籍が青き眼【句】げんせきを見よ。

げんぜん　儼然【名】嚴儀莊嚴なる貌。論語「望之儼然」。

げんぜん　泫然【名】淚のはら〳〵と落つること。

けんぞく　眷族【名】六等親以外の同族。また、僕婢などをもいふ。

げんだ　龜鼉【名】龜の、甚だ大きなるもの。「龜鼉蛟龍」などと熟用す。

けんたい　獻替【名】可を進め、否を廢つる義。世說「陶公疾篤、都無二獻替之言一」。

げんたう　現當【名】佛典の語。現在と當來との義。この世及び、あの世。

けんたん　健啖【名】大食するをいふ。爾雅の注「健二啖細魚一」。

けんちう　絹紬【名】織物の名。ふとおりといふに類したるものにて、支那より舶來したるもの。天鵞糸にておれり。

けんちやう　儉仗【名】古の官名。太宰府、鎭守府等の判官。

げんちゆうよう　阮仲容【名】げんなんを見よ。

けんてき　涓滴【名】しづく。水の小滴。水のしたたり。

けんど　權度【名】權は、ハカリ、度は、モノサシ。事の規則正しきことに用ふ。「才學力量、みな其の權度を得」など。

けんど　譴怒【名】しかる。責め怒ること。

げんとう　原頭【名】頭は、ホトリと訓みて、邊といふに同じ。唐詩選の出塞行「白草原頭望二京師一、黃河水流無二盡時一」。

げんとうそせつ　玄冬素雪【句】玄冬は冬、素雪は白雪に同じ。玄は北方をいふ。また黑き色。方位を四季にあつれば、東は春、南は夏、西は秋、北は冬なり。

けんとく　乾德【名】天皇の御德を申す語。

げんとく　玄德【名】蜀の昭烈帝、劉備の字。

げんとどく　源都督【名】太宰權帥源經信をいふ。都督は、權帥の唐名。

けんにんふばつ　堅忍不拔【名】意志堅固にして、物に屈せざるをいふ。

げんば　玄蕃【名】玄蕃寮の屬官。

けんばう　健忘【名】能く物を忘るること。ものわすれすること。司空圖の詩「齒落傷情久、心驚健忘頻」。

けんばくいどうのべん　堅白異同辨【句】堅白とは、堅と白とを離し、異同とは同じき者を異ならしむること。即、牽強附會して、是を非とし、非を是とするなり。莊子に「公孫龍問二魏牟一曰、龍少學二先王之道一、長而明二仁義之行一、合二異同一

離二堅白一、然二不然一、可二不可一、困二百家之知一、窮二衆口之辯一、吾自以爲二至道一也」とあり。また、孟子「公孫龍爲二堅白異同之辨一」。其の論の例をいはんに、堅、白、石、三なりや。不可なり。二なりや。可なり。目の、石を見るに、白きを知るのみ。堅を知らず。故に白石といふ。手の、石にふるる時は、其の堅きを知るのみ。故に堅石といふ。されば、堅と白とは別なりと。

けんばのこころ　犬馬の心【句】臣たる者の、君父に報ぜんと思ふ心。史記「臣竊不レ勝二犬馬心一」。

けんばのよはひ　犬馬の齢【句】自己の年齢を卑下していふ。類書纂要「犬馬齢殘。自言レ老也」。

けんぱふ　憲法【名】國憲の本體、及び、運用を規定せる國家統治上の大法。

けんぱふはつぷ　憲法發布【句】明治二十二年二月十一日、紀元節の日を以て發布せしめ給ふ。その式場は、宮城の正殿にて、そのさま、陛下玉座につかせ給ふや、三條内大臣實美公、憲法發布の詔書を奉り、陛下玉音朗に讀み上げさせ給ひ、次に、伊藤樞密院議長憲法を捧げ、陛下また之を黒田内閣總理大臣に授け給ふ。此の日、伊勢神宮、畝傍山陵、および月輪御陵に勅使あり。また特に、岩倉具視、島津久光、毛利敬親等を始め、維新の功臣の墓にも告げさせ給ひ、且贈位の典ありき。

げんぱれう　玄蕃寮【名】古代の官名。治部省の被管にして、外蕃辭見、讌饗送迎、及僧尼の度牒、佛事の刑政等を掌れり。

けんぶしきもく　建武式目【名】建武三年十一月、故評定衆、少貳、明石、太田、布施等の人々、及、僧の玄惠、是圓等に命じて、十七條の式條を定めしむ。之を建武式目といふ。室町幕府の憲法ともいふべきもの。

げんぶつ　見佛【名】人名。陸前松島の雄島に居りし高僧。鳥羽帝、其の道德の高きをきかせ給ひて、佛像及資器を賜ふ。見佛聖人、見佛ひじりなどいへり。又阿波の鍛工にも同名の人ありき。

げんぺいせいすゐき　源平盛衰記【名】書名。源平二氏の盛衰興亡を述べたるもの。當時の事狀戰況、大に詳なり。文章艶麗にして勇壯、百讀倦むこと無し。著者は葉室大納言時長なりと傳ふれども、いまだ詳ならず。保元物語、平治物語、太平記、平家物語と共に、軍記の五書と稱せらる。

げんぼく　愿朴【名】自然のままにして、飾なきをいふ。質朴素朴などいふに同じ。

げんぼなし　玄圃梨、枳椇【名】喬木の名。山野に多し。葉は互生にして鋸齒あり。實は五叉に分れ、其の上に肉まとひて指の如し。冬の初に熟し味甘く、皮の色梨に似たり。

けんまくげき　肩摩轂擊【句】人の肩と肩とすれあひ、車の轂と轂と打ちあふ意にて、雜沓の有樣をいふ語。史記「臨淄之塗、車轂擊、人肩摩」。轂は、こくを見よ。

けんもん　權門【名】きりもの。臣下の權力ある家。陳琳書に「與二袁紹一書」。

けんよ　權輿【名】物ごとのハジマリ。起原。詩經泰風權輿篇に「於レ我乎、夏屋渠渠。今也每レ食無レ余。于嗟不レ承二權輿一」。註に「衙を作るに權を始にし、車をつくるに輿より始む」とあり。

げんらう　元老【名】大老といふに同じ。國家の功臣をいふ。詩經「方叔元老、克壯二其猶一」。

げんらうゐん　元老院【名】我が國家に功勞ありて、年齢、名望共に高き人を議官として組織せし、立法の官衙なりしが、今は廢せられたり。

けむりふく　烟吹く【動カ四】煙草を喫するをいふ。

けむりや　煙屋【名】炊事部屋のこと。今昔物語に「家どもたふれかたぶきて、ただ煙家ばかりのこりたるに」。

けんりゆう　乾隆【名】清朝の高宗の年號。其の元年は、わが櫻町天皇の元文元年に當れり。

けんれいもん　建禮門【名】承明門の前面の門、紫宸殿の正面なり。

けんれん　眷戀【名】思のれんごろなること、慕はしきこと。眷眷に同じ。

けんれいもんゐん　建禮門院【名】平德子。清盛の女にて、高倉帝の皇后。安德帝の御生母。平家没落後、小原野に退隱せられたり。

げんわく　眩惑【名】目くるめき心惑ふこと。きら〳〵しきに、目昏み心迷ふこと。漢書「靡二瞻不レ眩、靡二聽不レ惑一」。

げんゑはふし　玄惠法師【名】叡山の僧にて、太平記の著者と傳へられたる人。

けんをねがふ　希賢【文】周濂溪曰く、「聖希レ天、賢希レ聖、士希レ賢」。

けやけきこと【句】勝れたる事。不思議なること。意外なること。際立ちたること。

けやけく【副】形容詞の副詞法。きはだつて、非常にはつきりしてなどの意。

げゆ　解由【名】國守の交替に付、事務の引繼を了へたるとき、前任者より後任者に、滯りなく、事務引繼を受けたる由を認めて渡す、其の文書を解由狀といふ。而して、京都には、勘解由使（カゲユ）といふ役所ありて、解由に關することを掌れり。

げらう　下郎【名】上臈、中臈、下臈などいふ下臈より轉じたるなるべし。賤しくして人に召し使はるる者。臈は、ラ

フの假字なり。

けりやう 家令【名】四品以上の親王、三位以上の臣下に勝はる職事にて、其の家内の事務を執ふ。今はいれいといふ。「家扶」「家令」など。

げゐ 外位【名】もと「外官」即「地方官に勝はるべき爲の位なりしが、後には「畢しき氏姓の人に、まう勝はる位さなれり。正五位上より、少初位下まで二十階ありき。

けをそのそうそく 毀納の裝束【句】ふだん着き暗着と。毀は平常の義、納は常には納めおく意。

けをふいてきずをもとむ 吹ン毛求ン疵【文】己が罪惡を、己が不注意から計くゝことにいふ。韓非子「不ン吹ン毛而求ン小疵ヲ、不ン洗ン垢而察ン難ン知」。

こ 孤【名】かなし。兩親のなき獨り子をいふ。孤兒。また、支那にて、諸侯が、自稱の代名詞さして用ひたり。

こ 股【名】數學の語。勾股弦の一にて、直角三角形の一邊。

こ 鉤【名】中古の頃、簾を捲き上げて掛けたるかぎなり。鉤の字音の略。

ご 御【名】婦人の尊稱に用ふ。「伊勢の御」など。また、目上の人をよぶにも附す。「母御」「殿御」。また、詞の上にも美稱さして附す。「御覽」「御安心」など。

ごあ 歐亞、哥亞【名】印度の地名。孟買の南に在り。葡領。

ごあう 奥奥【名】事物の奥のこと。謎のおくそこの意よりいふ。韓愈の詩句「後來相繼生、赤各縁二竟奥一」。

こいちや 濃茶【名】たてて呑む抹茶の一種。氣淡けれど、分量を多くして呑む。これに反して、氣烈しくて分量を少くして呑むを薄茶といふ。

こいんぜんかう 梧陰存稿【名】故井上毅の遺稿。全三冊。明治廿八年九月出版す。

こうあんのえき 弘安の役【名】龜山帝の文永五年に、元の國主忽必烈、高麗によりて使を遣し、われに通好を求む。北條時宗、その牒狀の無禮なるを怒りて斷ず。すなはち、文永十一年、元兵對馬に寇し博多に迫る。激戰數日、彼遂に敗れて歸る。之を文永の役といふ。而して、元なほ牒狀を止めず、後宇多天皇の建治元年、杜世忠、何文著などを遣して來朝せしむ。時宗、之を鎌倉に斬る。元主使を遣すこと九回に及べり。すなはち弘安四年、范文虎、忻都、洪茶丘などを兵十萬に將さして來侵す。龜山上皇、宸筆の願文を伊勢に奉り、石清水に參籠して、身を以て國難に代らむことを祈らせ給ふ。伊勢の人河野通有等、また能く戰ふ。時に、大風俄に起り、敵艦悉く沈沒して、元兵大に敗れ、數萬の兵中、生きて歸るもの僅に三人といふ。之を弘安の役と稱す。

こうう 項羽【名】人名。楚の王なり。秦の末年に兵を起し、漢の高祖と天下を爭ひ、遂に敗れて烏江に戰死す。

こうかい 紅海【名】アラビヤと亞弗利加との間の海をいふ。英語の Red Sea を譯したる語。其の北隅は、運河によりてスエズの運河さなれり。

こうかい 公廨【名】正しくは「クがイ」と訓むべし。公の家、役所なり。「公廨田」「公廨稻」など。

こうかん 槓杆【名】俗に「テコ」と云ふ。

こうぎ 公儀【名】朝廷をいふ詞なれど、幕府の政を執る所をも云へり。

こうきよ 貢擧【名】いにしへ、京都なる大學、又は諸國なる國學を卒業して政府の試驗に及第すれば、位に叙せらる。其の卒業生を受驗に出すを貢擧といふ。ただし、國學卒業の者を貢人といひ、大學卒業の者を擧人といふなり。其の試科には、秀才、明經、進士、明法の四あり。秀才は、歷史、文章等の試驗を受くるもの。明經は、道德、經書につきて、進士は、事務策につきて、明法は、法律につきて試驗を受くるものなり。各科共に、また、試驗の優劣により、叙せらるる位に差等ありき。

こうきよ 控御【名】ひきとめひきとめ使ふこと。詩經の傳「止曰ノ控」訳文「御使ノ馬也」とありて、馬を扱ふ如く制し治むるをいふ。

こうくわう 鴻荒【名】鴻は大、荒は蒙なり。太古の時をいふ。

こうくわんはふしんわう 公寛法親王【名】東山院第三の皇子。初に、寛尊親王といひ、江戸に下向して、公寛と改め、輪王寺に公辨親王の附弟となる。中御門帝の享保二年、一品に叙せられ、天台の座主となり給ふ。

こうげい 工藝【名】工作にかかる藝術なり。

こうけい 虹霓【名】にじのこと。雄を虹といひ、雌を霓といふ。赤白色の鮮明なるを虹、青白色の明なるを霓といふ。

こうけついまだかわかず 口血未乾【文】約束せし後、時日の幾許も立たざるをいふ。盟には血を吸る。其の血の乾かざる間の義。左傳「與二大國一盟、口血未レ乾而背レ之可乎」。

こうけん 貢縑【名】縑は、かとりぎぬ。緻密に織れる絹の名。貢は、それを年貢にするなり。

こうげん 控弦【名】馬を控へ、弦を鳴す義にて、よく弓を引きて戰に強きものをいふ。史記「控弦之士三十餘萬」。

こうこ 江湖【名】世間、世の中などいふに同じ。

こうこん 後昆【名】文選の注に、昆は明なりとあり。後代の賢哲をいふ。また、昆は後なり。子孫の義。

こうさう 烘箱【名】あぶりばことも訓む。火にて物を乾かす箱。

こうさう 靚粧【名】紛粧などいふ意にて、美しくつくりたる粧ひをいふ。

こうざんまことにびなり、これわがくに 江山信美是吾州【文】大槻磐溪が、文久二年、江戸より仙臺に歸るときの詩にて、「百年天地寄二蜉蝣一、明哲全レ身即善謀、歸去終焉卜云レ吉、江山信美是吾州」。

こうし 孔子【名】名は丘、字は仲尼、魯人、支那學者の宗たり。世に稱して聖人となす。東周の靈王二十一年に生れ、敬王四十一年に卒す。年七十三。史記の儒林傳に「孔子于二七十

餘君一無レ所レ遇」。

こうしけご 孔子家語【名】書名にて十卷あり。四庫全書簡明目錄に曰く「魏王肅註家語、雖二名見一レ漢志一而書則久佚。今本蓋即王肅所二依託以攻一駁鄭學一。馬昭已論レ之詳矣。然、肅雖レ作レ僞、實亦割二裂諸書所一レ載孔子逸事一、綴輯成レ篇。大義微言、亦往々而在。故編二儒家之書一者、終以爲レ首焉」。

こうじつ 口實【名】いひわけ、かこつけごと、等の意。書經に「恐二來世以レ吾爲二口實一」。

こうしときにあはず 孔子時に遇はず【文】史記の儒林傳に「孔子于二七十餘君一無レ所レ遇」。用ひられずとの意もあり。

こうしん 後進【名】後輩をいふが如し。論語に「後進於二禮樂一君子也」。

こうしんぷう 恆信風【名】氣候風、又は半年風ともいふ。暑候半年は西南より吹き、寒候半年は其の反對より吹く。其の吹きかはる期節を誤る事なきより、信風といふなり。

こうじのがく 口耳の學【句】心に留めず、身を益するところなき學問。荀子に「小人之學也、入乎耳一出乎口。口耳之間四寸耳。曷足二以美一二七尺之軀一哉」。

こうしゆ 公主【名】王女なり。康熙字典に「周制天子嫁二女諸侯一不二自主一婚。使二諸侯同姓者一主レ之。故謂二之公主一」。

こうしよ 鴻緒【名】天皇の國家統治の大業を申す。唐書に「紹二祖宗之鴻緒一」とあり。

こうせい 恆星【名】英語の Fixed star の義譯。天文學の語にて、星の一種。定星といふに同じ。地球よりは極めて遠くして、位置常に定れり。

こうせいおそるべし 後生可レ畏【文】後生は、少年、或は、後進なり。年富み、力強ければ、學を積み、功を成すことを得。論語「後生可レ畏焉。知二來者之不レ如レ今也」。

こうせつせん 恆雪線【名】地理學上假說の線にて、四時ともに、雪の消ゆることなき高さを連接したる線をいふ。

こうぜん 昂然【副、形】「意氣昂然」等いひて、高く擧る貌。

こうせんのはぢ 勾踐の恥【句】越王勾踐、吳王夫差に會稽山に困められ、遂に降る。越王の臣范蠡、後に吳を打ちて會稽の恥を雪げり。わいけいのはぢを見よ。

こうそ 後素【名】素は紛地にして畫の質なり。故に、繪をいふ。論語「繪事後レ素」は、人の美質ありて後に、文飾を加ふる意。

こうそう 倥傯【名】事の切迫したること。また、困苦のことにもいふ。又、忙しく困しきこと。楚辭「愁倥傯於山陸」。

こうそうし 孔叢子【名】書名。七卷あり。修身上の教訓を集めたるもの。漢の孔鮒の撰したるなりと傳ふ。

こうだうくわん　弘道館【名】烈公徳川齊昭卿、水戸城中に弘道館を設け、士を集めて、文武の學藝を、其の好むところによりて學ばしめられき。弘道の字は、論語に「人能弘レ道非二道弘レ人一」とあるよりとられるなり。すなはち、烈公の弘道館記にも「弘道者何、人能弘レ道云云」といへり。

こうたうとして　洪蕩【副】廣大なるをいふ。「海水洪蕩として」など。

こうたうのないし　勾當の内侍【名】女官。内侍司の長官。内侍に尚侍、典侍、掌侍あり。後に尚侍を廢し、掌侍四人に權二人を加へ六人とし、其の中の一人上位の者を勾當の内侍といへり。

こうちぎ　小袿、小褂【名】衣服の名。袿といふも、小袿といふも、共に婦人の上に着る服。貞丈雜記「小袿といふものあり。是は女の着るものなり。裳、唐衣など着さるときは、小袿をうちかけに着るなり」。

こうぢん　紅塵【名】繁華なる地に起る塵埃。「紅塵萬丈の巷」など。また、轉じては、巷街の喧しさ、わづらひなどをもいふ。「江都の紅塵」など。

こうちや　紅茶【名】支那の製法によれる、茶の名。

こうて　請而【句】請ひての音便。請ふは波行四段活の動詞なれば、請ふこと、請ふといへどもなどつづく時は、ふなれども、てに續くは連用段よりなれば、こひてといはざる可らず。さて、それを、音便には、うとするを正しとす。請ふて等は用ふべからず。波行四段の動詞はすべて然り。思うて、言うてなど。「請うてこれを討つ」などは副詞に用ひたり。

こうでん　功田【名】昔、朝廷より功臣に賜はりし田地にして、大上中下の四等ありき。

こうとう　叩頭【名】頭を以て地を叩くこと。稽首と同じ。漢書「免レ冠解二印綬一叩二頭殿下一」。

こうとく　公徳【名】社會公衆に對する德義をいふ。

こうとけん　紅杜鵑【名】紅き躑躅花をいふ。

こうなり、なとげて、みしりぞくは、てんのみちなり　功成名遂身退天之道【文】老子の語。物事は、滿つるを避くべしとの義。

こうば　詬罵【名】詬は「詈辱なり」。即ち、罵り辱しむるなり。

こうばいどの　紅梅殿【名】菅原の道眞の邸宅の名。美しき紅梅ありしかば、後人の名付しなりとぞ。其の邸は、京都五條坊門北町面にありきといへり。

こうばいのきぬ　紅梅の衣【名】表は紅、裏は紫の衣なり。十一月より二月まで用ふ。

こうばんり　江萬里【名】字は子遠、宋の許昌の人。理宗の時、賈似道の參謀となり、度宗の時右相となる。

こうび　後備【名】あとぞなへ。後の備とせるもの。また、我國にて三年の常備兵役と四年の豫備兵役とを終へて後、服すべき五年間の兵役、後備兵役の略稱。

こうぶくじ　興福寺【名】南部七大寺の一にして、奈良市春日神社の前にあり。昔時は、藤原氏の氏寺として、春日神社と共に繁盛を極めし寺なり。

こうふつ　紅拂【名】人の名。唐の妓女。虯髯客傳に「李靖久レ之、靖歸、夜有二紫衣戴帽一叩レ門、延入、乃一美女也。告曰、妾楊家紅拂妓也。絲蘿願托二喬木一。乃與俱適二太原一」とあり。

こうぶん　公文【名】官文書なり。

こうぶん　口吻【名】口さきなり。轉じて、口ぶり、話ぶりの意にいふ。「彼が口吻を學ぶ」など。

こうへい　詬睥【名】辱かしむといふに同じ。禮記「衆人之命儒也、妄常以レ儒相詬睥」。

こうめい　孔明【名】諸葛亮の字。しよかつりやうを見よ。

こうらくゑん　後樂園【名】水戸藩の小石川邸内なる後樂園は、威公賴房が、德大寺左兵衛をして經營せしめしものにして、三代將軍大猷公も、時々御成ありて、指圖をもせられしよしなり。此の地、もと寺地なりしを、三代將軍のとき、其の所にありし本妙寺は丸山に、吉祥寺は駒込に移して、さて水戸の中屋敷に賜ひしものさか。而して、享保の頃に至りては、庭石など取り毀ちたる處もありて、風景も一變せるものといへり。今は砲兵工廠となりて、陸軍省の管轄に屬し、其の庭園の一部を存せるのみ。後樂の字は、宋の范文正の文に「士當レ先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂」とあるにとりて、朱之瑜の命じたる名とぞ。

こえんぶ　顧炎武【名】明末の鴻儒。字は寧人。又、高林、江南、崑山人、など號す。清朝となりて後も、節を持して仕へず、心を經書に專にし、著書頗る多し。

こおひい　咖啡【名】英語 Coffee。熱帶地の木實にして、其れを炒りて粉とし、熱湯にて呑むこと、わが茶に等し。

ごおん　吳音【名】かんおんを見よ。

こか　胡笳【名】支那胡國の樂器。あしのはぶえ。樂府に、胡笳の曲あり。鼓、角、橫、吹、笳の五曲の一なり。史記の樂書に「胡笳似二觱篥一而無レ孔。後世鹵簿用レ之。伯陽避入二西戎一所レ作。卷二蘆葉一吹レ之也」とあり。其の聲尤も悲壯なる故、悲歌ともいふ。唐詩選に胡笳歌送二顏眞卿使行二河隴一の詩あり。

ごか　古雅【名】古くして雅致あること。

ごかい　五戒【名】佛敎にて、殺生、偸盜、邪淫、妄語、飲酒の五つを固く誡禁す。これを五戒といふ。

ごかう　五更【名】時刻の稱。今の午前四時頃。更とは、夜を五つに分けたる名にて、初更は戌の刻（五つ時、今の午後八

時頃)、二更は亥の刻(四つ時、今の午後十時頃)、三更は子の刻(九つ時、今の十二時頃)、四更は丑の刻(八つ時、今の午前二時頃)、五更は寅の刻(七つ時、今の午前四時頃)。

こがうのつぼね　小督局　【名】少納言信西の孫。櫻町中納言成範卿の女。高倉天皇に仕へて、宮中第一の美人なりしが、平清盛に忌まれて、嵯峨野の奥に隠る。

こがえき　古河驛　【名】下總猿島郡にあり。古河御所のありし所。いま、茨城縣に屬せり。

こがく　古格　【名】古き法則なり。古き儀式。古き文章の法。

こがこくだう　古賀穀堂　【名】名は濕、通稱藤馬。精里の長子、佐賀藩の儒官となる。天保七年歿す。年五十九。

こかさがけ　小笠懸　【名】がさかけを見よ。

こがせいり　古賀精里　【名】名は樸、字は淳風、通稱は彌助。精里は其の號。肥前佐賀の人。晩に幕府に仕へて、昌平黌の儒官となる。文化十四年五月歿す。享年六十七。

こかつ　呼喝　【名】呼ぶ。呼びかける。また、先拂ひのこゑ。白居易詩「報道前驅少二呼喝一」。

こがとうあん　古賀侗庵　【名】名は煜、通稱小太郎。精里の季子、佐賀の人。文化六年幕府の儒員となる。弘化四年歿す。年六十。

こがねはなさく　黄金花咲く　【文】天平感寶元年、陸奥國より、始めて黄金を獻りし時に、大伴家持が賀して詠める長歌の反歌に「すめろぎの、御代榮えむと、吾妻なる、みちの山に、黄金花さく」とあり。此の陸奥山とあるは、小田郡なる山なりといへり。

こがぶんがく　古賀文學　【名】文學は學者をいふ敬稱なり。古賀は、古賀精里、および、其の子穀堂をいふ。

こがみ　粉紙　【名】胡粉などを入れて製したる紙、奉書紙の屬といへり。元結などに用ふ。

こがん　古龍　【名】龍は佛像を安置するもの。また、浮屠の塔。塔下の室。轉じて、古寺。唐禇遂良の書に「久棄塵世與二彌勒一同レ龕」。

ごかんじよ　後漢書　【名】書名。宋の范曄の撰。後漢二十帝の事を記せり。本紀十卷、列傳八十卷あり。

こがらし　木枯、凩　【名】冬のはじめに吹く風。草木の葉を枯すよりの名なり。凩は木風の合字。

こがらす　小烏　【名】平貞盛の賓刀の名。大和の劍工天國の作。

こき　古稀　【名】七十歳をいふ。杜甫の詩「人生七十古來稀」の句より出づ。

こぎ　狐疑　【名】疑ひ深きをいふ。狐は、性疑ひ多く、氷河を渡るに、且聞き且渡るを、よりて譬へたるなり。漢書「執二狐疑之心一者、來二讒賊之口一」。

こききめの、うはぐもりたる　濃き衣の上曇りたる　【句】紫の濃き色の上づら黒みたる衣。なほ、たゞ「濃き色」、「濃き衣」といふに紫の濃き色をいふこととき、紅の濃き色をいふこととあり。但し單に、うすいろといふ時は、紫に限れり。

ごきしちだう　五畿七道　【名】山城、大和、河内、和泉、攝津の五畿内、および、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道をいふ。明治に至り、北海道を加へて八道となせり。

ごぎう、つきにあへぐ　吳牛喘レ月　【文】吳牛は水牛なり。熱を恐るるもの。吳の地は熱き故、月を見て日となして喘ぐなり。物おそれすることの甚しきにいふ。世說「滿奮曰、臣猶二吳牛見レ月喘一」。

ごきん　五金　【名】金、銀、銅、鐵、錫の總稱。

こきんしふ　古今集　【名】二十卷。延喜五年、紀貫之、紀友則凡河内躬恒壬生忠岑等の、勅を奉じて撰したる歌集なり。

こきんしふとほかゞみ　古今集遠鏡　【名】書名。本居宣長が、古今集の歌を、一々、口語に譯したるもの。卷のはじめに、自ら「雲のゐる、遠き梢も、遠鏡、うつせばこゝにみれのもみぢば」と、よみて、かきつけたり。

こきんしふひけつ　古今集秘訣　【名】細川幽齋、古今集の秘傳を、内大臣藤原實枝公に受け、悉く、其の秘訣を得たりと稱す。即ち「三木三鳥の傳」といふもの、これなりとぞ

こきんよざいせう　古今餘材抄　【名】書名。寫本三十卷あり。古今集の解なり。契沖の著。萬葉代匠記を著せる餘材にて成れるよりの名稱なり。

こきんろくでふ　古今六帖　【名】歌集。十卷あり。紀貫之の女の著なりと傳へて、紀氏六帖ともいへり。一帖は歳時。二帖は天、田、野、都、田舍、宅人、佛。三帖は水。四帖は櫻、祝、別。五帖は雜、思、服飾、色、錦綾。六帖は草、虫、木、鳥。

ごきやう　五經　【名】易經、書經、詩經、春秋、禮記の五書をいふ。上古には、此れに樂記を加へて六經といひ、今世には四書を一つとして、六經とも稱せり。

ごきやう　五行　【名】支那理學にて、木火土金水をいふ。(モククワドコンスキ)其の說に、木より火、火より土、土より金、金より水を生ずるものとして、之を相生と名付け、其の反對に、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に、尅つものとして相尅と名付け、世界は、總て此の五種に基くものと假定せしなり。

ごきやうごくのおとど　後京極大臣　【名】藤原良經。兼實の子。博學多藝にして、後鳥羽、土御門の二朝に仕ふ。正治元年に、左大臣、建仁二年に攝政となり、建永元年薨ず。殿記の著あり。また、庭づくりの事を記したるものに作庭記あり。

ごきゆくふねのあさのしらなみ　漕き行く船の跡の白

波【句】拾遺集に、愚しらすとして「世の中を、何にたとへむ、朝ぼらけ、漕ぎ行く船の、あとの白浪」とあり。萬葉集、滿誓沙彌の歌に「世の中を、何にたとへむ、朝びらき、漕ぎ去にし舟のあとなきがごと」とあるを改めたるなり。

こく 穀【名】コシキ。車輪の正中の、軸の貫く處。

こくか 國家【名】學者間に區々の議論あれども、「國家とは、確定せる領土内に於て、公益を謀る爲、其の政治機關を有し、永久の目的を以て、組織せられたる、人民の集合體をいふ」といへる説、その最穩當なるものなるべし。

こくかのとうちけん 國家統治權【名】國家を統べ治むる權力なり。國家は、一定の土地に住する人類の團體にして、主權者を有せり。其の主權者の、國家を治むる上に於て行ふ權力をいふ。我が國にて云へば、主權者は天皇陛下にましまして、其の統治し給ふ處は、日本の國土人民なり。

こくかはちろん 國歌八論【名】書名。荷田東滿の甥なる在滿の著。歌源論、翫歌論、擇詞論、避詞論、正過論、官家論、古學論、準則論を立てて、歌道を論じたる書なり。一卷あり。

こくき 國諱【名】支那にて、國王のいみな。

こくざくのきやう 告朔の餼羊【句】今は虚禮となりたれども、古禮のおもむけを窺ふべき材たるものの譬喩に用ふ。論語「子貢欲去告朔之餼羊。子曰賜也爾愛其羊。我愛其禮」と。

こくし 國士【名】其の名望、一世を蓋ふもの。史記「至二智伯一以二國士一遇レ我云々」。

こくし 國司【名】國々を治め司る地方官。守、介、掾、目の四部官あり。之を稱して國司ともいひ、又、其の長官たる守なのみ國司ともいふことあり。

こくししげふ 國子司業【名】支那の官名。大學の次長。唐書百官志「司業二人從四品下云々」。

こくしのち 黒子の地【句】狹少の地をいふ。黒子は「ホクロ」なり。漢書「淮陽之比二大諸侯一、僅如二黒子之著一面」。

こくしゆ 國手【名】名醫をいふ。國の疾をも治する義に取れり。國工とも稱す。國語に「平公有レ疾。秦景公使二醫和視一之。趙文子曰、醫及二國家一乎。對曰、上醫醫レ國、其次疾人、固醫官也」とあるより出づ。

こくぜ 國是【名】内治外交上につき、一國の人の、是と唱ふる論。類書纂要に「國是國家之公論也」とあり。

こくそく 穀觫【名】恐懼の狀。おそれおそるること。

こぐそく 小具足【名】鎧に屬したる小道具をいふ。すなはち、鎧の外の籠手、臑當、脇立など。

こくでう 黒潮【名】くろしほともいふ。潮流の名にして、我が近海にて、琉球の南より流れ來りて東北に向ひ、九州四國の南部を過ぎて、伊豆七島と、八丈島との間を流れ、更に北東に向ひて、終に西北岸に至り、赤道の方に向ひて流る。其の色の、近海のより濃きを以て、此の名あり。

こくのそち 黒帥【名】藤原季仲をいふ。

ごくらくじ 極樂寺【名】寺の名。相摸國鎌倉郡西鎌倉村に在り。其の前の坂は腰越驛を通ずる唯一の道にて、極樂寺坂の切通しといふ。元弘三年、新田義貞の火を放ちしは此の寺なり。また、山城國綴喜郡男山八幡宮の山麓に極樂寺あり。陽成天皇の元慶七年の創建なり。

こぐれ 木暗【名】木の繁りて暗きところ。

ごくわう 後光【名】神佛の體より放つといふ光。背光ともいふ。

ごくわん 五官【名】視、聽、鼻、味、觸の五感を掌る、眼、耳、鼻、舌、皮膚をいふ。

こくわんじや 小冠者【名】元服して、冠をつけたる程の年輩の者。また、六位無官の人などをもいへり。

ごけい 五刑【名】わが國の五刑は、笞、杖（テウ）、徒、流、死の五つにて、五罪ともいへり。支那のは墨（イレズミ）、劓（ハナキリ）、剕（アシキリ）、宮（陰部を切る）、大辟（クビキリ）の五なり。けいはふを見よ。

ごけう 五敎【名】五常の道の教。書經「汝作二司徒一、敬敷二五敎一、在レ寛」。

こけつ 虎穴【名】危險の地をいふ。漢書「穿レ地名數丈、以二大石一塞二其口一、名爲二虎穴一」。

こけつにいらずば、こじをえじ 不レ入二虎穴一則不レ得二虎子一【文】後漢の班超が、西域に使したる時、吏士を會して、之を激勵せんとていひし語。危險を犯さずては、大功はたてられじとの意。

こけつにいり りようがんをさぐる 入二虎穴一探二龍頷一【文】前と同義。莊子「千金之珠、必在二九重之淵一而驪二龍領下一也」とあるを、班超の語（前項を見よ）より出でたり。

ごけにん 御家人【名】家人は家來といふほどの意。德川幕府のとき、將軍に直參の士を御家人といへり。

ごげん 晤言【名】相對して語るをいふ。詩經陳風東門之池篇の毛傳に「晤は遇」と。鄭箋に「晤は猶レ對也」とあり。

ここう 股肱【名】肱と股との義より、賴みにする者をいふ。書經「帝曰作二股肱耳目一」。また、左傳昭公九年「君之卿佐謂二股肱一」。

ここう 虎口【名】危險の者の例にいふ。莊子「料二虎頭一、編二虎鬚一、幾不レ免二虎口一」。

こころのしん 股肱之臣【名】ここうを見よ。

ごこく 五穀【名】米、麥、粟、黍、豆をいふ。

ごごさん 五五三【名】しちごさんを見よ。

こごしふる 古語拾遺【名】書名。大同二年、従五位下齋部廣成の撰する所。一巻あり。廣成が家の衰へたるを訴へし建白書狀なり。

ここじふろくこく 五胡十六國【名】四晉の末より、五胡の族、内地に跋扈し、相攻伐し、互に興亡ありて、前後十六國に及ぶ。すなはち次の如し。

前趙(劉氏)	後趙(石氏)	前秦(苻氏)	後秦(姚氏)
西秦(乞伏氏)	前燕(慕容氏)	後燕(同上)	南燕(同上)
北燕(馮氏)	前涼(張氏)	後涼(呂氏)	南涼(禿髪氏)
西涼(李氏)	北涼(沮氏)	夏(赫連氏)	蜀(李氏)

ここのへ 九重【名】禁裡をいふ。「天子九門」といへば、「九重の門の中」の意。

ここら 許多【副】そこらを見よ。

こころおくれたるひと 心後れたる人【句】心の劣りたる人。

こころおごり 心傲【名】心のたかぶるをいふ。傲慢などいふに同じ。落窪物語「あなかま、落窪の君に聞かすな、心傲りせむものぞ」。

こころぎたなし 心穢【形】心の下品なるをいふ。心の卑劣なるをいふ。

こころしらひ【名】心の活くよしにて、用意、心遣ひなどの意。

こころづかひ 心遣【名】心配、氣遣、注意などに同じ。

こころづから 心自【副】「我が心よりして」、「心中にておのづから」、などの意。後撰集「風をだに、待ちてぞ、花の散りなまし。心づからに、移らふが憂さ」。

こころなしにや 心成しにや【句】心にて、しか思ひなす故にやあらんの意。

こころにくし 心憎し【形】奥ゆかしき意にて、他人の、自分より勝れたるを見て、自分も、然ありたしと羨ましく感ぜらるゝをいふ。保元物語爲朝の詞に「主上の御方、心憎くも候はす」とあるは、主上の方には、勝れて頼もしと思ふほとの武士は無しとの意。

こころのほかに 心外【副】意外に。存外に。曾ても思はぬこと。

こころのみなと 心湊【名】硯の異名。藏玉集に硯とせるよし、和訓栞に見えたり。

こころもとながる 心許無がる【動ラ四】心許なく思ふ。覺束なく思ふ。不安心に思ふ。待遠に思ふ。

こころもゆかぬがほ 心も行かぬ顔【句】心の慰まぬ顔つき。得心せぬ樣子。解せぬ顔つき。

こころやまし 心疾【形】心の惱しきなり。心よからず感ずる意。

こころよせ 心寄【名】心をむくるをいふ。心を其のものに寄すること。心に好くこと。最賞すること。信頼すること。

こころをらうするものは、ひとををさむ 心を勞する者は人を治む【文】「勞心者治人、勞力治於人。治於人者食人、治人者食於人、天下之通義也」と、孟子にいへり。人を養ふことは、賦稅を出して公上に給するにて、官吏は、其れによりて衣食するをいふ。

ございえ 御齋會【名】むかし、正月八日より十四日まで七日間、大極殿にて、最勝王經を講ぜしめられし儀式。天平元年より始まるといへり。

ござうろつぷ 五臟六腑【名】支那の解剖學の語にして、腹中にある臟腑の稱。五臟とは、肺、心、脾、腎、肝、六腑とは、大腸、小腸、膀胱、三膲、膀胱とす。また、單に、コヽロといふ意にも用ふ。

こざくらをどし 小櫻威【名】鎧の威の名。小き櫻の花形をおきたる革を藍に染むれば、花形は白く、地は藍となる。其の染革を細く裁ちて綴したる鎧をいふ。また、其の染革を、黄色に染め返せば、櫻の花は黄色になり、地は萌黄になる。其れを以て綴したるを小櫻を黄に返したる鎧といふ。

こざくらをきにかへしたるよろひ 小櫻を黄に返した

る鎧【句】こざくらをどしを見よ。

ござん 五山【名】南北朝頃、支那の制に倣ひて定めたる禪寺の等級。建長、圓覺、壽福、淨智、淨妙の五寺を、鎌倉の五山といひ、天龍、相國、建仁、東福、萬壽の五寺を、京都の五山と稱せり。

ござん 午餐【名】晝の飯なり。

ござし 吳子【名】人名。名は起、周末の兵家にして、魏の文侯、武侯に仕ふ。其の著したる兵書を吳子と稱す。

こしあて 腰當【名】貞丈雜記「腰當といふは、着服の類にはあらず。毛皮にて、數皮の如く造り、緒を附けて、うしろ腰にあて緒を結ぶなり。これを引敷といふなり」。

こしき 甑【名】今の蒸籠の類。和名抄「甑、和名古之岐、炊飯器也」。

こじき 古事記【名】書名。三卷あり。元明天皇の和銅五年、太安麿勅を奉じて、稗田阿禮が口誦せるを記せるもの。神武天皇以來推古天皇までの歷史なり。古事記傳は、本居宣長が、これを考證解釋したるもの。四十八卷あり。

こしごえ 腰越【名】相摸國鎌倉郡腰越津村大字腰越。鎌倉時代には、鎌倉、大磯の間の驛たり。文治元年、源義經、平宗盛を具して此に至る。頼朝、義經を疑ふことありて、つひに鎌倉に入ることを許さゝりき。また、文治五年義經の首級を

實撿せしめしも此の地なり。

こしつ 痼疾 【名】久しく癒え難き病氣。持病（ヂビヤウ）に同じ。

こじつ 故實 【名】古き事實。爲來（シキタ）りの法令儀式作法。猶、先例といふが如し。國語「問二于遺訓一咨二于故實一」。

ごじつぽ、ひやつぽ 五十歩百歩 【句】「似たり、寄ったり」の義。孟子より出づ。

こじとみ 小蔀 【名】小さき蔀。清涼殿の殿上の間に小蔀あり。これは、主上の、殿上の間を見そなはす所。蔀とは、風雨を凌ぐ板戸なり。板を張り桟を打ち、一間に壹枚又は上下二枚を横に入れて、掛金にて留め置く。

こしのゆき 越の雪 【句】越は、いにしへ越前、越中、越後邊の總稱なり。越路は古來雪を名物としたり。

こじまがさき 小島崎 【名】たちばなのこじまがさきを見よ。

こじん、かべをうがつものあり 古人有鑿壁者 【文】前漢の匡衡、家貧にして燭なし。隣舍に燭あれど、光遠くして及ばず。乃、壁をきりて光を取り讀書せりと。

こじんのさうはくをなむ 古人の糟粕を嘗む 【文】さうはくを見よ。

ごしんのふ 護身符 【名】神佛の守札をいふ。符は證（シルシ）の義。身を守るしるしなり。

こしやう 胡床 【名】床几なり。陣中、狩場などにて用ふる一人用の腰掛の名。輪ありて折りたたむことを得るを「畳み床几」といふ。其の制、胡國より渡りし故、胡床といふ。

ごしやう 後生 【名】死後をいふ。あの世に往ってからの生涯。

ごじやう 五常 【名】人の履み行ふべき道。仁、義、禮、智、信をいふ。

ごじやうくん 五常訓 【名】書名。貝原益軒の著。五常の道を、平易に敎示したるもの。五卷あり。寛永八年の出版。

ごしやうのおもひで 後生の思出 【句】來世（ライセ）にありての思ひ出しぐさ。

ごしやのしよ 五車の書 【句】藏書の多きをいふ。五車につむ程の義。莊子「其書五車、其道弁駁、其言也不レ中」。

こしゆいんぶね 御朱印船 【名】公許の鑑札を有せる海外貿易の船。その印、朱にて捺したれば名づけたるなり。秀吉の時より始まりて、德川時代にも襲用せり。

ごしゆせん 五銖錢 【名】支那の古き銅錢にして、文に五銖の二字あり。漢の武帝、半兩錢を止めて鑄たるもの。

こじゆう 扈從 【名】身に近き供人をいふ。字典に「後より從ふを扈といふ」とあり。

ごしよ 御所 【名】禁裏をいふ。後には、幕府の將軍家などにもいへり。將軍の隱居せるを大御所といふ。

こしようげん 古松軒 【名】古川子曙の號。備中の人。海内を遊歷して地理に精し。寛政中幕府に召されて製圖に與れり。東遊雜記、西遊雜記などの著あり。

ごしよどころ 御書所 【名】いつぽんごしよところを見よ。

ごしよはちまん 五所八幡 【名】五ケ所に祭れる八幡宮なり。即、筑前の大分宮、肥前の千栗宮、肥後の藤崎宮、薩摩の新田宮、大隅の八幡宮をいひしなり。

こしらふ 誘 【動ハ下二】字鏡に「引也誘也」。さとしすかすをいふ。

こすゐ 鼓吹 【名】太鼓を叩き、笛を吹くこと。轉じては、奬勵、また、吹聽の意に用ふ。「大に後進の希望を鼓吹す」。「民權論を鼓吹す」など。

ごせ 後世 【名】未來の世。佛說に、過去、現在、未來を三世といひ、過去は前世、現在は現世、未來を後世とす。

こせ かなをか 巨勢金岡 【名】畫聖なり。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へて、官、大納言に至る。紫宸殿の賢聖障子の像を描きし人。歿年詳ならず。

ごせち 五節 【名】いにしへ、十一月の中の丑の日に行はれし女樂にて、四人若しくは五人の舞姫（マヒヒメ）あり。後には、大嘗會などの時にのみ行はれたりき。

ごせつく 五節句 【名】繼新前に行はれし五度の節句。即、正月元日、三月三日（上巳）、五月五日（端午）、七月七日（七夕）、九月九日（重陽）。

ごせのたく 五畝之宅 【句】周の制に、一夫の受くる所の地。孟子「五畝之宅樹以レ桑」。

こせのはふり 居勢祝 【名】祝は神社に奉仕する者、禰宜、祝などいふ。居勢は地名なり。

こせひろたか 巨勢弘高 【名】畫家巨勢氏の第五世。姓は紀氏、采女正に任ぜらる。公望の子、其の家を嗣ぎて、繪所の長者となる。寛弘年中の人。

こぜん 湖塡 【名】塡は岸なり。即、湖岸のこと。

ごせんしふ 後撰集 【名】歌集。村上帝の天曆五年、坂上望城、源順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔五人が、勅によりて撰めるもの。

ごぜめ 後攻 【名】城を圍みたる兵の後より攻め寄する兵をいふ。城兵の援兵。

こせやまつばき 巨勢山椿 【名】巨勢山は大和國南葛城郡葛城村にあり。つらつらつばきを見よ。

こぜりあひ 小迫合 【名】小さなる戰ひをいふ。

こぞ 去年 【名】昨年。

こそく 姑息【名】一時の間に合せの意。「因循姑息」など熟用す。禮記に「小人之愛人也以姑息」とあるを註に「息猶安也言苟且取安也」王氏曰且止之辭。また姑は婦人の義、息は小兒の義にて「川姑息之語」などの句もあり。

こそる 擧【動ラ四】悉くあつまる。

ごだい 五代【名】唐の次に代る代る立ちし國。梁(太祖朱全忠)、唐(高祖李存勗)、晉(高祖石敬瑭)、漢(太祖劉知遠)、周(太祖郭威)の五國をいふ。其の次は趙宋なり。歐陽修の撰にかゝる五代史は其の間の歷史なり。

こだいし 胡頽子【名】ぐみの一種。

ごだいだう 五大堂【名】陸前松島の岸なる小島上にある小堂。五大尊の像を安置すればいふ。五大尊とは不動(カンダンカ)、降三世(ゴウサンゼ)、軍荼利(グンダリ)、大威德、金剛夜叉の五大明王なり。

こたう 虎韜【名】兵法の名。太公望の傳へたる六韜の中の一なり。

ごだう 五嶋【名】肥前國平戸島の西南に列せる諸島。やや大いなるもの五つ相接せるより名づく。

こたふ 答・對・應【動ハ下二】答は問に答ふるにて一々其の順序理由を正して答ふるなり。對は問に答ふるにて一々其の順序理由を正して答ふるなり。「對策」の如し。應は人に。また應對と連用する時は「おいさの」の義。

こだま 木靈・木魅・彭侯・反響【名】俗に天狗といふものの類。また山にて聲を發すれば遠に同じ聲にて應ふる聲あり。これを山彦ともいへり。木靈ともいへり。

こたんあん 胡澹菴【名】宋の忠臣。名は銓、字は邦衡。高宋に仕へて樞密院編修となる。秦檜等の奸臣を彈劾し、却て罷れらる。

こち 鯯・牛尾魚【名】魚の名。

こち 東風【名】東の風をいふ。東風は春時重んぜらる。

こちこち 【副】物の凝固せるさまを形容する詞。骨々しきなり。土佐日記「非君の病者もとよりこちこちしき人にてとあり。無骨なる人の意。

こちたし 事痛・言痛【形】甚し。甚多し。こと〴〵し。

ごぢん 後陣【名】後方に備へたる陣をいふ。

ごぢんれう 御掟【名】御仰せといふに同じ。貴人の命令をいふ敬語。

こちらのこと 此方寄りての事【句】「其の以後の事」といふ意。「近頃の事」の意。

ごぢん 護持院【名】元祿八年九月十八日、德川將軍綱吉、知足院に臨み、寺を院家に列して護持院と改稱し、院の僧隆光を大僧正となす。隆光は和州の人、名は榮春。享保九年六月七日寂す。

こつかうのしん 骨鯁之臣【名】剛毅の臣。又、直言の臣なりとも解す。(鯁は、骨の口中に留る義なれば、直言の容れ難きことは、骨の喉にあるが如しとの譬へ。史記「彼項王骨鯁之臣亞父云々」。

こつがはら 小塚原【名】地名。東京府下北豊島郡に在り。市内の淺草區に連る。舊幕時代の刑場たりし所。

こつげ 小鶡毛【名】白山重忠の馬の名。その毛色よりいふ。「つきげ」を見よ。

こつけい 滑稽【名】滑は亂、稽は異、異同を亂るをいふ。また一說に酒器なり。轉じて酒を吐き已まざる者にいひ、それより俳優の言語の止まずして口をいで、しかも章を成すに譬ふ。史記「優孟手滑稽多智」。

こつこつ 榾榾【副】力を用ふる狀をいふ。莊子「榾榾乎」。

こつじき 乞食【名】食物を求むること又食物を乞ひ求むる人。國語「過五鹿乞食於野人」。

こつとう 骨董【名】古道具。珍器物。靠山錄「骨董乃方言」初無定字、東坡作骨董羹、晦菴先生語類只作汨董」。

こて 肱當・臂當・籠手【名】鎧の具にて兩の臂を被ふもの。また弓籠手ともいふ。「弓にては射籠もかきて弓射る時左の臂を被ふもの。

こてい 五帝【名】支那古代の帝王の中、少昊、顓頊、高辛、唐堯、虞舜をいふ。

ごでうのさんみとしなり 五條三位俊成【名】藤原俊成なり。世にシュンゼイと呼べり。俊忠の二男。剃髮して釋阿と稱す。和歌に巧にて歌道の家の基を開く。元久元年十一月薨ず。年九十一。

こてうのゆめ 胡蝶の夢【句】「さうじのゆめ」を見よ。

ごてん 五典【名】五常の道。すなはち父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、これなり。書經「慨徽五典」。

ごと 五都【名】繁華なる大都をいふ。故事未詳。

ことあげせぬくに 言擧せぬ國【句】わが日本國をいふ。實行を主として殊更に揚言せぬ國の義。

ことあたらし 事新し【形】事を改めて今更いふまでもなしなどの意。

ことおもひ 言忌【名】えんぎのわろきを避けて言葉を謹むこと。

ことさうじん 後藤芝山【名】漢學者。名は世鈞、字は守仲、高松藩の儒官。天明二年四月歿す。年六十一。

ことさうしん 五等親【名】大寶の制も現今のも同じ。次の如し。但し今は親等といふ。

一等　父母、養父母、子女、養子、

二等｛祖父母、嫡母、繼母、伯叔父、姑、兄弟姉妹、夫の父母の妻妾、姪、孫、子婦、父妾、
三等｛曾祖父母、伯叔婦、夫姪、從父兄弟姉妹、異父兄弟姉妹、夫の祖父母、夫の伯叔姑、姪婦、繼父、同居前妾子、
四等｛高祖父母、從祖祖父母、從祖伯叔父、夫兄弟妻妾、再從兄弟姉妹、外祖父母、舅姨、兄弟孫從父兄弟子、外甥、曾孫、孫婦、妻妾、前夫子、
五等、妻妾父母、姑子、姉子、玄孫、女聟、

ごとう しやういん 後藤松陰 【名】名は機、字は世張、松蔭は其の號。大阪の人にて、賴山陽が高足の門弟子なり。

ごとう まごべゑ 後藤孫兵衛 【名】姓は藤原、名は政次、基次の子。はじめ、黑田如水、および長政に仕へ、朝鮮役關ヶ原の役等に功あり。後、事を以て仕を辭し、細川興晴に仕へんとして成らず。これより、諸方に流浪し、遂に、大阪冬の役起るに及びて、これに與して戰死す。時に年四十六。頗る挫強助弱の氣に富めり。

ごとう またべゑもとつぐ 後藤又兵衛基次 【名】勇士なり。將監基國の子。黑田孝高に養はれて、秀吉に仕ふ。征韓の役、關ヶ原の役、大阪の役等、皆驍勇の譽あり。大阪城陷るとき、銃を以て自殺せり。

ことえり 言擇 【名】ことばえらび。ことばたくみ。

ことき 異木、他木 【名】其の木ならぬ他の木。

ごとくだいじのおとど 後德大寺の大臣 【名】藤原實定をいふ。

ことごとくしよをしんせば、しよなきにしかじ 盡信書則不レ如レ無レ書 【文】孟子の盡心の章にあり。

ことごとしく 事事 【副】仰山に、大事さうに、などの意。

ごどころ 碁所 【名】德川幕府の時に、圍碁の技藝を以て、代々仕へたるもの、勤むる所。

ことさへぐ 言塞言喧 【枕】から、くだらなど、外國にかけていふ枕詞なり。「さひづるや」に同じく、外國人の言語の、意味通ぜざるより起れる詞。

ことざま 事樣 【名】樣子に同じ。

ことさめて 事冷めて 【副】興さめて。面白み無くなりて。

ことさらに 殊更 【副】わざと。わざ〳〵。特別に。

ことそぐ 事殺 【動カ四】省畧するをいふ。簡略にす、手輕にすなど、皆同じ。

ことだつ 事立 【動タ下二】常に變れることをなする。

ことだま 言靈 【名】詞のつかひざまによりて、あやしく妙なることのあるよりいふ語にて、詞の德をいふ意。

ことひしとりのな 言問ひし鳥の名 【句】都鳥なり。

伊勢物語に、在原業平の歌に「名にしおはゞいざ言問はむ、都鳥、我が思ふ人は、ありやなしやと」とあるよりいふ。

ことどふ 言問 【動ハ四】語らふをいふ。又、後に、問ひたゞす意に用ひたり。

ことにのぞみておそれ、はかりごとをこのみてなす 事に臨みて懼れ謀を好みて爲す 【文】論語の述而篇に「子路曰、子行三軍、則誰與。子曰、暴虎馮河死而無レ悔者、吾不レ與也。必也臨レ事而懼、好レ謀而成者也」とあり。

ことにみゆ 殊に見ゆ 【句】特別に見ゆ。殊に勝れて見ゆ。

ことのままのやしろ 事任の社 【名】遠江國周智郡宮代村にあり。大巳貴神（オホナムヂ）を祀る。同國の一の宮にして、今は小國神社と稱して、國幣小社たり。

ことのやぶんじふ 琴舍文集 【名】堀秀成、家の名を、琴舍と號す。その文集なり。

ことばのたまのを 詞の玉の緒 【名】書名。六卷あり。本居宣長の著にて、詞の係結法を、用例をあげて說明せるもの。

ことは。もれやすし 事は漏れ易し 【文】三略に「謀泄則軍無レ勢」とあるより、秘密を貴ぶにいふ語。

ことばをたくみにし、いろをよくす 言を巧にし色を合

くす【文】論語に「巧言令色鮮矣仁」とあり。言葉づかひ、及び、顏色をよくして、外見のみを飾る意。

ことひら 琴平 【名】讃岐國那珂郡琴平町、琴平山に祀れる國幣中社金刀比羅宮。

ことほぐ 言祝 【動カ四】祝ふ。賀す。ことほぎは、名詞となれるもの。

ことむく 言向、平 【動カ下二】征服す。從はす。此の方に向かす。

ことやう 異樣 【名】ことなる樣（サマ）。樣子の變りたるをいふ。

ことゆかず 事行かず 【句】埒あかず。合點ゆかず。承知出來ず。

ことろことろ 子捕子捕 【名】兒童の遊戲の名。一人、親となりて、數人の子を、おのれの後に從はしめ、外に一人、鬼となりて、其の親の後なる子を捕らむとする遊び。

こなかぐろのや 小中黑の矢 【名】中ほどの、少しく黑き斑ある羽を以て作きたる矢。黑斑多きものを大中黑（オホナカグロ）といふ、

こなかむらきよのり 小中村清矩 【名】陽春廬と號す。伊能穎則の門に入り、また、本居內遠に學ぶ。明治十五年、東京大學教授に任ぜられ、引續き帝國大學文科大學教授たりき。文學博士、貴族院勅選議員從五位を以て、明治二十八年十月歿す。年七十四。

ごにんぐみ　五人組【名】屠龍工隨筆に、「町々所々國々在々に、五人づゝ組合ひて萬事を濟すを、五人組といふ。令に、「凡、戸は五家相保而一人爲レ長」と。出事法にも、「五人を伍といひ、五十人を隊とす」とあり。

ごにんばりのゆみ　五人張の弓【名】通常の人五人にて弦を張る弓。即、四人にて弓を撓め、一人が弦をかくるなり。

こに、わうごんなのこすなかれ　子に黄金を遺す勿れ【文】漢書韋賢の傳に「遺二子黄金滿一レ嬴、不レ如レ教二子一經」とあるに本づく。

このこ、れいこつあり　之子有靈骨【文】佐久間象山が、吉由松陰の海外に航せむとせしとき、これを送れる詩、「之子有二靈骨一、父獻二髻璧群一、振レ衣萬里道、心事末レ語レ人、雖二創未一レ遂、忖度或有レ逕、因レ行出二郭門一、孤鶴横二秋昊一、瑕海何茫々、五州自爲レ隣、周流究二形勢一、一見超二百聞一、智者貴二投機一、歸來須レ及レ辰、不レ立二非常功一、身沒誰能賓」。此の子は、すなはち松陰をさす。

このはなさくやひめ　木花開耶姫【名】大山祇神の女にして、瓊々杵尊の后神なり。富士の淺間神社にまつらる。

このもかのもに　此面彼面に【副】「ここなた、かなたに」などの意。古今集「筑波山、このもかのもに、陰はあれど、君が御陰に、ます陰はなし」。

このゑあつまろ　近衛篤麿【名】舊公家、現に學習院長、貴族院議長、公爵たり。

このゑいへひろ　近衛家熙【名】基熙の子。攝政關白太政大臣。元文元年十月薨す。家熙、文を好み茶を嗜む。吾樂軒、昭々堂、盧舟子などの號あり。

このゑふ、近衛府【名】皇宮に近く警衛する武官の府。いにしへ、大將、中將、少將、將監、將曹の四等の官あり。各左右に別れて、左近衛、右近衛といひ、略して左近、右近ともいへり。

ごは　五覇【名】支那周の末に、諸侯の不逞を攻め、天子を貴ばしめしものを覇者といひ、これ五人ありし故、五覇といふ。齊の桓公、晉の文公、秦の繆公、楚の武王、宋の襄王なり。

こはふげん　古法眼【名】土佐元信をいふ。

こはしやうぞく　強裝束【名】衣の棚を強くして、着用の時に折目正しく、稜（カド）あるやうにせしもの。烏羽帝の皇子源有仁（花園の右大臣）の始められしなりと傳ふ。

こばたのさとに、うまはあれど　小幡の里に馬はあれど【句】拾遺集に「山科の、小幡の里に、馬はあれど、徒よりぞくる、君をおもへば」とあり。

こばたやま　木幡山【名】山城國宇治郡宇治村大字木幡にあり。藤原冬嗣の墓をはじめ、有名なる墓たり。

こはる　小春【名】陰暦十月をいふ。せうしゅんを見よ。

こびつのゑ　小櫃の繪【句】小さき櫃に繪をかきて、童の玩弄にせしもの。土佐日記に見えたり。

こひねがはくは　庶幾、庶乎、希、冀【副】請ひ願ふ義。庶幾はチカシと訓じ、及ばずながらも、なるべく近くしたき義なり。孟子「王庶幾無二疾病一」。庶乎は、たゞ庶とのみもかく。庶幾に同じ。冀は欲也、望也と注して、何事をか望む意。希はマレと訓す。まれなることの出來るやうに願ふ意。

ごふ　御封【名】また、封戸、食封ともいひて、一品親王八百戸より、從三位三百戸に至るまで、各官位に應じて差等あり。此の戸を、其の人に賜ひて、其れより納むる田租の半を調庸とを、其の人の所得となさしむるためのもの。

ごふうじふう　五風十雨【句】書言故事、「太平氣象則五風十雨」とあり。かぜえだをならさすを見よ。

こふく　鼓腹【名】はらつづみ。食足りて身の休まりをるをいふ。「太平の民は鼓腹す」などは、動詞とせるなり。

ごふくわ　業火、劫火【名】火災なり。印度の傳說に、世界の滅却する時に大火災起りて、悉く燒失すといへるにとれり。また、嗔恚の甚しきをいへり。

こぶしんぐみ　小普請組【名】德川幕府の時の役名。三百石以下二百石以上の非職の者を以て組をなせり。此名稱は、もと、老人また幼者にして、常に勤仕せざるものの、營中、其の他に小普請ある時、奴僕に、家人を添へて役を助けしに起れり。

こふづ　國府津【名】相摸國足柄下郡國府津村。東海道鐵道停車場の所在地で、南は海に濱し、北は山を背ひ、海水浴にも適すれば遊客多し。大磯と小田原との中間に在り。

ごぶのだいじようきやう　五部の大乘經【句】華嚴經、大集經、大品般若經、法華經、大般涅槃經をいふ。

こぶんしんぽう　古文眞寶【名】書名。宋の黄堅の原選、明の林以西の增補せるにて歷代の文章を集めたるもの、前後二集あり。

こぶれい　忽必烈【名】支那の人名。蒙古より起り、宋を亡して、國號を元と改む。かくて、燕に都して、年號を至元といひしは、我が文永元年にして、其の帝位に即ける至元十七年は、わが弘安三年に當る。當時なほ、宋の遺臣文天祥等、屈せずして元に抗しき。忽必烈の來寇に就きては、弘安の役を見よ。

こべん　顧眄【名】省みること。ふりかへり見ること。首を回すこと。大に回すを顧といひ、少し回すを眄といふ。曹植の書「左顧右眄謂レ若レ無レ人、豈非二君子壯志一哉」。

ごへん　御邊【代】貴殿、そなたなどいふに同じ。對稱人代名詞。

こぼ 鉇鍔【名】ひのし（熨斗）。金屬にて作り、中に火を入れて、布の皺をのばす器。

こほう 戸部【名】民部省の唐名なり。我が國の民部省は、支那の戸部省に當れり。故に、我が民部を戸部ともいふ。新井白石の折焚柴記に、其の舊主民部少輔土屋利直を指して、戸部と書ける類なり。

こぼん 虎賁【名】賁は奔と同義。虎の如く奔るとの譬へにて、勇猛の士をいふ。また天子を守る兵の稱。史記「戎車三百乘、虎賁三千人、甲士四萬五千人」。

こまきのえき 小牧の役【名】天正十二年、徳川家康の織田信雄を援けて、羽柴秀吉と戰ひしをいふ。豐臣氏、不利のやうなりしが、和睦を結びて不一となれり。

こまごめ 駒込【名】東京市本郷區にあり。もと水戸の駒籠の邸のありし地にて、今の第一高等學校の邊なり。

こまずくねもちなり 狛宿禰諸成【名】國學者。加茂眞淵翁の門人。

こまのはい 護摩の灰【名】いにしへ、旅人の裝をなして道中を徘徊し、他の旅人を騙かして、旅費などを盜むものをいへり。街道に高野聖に扮して、弘法大師の護摩の灰なりと稱して押賣せしより、かく名づけたりといふ。

こまひきわたるもちづきのころ 駒牽き渡る望月の頃【句】十五日頃といふ意。望月は十五夜の滿月をいふ。駒牽きわたるは、古歌によりておける迄の詞なり。もちづきのこまを見よ。

こまぼこ 狛鉾【名】舞樂の名。棹を持ちて舞ふ舞。舞曲口傳に「狛鉾、別裝束、中曲、執鉾舞といふ。また、棹の長一丈七寸あり。此の舞は、古人說に、高麗より渡りける時、五色に彩りたる棹にて船をさして渡りけるを見て、舞ひ始めたりと申傳へたり」とあり。其の服裝は、歌舞品目に、「狛鉾、冠（卷纓綾）、袍、褌襠、袴、腰帶、棹一とあり。而して舞樂に用ふる袍は、總べて闕腋なり。褌襠はウチカケと稱す。袍の上に着るものなり。

こみやまないぜん 小宮山內膳【名】名は友信。上州松枝の城主、武田勝賴の臣。勝賴、其の縣を沒入せしが、天正十年天目山の急を聞き、馳せ至りて、遂に戰死せり。

こもい 袞衣【名】こんりよう及びこんべんじふにしやうのふくを見よ。

こんがうせん 金剛山【名】大和、河內の國界にある山。千早村より絕頂まで二十八町あり。

こんかき 紺掻【名】こうや。染物屋。拾玉集「こんかきの、ふこんのあさぎ、せとにほして、ぜによくほるや、この世ならん」

こんぐわいのにん 圖外任【句】將軍をいふ。史記馮唐傳「臣聞上古王者之遣將也、跪而推轂、閫以內者寡人制之、閫以外者將軍制之云々」。閫は門の横木なり。

こんくわん 悃慇【名】志の專一にして誠なること。楚辭「吾寧悃悃款款」。

ごんげ 權化【名】權現といふに同じ。佛が權に化身して、此の世に現れたりといふ意。義林に「權示化形」とあり。天照大御神は、大日如來の權化なりなど、佛者のいふ類、附會の最も甚しきものなり。

ごんげん 權現【名】佛語にして、佛菩薩などの、衆生を濟はんが爲に、權に化身を、此の世に現すといふ意。神佛混淆の時代に、我が國の神社を何權現などいへるも、これに基く。

こんこんと 滾滾と【副】水の涌き流れて盡きぬ有樣をいふ。

ごんしやうじ 權掌侍【名】掌侍の副官。ないしのじょうを見よ。

こんじやうのいろ 紺青の色【名】空の如き青色をいふ。紺青は群青に同じ。繪具の色名。

こんじやうのめんぼく 今生の面目【句】此の現世にての名譽。こんじやうのめいぼくとも訓む。

こんじやくものがたり 今昔物語【名】書名。六十卷あり。このうち、日本の部三十卷、普通世に行はる。和漢古今の雜話を記せるものにて、每篇とも、今は昔の冒頭をおきたれば名とす。源隆國の著と傳ふ。

こんせき 痕跡【名】あと。そのめじるしとなるあと。「痕跡をとどめず」など。

こんぜさくひ 今是昨非【句】過去の過ちを、今悟れるをいふ。莊子「始時所是、卒而非之、未知今之所謂是之非卒而非」。また、歸去來辭に「今是而昨非」とあり。

こんぜん 軍然【副】齒なきを顧さいふ。韓詩外傳に「太公年七十、齘然而齒墜矣」。

こんだて 獻立【名】料理の取合せなり。膳立に同じ。

こんぢく 棍軸【名】事の心棒なり。

こんどう ゆりしげ 近藤守重【名】通稱は重藏、幕府の與力。信濃の子。性剛腹にして學識あり。寬政十年、蝦夷、北邊を擾すに及び、命を帶びて、北海道より擇捉に渡り、夷人の立てたる標榜を撤して、わが國標を立つ。後に、小普請より書物奉行に轉じ、執政と合はずして、大阪弓矢奉行となり、更に小普請となる。ここに至りて青雲の志を絕つ。文政十二年六月、近江の大溝にて歿す。年五十九。

こんどう よしき 近藤芳樹【名】周防の人、本姓は田中。

藩命によりて近藤家を嗣す。名は宜寧、字は芳樹、通稱晉一郎、寄居子庵と號す。維新の後、宮内省に出仕し、文學御用掛となり、從六位に叙せらる。明治十三年二月歿す。年八十。

こんとん 渾沌、混沌 【名】天地開闢のはじめ、宇宙の未だ定まらざりし體の、形容にいふ語。正韻に「混沌元氣未判也、亦作渾沌」。楊子太玄經に「渾沌無端、莫見其根」と見えたり。また、開通せざる貌にもいふ。莊子應帝「中央之帝爲渾沌」。

こんにふ 溷入 【名】水の濁りて亂入するをいふ。溷は、字書に亂也とも、水濁貌ともあり。

こんぱい 困憊 【名】困み疲るるをいふ。憊は疲勞の極をいふ。

こんぺんにしやうのふく 衮冕十二章の服 【名】衮の衣の名。衮龍の御衣といふもの是れなり。冕は、玉を貫き垂れて飾りたる冠にて、玉の冠といふもの。十二章の御服とは、十二の模樣ある服にて、日月龍虫等の模樣をつけたる緋の御衣。天皇、御即位の時、着御せらる。衮龍を見よ。

こんぽんちうだう 根本中堂 【名】比叡山延曆寺の本堂を根本中堂といふ。北に、多聞天を安置し、南に藏經を置きて、藥師如來中間なる故、中堂といふ。

こんむらごのひたたれ 紺叢濃の直垂 【句】紺にて濃き所、濃き所あるやうに染めなしたる直垂。

こんめいちのさうじ 昆明池の障子 【名】清涼殿の二間と上御局との間に立てられたる障子。古今著聞集、清涼殿の弘廂についたち障子を立て、昆明池を誰かせられたり。其の内に野を書き、片方に小屋形あり。また、近衛司の鷹つかひたるを書けり云々」。昆明池は、支那の漢朝の時、武帝の作られし池。

こんよ 坤輿 【名】地球。易經「地載萬物、如輿」よりいでたり。

こんいよう 衮龍 【名】天子の御禮服の稱。御即位、大嘗會等の大禮に着せらる。色赤くして、日、月、星、辰、龍、蟲、火等の象を繡ふ。衮龍の御衣と稱す。衮冕十二章の服を見よ。

こんろん 崑崙 【名】地名。舊經禹貢の疏に「崑崙は荒服の外、流沙中に在り」と。

こんわんのおとど 近院の大臣 【名】源龍存なり。文德帝の皇子にして、仁壽三年、源姓を賜はる。正三位右大臣に陞り、寛平九年六月薨ず。年五十三。正一位を贈らる。近院の大臣と號す。近院は家の名。

こんゑんきうじやう 渾圓球上 【句】地球上といふに同じ。

こめざ 米坐 【名】しうさを見よ。

こもん 顧問 【名】事を爲すに當りて、顧み問ふべき後見者。相談役。

こもんじよ 古文書 【名】古代の文書。ふるきかきつけ類。

こもりづの 隱水の 【枕】こもりづは、物の下に蔽はれて見えぬ水なれば、下にかけていふ。

こやしなはんとおもへども、おやまたず 子養はんとすれども親待たず 【句】韓詩外傳に「孔子聞器聲甚悲、至則皐魚也。孔子辟車與之言。皐魚曰、吾矣之三矣、少而學三遊諸侯、以後吾親一也。高吾志、聞吾事、君二也。與友厚而小絕、之三也。樹欲靜而風不止、子欲養而親不待也。吾請從是辭矣、立槁而死」。

こゆるぎ 小余綾 【名】おほいそこいそ（大磯小磯）を見よ。

こらうのきば 虎狼の牙 【句】危險といふ義に用ふ。

こらうのくに 虎狼之國 【句】貪りて飽くことなき國にいふ。史記「秦虎狼之國也、有呑二天下一之心」。

こりつ 股慄、股栗 【名】戰慄、震慄などいふに同じ。慴れて身振ひするをいふ。漢書「王則誅二嗣兵首惡一餘皆股栗」。

こりむちう 五里霧中 【句】迷ひ居るをいふ。霧深ければ方角を辨じ難く、行くべき方向を知ること能はざるに譬へいふなり。後漢書「張楷字公超、性好二道術一、能作二五里霧一。時關西人裴優、亦能作二三里霧一」。五里霧中の語は、是れより出づ。

ごりやう 五龍山 【名】肥前國北松浦郡鷹島村にあり。弘安の役に、元兵の據りし所。

こるしか Corsica 【名】地中海中に在る島の名。ナポレオンの生地なり。

ごるじやす Gorgias 【名】人名。紀元前四八五年、伊太利のシシリー島に生れ、三八〇年、セサリーに死す。雄辯を以て著はる。

これたかしんわう 惟喬親王 【名】文德天皇第一の皇子。母は紀名虎の女靜子。太宰帥、彈正尹、常陸太守を經て、上野太守となれり。寛平九年二月薨ず。年五十四。小野の里に居られしを以て小野宮と稱す。親王は、藤原氏の出にあらせられねを以て、帝位に即くことをえず。弟惟仁親王九歳にして、父帝に繼ぎて立つ、清和天皇なり。親王の子を棟貫王といふ。宮内卿となる。

ころすべし、はづかしむべからず 可レ殺不レ可レ辱 【文】禮記に「儒有レ可レ殺而不レ可レ辱也」。

ころんぶす Christopher Columbus. 【名】人名。伊太利セノアに生る。十五世紀の末に、新大陸發見の名譽を荷ひし人。

ころんぼ Colombo 【名】地名。印度の南の島なる錫蘭島中

の一港にして、英國に屬せり。

こわたり 古渡 【名】また、コトカともいふ。何にもあれ、古く舶來したるものをいふ。之に反して、新しく舶來せしものを「新渡」といふ。

こゑ、ききしらんきは 聲聞き知らむ際 【句】眞僞を辨別するとの出來る分際の者。玉の小琴の序歌に「掻き鳴らす、玉の小琴の聲 知りて、よけく惡しけく、聞かむ人もが」。がはがなに同じく希求する意の辭。聞く人のあらんを望む意なり。

ごゑつのおもひ 吳越の思 【句】吳と越とは、支那戰國時代に、最も甚しく相反目仇視せし間柄にして、攻伐なのみ事とせり。是れよりして、互に相敵視するを、「吳越の思」、「吳越の觀」などいふ。

こをおもふこころのやみ 子を思ふ心の暗 【句】後撰集藤原兼輔の歌「人の親の、心はやみに、あらねども、子を思ふ道に惑ひぬるかな」。子を思ふ爲に、賢き親の心も淺はかになるをいふ。

さあ、じよしゆあ、れいのるづ Sir. Joshua. Reynolds. 【名】英國デボン州の人、有名なる畫家なり。西暦一七二三年生れ、一七九二年歿す。

さい 齋 【名】部屋に名づくる號。「書齋」のごとし。また、物忌みをいふ。

さいいふ 采邑 【名】知行、采地。食邑などに同じ。領地のこと。

さいかい 齋戒 【名】物忌みすること。身體を穢にふれぬやうにすること。「齋戒沐浴禱ル神」など。

さいかう 宰衡 【名】宰相に同じ。周公は太宰、伊尹は阿衡たるより、尊稱としていふ。漢書「加二安漢公號一曰二宰衡一」。

さいき 猜忌 【名】人を疑ひそれむこと。

さいぎ 猜疑 【名】人を疑ふこと。俗に、まはり氣。

さいぎ 再議 【名】再度評議すること。

さいぎやうはふし 西行法師 【名】俗名は佐藤義清。藤原秀郷九世の孫、勇敢にして射を能くし、また、和歌に巧なり。鳥羽上皇に仕へて左衛門尉となる。年二十三にして僧となり、西行と稱し、圓位と號す。建久元年、京に寂す。年七十三。歌集を山家集といふ。また、擇集鈔の著あり。

さいぐう 齋宮 【名】いにしへ、天皇の即位ある毎に、內親王、または女王の、いまだ嫁し給はぬを選びて、伊勢の神宮と、山城の賀茂の社とに奉仕せしめ給ひぬ。共に之を齋王といひ、伊勢なるを齋宮といひ、賀茂なるを齋院といへり。齋宮は垂仁帝の朝に、倭姫命に始まり、齋院は、嵯峨帝の朝に、有智子內親王より始まれり。

さいくん 細君 【名】東方朔の故事によりて、おのが妻をいふ。後世は訛して、「妻君」などとも書きて、他人の妻をいふ尊稱ともす。漢書「歸遺二細君一、又何仁也」。

さいくわい 崔嵬 【名】土砂を載ける石山をいふ。詩經「陟二彼崔嵬一、我馬虺隤」。

さいくわう 西光 【名】藤原師光の法名。後白河法皇の寵臣。曾て、北面の武士たり。平治の亂後、法皇を輔け進らせしが、鹿谷の謀に加はり、事露はれて捕へられ、清盛に殺さる。

さいけい 賽詣 【名】神社、佛閣に參詣すること。

さいげつ、ひとをまたず 歲月不待人 【文】せいれんかさねてきたらずを、見よ。

さいこくりつしへん 西國立志編 【名】英人すまいるす氏の著なる自助論を、(一八六七年發行)、中村正直が、明治三年飜譯に着手し、成功の後、かく名つけしなり。

さいごおゆうじやう　在五中將【名】在原業平なり。阿保親王の子にして、平城天皇の御孫なり。兄行平と共に、在原の姓を賜はりて臣下に列せらる。元慶四年五月卒す。年五十六。

さいさんすれば、なみ、あつまる　財散則民聚【文】大學に「德者本也、財者末也、外ノ本内ノ末爭ヒ民施ノ奪、是故財聚則民散、財散則民聚」と。

さいし　祭粢【名】粢は神に供する米をいふ。左傳「潔粢豐盛」の注に「黍稷曰ノ粢」とあり。

さいじ　蕞爾【形動】小なる貌。左傳「蕞爾國」。

さいじん　細人【名】小人に同じ。後には、間諜、即ちしのびのものごとに用ふ。

さいしんのうれひ　采薪之憂【句】我が身の病氣をいふ。孟子に「昔者有二王命一、有二采薪之憂一、不ノ能ノ造ノ朝、今病小愈」とありて、註に「言三病不ノ能ノ采ノ薪、謙辭也」とあるが如し。

さいしや　宰者【名】事物をつかさどるものをいふ。荷物などなればは宰領といふ。

さいしやう　宰相【名】大政を總理する官をいふ。攝政大臣の通稱。また、參議の異稱にもいふ。史記の陳丞相傳「宰相者上佐二天子一理二陰陽一順二四時一下育二萬民之宜一」。

さいしやう　罪障【名】佛語。罪科ありて、往生の障碍となる意。故に、佛者は常に罪障の消滅に勤むといへり。

さいしゆ　祭酒【名】大學頭の唐名。

さいしやうじ　最勝寺【名】山城國愛宕郡白河にあり。鳥羽院の勅願にして、龜山院再興の寺なり。

さいしよく　菜色【名】人專ら菜を食へば、肌膚青黃となるをいひて、饑ゑたる者の色なり。荀子「禹十年水、湯七年旱而天下無二菜色者一」。

さいせき　載籍【名】書籍のこと。載は事を記載する義。書序の正義に「籍者借也借二此簡一書、以記二錄政事一故曰ノ籍」とあり。史記伯夷傳「失學者載籍極博」。

さいせつ　細說【名】小人の言をいふ。史記「聽二細說一欲誅二有功之人一」。また、詳說の義にも用ふ。

さいたるや　差いたる矢【句】差したる矢の音便。差すは、箙、靫などすべて矢を盛るものにさすなり。

さいち　采地【名】領地に同じ。俸祿なり。

さいど　濟度【名】佛語。人の罪業に迷へるを救ひて、彼岸にわたすをいふ。

さいとうけい　齋藤馨【名】さいとうくだうを見よ。

さいとうさねもり　齋藤實盛【名】別當と稱す。鎭守府將軍藤原利仁の後にして、世々越前の著姓たりしが、實盛に至りて、武藏長井に移る。初、源爲義義朝に仕へ、後に平氏に屬せり。壽永二年四月、維盛に從つて源義仲を北陸に討つ時に、髮鬚皆白かりしかば、すなはち之を染め、壯者に伍して戰ひ、遂に手塚光盛に首級を授く。年七十三。義仲嘗て實盛に養はる。因つて其の舊恩を思ひて、悲泣して之を葬る。

さいとうせつだう　齋藤拙堂【名】名は正謙、又、鐵研と號す。伊勢の人。學を古賀精里に受く。有名の儒者なり。藤堂藩の督學となり、慶應元年七月歿す。年六十九。

さいとうちくだう　齋藤竹堂【名】仙臺の人、名は馨、字は千德、竹堂は其號なり。安積艮齋に師事し、有名の儒者なり。嘉永五年閏二月歿す。年三十八。續史籌議、竹堂文鈔等を著す。

さいとうひこまろ　齋藤彦麿【名】可怜、葦の假庵、宮川舍などの號あり。石州濱田の藩士。國學者にて、本居宣長の弟子。安政元年三月江戸に歿す。年八十七。

さいはい　儕輩【名】ともがら。なかま。ともだち。等類。

さいはひ　幸、福【名】福は休也、善也、祥也と注し、運のよきをいふ。幸は、しあはせ。

さいばら　催馬樂【名】神樂歌の類のうたひもの。

さいび　齋樞【名】書齋の軒なり。

さいふ　西府【名】太宰府をいふ。

さいみやうじにふだう　最明寺入道【名】北條時賴なり。

さいもん　柴門【名】柴の門にて、貧者の門をいふ。後漢書「于是柴門絕二賓客一」。

さいらうみあにあたる　豺狼當路【文】狼や山犬のごとき大奸物が、要地に立ちて、政事を執るをいふ。後漢書「豺狼當路、安問二狐狸一」。

さいわか　幸若【名】舞の一派。桃井直常の後裔直詮、童名幸若丸といふ者の舞ひ初めしものといへり。爾後、其の子孫、越前に住して業を傳ふ。其の曲すこぶる能に似たり。藥器を用ひず。カウワカともいふ。

さいをうがうま　塞翁馬【句】支那の北邊なる塞に近く住める翁ありて、馬を飼ひけるが、馬見えずなりしに、其の馬、やがて多くの馬を引きつれて歸れり。かくて、翁の子、馬より落ちて不具になりぬ。其の後、國に軍事起りて、壯兵皆徵せられて、軍に死にたるに、此の子は不具なりとて、家に止められて命を全うしたりといふは、淮南子に見えたり。されば、禍福常なきを譬へて「人間萬事塞翁が馬」といへり。

さうあみ　相阿彌【名】名は眞相。鑑岳、はた、松雪齋の號あり。足利義政に仕へ、造庭、書畫、詩歌、茶などに通ぜる人。

さうか　草加【名】地名。武藏國北足立郡にあり。甲佳の北。

さうかい　滄海【名】青海。大海。

さうがい　窓蓋【名】まどおほひ。窓かけ。

ふ義。全唐詩話「欣然操ㇾ觚染ㇾ翰」。

さうさう 草創 【名】事を起す初をいふ。はじめ。はじまり。草は略の意、創は造の意にて、創造粗略なりさの義よりしていふ。論語「稗諜草ニ創之一」。「草創之際」。

さうさう 草草 【副、形】怱怱に同じ。急遽の狀。いそいで。そまつに。杜甫の詩句「聞君適ニ萬里一、取ㇾ別何草草一」。

さうざう 想像 【名】推想して、胸底に像を畫く意。楚辭「思舊故ニ以想像兮一」。

さうざうし 寂寂 【形】物淋しき意。騒がしきをもいふは別の語なり。

さうさうのへん 滄桑の變 【句】神仙傳より出でたる語。さうでん、うみとなるを見よ。

さうじ 莊子 【名】支那の古代の道家。名は周、周梁王、齊の宣王と同時代の人。その學説はざろなく、その説老子に基きて、虚無を以て主眼とせり。莊子三十三篇を著す。

さうし 曹子 【名】くらうおんさうしを見よ。

さうしうのゆめ 莊周の夢 【句】莊子齊物論に「莊周夢爲ニ胡蝶一、栩栩然胡蝶也。自喩適ㇾ志與、不ㇾ知ㇾ周也。俄然覺、則蘧然周也。不ㇾ知ㇾ周之夢爲ニ胡蝶一與、胡蝶之夢爲ㇾ周與」とあり。

さうしずみ 曹司住 【名】曹司とは部屋をいふ。己が部屋に退きて、休息し居るをいひ、また、部屋住と同義にて、一家の主人とならざるものをもいふ。

さうしん 爭臣 【名】君をよく諫むる臣。忠諫の臣といふに同じ。

さうじもの 精進物 【名】精進中に食ふ食物をいふ。せちみを見よ。

さうじやう 相生 【名】支那の理學の語にて、木火土金水の五行に基き、木より火、火より土、土より金、金より水、水より木を生ずとの原則を建つ。之を相生と名け、その反對に、木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に剋つものとして相剋と名け、世界は、すべて此の五種に基くものと假定せしなり。されば、人の生れ年によりて、木の性、火の性などいひて、陰陽家は、人の運、不運をも說けり。

さうしや 湿者 【名】玉篇に「水調ニ粉麪一也」とあり。菓子や饅頭の類を作る時、粉をこねる者をいふ。

さうしよ 草書 【名】書の一體にて、張旭の創むる所。また一說に、齊の相杜操が作る所なりともいへり。

さうせい 蒼生 【名】人民をいふ。書言故事に「晉謝安、爲ニ司馬、朝士皆途、中將高崧曰、安石不ㇾ出、將ㇾ如ニ天下蒼生一何云々」。

さうせい 裝齊 【名】荷物の中に入れて携へ行くをいふ。字典に「行道所ㇾ具也」。

さうせつ 草竊 【名】草野の竊盜の義にて、書經に「殷罔ㇾ不ニ小大一好ニ草竊姦宄一」とあるに基く。こせこせどろぼうをもいふ。

さうせん 蒼仙 【名】古き仙人の稱。

さうそつ 倉卒 【名】倉皇に同じ。漢書「前書倉卒未ㇾ盡ニ所懷一」。

さうづ 三頭 【名】字音の音便。馬の尾の附根（ソケヂ）の上の所をいふ。

さうづざん 象頭山 【名】印度の山。佛典に出づ。之に象りて、讃岐國琴平神社のある地をも象頭山といふ。

さうてん 蒼天 【名】春の天をいふ。萬物皆蒼蒼然として生ずるによる。爾雅「春爲ニ蒼天一」。

さうでんうみとなる 桑田海と成る 【文】世の變遷しやすきにたとふ。唐詩選の代ㇾ悲ニ白頭一翁一の詩に「已見松柏摧爲ㇾ薪、更聞桑田變成ㇾ海」。また、長安古意に「節物風光不ニ相待一、桑田碧海須臾改」とあり。また、神仙傳に「麻姑謂ニ王方平一曰、吾自ニ接待一以來、見ニ東海三爲ニ桑田一」ともあり。

さうとう 蒼頭 【名】兵卒の青帽を冠れるもの。戰國策に「魏有ニ蒼頭二十萬一」などあり。後世は、番頭、手代の義に用ひたり。

さうどうしう　曹洞宗【名】禪宗の一派。ぜんしうを見よ。

さうどく　騒ぐ【動カ四】騒ぎ立つるをいふ。增鏡、小弓、雙六などおもしろき事まで、思ひ思ひに勝負をさうどきあつるも、いとおかしう御覽じて云々」。

さうとつあたたかならず　竈突不暖【文】「孔席不レ暖、墨突不レ黔」の故事より出でたるにて、奔走に暇なきをいふ。突は烟突なり。

さうはく　糟粕【名】かすのこと。爾雅釋名に「酒滓曰レ糟、浮米曰レ粕」とあり。學者が、先聖の說をのみ事とするを「糟粕を嘗む」などいふ。

さうひ　臧否【名】よしあし。臧は善なり。詩經「於二乎小子一未レ知二臧否一」。

さうほ　巢父【名】人の名。きよいうの條下に出づ。

さうぼうのこころざし　桑蓬之志【句】宿年の志、宿志などの意。こは、禮記時義に「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射二天地四方一者男子之所レ有レ事也」とあるより出づ。

さうまい　草昧【名】世の開けはじめをいふ。易屯卦象に「天造草昧」とありて、正義に「草曰二草創一昧曰二冥昧一、言天造萬物於草創之始、如レ在二冥昧之時一也」と釋せり。

さうまう　草莽【名】草むらの茂れるをいふ。また、朝廷に對して、民間といふ意に用ふ。「草莽の臣」など。

さうまうのしん　草莽之臣【句】仕へずして野に居る者。孟子に「在レ國曰二市井之臣一、在レ野曰二草莽之臣一、皆謂二庶人一」とあり。國は國都なり。

さうもくきはみおちて、かりみなみにかへる　草木黃落雁南歸【文】しうふうおこつて、はくうんさぶを見よ。

さうもん　桑門【名】沙門に同じ。世を遁れたるもの。僧侶をいふ。文選「展季桑門、誰能不レ營」。

さうゆ　桑楡【名】日暮をいふ。後漢書「失二之東隅一收二之桑楡一」。また、日沒の意よりして、西方の義にも轉用せり。

さうよう　蒼蠅【名】あをばへと稱するもの。古來、讒者に比へていふ。詩經「營營青蠅止二于樊一、凱弟君子、無二信二讒言一」とあり。その羽聲の清聒にして、然も食物などを害するよりいふ。

さうようをにくむふ　憎蒼蠅賦【名】歐陽修の文にして、また、讒者に比して之を憎めるなり。

さうれき　槽櫪【名】槽は馬の食器、櫪は厩の板敷又は馬飼桶をいふ。「槽櫪の間に朽ち果つ」などいふは、志は高尚なれど、賤しきものにて一生を終ふることなり。

さかいた　逆板【名】鎧の背の上部に附きたる板をいふ。古制の鎧は、背を風むる時のくつろぎに、上部を一寸ばかり明くやうに逆板を設けたり。其の中央に總角の總を附けたるも、逆板の上にあがらぬやうに、おもしとしたるなり。

さかきばらよしの　榊原芳野【名】號は琴洲、江戸の人、國典に精し。明治の初年太學に出仕し、後に文部省に仕ふ。那珂通高等と、古事類苑を修す。明治十四年十二月歿す。

さかさかし　賢々【形】勝れたり。心賢し。怜悧なり。

さかし　賢【形】かしこし。勝れたり。上手なり。巧なり。

さかた　きんとき　坂田金時【名】源頼光の四天王の一人。力萬人に超ゆ。頼光卒して後、行方知らず。

さかた　けいげん　阪田警軒【名】儒者。名は丈平、警軒はその號。備中の人。阪谷朗廬の甥にして安井息軒の門人。曾て衆議院議員に擧げられ、後、慶應義塾、高等師範學校の講師となり、四五年前、世を去れる人なり。

さかのうへ　たむらまろ　坂上田村麿【名】刈田麿の子。身長五尺八寸、身重二百一斤あり。もし之を輕くすれば六十四斤に至る。容貌魁偉、膂力あり。延暦中陸奥出羽按察使兼陸奥守、鎮守府將軍となりき。又、征夷大將軍となり、陸奥を鎭して殊功あり。藥子の變に勅を奉じて三關を固む。正三位大納言に進み、弘仁二年薨ず。年五十四。從二位を贈らる。

さかのみかたち　釋迦の御形【句】釋迦如來の像。

さがのらん　佐賀の亂【名】明治七年二月一日、江藤新平、島義勇等、征韓、攘夷を名として、亂を佐賀に擧げ、縣廳を攻む。朝廷、大久保利通をして、鎭撫せしめ、野津鎭雄をして、討たしむ。終に平らぎて、江藤、島等斬らる。

さかほこ　逆鉾【名】神代にありし鉾の名。「天の逆鉾」は、日向の霧島山の嶺に在り。

さかまさをみ　坂正臣【名】名古屋の人。國學者なり。現に、華族女學校教授にて、また、御歌所の寄人たり。

さかん　盛、隆、熾、昌、壯【名】さかりの音便。盛は衰の反對にて、盛り最中の意。隆は中央の高きなり。くぼきの反對。熾は、火の燃え上がる如くに、勢のさかんなるをいふ。昌は、次第にさかんになるをいふ。壯は、氣力のさかんなる意。「年壯氣銳」。

さかもぎ　逆茂木、鹿砦【名】敵兵を防ぐ爲に、枝ある木を逆に立てて、籬の如く結ひたるもの。

さかもと　はおらうた　坂元八郎太【名】奮鹿兒島藩士。海軍に入り、明治廿三年少佐に進む。同二十七年九月十七日、黃海海戰の際に、赤城艦長たりしが、奮戰して敵彈に斃る。年四十一。

さかやき　月代【名】つきしろともいふ。今はさかいきといふ。額より頭の頂まで剃りたるをいへり。轉じては、單に頭

髪を剃るを、月代をそるなどいへり。

さかわ 酒匂 【名】相州足柄下郡にある地名なり。

さかわこざん 坂井虎山 【名】漢學者。名は公實、字は華、通稱百太郎。安藝の人なり。幼時、家貧なりしを以て、自ら薪水の勞をとりて、其の親を養ひ、且書き且讀めり。嘗て人に謂ひていはく、吾れ離騷を誦すること一遍にして、米すなはち續ぐと。嘉永三年歿す。年五十三。

さき 先 【名】先拂、先を追ふなどの先なり。「先を追ふ」とは、貴人の通行のときに、前驅のもの、聲をあげて、前に行く人を拂ひのけて、道を清むるをいふ。されば「前高らかに追ふ」などもいへり。

さきに 乃者、曩者 【副】まへに。むかし。もと。漢書「乃者我使ㇾ諫ㇾ君也」の注に「乃者猶ニ曩者一」也とあり。

さきに 嚮に、向に 【副】嚮は昔なり。向は鄉ともかきて、先刻といふに同じ。

さきんずれば、すなはち ひとをせいす 先即制ㇾ人 【文】先手になれば、敵を自由にするを得(ウ)といふ意。史記項羽本記に「會稽守殷通謂ニ項梁一曰、江西皆反。此天亡ㇾ秦之時也。吾聞先即制ㇾ人、後則爲ㇾ人所ㇾ制」。

さきもり 防人 【名】天智帝の時に、防人の兵士を、筑紫、壹岐、對馬におきて、外寇に備ふ。大寶に至りて、太宰府に屬して防人司あり。諸國の兵士を分遣交番せしめたり。其の後、或は筑紫人を遣し、或は專ら東國の兵士を遣したることもあり。仁明帝の頃に至りては、大に停廢して遂に全くその跡を絕つに至れり。

さきやま 佐紀山 【名】大和國添下郡の地名。萬葉集に、元興寺(ガウジ)僧の歌に「春日なる、三笠の山に、月も出でぬかも。佐紀山に、さける櫻の、花の見ゆべく」とあり。出でぬかもは、出でよかしと希求する意をふくめたり。僧の傳は詳ならず。

さく 裂、割、剖、劈 【動ヵ四】裂は引きさくこと。「裂ㇾ布」「裂ㇾ口」。割は刀にて切りさくこと。「割腹」。剖は折ること。中より二つにすること。「剖ㇾ符」。劈は裂き破ること。「劈耳」。

さくがく 錯愕 【名】甚しく驚くこと。驚き惶つること。

さくご 錯誤 【名】あやまり。かれとこれと入りちがひて、誤れること。錯は交錯なり。

さくさく 嘖嘖 【副、形】口口にいひ傳ふること。また、大聲を發して叫ぶこと。柳宗元の文「譊浮嘖嘖」。

さくしや 作者 【名】書物を作り著す人。著述家。著作家。著者。また、演劇を作る人。狂言作者。滑稽小説を作るものを戯作者などいふ。

さくじる 抉 【動ラ四】差し出で、事をするをいふ。小賢しき振舞。

さくせつ 錯節 【名】ばんこんさくせつを見よ。

さくせんけいさく 作戰計畫 【句】戰鬪をなすべき計策を立つるをいふ。

さくぜんと 索然と 【副】面白みのなき狀をいふ。「興味索然たり」など。

さくそう 錯綜 【名】錯は入り交ること。綜は、總て之を挈ぐること。二語熟して、上り下り、高低のある意にて、左右上下入り交るをいふ。易經「參伍以變錯ニ綜其數一」。

さくなみ せいりやう 作並清亮 【名】舊仙台藩主伊達家の家扶にて現存の人。

さくなりぬらし 狹くなりぬらし 【句】せまくなりたるやうなりの意。

さくばく 索寞 【副、形】寂寞に同じ。さびしく荒れたる樣をいふ。「天索莫たり」など。

さくまけい 佐久間啓 【名】次條を見よ。

さくましやうざん 佐久間象山 【名】名は啓、信州松代の藩士。性豪邁にして、濟世を以て任とす。嘉永六年、米艦來航のとき、門人吉田松陰の事に座して獄に下され、九年にして宥を蒙り、元治元年京都に赴く。當時、攘夷の說盛なる中に、象山ひとり、開港を主張して志士に忌まれ、七月遂に京に刺さる。年五十四。礫卦は其の著なり。

さくまどうがん 佐久間洞巖 【名】名は義和、字は叡、また太白山人、容軒などと號せり。仙臺侯の儒臣。元文元年二月十日歿す。年八十四。

さくまもりまさ 佐久間盛政 【名】尾張の人。父は盛次、織田信長の臣。母は柴田勝家の妹なり。小字は修理、土俗尤と稱す。信長の命を以て勝家に仕へ、尾山の城主となる。天正十一年勝家の先鋒として、中川清秀を賤が嶽に襲ひて之を斬りしが、遂に秀吉の襲撃を受けて捕へらる。

さくめい 策名 【名】策は簡策なり。己の名を君の策に書して、臣たる義を明にするをいふ。左傳「策ㇾ名委ㇾ質、有ㇾ貳避也」。

さくらがは 櫻川 【名】常陸國筑波山の麓を流るゝ川なり。櫻樹多し。後撰集に、紀貫之つれよりも、春べになれば、櫻川はなの波こそ、間なく寄すらめ」。謠曲にも櫻川といふあり。

さくらがをか 櫻が岡 【名】東京市上野公園の西隅、不忍池に臨める高丘なり。こゝに府社東照宮あり。德川家康を祀る。

さくらそうごらう 佐倉宗五郎 【名】下總印幡郡の人。本姓は木内氏。其の佐倉の領主たる堀田正信の時、其の臣權を弄して賦稅を重くせしより、農民其の苦に堪へず、屢〻これ

を哀訴しけれども聞かれず。宗五郎、すなはち一身を犠牲に供し、江戸に出でて、寛應三年十二月、將軍家綱に直訴し、不敬の罪を以て遂に磔刑に處せらる。

ささくら 櫻井【名】地名。播津國三島郡島本村大字櫻井は、楠公父子訣別の地。三河國碧海郡櫻井村は、永祿六年に、松平家次一向宗の徒に與して、家康に背きし地。大和國磯城郡櫻井町は、奈良鐵道にて、故傍の御陵および多武峯に詣づる人などの下車する地。

ささくらのじろ 櫻尾城【名】安藝國佐伯郡にあり。

ささくを、ねあくのうちにめぐらす 策を帷幄の中に運らす【句】ちうさくをねあくのうちにめぐらすを見よ。

ささけ 鯷、鮭、鰌、水豚、石桂魚【名】東北地方の海に產す。秋末、川に溯りて子を生む。狀、鰷に似て大なり。

ささは、てんのびろく 酒者天之美祿【文】びろくを見よ。

ささへのさくら 左近の櫻【名】紫宸殿の御階の前の左にあり。右にある橘を右近の橘といふ。左近衛陣の遣戸なればいふ。また、南殿の櫻、南殿の橘ともいへり。

ささごろものがたり 狹衣物語【名】書名。六卷あり。狹衣の大將といへるを主人公とせる小說。作者は、紫式部の女大貳三位。

ささえ 竹筒【名】酒を入るゝ器。辨當などいふ意にも用ふ。

ささかま 鷦鷯【名】はやしにやどるささきを見よ。

ささき かうし 佐々木高志【名】伯爵佐々木高行の二男にして、現に海軍大尉たり。

ささきげんざうひでよし 佐々木源三秀義【名】其の先は源義親王より出づ。父は秀定。保元の亂に、義朝に從ひて白河殿を攻む。平治の亂に、義朝東奔するにあたり、追兵急なりしかば、秀義力戰して之を郤く。後、平氏に屬するを肯しとせず、屢々子定綱、盛綱を遣し、賴朝を候問せり。賴朝兵を擧ぐるに及び、弟經高、盛綱、高綱等主ざして功を建つ。秀義近江に入り、甲賀郡の兵を發して、平軍を大原坂に邀へて奮戰し、矢に中りて死す。時に年七十三。

ささきしらう 佐々木四郎【名】名は高綱。秀義の子。驍健にして膽略あり。源賴朝に、石橋山の軍に從つて大功あり。壽永三年、源義仲を京に討つさき、賴朝の駿馬生唼を賜はりて、宇治川の陣に先登の功をあらはす。後、高野山に入りて、僧となり、了智と號す。

ささき たかつな 佐々木高綱【名】前條を見よ。

ささきたかのり 佐々木高行【名】高知藩士。維新の際に功あり。現に、樞密顧問官、伯爵たり。又、皇女常宮、周宮の御養育掛を掛ね。

ささき たかより 佐々木高賴【名】近江の人。父政賴に繼ぎて大膳太夫となる。應仁の亂に、山名宗全に與し、爾來足利氏に背く。後土御門天皇崩御のとき、葬費を獻じて昇殿を聽さる。永正十七年八月卒す。

ささきのぶつな 佐々木信綱【名】號を竹柏園といふ。父弘綱は伊勢の人。其の跡を繼ぎて、現に東都の歌壇に聞ゆ。

ささなみの 樂浪【枕】ささなみやともいふ。近江國の滋賀大津などの地名にかけて枕詞とす。また滋賀の一名なりともいへり。もと琵琶湖邊の地を「サヽナミノクニ」などいへるが故なるべし。

ささぶね 笹舟【名】笹の葉にて造れる小さき舟。小兒の遊びにするごときなり。夫木集、うなゐ子が、流れにうくる、笹舟の、とまりは、冬の氷なりけり」。

ささぼこ 棧敷、假床【名】さんじきともいふ。物見などのとき、床を高く造り構へたるところ。

ささぐも 差含、差掬【動マ四】涙を催すこと。

ささしつさに 差次に【副】次々に。その次に。

ささしなから、とほきをしる 座しながら遠きを知る【文】淮南子に「孔子之明以小知大、以近知遠、通二于論一者也」とあり。俗諺にも「歌人は居ながらにして、名所を知る」ともいへり。

ささしば 篠【名】えい(篠)を見よ。

ささしもぐさ 差焉草【動カ四】批難す、揶揄すなどの意。

ささしもの 指物【名】戰場などにて、鎧の背の、受け筒に指しかざして、目標とせし小旗の如きもの。

ささしゅ 叉手【名】兩手の指を組むこと。柳宗元の詩、入郡勝常折、逢人手盡叉」。

ささながに 流石、遖【副】しかしながら。然は思ふものの。何というても。本を失はぬを美めていふ語。

ささらふ 流離【動ハ四】流浪す、漂泊す、寄る方なしなどの意。また下二段にも活く。

ささん 左遷【名】官を、高きより卑しきに貶さるゝをいふ。前漢書諸侯王表に「朝廷之列以右爲尊、故謂二降秩一爲二左遷一」。

ささん 坐禪【名】禪宗の行の名。坐して禪道を修す。俗にあぐらを組むをいふ。

さだ 蹉跎【副、形】時を失ふ貌、歩行困難の貌などにいふ語。楚辭に「驥垂二兩耳一兮中坂蹉跎」。「蹉跎として行く」など。

さだう 左道【名】正しからざる道。漢書「是背二經術一惑二左道一也」。

さだいしやう 左大將【名】左近衛大將の略。

さだす 沙汰【動サ變】定を附く。評判す。始末をつく。

さだむね 貞宗【名】刀劍の名工。初め彦四郎弘光と稱し、また、極彦四郎助眞と改め、正宗の養子となりて貞宗と改む。眞和五郎五十一歲にして歿す。

さたん 左袒【名】味方する義に用ふ。實は、衣の左の肩を脫ぎて、肉を露はすこと。史記「行令三軍中曰、爲二呂后一右袒(爲二劉氏一左袒、軍中皆左袒爲二劉氏一)」とあるによる。

さつき 皐月【名】五月をいふ。後の皐月といふは、閏五月なり。

さつき 殺氣【名】殺伐の氣象。あら〳〵しき樣子。禮記「仲秋之月殺氣浸盛」。

さつきふ 早急【名】字音の音便。極めて急なることをいふ。

さつさつと 颯々と【副】風の聲のやゝ強きを形容していふ語。轉じては、人の風采の勇威なる狀などにもいふ。

ざつじるゐへん 雜事類篇【名】書名。柴眞毅の著。我が國語を、天門、地理、時令、宮室、官職、飮食、人事等十數門に類別して集めたるもの。二卷あり。

さつせい 殺青【名】簡牘なり。かんせいを見よ。

さつたやま 薩埵山【名】駿河國庵原郡興津町の東にある嶺。昔時は、行客のゆきなやみし處なれども、今は汽車の隧道を設け、一睡の間にも過ぐべし。

せつていり 刹帝利【名】正しくはクシヤトリア、略して、刹利(セツリ)ともいふ。天竺四姓の一にして王種をいふ。

さつない 幸奈(さつないはう) **幸震 薩內**【名】十勝國の中央部にある地名。帶廣(オベロベロウ)といふ地と相隣れり。

さつふうけい 殺風景【名】風致を損ずること。風情を殺ぐこと。西清詩話「李義山雜纂品目數十、其一曰殺風景、謂二清泉濯一足、花上曝一裈、背一山起一樓、燒一琴煮一鶴、對一花啜一茶、松下喝道一」。

さつぽろ 札幌【名】北海道石狩國の地名。

さつを 獵夫、獵男【名】獵に用ふる弓矢を、幸弓(サツユミ)、幸矢(サツヤ)といひ、其の獵する人を、さつを、さつびとなどいふ。

さてつ 差跌【名】つまづき。足(ヨルトコロ)據を失して仆ろゝをいふ。事業に失敗するなどにもいへり。後漢書律曆志「無一布二蹉跌一」。

さでん 左傳【名】書名。三十卷あり。孔子の春秋を、左丘明の傳せし春秋左氏傳の略稱。春秋は、魯の史記なり。孔子之を筆削し、名を正し實を顯し、亂臣賊子をして恐れしむ。

さつと 颯【副】さつと。物事の忽に來る(狀)にいふ。

さつとう いつさい 佐藤一齋【名】德川幕府の儒官。名は坦、字は大道、また、愛日樓、老吾軒などの號あり。書は三井親和、經は井上四明、中井竹山等を師とせり。安政六年八月歿す。年八十八。

さつとう しんろん 佐藤信淵【名】出羽國雄勝郡の人。農政經濟に長じ、世に貢獻せし處多し。嘉永三年歿す。年八十二。其の著書農政本論を始め數百種あり。

さつとう せいじつ 佐藤誠實【名】現存の人。文學博士。古事類苑の編修長たり。

さつとう ただのぶ 佐藤忠信【名】さとうつぐのぶを見よ。

さつとう つぎのぶ 佐藤繼信【名】弟を忠信といひ、共に藤原秀衡の近親なりしが、治承四年、義經平泉を出でて、賴朝の許に赴くとき、兄弟共に、秀衡の命を受けて義經に隨ひ、常に戰功あり。鎌田盛政、同光政と共に四天王と稱せらる。繼信は、屋島の戰に義經に代りて、能登守教經に討たれ、忠信は、義經の吉野に落つるとき、踏み留りて僧兵を防ぎ、逃れて京都に入りしが、後に糟谷有季に圍まれて自殺す。

さつとう なほかた 佐藤直方【名】通稱は五郎左衛門、字號共になし。備後福山の人。山崎垂加の門に入りて、其の高足と稱せらる。享保四年歿す。享年七十一。

さとさこさは、さなはさとうあり 敏き時は即ち功あり【文】事を爲すに敏なれば、何事にても功ありとの意。論語陽貨篇に「敏則有レ功」とあり。

さどのろん 佐渡院【名】順德天皇。承久の亂に佐渡に遷され給ひしによりて稱し奉る。

さとみのたらう 里見太郎【名】里見冠者ともいふ。新田義成なり。

さとわ 里曲【名】里といふほどの意。曲は、「浦わ」「くるわ」などのわと同じく、一區域をなしたる所をいふ。

さとをさ 里長【名】大寶の戶令に「凡以二戶五十戶一爲レ里、每レ里置二長一人一」。

さながら【副】其のまゝに、ちやうど、などの意。

さなぎ 蛹【名】蠶の繭の中にて化したる時をいふ。羽化して蛾となるべきもの。

さなへ 早苗【名】稻の苗をいふ。其の苗を、苗代より田に移し植うるを「早苗取る」といひ、早苗植うる少女を「早少女(サヲト)」といふ。

さにづらふ 狹丹頰赧【枕】赤く匂ひやかなる意。いろ、ひも、もみぢなどにかけていふ。

さにぬりの 丹塗【句】さは添へたるのみ。丹塗といふに同じ。赤く塗りたるをいふ。萬葉集「さにぬりのおほはしの

上ゆ、紅の赤裳すそひき云々」。

さぬきのみん 讃岐院【名】崇徳上皇。保元の亂に讃岐に遷され給ひしを以てなり。

さね 實【副】じつに、まことに。などいふに同じ。「さね多し」「さねあらじ」など。

さの 佐野【名】上野國群馬郡佐野村。高崎の近くにあり。佐野の船橋とて、古くより歌に多く詠めり。萬葉集「上野の、佐野の船橋、取りはなち、親はさくれど、我はさかるがへ」。佐野といふ地名は、大和にも和泉にも下野にもあり。萬葉集「くるしくも、降り來る雨が、三輪が崎、佐野のわたりに、家もあらなくに」は大和のなり。

さのみはとて【副】さのみは、然ばかりの義。さての上にある詞の省かれたるものなれば、前後の關係によりて、其の意種々に變ずべし。「然ほどにもあるまじ」「そんなにいふべきでもあるまい」など。

さのれうはく 佐野了伯【名】越前守昌綱の子。初め修理大夫と稱し、剃髪して天德寺了伯といへり。兵法に通じ槍をよくせり。秀吉、佐野、および足利の地十二萬石を與ふ。了伯、すなはち兄宗綱の女に婿を迎へて、其の封を與へ、兄の家を嗣がしむ。慶長六年七月歿す。年四十四。

さば 散飯、生飯【名】膳の飯を少し取りのけて、神佛に供へたるをいふ。

さはだとうかう 澤田東江【名】姓は源・名は鱗（字は文龍、東江、來禽堂、青羅叟、王島山人等の號あり。通稱は文次郎。江戸の人にて、書に巧なり。寛政八年歿す。年六十五。

さはに 多に【副】さくさんに。多く。

さばへなす 五月蠅なす、青蠅なす【枕】なすは如くといふ意にて、五月頃の蠅は、多く群りてうるさく騒ぐものなれば、騒ぐにつづけて用ふ。萬葉集「五月蠅なす、さわぐ舍人は、白妙に、衣とりきて云云」。また、「青蠅なす聖」などいひて、騒がしき小人輩を嘲罵するにもいふ。

さばれ【句】さもあらばあれの略。

さび 瑳尾【名】瑳は細、尾は小なり。微弱なさいふに同じ。詩經「瑳兮尾兮、流離之子」。

さびつきげ 宿鶴毛【名】馬の毛色の名。月毛のやゝ黑ばみたる色。

さふ 左府【名】左大臣をいふ。

さぶさは 寒風澤【名】陸前松島の一島村なり。一に寒澤島に作る。居民百餘戸あり。松島八百八島と稱するうち、宮戸島につぎて第二の大島なり。宮戸の西六町餘にあり。

さふしき 雜色【名】侍の、いまだ位階なく下賤にて召し使はるゝ者。貞丈雜記に中間よりした、馬屋の者より上なる由見えたり。元來位階あれば、其の位階相當の定色の衣服あり。位階なき者は、それにまぎれぬ色を着る故にいふなりとぞ。武家にては、之をザツシキ（雜式）と呼びて、警固の事などを掌らしめたり。足輕の如き賤しき從卒なり。

さふやく 雜役【名】種々の仕事。いろ〳〵のやく。下賤の仕事。

さべう 可然【副】さるべくなり。それ〳〵、相應に、などいふ意。

さほひめのこころづくし 佐保姫の心盡【句】佐保姫は、春を掌る神として、春の花の樣々に咲き出づるを、然いへり。佐保姫の心を盡して、美しく匂はせたる由なり。

さま 狹間【名】隙間（スキマ）をいふ。また、矢間（ヤザマ）をもいふ。やざまを見よ。

さみす【動サ變】非難す、輕蔑す、などの意。

さん 贊【名】文章の一體。其の德を賞揚したるもの。

さんいつ 散佚、散逸【名】散り失すること。紛失することと。

さんうんかふうにつき 棧雲峽雨日記【名】書名。明治九年、竹添井井（進一郎）が、清國内地を漫遊せし時の紀行。

さんかいめいさんづゑ 山海名產圖會【名】書名。五册あり。我が國々の名產を集めて、圖説したるもの。木村孔恭の著。寶曆十三年の出版なり。

さんかん 三韓【名】今の朝鮮の地。國初の君長を檀君といふ。周の初に殷王の遺族箕子を封ぜり。それより傳位四十一世、百四十四年にして燕の衛滿に逐はる。衛氏三世にして漢武帝に滅ぼされ、是より全國三分して、馬韓、辰韓、弁韓となる。これを總稱して三韓といふ。

さんき 纂記【名】系譜をいふ。ツギアミ。

さんぎ 參議【名】官名。朝政に參與して、邦治を觀察するを任とす。四位以上の人を充つ。宰相は、その唐名。

さんきん 參勤【名】德川幕府の制に、諸大名、總べて江戸に邸宅を構へ、隔年に參府せしをいへり。

さんきんかうたい 參勤交代【名】諸侯が交る〳〵參勤するをいふ。

さんぐう 三宮【名】太皇太后宮、皇太后宮、皇后宮を申す。之に准ずる待遇を臣下に賜はることあり。准三宮といふ。

さんぐん 三軍【名】三萬七千五百人の軍勢。ろくぐん參照。

さんぐん 參軍【名】軍事に參與する官。

さんくわう 三皇【名】周禮に出でたり。支那古代の皇帝、即、太昊伏犧氏、炎帝神農氏、黃帝軒轅氏をいふ。

さんくわうべう 三光鋲【名】兜の鉢の三所に打ちたる鋲

たいふ。

さんくわん　散官【名】職務のなき官をいふ。

さんくわんのくに　三關の國【名】いにしへ、鈴鹿の關、不破の關、愛發（アラチ）の關を三關といへり。故に、三關の國とは、伊勢、美濃、越前をいふ。

さんげ　懺悔【名】佛語にして、過去の惡業を述べて悔い改むるをいふ。

さんけい、くわうにつく　三徑就レ荒【文】三輔決錄に「前漢蔣詡、字元卿、杜陵人、舍中竹下開三逕、唯故人求仲、羊仲、從レ之遊、皆逃レ名而不レ出」とあるより、隱遁者、又は、挂冠者の門庭を、三逕といふ。就レ荒はあれたること。

さんけい　三景【名】安藝の嚴島、丹後の天の橋立、陸前の松島を合せていへり。

さんげん　懺言【名】佛語。懺は悔過、また、追悔と譯す。過非を悔ゆるなり。

さんご　三五【名】十五夜をいふ。禮記「月生三五而盈、三五而闕」。また、物の數の稀少なるにいふ。詩經「嘒彼小星、三五在レ東」。

さんこう　三公【名】支那にて、太師、太保、太傅をいふ。わが國にも之に擬し、太政大臣、左大臣、右大臣をいふ。

さんこう　三后【名】三宮に同じ。

さんごく　三國【名】支那の漢末に起りし、蜀、吳、魏の三國また、高麗、百濟、新羅をもいふ。

さんごく　慘酷　殘酷【名】殘忍といふに同じ。むごきこと。

さんごくし　三國志【名】書名。支那の魏、吳、蜀三國鼎立時の歷史にて、二十二史の一。六十五卷あり。晉の陳壽の著。

さんごくつうらん　三國通覽【名】林子平の著書。朝鮮、琉球、蝦夷等の地誌を明にす。著者の意は、他日、外國と事あるに當りて、應變の參考に供せむためなり。

さんごやちゆう、しんげつのいろ　三五夜中新月色【句】白樂天が、八月十五夜に禁中に宿直して、月に對して遠方にある友人元愼を懷ひて詠ぜし詩句。次の句「二千里外故人心」とあり。和漢朗詠集にも出せり。故人は、ふるくよりの友人をいふ。

さんさい　三才【名】天地人をいふ。才は裁にて、萬物を制裁する義よりいへり。易經「有二天道一焉、有二人道一焉、有二地道一焉、兼二三才一而兩レ之、故六」。

さんさい　山寨【名】盜賊などの、山中にて住する所。山に築きしとりでなり。

さんさく　散策【名】散步に同じ。佐變に活きて動詞となる。

さんざふらふ　さん候【句】然に候ふの音便。「さやうで御座る」といふ意。謠曲におほく用ひられたる語。

さんさん　毿毿【副、形】毛の長き貌。

さんさんくど　三三九度【名】婚禮式の獻盃のかず。三度づゝ三度取りやりすること。また九こんともいふ。

さんさんごご　參參伍伍【副】三人五人と相連れて行く狀にいふ。說文「三相參爲レ參五相伍爲レ伍」。

さんざんのてい　散々の體【句】甚だ見苦しき有樣。

さんしすゐめい　山紫水明【句】山水の風光の美なるを形容したる語。

さんじふさんげんだう　三十三間堂【名】本名は蓮華王院。京都東山阿彌陀峯の麓にあり。長承元年、鳥羽上皇、此の地に三十三間堂を建てゝ一千一軀の佛像を安置せらる。長寬元年、後白河上皇、更に建立したまふ。今の堂は、火災後、文永三年の建築なり。

さんじふろくけい、はしるなじやうさくとす　三十六計、走爲二上策一【文】戰爭に當りて計策は多けれども、彼是と考へて躊躇せんよりは、走るが安全なりとの義。北史に「王敬則曰、檀公三十六策、走是上活計」とあるに本づく。

さんしん　斬新【名】きはだちて新しき意。蘇東坡の詩に「斬新一衆含二風露一」とあり。「斬の字は、正に其の新を形容す。解すべからざる間にあり」と、遯齋詩話に見えたり。

さんじやう　驂乘【名】陪乘なり。乘車の法、尊者、左に在り、御者中に居り、また、一人、右にありて傾斜に備ふ。之を驂乘といふ。戎車の時は、車右といふ。驂は三なり。左傳「納二閻職之妻一而使二職驂乘一」。

さんじやうめ　三城目【名】奥州白河の地名。

さんしやく　參酌【動サ變】參へ酌みて物事を處分すること。後漢書の曹褒傳論に「漢初天下創定、朝制無レ文、叔孫通頗採二禮經一參二酌秦法一、雖下適レ物製レ時有レ救二崩敝一、然先王之容典、蓋多闕矣」。

さんしやをさく　三舍を避く【句】謙退することゝ。また、辟易することにいふ。左傳に「若以二君之靈一得反二晉國一、晉楚治レ兵遇二於中原一、其辟レ君三舍」とあり。師の行くには、一日、支那の三十里にして舍る。すなはち、三舍は九十里にして、君の軍に遇はゞ、三日路を引き退かむとの意。

さんしゆのじんき　三種神器【名】八咫鏡、草薙劍、八尺瓊曲玉を申す。天照大御神より、天孫瓊々杵尊に授け給ひたる神寶にして、天皇陛下の天位に即き給ふ璽とす。鏡は、石凝姥命の鑄給へるものにして、今は伊勢神宮に齋かれ給ひ、劍は、初め天叢雲劍と申しけるを、日本武尊東征のとき、

駿河にて草を雍ぎ給ひしより改れる名にて、今は尾張の熱田神宮に齋かれ給ひ、曲玉は、今もなほ、御璽として天皇陛下の、御身近くいつかせ給ふものなり。

さんしよう　攅竦【名】攅は聚なり。竦は聳なり。山などの峰々の連續して聳ゆるをいふ。

さんしょうだいふ　三庄太夫【名】貞享年中、大阪天滿に、油屋五郎左衞門といふ者ありしが、放逸無慚にして、下人を責め仕ふこと獄卒の如し。世人異名して山椒大夫といひき。俗談にいふ三庄太夫は、之に基きて作れりといふ。

さんしょく　蠶食【名】蠶の桑葉を食ふ如く、國を次第次第に奪ふことをいふ。史記の刺客列傳に「秦日出二兵山東一以伐二齊楚三晉一、稍蠶食諸侯一、且レ至二於燕一、燕君臣皆恐二禍之至一」とあり。

さんしょごんげん　三所權現【名】くまのさんざんを見よ。

さんすゐめいび　山水明媚【句】山水の風景の美はしきをいふ。

さんせい　三聖【名】禹王、周公、孔子をいふ。

さんせい　參政【名】政事に參與するものをいふ。わが國にても、攝關に次ぎて、政事に參與するものを、然よべり。

さんせき　三蹟【名】小野道風、藤原佐理、藤原行成を、書道の三蹟といふ。

さんぜのしよぶつ　三世の諸佛【句】三世は過去、未來、現在をいふ。三世に三千の佛ありと佛教に傳へたり。

さんぜん　燦然【副、形】笑ふ貌。粲は米の精白なるものなれば、笑ふ時、齒の白く見ゆるよりいふ。穀梁傳「軍人皆粲然而笑」、また漢書「周道粲然復興」は、鮮明の貌。また、きらびやかなどの意。

さんぞく　三族【名】父と、母と、妻との族をいふ。

さんぞん　三尊【名】彌陀如來と、其の脇に立ちたる觀音、勢至の二菩薩とをいふ。

さんだい　三代【名】支那の夏、殷、周の三代をいふ。

ざんだのつるぎ　斬蛇劍【名】漢の高祖が蛇を斬りし名劍。漢書「駕出則一人負二傳國璽一、操二斬蛇劍一乘輿」で、また、支那に斬蛟の劍あり。呂氏春秋に見えたり。

さんちゆうのぞくをやぶるはやすく、しんちゆうのぞくをやぶるはかたし　破二山中賊一易、破二心中賊一難【文】王陽明が薛侃に與ふる書中に出でたる語。書は、王陽明全集にあり。

さんちゆうれきじつなし　山中曆日なし【文】唐詩選に、太上隱者の詩に「偶來二松樹下一、高レ枕石頭眠、山中無二曆日一、寒盡不レ知レ年」。

さんでうだいじん　三條右大臣【名】藤原定方。ふちはらみつより、を見よ。

さんでうさねとみ　三條實美【名】實萬の子、舊公家なり。明治三年太政大臣となり、後また内大臣となり、總理大臣となり、二十四年二月、内大臣正一位大勳位公爵を以て薨ず。年五十五。

さんでうのみや　三條宮【名】以仁王をいふ。また、高倉宮とも稱せり。

さんねん、ちちのみちをあらためざるを、かうといふべし　三年無レ改二於父之道一可レ道レ孝【文】論語に出づ。

さんば　酸痲、酸麻【名】痛みしびるるをいふ。脚の麻痺して歩まれぬなどにいへり。

さんはかせ　算博士【名】むかし、大學寮に、紀傳、明經、明法、算の四道ありしうちの、算道の極上官なり。

さんばし　棧橋【名】岸より水上に突出したる橋にて、船客の上陸、或は貨物などを陸上げする爲のもの。

さんばふふとうそう　算法統宗【名】書名。明の汝思甫の著。算學の書。吉田兆由、この書に依りて學び、大に得る所ありきといふ。

さんばふ　懺法【名】阿彌陀懺法、法華懺法などありて、一種の節調をつけて讀誦す。破戒の者もこれによりて懺悔し、改過遷善する義なりといふ。

さんび　酸鼻【名】可愛想に思ひて哀み痛むこと。高唐賦「孤子寡婦寒心酸鼻」。

さんぴ　饗婢【名】飯たき女。爨は炊なり。

さんぴつ　三筆【名】嵯峨天皇、弘法大師、橘逸勢を、書道の三筆と稱す。

さんふかう　三不幸【句】程伊川曰く「人有二三不幸一。少年登二高科一一不幸。賴二父兄之勢一爲二美官一二不幸。有二高才一能文章一三不幸也」。

さんぷう　杉風【名】人名。氏は杉山、名は元雅、鯉屋藤右衞門といひ、江戸深川の魚商の元締なりきといふ。芭蕉の門に入り俳を學ぶ。享保十七年六月歿す。年八十六。

さんぷく　三伏【名】夏の極暑の候をいふ。初伏（夏至の後の第三の庚）、中伏（第四の庚）、末伏（立秋の後の初庚）の三にわけたれば、この稱あり。漢書「伏日詔賜二從官肉一」とあるは、三伏の日なり。

さんぶしふ　三部集【名】書名。三部假名抄といへり。歸命本願抄、西要抄、父子相迎の三部を合せたるもの。共に、淨土宗鎭西派に相傳せる淨土念佛の法義を述べたる書。著者は鎭西派の名僧向阿。向阿は、是心、又は證賢ともいひて、龜山帝の弘長三年に生れ、光明帝の貞和元年に寂す。年八十三。

さんぶん 散文【名】韻文に對して、普通の文章をいふ。英語の Prose なり。韻文とは、また散文に對して、韻をふめるもの、すなはち詩歌の類をいふ。

さんふらんしすこ Sanfrancisco【名】北米合衆國の西岸にある要港。太平洋鐵道、および太平洋汽船によりて、東洋諸國、濠洲、歐洲に連絡する樞要の處なり。横濱より航程四千九百三十浬。日本人の在留するもの多し。

さんまい 三昧【名】梵語にして、平等正受正定の義。心を定めて動かさぬをいふ。其より轉じて、物事に傾き耽るをいふ。「贅澤三昧」など。また、京都の方言として、墓地をいふ。晝言故事に「得二妙所一謂二三昧一。坡詩多用二三昧字一。大凡物皆有二三昧一。謂二其妙處一也」。

さんまいかぶと 三枚甲【名】兜の錣（シコロ）を、三枚に重ねたるもの。

さんみ 散位【名】官職なくして、位のみあるをいふ。

さんもん 山門【名】寺の門。また、比叡山延暦寺を、特にいへる稱。延暦寺は、天台宗の總本山なれば、只に、山門、また、山とのみいふときは、常に叡山をさすことゝなれり。これに並びて、三井寺を寺門と稱す。

さんようすゐさう 山容水相【句】山のかたち、水のすがた。

さんらん 燦爛【副、形】きらびやかにうつくしきをいふ。詩經に「角枕粲兮、錦衾爛兮」。

さんり 山里【名】膝の下の外がはの、漸く凹みたる處。灸穴なり。

さんりようし 山陵志【名】書名。二卷あり。歴代の御陵を、漢文にて考證記述したるもの。蒲生君平の著。

さんりようしう 三稜洲【名】河川の上流より土砂の流れ來りて、河口に於て堆積して、陸となれるものをいふ。英語の Delta なり。

さんゐ 散位【名】サンミと發聲す。さんみを見よ。

さめい 佐命【名】新に國主となるべき君を佐けて、功業をなす人物。李陵の書「佐命立功之士」。

さめがゐ 醒井【名】近江國坂田郡の地名。柏原を去る一里半。番場を去る一里餘。中仙道の一驛なり。

さめづか 鮫柄【名】刀の柄を鮫の皮にて卷けるもの。鮫の皮は色白く粒々あり。大粒なるは柄を卷き、小粒なるは鞘を卷きて、其の上を塗り込めたるもあり。

さやかに【副】分明に。はつきりと。「さやかに澄める秋の夜の月」など。又「寥亮（サヤカ）に」は、音の冴えたるにいふ。

さやく 鎖鑰【名】門戸の鍵の如き肝要なる場所。宋史の寇準傳に「準出、主上以二朝廷無事一、北門鎖鑰非レ準不可」。

さやのなかやま 佐夜の中山、小夜の中山【名】遠江國小笠原郡にあり。日坂と金谷との中間の坂。また、サヨノナカヤマとも呼べり。

さらいのしよく 嗟來食【句】嗟來は、ああ來いと鄙み呼ぶ辭。いやしみ呼びて與ふる食物をいふ。禮記「予唯不レ食二嗟來之食一」。

さらそうじゆ 沙羅雙樹【名】沙羅は、梵語にして高遠と譯す。印度に一村あり、樹木高く聳え、他林に超えたり。四方に二本づゝ樹並び立ちて特に高し。釋尊、此の樹林にて入滅す。時に其の双樹、各合して一樹となりて垂れ覆ひ、忽にして白色に變じて枝葉枯悴せりと、涅槃經にいへり。されば、「沙羅双樹の花の色」などいひて、盛なるもの、必ず衰ふる例にいへり。ぎをんしやうじや參照。

さらでだに【副】然あらずしてだにの意。さうでなくても。

さらぬてい 然らぬ體【句】それとなき樣子。そしらぬ顔つき。なんともなき狀。

さらぬわかれ 然らぬ別【句】不時の別れ。思ひかけぬ別れ。尋常ならぬ別れ。死に別れ。在原業平の母、長岡といふ處に住みけるが、或るとき、業平に「老いぬれば、さらぬ別れの、ありといへば、いよいよ見まく、ほしき君かな」といひやりければ、業平、馬にも乘りあへず、母のもとに參るとて「世の中に、さらぬ別れのなくもがな。千代もと祈る、人の子のため」と詠みけるよし伊勢物語に見えたり。この歌ども古今集にも出でたり。

さらひ 浚【名】四段活用の動詞の、名詞となりたるもの。内にあるものを取りあぐること。掃除すること。また、復習すること。

さるがく 猿樂、申樂、散樂【名】種々の滑稽を演ずる舞樂。後には、音樂、舞曲を備へて演ずるに至れり。今の能樂のもとにして、能の狂言に類するもの。されば、今日の能を、猿樂と稱することもあるなり。

さるさはのいけ 猿澤の池【名】大和國奈良市にある池の名。拾遺集に、さるさはの池に、采女の身を投げけるを見て、人麿、「わぎも子が、寢くたれ髮を、猿澤の、池の玉藻と見るぞ悲しき」。このこと、大和物語にも見えたり。

さるしま 猿島【名】相模國三浦郡に屬し、横須賀の沖にあり。

さるたづき 然る便宜【句】たづきは、便宜、方便、たより、よるべなどいふ意の名詞。さるたつきは、然るべき便宜、相應のつて、ふとした緣故、などいふ意。

さるべきにやありけむ 然る可きにや有りけむ【句】然あるべき事であつたかして。さるべき前世の約束であつ

たか。

さるまるだいふ 猿丸太夫 【名】人名。歌人なり。傳詳ならず。三十六歌仙傳には、元慶頃の人かといへり。或はまた、山背大兄の三子弓削王の別名なりともいへり。古今集に「奥山に、紅葉ふみわけ、なく鹿の、聲きくときぞ、秋はかなしき」とある、讀人不知の歌は、猿丸太夫歌集に出でたり。

さるものひにうとし 去る者日に疎し 【文】文選古詩「去者日以疎、來者日以親」とあるよりいづ。去者は、死者なり。其の容貌を見ざる故、益、疎くなるとの意。

さるものにて 然るものにて 【句】然あるものにして。それはそれとして。いふまでもないことにして。もとよりのことにして。勿論にして。

さわさわと 爽々 【副】さつぱりと。きれいに。

さわらび 早蕨 【名】わらびに同じ。山に生ふる草。芽出のときに取りて食ふ。

さをとめ 早少女 【名】田を植うる少女をいふ。さるを、若き婦人の義に用ひたるなどの見ゆるは、誤りなり。

さをはうがつ、なみのうへのつきを 棹は穿つ波の上の月を 【文】漁隱叢話に賈島が詩「棹穿波底月。舡壓水中天」の句あり。

し

し 志 【名】紀傳體歷史に、本紀列傳の外に、殊に一部として、天文、地理、刑政などの事を述べ誌したるもの。

し 矢 【名】弓矢の矢は箭。また、矢は屎と同字にて大便をいふ。サ行變格に矢すと活用したるは、脫糞すること。

じあい 自愛 【名】自分の身を大切にすること。

しゆう 雌雄 【名】雌は女性、雄は男性にいふ語。轉じては、勝負の義にもいふ。「雌雄を決せん」など。

しいうさつき 周遊雜記 【名】書名。一册あり。今を去ること十餘年前、矢野文雄が海外を周遊したる時の雜記。

しういつ 秀逸 【名】物ごとの優れたるをいふ。

しうがう 秋毫 【名】すこしばかりといふ意に用ふ。「秋毫の末を察す」「秋毫の汚穢を止めず」など。

しうこうきんをとかす 衆口鑠金 【文】大勢の口よりいふことは、事實に非すとも、事實とせらるとの意。文選「衆口鑠金、積毀消骨」。

しうさい 秀才 【名】學生をいふ。唐書選擧志「其科之目有二秀才一。自後士人通稱謂二之秀才一」とあり。また、學才の秀でたる者。大學寮を卒業したる文章得業生をもいふ。貢擧參照。

しうさう 秋霜 【名】しものつろぎを見よ。

しうさくぐわ 繡錯畫 【名】五采を施して色どりたる繪。ぬひとり繪。

しうざん 崇山 【名】高山といふに同じ。崇は高しと訓す。

しうしうと 啾啾と 【副】鳴聲をいふ。ひそ〳〵と泣く聲。

しうしきざくら 秋色櫻 【名】東京市上野觀音堂後の井のほとりにある櫻をいふ。江戸の俳人秋女、十三歳の時、此の櫻を見て、「非の端の、櫻あぶなし。酒の醉」と詠めり。寛永寺の門主、これを秀逸拔群となし、屢々秋女を召して俳諧を弄し、名を秋色と賜ふ。よりて、此の櫻を秋色櫻とよぶ。秋女、姓は大目氏、堀江町の菓子司某の妻なり。享保十年四月十九日歿す。年五十七。菊後亭と號す。其角の門人なり。

しうじゆう 騶從 【名】車駕に從行するものをいふ。騶は、厩御也と說文に見えて、馬の御者、別當などいふもの。

しうすゐ 秋水 【名】秋の水流をいふ。また、刀劍の異名とす。東坡の詩に「十量銅花蝕二秋水一」。菅公の劍銘に「曉霜三尺秋水一條」。山陽の詩に「腰間秋水」などの句あり。

しうせい 銹錆 【名】さび。金屬の酸化して、其の面に生ずるもの。

じうせき 充斥 【名】はびこること。充は滿、斥は大の義、左傳「寇盜充斥」。

しうせつ 醜褻 【名】見にくく、みだりがはしきこと。

しうせん 鞦韆 【名】縄を吊り下げ、其れにすがりて行ふ運動。ブランコ。

しうぜん 愀然 【副、形】愁ふる貌。字書に「容色變也」。

しうそ 愁訴 【名】歎願、哀訴などに同じ。うれへ訴ふること、慈悲を願ふこと。

しうたう 周到 【名】よく行きわたること。綿密、緻密などに同じ。「用意周到」など。

しうち 痩地 【名】地味の悪しき地。耕作に適せざる地。

しうちやう 繍帳 【名】色糸などにて、縫模様したる帳幕なり。曼陀羅などいふ。

しうちやう 繍腸 【名】文才ある人をいふ。また、佳文をいふ。多く、錦心繍腸など、つづけいへり。李伯の送二仲弟令問一序に「紫雲仙李有二英風一焉。吾毎レ見レ之常醉、目レ吾曰、兄心肝五臓皆錦繍耶。不レ然、何開レ口成レ文、揮二朝霧一散也」とあるより出づ。

しうとんい 周敦頤 【名】人の名。字は茂叔、宋の人。舅の鄭向に因りて、仕へて分寧の主簿となり、累官して知南康軍に進む。その人品甚高く、懐灑落なり。神宗の熙寧六年に卒す。道國公に封じ、日元と諡す。

しうなんざん 終南山 【名】支那の山の名。陝西省にあり。

じうのくわ 時雨の化 【句】恩澤、厚き政治、厚き教、などの意にいふ。恩澤、教化などの普く及ぶこと。時雨のふるが如きにたとへたる語。時雨は、望む時に降る雨なり。孟子「君子之所二以教一者五、有下如二時雨化一之者上」。成語考「學業感二師之造成一曰二仰沾一時雨之化一」。

じうびめんゆ 柔媚面諛 【名】媚び諂ふをいふ。

しうふうおこつて、はくうんさふさふ 秋風起分白雲飛 【文】漢の武帝の秋風辭の句なり。次句に「草木黄落雁南歸」とあり。全文は、古文眞寶後集に出でたり。

しうふうのがく 秋風の樂 【名】盤渉調の曲名。秋の調なり。

じうふく 戎服 【名】戎衣ともいふ。軍陣に着用する服。すなはち、甲冑の類。

しうぶざん 鷲峰山 【名】印度の山の名。わしのみやまともいふ。

しうぶん 周文 【名】人名。畵僧なり。等慶、越溪、岳翁、春育などの號あり。江洲の産、京の相國寺に住す。如拙を師として、出藍の譽れあり。應永年中の人。

しうへき 皺襞 【名】皺は、しわ、襞はひだ。或は、山坂の路に高低あるなどを、皺襞ありとも云へり。

しうぼつ 周勃 【名】漢の高祖の忠臣。惠帝の時、呂氏の亂を平け、絳侯となる。文帝の時、右丞相となり、周亞父と稱せらる。

しうみ 臭味 【名】くさき氣。また、一味黨類をいふ。「同臭味の人」など。

しうん 紫雲 【名】紫の雲。吉祥ある時に靡く雲なりとぞ。釋迦の誕生の時、および、涅槃に入るとき、紫雲たなびけりなどいへり。山家集「西を待つ、心に藤を、かけてこそ、其の紫の雲を思はめ」。方丈記「春は藤波を見る。紫雲の如くにして西の方に向ふ」。西の方に向ふは、浄土の方に向ひて匂ふなり。

じうめいもんゐん 修明門院 【名】藤原重子をいふ。後鳥羽帝の后、順徳帝の御母。範季の女。

しうらく 聚落 【名】村落をいふ。博雅に「落、居也」。また、綱目集覽「人所聚居、故謂之村落屯聚」とあり。

じうりん 蹂躙 【名】ふみにじること。前漢書「奔走蹂躙」。なること。

しうれい 遒麗 【名】美をつくしたるをいふ。すぐれて美麗

しえき 祇役 【名】祇は謹み敬ふ意。德川時代に、參勤交代の義に、此の字を宛てたり。「江戸に祇役す」など。

じえん 慈延 【名】天台宗の僧。字は大愚、咄屠庵と號す。和歌和文に長じ、當時、蘆庵、嵩蹊、澄月と、京都の和歌四天王と稱せらる。文化三年七月歿す。

しおん 四恩 【名】佛教の説に、天地、國土、父母、衆生の四恩ともいふ。また、國王恩、父母恩、師友恩、檀越恩ともいへり。

しかい 死海 Dead Sea 【名】小亞細亞高地に在る、鹹水の湖なり。

しかう 司寇 【名】支那古代の官名。刑罰、盗賊などのことを司る。書經「司寇、掌二邦土詰姦慝一刑暴亂一」とあり。

しかう 志行 【名】志操品行をいふ。

しかう 尸佼 【名】人名。漢書藝文志に、尸子二十篇とあり。尸子名は佼、晉の人。秦の商君の師なりしが、商君死して、逃れて蜀に入れりと。

しかく 資格 【名】身分、分限などの義。

しかく 刺客 【名】暗殺を行ふ人。史記に刺客傳あり。

じがくだいし 慈覺大師 【名】天台宗第二世の座主。名は圓仁、下野の人。叡山に入りて傳教の弟子となり、承和五年入唐して、十四年に歸朝す。貞觀六年正月寂す。年七十一。勅して慈覺大師と諡す。

しかご Chicago 【名】北米合衆國有名の都府のある地。ミシガン湖上にあり。

しかすがに 【副】「然しながらに」、「然は云ふものゝ」、などいふ意。さすがにに同じ。

しがのはなぞの 滋賀花園【名】天智天皇の都したまひし近江の都を、滋賀の宮とも、大津宮ともいへり。宮址は、今の大津町の東方廿四五町の所にあり。こゝは、其の花園なり。但し、花園の所在詳ならず。

しかん 鷙悍【名】勇猛なるをいふ。

しかをおふものは、やまをみず 逐レ鹿者不レ見レ山【文】一方に偏する者は、他方の利害を顧ざる譬。淮南子「逐レ鹿者不レ顧レ兎」。又曰「逐レ獸者、目不レ見二大山一」などあり。

しき 式、軾【名】車前の横木。支那の禮に、貴人に遇へば、俯して之に憑ること。ショクとも訓す。

しき 史記【名】書名。支那前漢の世に、司馬談、司馬遷、父子の、著したる歴史の書。黄帝より、漢の武帝に至る迄の事歴を記せり。十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳あり。

じぎ 時宜 時儀【名】俗に禮のことをいふ。禮記「禮從レ宜」て、また「禮時爲レ大」。漢書「元帝已達二時宜一」とあるに本づく。

しきう 梓宮【名】漢書霍光傳「賜二梓宮一」の注に、「以二梓木一爲レ之、親レ身之棺、爲二天子制一、故亦曰二梓宮一」とあり。後世は、天子の御棺を申す。また、おんなきがらをも申す。

し、きうすれば、せつぎをあらはす 士窮乃見二節義一【文】飽明遠の詩句「時危見二臣節一、世亂識二忠貞一」などよりいへるか。

しきじ 職事【名】藏人をいふ。くらうどごころを見よ。

しきしまの 敷島の、磯城島の【枕】磯城島は、大和國の地名にして崇神帝、欽明帝などの、久しく都したまひし地なるより、大和國の總名の如くもなりて、さて、其の大和にかけて枕詞とす。遂には、また、日本國の總名としてもいへり。

しきしまのかなざしのみや 磯城島の金刺の宮【名】欽明帝の宮。大和國磯城郡なれども、其の地詳ならず。

しきしまのみち 敷島の道【名】歌道をいふ。敷島は、もと大和の枕詞なりしが、轉じて日本の別稱となり、遂に歌道に轉ぜるなり。

しきぜん 色然【副、形】おどろく貌。色を變する狀。公羊傳「色然而驚」。

しきだい 式退、色代、色退、式代【名】會釋、あいさつ、などの意。式退を正しとす。

しきでん 職田【名】古、朝廷より、その官職に應じて賜ひし田地。太政大臣四十町、左右大臣三十町、大納言二十町など、田令に見えたり。

しぎの、いまふく 鷸野、今福【名】共に地名、大坂城の東北。河を隔てて相對せり。今の砲兵工廠のある地。

しきのみづがきのみや 磯城の瑞籬の宮【名】大和磯城郡三輪町の金屋に其の址あり。崇神天皇の宮所。

しきび 式微【名】衰微に同じ。詩經「式微（ソレオトロヘツルオトロフ）式微」。

じきふ 自給【名】自活に同じ。後漢書「諸生織レ席自給」。

しきべつ 識別【名】見わくること。

しきみ 樒【名】樹の名。山中に多く自生す。丈高からず、春季に花を開く。その枝葉をきりて、佛前、墓前に供す。葉は抹香を製す。

しきやう 色養【名】顔色を和げて、父母に事ふるをいふ。孔子筆削して、三百篇とせり。

しきやう 詩經【名】書名。支那古代の詩を輯めたるもの。

しきりに 頻、連、荐、累、切【副】頻はたびたびなり。頻と熟用す。連は引きつづきて間のなきなり。「連戰連敗」。荐は連の意にて輕し。草のしげる義。累はかさぬとも訓じて、同じ事のたびたびなる意。切は身を切るほど切なるなり。

しくう 司空【名】支那の古代の官名。土地、及、民事を司る。書經「司空、掌二邦土一、居二四民一、時二地利一」とあり。

しこのみたて 醜の御楯【名】つよきまもり。たけくつよきいくさびと。萬葉集「今日よりは、返り見なくて、大君の、醜のみたてと、出で立つ我れは」。君の御楯となりて、仇なす輩を防ぐ意。

しぐれのおちやや 時雨の御茶屋【名】豊臣秀吉の茶屋の名。

じくわう 慈光【名】太陽の光をいふ。太陽の光線、よく萬物を育し、世に惠を與ふるによりていへり。

しくわん 視官【名】五官の一にて、眼をいふ。

じくわん 寺觀【名】寺のこと。漢書「道宮謂二之觀一」。

しけう 鴟梟【名】鴟は惡聲の鳥。梟は母を食ふ不孝の鳥。不孝の人、不臣の人に譬へいふ。

しげう 繁【副】しげくの音便。

じけうかん 自敎鑑【名】書名。人倫の大要、君治の大道を說きたるもの。明和七年、松平樂翁十三歲の時の著。

しげざうのゆみ 繁籐の弓、滋籐の弓、重籐の弓【名】籐を繁く巻きたる弓。

しこ 指顧【名】ゆびさして見るなり。すなはち、距離の甚近きをいふ。「指顧の間に在り」など。

しご 枝梧、支吾【名】支へ持つこと。また、くひちがひ、さからふ、異議、異存、異論などの意。史記項羽本紀「諸將慴伏敢莫二枝梧一」。

しこう 子貢【名】孔子の弟子。姓は端木、名は賜。其の賢、顔回に次げりと。

しこめ 醜女 【名】黄泉に住ずる鬼女なり。

しころ 錏、錏 【名】兜の後に垂るるもの。頸を被ふ爲のものなり。

しし 子思 【名】孔子の孫。業を曾參にうけ、中庸を作れり。

しし 四至 【名】四方のさかひめ。「天地四至」などいひて、俗に、境内といふと同じ。

しし 施々 【副、形】喜悦自得の狀をいふ。孟子に見ゆ。

ししんちうのむし 獅子心中の虫 【句】佛典の語。身内より災の起るにいふ。獅子は、百獸の王なれば、他より害するものなく、己が身より虫の生じて、おのれを食ひ殺すなりと。

ししてのちやむ 死而後已矣 【句】論語泰伯篇に出でたる曾子の語。

しし 孜孜 【副、形】あつく勤勉すること。「孜々として逸豫なし」などいふ。

ししのじやうず 猪の上手 【句】猪鹿を射ることの上手なり。

ししのたみ 蚩蚩之民 【句】質朴の民。愚民などいふに同じ。蚩蚩は、詩經の注に、敦厚の貌とあり。

ししのまる 獅子の丸 【名】獅子の、相逐うて走る形を、丸くしたる模様。

ししは、こうがくにあるを、わすれず 志士不レ忘レ在二溝壑一 【文】孟子に出でたり。志士は、常に、壑の上ならぬところにて死ぬ覺悟ありとの意。次句、勇士不レ忘レ喪二其元一とあり。勇士は、戰闘して其の首をうしなはむことを念ひて、敢へて死を顧ずとなり。

ししまふ 逡巡 【動八四】立ちさまよふこと。神武紀に棲遑を「シシマヒテ」と訓めり。進退谷まりての意。

ししん 四箴 【名】視、聽、言、動の四つにつきての戒めなり。

ししんき 四神旗 蒼龍旗、朱雀旗、白虎旗、玄武旗をいふ。天皇御即位の時に、紫震殿の前に立つるもの。

ししや 紫麝 【名】麝香なり。其の色によりていふ。麝といふ獸より取れる香料。

ししやう 詞章 【名】詩歌文章の類をいふ。

ししやう 司城 【名】支那の官名。司空のこと。宋の武公の名を司空といひし故、これをさけて司城といへり。其の後、人の姓ともなれり。

ししやう 泗上 【名】地名。泗水のほとりなり。

ししやうしかん 司城子罕 【名】人名。宋人、玉を得て之を子罕に獻ず。子罕受けず。其の人曰く、之を玉人に示せしに至寶なりといへり。故に之を獻ずといふ。子罕答へて、我は、玉を以て寶とし、汝は玉を以て寶とす。然るに、今我れ汝の賄を受けば、俱に其の寶を喪ふといふべきなりといひて、遂に受けざりきといふこと、左傳に見えたり。

じじやく 自若 【副、形】平常の如くにて、かはらぬをいふ。「自若として動かず」など。

じじゆ 二豎 【名】病氣のこと。左傳「晉侯疾病求醫於秦、秦伯使醫緩爲レ之。未至公夢、疾爲二二子一曰、彼良醫也。懼傷レ我爲。逃レ之」とあり。

しじゆう 施從 【名】俗に、見えがくれに、あとをつけ行くこと。孟子「施二從良人之所一レ之」の注に、「邪施而行、不レ使二良人知一也」。

じじゆうでん 仁壽殿 【名】內裡の紫宸殿の後にあり。もとは、天皇の常の御座なりしが、後に、御座は清涼殿に徙し給へり。

ししゆく 私淑 【名】其の人となりを慕ひ、其の人の行に倣ひて、己が身を善くすること。孟子「予未レ得爲二孔子之徒一也。予私淑諸人」。

ししゆのたから 錙銖の寶 【句】少許の寶なり、錙、銖、共に秤量名、正字通に「古人言較二量錙銖一謂二輕微一也」。

じじゆん 耳順 【名】六十歳をいふ。論語「六十而耳順」。漢書「至於耳順之年履二折衝之位一」。

ししよう 刺衝 【名】刺激に同じ。つきおこすこと。はげますこと。

じしよく 耳食 【名】眞の味を知ること能はざるをいふ。史記「此與二以耳食一無異」。また、世の風說を信ずるを、耳食といふ。

しずる 雌蕊 【名】花の中心にありて、種子を結ぶ機關。子房、花柱、柱頭の三部に分かる。

しせい 市井 【名】市、町。また、町家などいふに同じ。玉篇「穿地取レ水、伯益造レ之、因井爲レ市也」。

しせい 至誠 【名】眞こころ。天性に基きたる純粹のまことをいふ。中庸に「至誠無息、不息則久、久則徵、徵則悠遠、悠遠則博厚」。「唯天下至誠、爲二能盡一其性一、則能盡二人之性一、則能盡二物之性一、能盡二物之性一、則可二以贊一天地之化育一」などあり。

じせい 自制 【名】自己の意志を以て、其の慾情を抑制すること。

しせい、かみのごとし 至誠神の如し 【文】誠意の至れるは、神の如く明かなりといふ意。

しせき 紫石 【名】鑛石の名。紫の雲湧き上りたるが如き班紋ある石。長門國厚狹郡より出づ。

しせき 咫尺 【名】尺度の名。說文に「周制、寸尺呎尋、皆以二人之體一爲レ法、中婦人手長八寸謂二之咫一、周尺一也」と。轉じて、

は、少距離をいふに用ひ、目前を「咫尺の間」などいへり。

しぜんえんまんのせかい　至善圓滿の世界【句】佛教にて、いはゆる、極樂をいふ。また、此の世にても、未來にありと信ぜられたる、善美完全の時代。

しそく　脂燭【名】松を細くさき、油をぬりて火を點ずるもの。また、紙捻に油をさしても用ひき。蠟燭のなき世には、專ら用ひられしなり。其の脂燭を燈すを脂燭さすなどいへり。

しそつの、そをやめるをいふ　士卒の疽を病めるを吮ふ【文】大將が士卒を愛する例にいふ。支那の春秋の世に、魏の將の吳起といふもの、士卒の疽を病めるをすひたりとそ。史記の吳傳記に「卒有二病疽者一、起爲吮レ之」とあり。疽といふは、腫物の名。癰に似て毒深く、筋骨までも腐るといふ難治の症。

したい　羊齒、薇朶【名】隱花植物なり。ぜんまいに似たり。

したい　耳朶【名】耳たぶ。又、耳をいふ。「耳朶に觸る」など。

したいしゆ　四大種【名】佛教に四大元素として、地、水、火、風をいふ。

したがさね　下襲、下重【名】袍の下に着る服にて、うしろの裾を、長く地に引くやうに製れるもの。位により長短あり。後には、下襲と裾と、別々に仕立つることとなれり。

したがふ　從、順、循、遵、隨【動ハ四】從は逆の反對にて、其の通りに附從する意。從者、侍從などの如し。順は逆の反對にて、其の通りにすなほになりて、逆はぬこと。「孝順」、「順風」など。明通紀「上順二天心一下從二民望一、循は順序の通りになること。「循河而下」など。遵は循に同じ。「遵二先王之法一」。隨は從行する義。「夫唱婦隨」など。

したぐみ　下組【名】したごしらへ。準備。用意。

したしきより、うときにおよぶ　親しきより疎に及ぶ【文】禮記に「禮者所二以定一親疎一」。

したたかに　健【副】甚しく。強く。多く。澤山に。厳しく。

したぐつ　襪、襪子【名】音便にしたうづともいふ。下履の義にて、靴の下に用ふるもの、即ち今の足袋、跚下の類。

したてるひめ　下照姫【名】大國主命の女。天稚彦の妻。天稚彦の死するや、其の友にて、姫の兄なる味鋤高日子根神來り弔す。其の容貌酷だ天稚彦と肖たり。家族誤つて天稚彦蘇生せりとなす。味鋤高日子根、其の不祥を怒りて去る。姫即ち長歌傳はれるものの始なり、といふ。

したのうきじま　信太の浮島【名】常陸國稻敷郡の霞浦の一島。舊名信太郡なればいふ。古くより歌にもよめり。

したん　師團【名】一師團は二旅團より成る。現今、我が國に十二箇あり。之を二都督にて督す。

東部{一、東京。二、仙臺。三、名古屋。四、大阪。七、札幌。八、弘前。}　中部{九、金澤。十、姫路。}
西部{五、廣島。六、熊本。十一、丸龜。十二、小倉。}

したりがほ　誇顏【名】誇りげなる顏付。得意なる樣子。

しち　四知【名】天知、地知、子知、我知なり。楊震の故事に起る。やうしんのしちを見よ。

しお　楊【名】車の轅の端。蹈臺腰掛の類。

じち　自治【名】自分で自分を治むる意。町村にて、各町村長を選擧し、町村會を置きて、其の町村を治むるを自治制といふ。

しちかこのすりやうをふれば、さんぎにはんず　七個國の受領を經れば參議に任ず【文】藤原公任の北山抄に「國司加階事。一箇國從上、三箇國正下、四箇國四位、五個國從上、七箇國可レ任二參議一是常例也」と見えたり。受領は國司なり。

しちくりん　紫竹林【名】支那の天津にある地名。

しちごさん　七五三【名】祝儀の物事に用ふる數。祝儀の膳部にいふは、まづ肴をいだし、酒三度すすめて、膳も銚子も引く。これ一獻なり。此の如く三度出せば三獻なり。一獻毎に、肴をも銚子をも代ふるものなり。三とは即ち、この三獻なり。五とは五獻するをいふ。七とは、七の膳まで出すをいふ。五五三といふも同意なり。いづれも、皆祝して陽數を用ふ。陽氣は物を生ぜしむるにとれり。また、桂連をいふ。

しちざ　七坐【名】七坐とは、絹坐、炭坐、米坐、檜物座、馬坐、千衆積坐、相物坐をいふ。むかし、諸國にありし商店。

しちせい　七星【名】支那の星學の說にして、日月火水木金土の七曜星をいふ。

しちだう　七堂【名】山門、佛殿、法堂、方丈、食堂、浴室、東司、みな備りたる寺。七堂伽藍などいへり。

しちちんばんぱう　七珍萬寶【名】種々なる寶貨といふ意。七珍とは、金、銀、琉璃、車渠、瑪瑙、玻璃、眞珠をいふ。

しちつがん　資治通鑑【名】書名。宋の司馬溫公の著。周の威烈王より、唐末五代に至る千三百餘年間の歷史にして、二百九十四卷あり。

しちでうゐん　七條院【名】藤原殖子。高倉帝の典侍にして、後高倉院（守貞親王）および、後鳥羽帝の御母なり。藤原信隆の女。

しちのくに　自治の國【名】立憲政體の國。立憲政體とは、兩議院の決議には、其の國の皇帝、不裁可權を有せざるを常とす。然れども、我が國の如きは、君主國體にして、立憲政體によるものなれば、普通の自治國とは、自から別なり。

しほのし　七歩の詩【句】魏の文帝、東阿王(陳思王)を召して、七歩の間に一詩を作らしむ。もし成らずば大法に行はむといふ。王すなはち聲に應じて「煮豆燃二其萁一。豆在二釜中一泣。本是同根生。相煎何太急」の詩をなす。文帝は曹操の子、曹丕にして、東阿王は、丕の弟曹植なり。

しほめんざん　七面山【名】甲斐國南巨摩郡にあり。其の一支峰を身延山といふ。久遠寺と稱する寺院は、此の支峰中にあり。

じちゆう　侍中【名】支那の官名。左右に侍し、衆事を贊導し、顧問應對することを掌る。

じちよう　實用【名】律儀(リチギ)などの意。まめやかにて、おとなしきをいふ。伊勢物語「昔、男ありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり」。

しつうはつたつ　四通八達【句】四方八方に、道の通ぜるをいふ。交通の便利を形容していふ語。

しづか　靜【名】人名。京都の白拍子にして、義經の妾となれり。義經の陸奥に奔りし後、靜捕へられて鎌倉に至り、頼朝の命により、八幡の祠前に舞を奏す。その時「しづやしづ、しづの小手卷、くりかへし、昔を今に、なすよしもがな」「吉野山峰の白雪ふみわけて入りにし人のあとぞ戀しき」とうたへり。

しづがうみを　賤が績麻【句】賤の女が績ぐ麻なり。麻を細く裂き縒(ヨ)りて、長く繼(ツ)ぐを績むといふ。「賤が績麻の倦むとき」などいふは、音の似かよひたるより、倦むの序にいへるまでの詞なり。

じつがく　實學【名】實用の學なり。

しづがたけ　賤が嶽、志津が嶽【名】近江國伊香郡伊香具。余吳の二村に跨がれる十町餘の山路なり。さくまげんばもりまさ參照。

しつき　漆器【名】塗物の業は、本邦特殊の長技にして、夙に外人の賞讃する所。蒔繪の今日に傳はりて最古なるは、正倉院御物の聖武帝御劍の蒔繪、次に仁和寺所藏の經卷筥の蒔繪、これは、藤原氏全盛時代初期の製作品とす。

しつきんご　執金吾【名】支那漢の時の官名。兵器を執りて宮門を警護し、非常を防ぐことを掌れり。我が國の左右衛門府の職に同じ。金吾は、銅にて作り、黃金を足に鍍したる棒なり。これを執りて仕ふるを以て名さす。金吾は、又、鳥の名、不祥を避くともいふ。

しづきやま　指月山【名】長門國阿武郡萩町の北端にあり。これ、毛利氏の萩城の地なり。

しづく　沈【動カ四】物の水中に沈みて見ゆるをいふ。また「花のしづく」などもいひて、その色の、水面にうつるをもいへり。萬葉集「水底に、しづく、白玉、誰が故に、心つくして、我が思はなくに」。

しづくのたま　雫の田居【句】雫は地名。常陸國筑波山の麓に雫村といふがありといへり。田居は田圃といふ。萬葉集「草枕、旅の憂を、なぐさもる、事もあらむと、筑波嶺に、登りて見れば、尾花散る、雫の田居に、雁がねも、寒く來なきぬ。云々」。

しづくら　下鞍【名】馬の鞍の下におきて背の部分を覆ふもの。

じつげつ、あきらかならんことほつすれば、ふうん、これをおほふ　日月明ならんと欲すれば、浮雲之を蓋ふ【文】韓非子「日月欲明則浮雲蔽之、河水欲清則沙石濁之」。

じつげつどうのはた　日月銅烏の幢【名】日象幢、月象幢、および銅烏幢の三種の幢。幢は旗の類。日象幢は日中に三足の烏、月象幢は月中に月桂樹と、その兩側に、兎の立てる狀。共に金銅にて鏤造せり。銅烏幢は、三足の烏の銅象を、上につけ、下に幢を垂れたるもの。いづれも、天皇御即位の時、四神旗と共に紫宸殿前にたつるもの。

しつけん　執權【名】鎌倉足利兩幕府の制にして、將軍を輔佐して內外の機務を綜べたる職。

じつごきやう　實語經【名】書名。一卷あり。著者詳ならず。智識道德に關する教訓を、五言一句として、合計九十六句より成れり。

しつこく　桎梏【名】桎は手枷(カセ)、梏は足枷なり。かせとは、鐵または木にて造り、體に施して自由ならしめざるもの。囚人に用ふる具。

しつじつ　疾日【名】子と卯との兩日をいふ。紂は甲子の日を以て亡び、桀は乙卯の日を以て死せり。故に、王者は、此の日、樂をあげずといへり。

しつた　叱咤【名】ふかりつくる。怒りていきまく。「叱咤の聲」など。

じつて　十手、鐵尺【名】捕手(トリテ)の持つ短き鐵の棒。手木といふも同じ。

しつてうじんうんも、およばず　疾鳥迅雲も及ばず【句】非常に、急速なることの形容。「盛弘之の荊州記に「朝發二白帝一暮至二江陵一、其間千二百里、雖二飛雲迅鳥一、不レ能過也」とあるより出づ。

しつぱう　七寶【名】佛經にいふ金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、玻瓈眞珠の稱。また、七寶燒といふ窯物をも略稱す。

しつぱうやき　七寶燒【名】銅器の上にハリガネを用ひて、種々の畫樣を作り付け、五彩のやきもの藥にて、其の隙を填めて燒きなせる陶器。又、シッポーナガシ（七寶ともいふ）。

ふ。

じつぶ 實否 【名】まことと、そらごととの。十訓抄に「たしかに、實否みてまゐりなんやと仰せらるるに」。俗に、ジツヒ。

しつぷうにして、けいさうをしる 疾風知ニ勁草一 【文】艱難に遭遇せし時に、節操の固きを知るとなり。後漢書「光武曰、顚川從レ我者皆逝、而子獨留務レ力。疾風知ニ勁草一」。

しつぷうもくう 櫛風沐雨 【句】風にくしけづり、雨にゆあみする意にて、風雨を冒して事をつとむるをいふ。莊子の天下篇に「昔者、禹之溇ニ洪水一決ニ江河一而通ニ四夷九州一、腓無レ胈脛無レ毛、沐甚風櫛ニ疾雨一置ニ萬國一」とあり。

しづめとも、たからとも 鎭とも寶とも 【句】萬葉集、作者不詳の歌に「なまよみの、甲斐の國、日の本の、大和國の、鎭とも、います神かも、寶とも、なれる山かも、駿河なる、富士の高根は、見れど飽かぬかも」。

しでうだいなごん 四條大納言 【名】藤原公任。また、源定（サダム）（嵯峨帝の皇子）をいふ。

しでう たかすけ 四條隆資 【名】藤原氏。隆實の子、南朝に仕へて、後村上天皇の時、從一位大納言に進む。正平七年、男山の行幸に從ひ、途に戰死す。左大臣を贈らる。

しでのたをさ 死出の田長 【名】時鳥の異名。榮花物語に「早苗植うる、折にしも鳴く、ほととぎす、死出の田長と、うべもいひけり」。

しでのやまぢ 死出の山路 【名】死にて行く山路。死出の山は、冥途といふに同じ。方丈記に「夏は時鳥をきく。語らふ毎に、死出の山路を契る」とあるは、時鳥の啼くを聞く毎に、冥途の道づれとならんことを約束するとなり。時鳥の異名より、死出の山途に鳴く鳥なりといふ諺によれるなり。

しでん 四天 【名】春夏秋冬をいふ。爾雅に、春を蒼天、夏を昊天、秋を旻天、冬を上天といへり。

してんわうじ 四天王寺 【名】大坂市天王寺村にあり。初め、厩戸皇子、守屋を討つに當り、四天王の像を作りて頭髪に藏し、勝たば寺塔を建てんことを誓ふ。すなはち、軍了へて本寺を營み、守屋の家奴田園を、悉く寺領とせられたり。

しと 司徒 【名】支那の三公の一。教育を司る官。書經「司徒掌ニ邦教一敷ニ五典（ノリ）一擾（ナヅク）ニ兆民一」。

しど 志度 【名】地名。讃岐國寒川郡志度村。海濱の一村落なり。崇德天皇の崩御の地。

しとう 廁賓 【名】便所をいふ。かはやなり。

しとく 歯德 【名】高齢の人をいふ。齒は齢に同じく、壽なり。

しとくのあい 舐犢の愛 【句】舐は舌にて物をねぶるなり。犢は子牛。正しく子を教育することをせずして、牝牛が其の子を舐りて愛する如く、只々、其の愛に溺るるをいふ。

しどけなし 【形】亂雜なるをいふ。亂りなり。締りなし。撿束なし。源氏物語「直衣ばかりを、しどけなく着なし給ひて」。

しと、はうをおなじうせん 與レ子同レ袍 【文】一つ着物を着合ふほどの親しき朋友といふ意に用ふ。詩經に、秦の國風、無衣の章に「豈曰レ無レ衣、與レ子同レ袍、王于興レ師修ニ我戈矛一與レ子同レ仇」とあり。

しとね 茵、褥 【名】蒲團。敷物。

しどろに 亂雜 【副】「しどろもどろに」などもいへり。次第なく打ち亂れたる狀にいふ語。しどろに落つるは、亂れ落つるなり。

しなかたち 品形 【名】人品、容貌。

しながは 品川 【名】武州荏原郡品川町。東海道鐵道を、東京より第二次の停車場のある地。

しなさだめ 品定 【名】人、又、物の、よしあしを評するをいふ。品評、批判。

しなせんごく 支那戰國 【名】周の王室衰へて、趙、魏、韓、ならびに、秦、楚、齊、燕の諸侯、國々に割據して、雄を爭ひし時代をいふ。

しなどのかみ 科戸神 【名】風の神。伊弉諾尊の御子に、志那斗辨神（トベ）とて、風を掌り給ふ神あり。この神の御名により

て、科戸の風など、古くよりいへり。

しなん 指南 【名】物を教ふること。黃帝軒轅氏、指南車を作りて、方角を示せるより、道を教ふる義にていふ。文選「予習レ非而遂迷矣、幸見レ指ニ南於吾子一」。

しにても、ほねくちず 死にても骨朽ちず 【文】埤雅に「語曰、人死留レ名、豹死留レ皮。故君子疾ニ沒レ世而名不レ稱焉」とあるより出でたる諺なるべし。

しのぎ 鎬、鎬 【名】刀の身の、背と刃との中間に、高く起れる線なり。「しのぎを削る」とは、刀劍にて烈しく戰ふさまをいふ。

しのだのもり 信太の森 【名】和泉國泉北郡信太村にあり。昔は數十町に滲りし杜のよしにて、歌にも多く詠まれたり。古今六帖に「和泉なる、信太の森の、楠の木の、千枝に別れて、物をこそ思へ」。

しののめ 東雲 【名】ほがらほがらといふ語の枕詞にも用ひ、また、直ちに曉天の意にも用ふ。

しのはら 篠原 【名】地名。近江國栗太郡にあり。野路に次げる東國への街道なれば、歌などには、野路の篠原とつづけたり。十六夜日記「打ちしぐれ、古里思ふ、袖ぬれて、行くさき遠き、野路のしの原」。また、齋藤實盛の戰死せし處も篠原といふ。此の地は、加賀と越前の境にして、加賀の柴山潟の

南方にあり。

しのぶがは 忍川 【名】東京市上野廣小路に架せる三枚橋の下を流るゝ川。

しのぶがをか 忍岡 【名】東京上野の公園地邊の丘陵の汎稱なり。その西なる池を不忍の池といふ。

しのぶぐさ 忍草 【名】蔓草にして、歌などに多く詠めり。古木、軒端などに生ず。葉の幅二三分ありて長五六寸あり。厚くして綠色を呈し、金色の星などあるもあり。

しのぶ じよけん 信夫恕軒 【名】漢學者にて、現に東都に住す。名は槃、恕軒は其の號なり。

しのみやがはら 四宮河原 【名】地名。山城國宇治郡山科村、大字四宮にあり。

しば 司馬 【名】三公の一。軍事を掌る官。書經「司馬掌二邦政一、統二六師一、平二邦國一」。

しばう 資望 【名】人より仰がるゝこと、名望位置などいふこと。

しばう 子房 【名】花の雌蘂の最下部にありて嚢狀を爲し、未成の種子、すなはち、胚珠を包有せる緊要なる部分なり。

しばう 市坊 【名】市街をいふ。坊は、字典に「人所在之里、爲レ坊」とあり。

じばうじき 自暴自棄 【句】みづから我が身を捨つるなり。孟子に「孟子曰、自暴者不レ可二與有一レ言也。自棄者不レ可二與有一レ爲也。言非二禮義一謂二之自暴一也。吾身不レ能二居一レ仁由レ義、謂二之自棄一也」とあり。

しばうのはかりごと 子房の謀 【句】子房は、支那前漢の張良の字なり。漢高祖に從ひ籌策の功あり。高祖、その功臣を封ずるに及び、嚢を帷幄の中に運らし、勝を千里の外に決せしは子房の功なりとて、封じて留侯とせり。この句の意は、帷幄の中に謀を廻らすといふことなり。

しばうはい 四方拜 【名】元日の早朝（寅の刻、今の午前四時頃）に、天皇の、天地、四方、山陵を拜し給ふ儀式。

しばかうかん 司馬江漢 【名】名は峻、字は君岳、谷波樓、又、無言道人と號す。始め浮世繪師、鈴木春信の門に入り、重春と號し、師歿して二世春信と名のる。後、長崎に行き蘭語を學ぶ。また、天文、地理、暦算にも通ぜり。吾が國油繪の祖と稱せらる。文政元年十月歿す。年八十二。

しばぎう 司馬牛 【名】人名。孔子の弟子。論語「司馬牛憂曰、人皆有二兄弟一。我獨亡。子夏曰、聞之矣。死生有レ命。富貴在レ天。君子敬而無レ失。與レ人恭而有レ禮。四海之内皆兄弟也。君子何患乎無二兄弟一也」。

しばくわう 司馬光 【名】人の名。字は君實、溫公と號す。宋の人。仁宗の寶元の初めに進士となり、端明殿學士より累進して、哲宗の元祐元年左僕射となり、門下侍郎を兼ね、其の年卒す。大師を贈り、溫國公に封じ、文正と諡す。學通ぜざるところなく、著述甚だ多し。資治通鑑最も著はる。

しばしば 屢、數、亟 【副】たびたび。俗にサイサイ。但し、亟は早急の義。

しばす 師走 【名】十二月の異名。極月ともいふ。

しばせん 司馬遷 【名】漢の太史にて、史記の著者。字は子長。李陵が事に坐して刑せられ、後許されしが癈人となれり。

しばなく 屢鳴 【動カ四】しばしば鳴くにて、古くよりある詞なり。拾玉集「かぢまくら、いつとなきさの。友ちどり、しばなく聲に、あくるしののめ」。

しばのいほり 柴の庵 【句】木の小枝にて作れる、卑しき家。新古今集西行の歌「いづくにも、住まれすばただ、住まであらむ、柴のいほりの、しばしなる世に」。

しばのほね 死馬の骨 【句】くわくかいを見よ。

しばの りつざん 柴野栗山 【名】名は邦彦、字は彦輔、栗山、古愚、五峰山房等の號あり。讃岐高松の人にて、德川幕府に仕へ、昌平黌の教官たり。文化四年十二月歿す。享年七十二。

しはふ 司法 【名】法律を正しく執行し、違犯を正すことをいふ。俗にいふヤクなり。孟子に「孟子曰、自暴者不レ可二與有一レ言也。自棄者不レ可二與有一レ爲也。言非二禮義一謂二之自暴一也。吾身不レ能二居一レ仁由レ義、謂二之自棄一也」とあり。

しばふかふ 咳ふ 【動ハ四】しはぶくの延びたる詞。咳をするをいふ。

しは、まさに、てんかのうれへにさきだちてうれへ 士當レ先二天下之憂一而憂 後二天下之樂一而樂 【文】范文正公（范仲庵）の岳陽樓記の中にある語。

しばらく 暫、姑、且、少 【副】暫は久しからざるなり。少しの間。姑と且とは時間の意なし。孟子「姑舍二汝所一レ學而從レ我」は、とにかく云々の義。少は少時の時を省きたるなり。少間とも運用す。

しばんこう 司馬溫公 【名】しばくわうを見よ。

しひごと 誣言 【名】誣ひたる詞。然らぬを然なりと枉げていふ。理を非になす。また、譏言の意にもいふ。

しひしば 椎柴 【名】椎の枝、また、椎の樹をもいふ。椎は樫に似て、實は食ふべし。また、喪服を「しひしばの袖」ともいふは、椎は、喪服の染料となるが故なり。

しひつ 試筆 【名】もとは、單に筆を試みるをいひしが、明の頃より、今の如く、歳首に書くをいふとなれるが如し。

しひやう 師表 【名】師範となり、儀表となること。人のてほん。

しふ 集 【名】詩歌文章の類を輯めたる書をいふ。又特に、司ること。又、その府を司法府といふ。

歌集をのみもいふ。

しふ 資斧【名】資本に同じ。もとでの義。

しふ 執【名】執着心、執念、執心などいふ。固く思ひこみて動かぬ心。妄執は、亡者の、此の世に思ひかくる心の失せずして殘れるをいふ。

じふあく 十惡【名】佛典に「殺生、偸盜、貪慾、愚痴、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、瞋恚」の惡しき所行をいへり。十惡をせざるを十善といふ。

しふがいせう 拾芥抄【名】書名。六卷。藤原實凞の著。時令、人事、地理、經史、文筆、言語、飲食など、萬般のことを拾集して、簡單なる説明を施せるものなり。

しぶかは かげすけ 澁川景祐【名】助左衛門と稱す。天保頃の人。德川幕府の天文方なり。新法曆書、曆引、圖編、などの著あり。

しふくせんよりは、ゆうひすべし 雌伏せんよりは雄飛すべし【文】後漢書に「趙溫曰、大丈夫當二雄飛一、不レ可二雌伏一。棄官而去」。

しふしふ 習習【副、形】そよそよと風の吹く音。詩經「習習谷風、以陰以雨」。

しふす 執す【動サ變】執心す。また、取り用ふる意。

じふぜん 十善【名】佛典の語。じふあくを見よ。

しふちやく 執着【名】佛典の語。しふ（執）を見よ。

じふどくは、いつしやにしかず 十讀不レ如二一寫一【文】書物を讀むには、うはのそらにて、數多く讀まんよりは、一度なりとも、心にしめてよむべしとの譬。唐書「朕思、讀十遍、不レ如二寫一遍一」とあるより出づ。

じふねん 十念【名】淨土宗にて、南無阿彌陀佛の六字の名號を信者に授け緣を佛に結ばしむると。「十念を授く」など。

じふはちこう 十八公【名】松の異名。詩韻集成「吳之梓丁固、夢二腹生一レ松、曰、松十八公也。吾經二十八年一、當レ爲レ公矣。後果然」とあるを本とす。

しふぼく 輯睦【名】相和して睦しきをいふ。左傳「晉呂甥曰、君臣輯睦、甲兵益多。好レ我者勸、惡レ我者懼、庶有レ益乎」と。

しぶんせいきん 紫文製錦【名】橋本稻彥が、源氏物語中の佳句を抄錄類聚して、歌文の材料たらしめんとて編纂せるもの。製錦の義は、左傳「子有二美錦一、不レ使下人學上レ製焉」とあるに取れり。

じぶらるたる Gibralter【名】地中海より太西洋に通ずる海峽をいふ。西班牙の南端と亞弗利加のタリフア岬との間にあり。陸上に砲臺の堅固なるあり。英國の治下なり。

じふわうのちやう 十王の廳【名】佛經に、冥府に十人の王ありて、其の十王の政廳なり、十王は、秦廣王、初江王、宋帝王、伍官王、閻羅王、變成王、泰山府君、平等王、都市王、轉輪王。

じへい 時柄【名】時の權柄、權力といふほどの意。

しべりや 西比利亞【名】地名。西はウラル山脈より、東はオコツク海、日本海の海濱にまで廣れる一帶の地は、即、露領シベリヤにして、亞細亞の四分の一を占めたり。

しほがま 鹽竈【名】陸前宮城郡に屬し、仙臺を去ること四里、松島灣に臨めり。浦上に鹽竈神社あり。鹽竈浦、又一名を千賀浦ともいふ。

しほがまに、いつかきにけむ 鹽竈にいつか來にけむ【文】左大臣源融、邸を東六條に營み、河原院といひて、鹽竈の景をうつせり。在原業平こゝに遊びて「しほがまに、いつか來にけむ、朝なぎに、つりする船は、こゝによらなむ」と詠みしこと、伊勢物語に見えたり。

しほぎぬ【名】宇治拾遺物語「しほぎぬの、あを（襖）といふもの着て、帶して、若やかにきたなげなき女どもの」とあるは、打ち萎へたるきぬをいふか。或は織物の一種か。

しほたる 潮垂る【動ラ下二段】潮水にて、海人の袖のぬるゝをいふ。轉じて、淚に袖のぬるゝにも、泣き沈む意にもいふ。

しほづ 鹽津【名】地名。近江西淺井郡にあり。

しほづちのをぢ 鹽土老翁【名】彥火々出見命の、釣針を求めむ爲に、海濱にさまよひ給へる時、この翁道しるべせし由、神代紀に見え、また、神武紀にも見えたり。

しほで 鞍、四方出、四方手、四緒手、鹽出【名】鞍の前輪後輪に、各二所づゝ着けたる紐の根附をいふ。馬の胸繫、尻繫を結びつくる具。

しほどく 鹽解【動カ下二】總て、「しほたる」といふに同じ。

しほどけげに 潮解氣に【副】しほだれさうに。潮に濡れたるやうに。淚の意にいふこと、しほたるに同じ。

しほなわ 潮泡【名】潮の泡の約音。祈年祭の祝詞「皇神能敷座島能八十島者、谷蟆能狹度極、鹽沫能留限」。

しほのや たういん 鹽谷宕陰【名】昌平黌の教官。名は世弘、字は毅卿、通稱は甲藏。慶應三年八月廿八日歿す。年五十九。

しほや 鹽屋【名】鹽を燒く家をいふ。

しまいかん 姉妹艦【名】二つの軍艦の、其の形體、構造相似たるものを互にいふ。蓋は、英語にて、女性名詞たるが故なり。

しまだ 嶋田【名】駿河國志太郡島田町。東海道の一驛。停車場あり。

しまつくれるおほおみ 嶋作れる大臣【句】蘇我馬子をいふ。日本紀推古天皇三十四年五月の條、馬子い薨去を云へ

る條に「大臣薨。仍葬二干桃原墓一。大臣則稻目宿禰之子也。性有二武略一、亦有二辨才一、以恭二敬三寶一、家二於飛鳥河之傍一、乃庭中開二小池一、仍興二小島於池中一、故時人曰二島大臣一」とあり。

しまつ なりあきら 島津齊彬 【名】島津氏廿八世の主にして、齊興の男、薩摩守と稱す。安政五年七月歿す。年五十。明治二年、從一位の贈位あり。久光は其弟なり。

しまばらいつき 島原一揆 【名】寛永十四年、耶蘇教徒四萬人、天草、島原に據りて叛す。幕府大兵を發して之を殲滅したり。この亂、耶蘇教に原因せるを以て、以來、鎖國主義を取り、これより、たゞ和蘭の一國にのみ通交を許せり。

しまんどがは 四萬十川 【名】土佐にあり。また、渡川ともいふ。流域凡二十餘里。源を牛家村に發す。

しみ 紙魚、蠹、衣魚 【名】全身銀色を帶びて、其の尾、魚の形をなせる小虫。書册、衣類などの濕氣のうちに生ず。

しみづ 清水 【名】地名。駿河國安倍郡清水町、東の海灣を清水港といふ。東海道沿岸第一の良港と稱せらる。

しみづかうづけ 清水上野 【名】名は秀康、小田原北條の家臣にして、伊豆下田の城主。

しみづながるるやなぎかげ 清水流るゝ、柳蔭 【句】新古今集夏の部に、西行法師の歌「みちのべに、清水流るゝ、柳かげ、しばしとてこそ、立ちとまりつれ」。

しみづ はまおみ 清水濱臣 【名】通稱玄長、江戸の和學者。醫を業として、不忍池畔に住し、泊泊舍（サザナミノヤ）と號し、また、月齋と號せり。村田春海の門人。文政七年八月歿す。年四十九。

しむ 使、令、遣、敎、俾 【助】皆同じく、さする義なり。但し、敎と遣とは俗語なり。

じん 仞 【名】八尺なり。「深さ千仞」など。

しんえふしふ 新葉集 【名】歌集。二十卷あり。後龜山天皇の弘和元年、中務卿宗良親王の撰。南朝の敕撰集ともいふべきものなり。

しんえふじゆ 針葉樹 【名】植物學上、濶葉樹に對する一種の名。松杉の類、之れに屬す。

しんがく 心學 【名】天明年間に、中澤道二といふものの始めし、一種の道德說にして、神儒佛の說を交へて、卑近に、修身の道を說きたる學問なり。

しんがくいけん 新學異見 【名】書名。正しくはにひまなびいけんといふべし。一卷。加茂眞淵翁のにひまなび（新學）といふ書につきて、香川景樹が、己の意見を述べたるもの。

しんがぽうる 新嘉坡 【名】地名。馬來半島の南端の小島にして、マラッカ海峽の咽喉を扼し、東西二洋通商の要路を占め、南洋諸島の物産こゝに蝟集して、實に亞細亞洲中最重なる交易場の一なり。

しんかんす 震撼 【動サ變】ふるひ動かすをいふ。

しんぎ 震儀 【名】天子の御身をいふ。震は帝居の稱にて、常に天子の御事にいへり。儀は容儀の意。北史「陛下躬履謙虛、震儀永彰」。

じんぎくわん 神祇官 【名】神祇の祭祀を掌りし役所にして、大寶令の制には、太政官の上位にあり。これ、神祇の重んずべきを知らしめて、皇緒の由來を明にせるものなり。長官を伯といへり。維新後にも、一時置かれたりしが、今はなし。內務省の神社局は、其の名殘なり。

しんきじく 新機軸 【名】從來のものに比して、一層新なる事にいふ。「新機軸を出す」など。機軸は機關の軸。

しんきん 震襟 【名】みかどの御心。卓氏藻林に「震襟は帝の心也云々」とあり。

しんぎん 呻吟 【名】うめくこと。

しんきろう 蜃氣樓 【名】海上、または沙漠などにて、空氣の反射によりて、遠く樓臺などの影の、空中にあらはれたるもの。

しんくわい 秦檜 【名】宋の高宗の時、金と通じ、自、宰相の位にあるを以て、勤王の士を陷殺し、宋の社稷をして、復興の力なきに至らしめし國賊。

しんくわうしやうとうき 神皇正統記 【名】書名。三卷又は六卷に分つ。北畠親房卿の著、神代より、後村上天皇までの歷史なれども、南北朝の爭亂に憤慨して、皇統の正閏を明にし、大義名分を正せる長編の論文ともいふべきものなり。

しんけい 神經 【名】動物の、知覺と活動とを掌る機能をいふ。細微なる白線より成りて、腦髓と脊髓とより分岐して、身體の各部に達せり。また、單に、知覺感情などをもいへり。

しんげん 森嚴 【名】嚴重なる貌。きびしき貌。唐書に「法度森嚴」など見えたり。

しんこ 振古 【名】極古に同じ。むかし。詩經「振古如茲」。

じんこうにくわいしやす 人口に膾炙す 【句】人の口の端に留まれること。ひろく、言ひはやさるること。膾は、なます、炙は、あぶり肉をいふ。くわいしやを見よ。

しんこきんしふ 新古今集 【名】歌集。二十卷。元久二年、後鳥羽上皇の敕により、藤原定家、同家隆等の撰めるものにて、二十一代集中の花と稱せらる。

しんごんしゆう 眞言宗 【名】佛教八宗の一。眞如の密言の義といへり。大日經などの秘密眞言の教を所依とす。空海入唐して之を傳へ來り、後に、紀伊根來（ネゴロ）の僧聲鍠、一派を起して、古義と新義との二流に分る。

しんさん 辛酸 【名】艱難といふ意。嵇唐の詩「自致力所難、臨文情辛酸」の句あり。苦勞するを「辛酸を嘗む」など

じむさく 時務策【名】施政の方策。政治に就きての考案。

しんし 參差【名】齊しからぬをいふ。また、亂れたるさまにいふ。詩經「參差荇菜、左右流之」。

しんし 進止【名】進退かけひき。また、擧動といふこと。

しんし 進士【名】支那にて、國中の、學才秀でたる者を、試驗の上、諸官に選擧す。學校より出づるあり、州縣より出づるありて、其れ等の人を進士といふ。我が邦にも、また、いにしへ、此の法ありき。こゝうきよを見よ。

しんしん 縉紳【名】官位高き人。縉は挿む、紳は大帶にて、笏を腰帶に挿む義。即ち、朝に立つ人のさまなり。

しんしん 駸駸【副、形】馬の馳する如く早きこと。また「駸々として進む」など。

しんしん 津津【副、形】十分なること。溢れこぼるる貌。「興味津々」など。

しんしん 岑岑【副、形】雨の多き貌。また、轉じては、血、或は涙の多きことにも用ふ。

しんしんけ 縉紳家【名】高貴の家をいふ。縉紳參照。

じんしんないけいづせつ 人身內景圖說【名】書名。洋方醫傳中の前野良澤の條に、良澤が青木昆陽に關語を學び、また、譯官吉雄、楢林二氏につき、大に得る所あり、すなはち、關人の著はす所の人身內景圖說を購ひ歸り、杉田玄伯と小塚原の刑場に行き、刑屍を解剖し、人身內景圖說を出して、一々是を對照して、其の縝密なるに服したるよしいへり。後に之を譯述せり。

じんしんの、おなじからざるごと、そのおもてのごとし 人身不レ同如二其面一【文】左傳「人心不レ同如二其面一。吾豈敢謂下子之面如中吾面上哉」。

しんしやうのにせい 參商の二星【句】參星は、天の西方に在り、商星は天の東方に在りて、互に相行き違ひて、相遇せざるに譬へいふ。

じんじやう 尋常【副】周禮の地官媒氏の註に「八尺曰レ尋、倍レ尋曰レ常」とあり。また韓文公應二科目一時與レ人書に「尋常尺寸之間耳」とあるごとく、「幾の間」の意に用ひられたり。今は「尋常一樣」など云ひて、「普通」「あたりまへ」「よのつれ」などの意とす。

じんじやう 尋承【名】前に同じ。軍記などに多く用ひたり。

じんしやは、やまをあいす 仁者は山を愛す【文】論語「子曰知者樂レ水、仁者樂レ山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽」とあるより出づ。

しんしゆう 眞宗【名】一向宗ともいふ。親鸞上人の開きたる宗。佛教の一派にて念佛を主とする。親鸞は、承元頃の人にて僧侶の肉食帶妻を始めし人。

しんじゆつ 賑恤【名】貧者、および老者に施すこと。說文に「賑は富也。擧救也。恤は憐也。賑也」とあり。

しんじゆつ 心術【名】心だて。術は道なり。心の由る所の道をいふ。禮記「夫民有二血氣心知之性一而無二哀樂喜怒之常一。應レ感起物一而動、然後心術形焉」。

しんしよ 晉書【名】西晉の四代五十四年間、東晉の十一代百〇二年間の歷史なり。唐の魏徵等の、敕を奉じて撰せるもの。

しんすゐ 心醉【名】心の迷ふこと。理非の辨別なく、思ひつくこと。列子「列子見レ之而心醉」。

じんすゐ 盡瘁【名】骨を折ること。心を盡し、力を勞らすをいふ。（瘁は勞なり）。詩經「或燕燕居息。或盡レ瘁事國」。

しんすゐのらう 薪水の勞【句】薪をとり、水を汲む骨折り。即ち、物を煮、炊ぐことの骨折り。

しんせい 信西【名】藤原通憲の法名なり。

しんせいざん 眞西山【名】宋の人。名は德秀、字は景元。世に西山先生と稱す。大學衍義の著者。

じんせい、てうろのごとし 人生如二朝露一【文】漢書蘇武傳に、李陵より蘇武に諭す語中に「人生如二朝露一。何久自苦如レ此」。

じんせき 紝席【名】紝席ともかく。臥床のこと。

しんせふ 震懾【名】ふるひおそるること。恐るることの甚しきこと。

しんせん 神仙【名】支那にていふ、一種の、浮世離れし人。仙人。

じんせん 仁川【名】朝鮮の地名。仁川をインチョンと發音せり。京城を去ること七里。我が明治十六年の開港場にして、當港の、京城における、恰も、我が國橫濱の、東京におけるが如し。長崎より航路四百五十五浬を距つ。

じんぜん 往苒【副】日月の長引くをいふ。浸淫ともいふ。ぐづ〳〵と、日を送るにもいふ。

しんそ 神祖【名】皇室の御先祖を申す。德川時代には、家康を東照宮に祭れるより、神祖とも、神君とも稱せり。

しんそく 神速【名】その事の速にして、神の業かと思はるる程なるにいふ。史記酷吏傳「河內皆怪二其奏以爲二神速一」。

しんたい、きはまる 進退谷まる【文】谷は山谷をいひ、谷に追ひつめられたるに譬へ、困窮の義にいふ。詩經「人亦有レ言、進退維谷」。

しんたうしよだうのめいか 晉唐書道の名家【句】漢魏を經て晉に至りて、書法大成し、衛夫人、王羲之、王獻之など、斯道の宗と仰がるる人を出し、下りて唐に至り、大に盛

を極め、太宗を初めとして、顔眞卿、趙子昂など、多くの妙手を出せり。是等を概稱す。

しんたん 震旦 【名】支那のこと。

じんちうのりょう 人中之龍 【句】傑出したる人物をいふ。晉書「馬岌歎曰、名可レ聞。不レ可レ見二人中之龍一也」とあり。

しんちん 深沈 【名】落ちつきたる貌。「深沈有二大度一」など。

しんちゃう 申帳 【名】人名。魯の人。孔門の一人。

しんてんかんち 震天撼地 【句】天地を震動せしむるをいふ。

しんど 震怒 【名】天子の怒。詩經「王奮二其武一、如レ震如レ怒」。

しんど 新渡 【名】こわたりを見よ。

じんどう 鐓頭、神頭、矢頭 【名】矢の名。矢根より起れるなり。伊勢貞丈の安齋隨筆に、「ジンドウは實頭なるべし。鏑矢、蟇目、四目などは、皆中を彫りぬきて、空虚にすることなり。ジンドウは中を彫り抜かず、實にしてある故、實頭といふなり。ジツトウとはいひにくきゆゑ、ジンドウといふなり」とあり。また、神通の鏑矢といふあり。或説に、これ、神頭の事にて、目なしかぶらとて、目をくりあけぬ鏑なりといへり。然るを、貞丈は、また之を妄説なりとし、神通とは、神に通ずる義にて、其の物をほめていへるにて、別に其の物のあるにあらずといへり。

しんとくこう 愼德公 【名】徳川十二代將軍家慶をいふ。

しんないぶし 新内節 【名】俗謡の一種。鶴賀新内といへるものの創めし淨瑠璃なり。

しんのうし 神農氏 【名】支那古代の帝王。炎帝といふ。始めて耒耜を作り、民に稼穡の法を教へしよりの名なり。

しんばし 新橋 【名】地名。東京市芝區にあり。東海道鐵道の起點。

じんばらくえき 人馬絡繹 【句】人や馬などの多く往來するさまの、宛もはたを織る如きをいふ。

しんぷうしどうはう 秦風與レ子同袍 【句】秦風は秦の國風。しところもをおなじうせんを見よ。

じんぶん 人文 【名】人間のあや。人情、文物の義。易「觀二乎人文一」。

しんべつ 神別 【名】嵯峨帝のとき、姓氏の亂れたるを正して、神別、皇別、蕃別の別を立てたり。神別とは、神代の諸神より出でたる族をいひ、皇別とは、神武帝以來、皇統より岐れたる氏族をいひ、蕃別とは、歸化人の後をいへり。

しんぽう かうかん 神保行簡 【名】字は子廉。紀徳民の門にして、米澤藩の儒臣。興讓館の督學たり。

しんぼち 新發意 【名】しぼち、しんぼっちともいふ。新に佛門に入りたる者の稱。梵語の阿夷悟の唐譯。發意とは、無上菩提を求むる意を發する義にいへり。

しんまう 榛莽 【名】森林や草むらなど。榛は、字書に「叢木曰レ榛」とありて、樹木の叢生したる地。莽は「草也」また、「草深貌」など字典に見えて、草の生び茂りたる地をいふ。

しんめう 神妙 【名】しんべうともいふ。奇しく妙なるにいふ語。轉じては、行なごの勝れたるを褒むるにいふ。奇特。

じんやうかう 潯陽江 【名】潯陽は支那の地名。白樂天の配所なり。樂天、唐の元和十年、九江郡の司馬に左遷せられ、翌秋、この地に琵琶行を作る。「潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟瑟。主人下レ馬客在レ船。擧レ酒欲レ飲無二管絃一。云々」。白氏文集、古文眞寶前集等に出でたり。

じんらい 人籟 【名】人の口より發する響。莊子「人籟則比竹、是已」。

しんらばんしやう 森羅萬象 【句】宇宙間に存在するすべての物。

しんりうのかみ 新柳の髪 【句】新芽を出せる柳の枝垂を、髪と見立てての語。きはれては云々の條を見よ。

じんりん 人倫 【名】倫は、道なり、序なり。孟子「人倫明二於上一小民親二於下一」。

しんりやう 津梁 【名】船舶の出入碇泊する所をいふ。神は渡船所、梁は橋なり。

しんろん 神論 【名】書名。會澤正志の著。二卷。國体、形勢、廢情、守禦、長計等の條を立てて、神聖建國の聖意、富國強兵の策を論ぜるもの。漢文にてかけり。

しんわう 神旺 【名】精神の盛なるをいふ。神王ともかく。

しんをきをてつす 畛域を撤す 【文】物事に氣をおかぬやうにすること。畛は田の畔なり

しめん 市面 【名】市場をいふ。

しもかうべ ゆきひら 下河邊行平 【名】藤原秀鄕の裔、行義の子下總國下河邊の莊司たり。源賴朝に屬して親愛せらる。

しも、したにおよばず 駟も舌に及ばず 【文】一旦、口より發すれば、四馬を驅りて、之を追及せんとするとも能はずとの意。言語を愼むべきを敎へたるなり。論語「惜乎夫子之說二君子一也、駟不レ及レ舌」。

しもだ 下田 【名】伊豆國賀茂郡下田町。安政三年七月、米國總領事こゝに來り、一時開港場となれり。

しもつき 霜月 【名】陰暦十一月の異名。

しもつやみ 下闇 【名】月の下旬の闇の時をいふ。

しもと 笞、楚 【名】 細き木の枝、また、鞭の類をいふ。また、笞罰として、むかし、笞にて鞭つ刑あり。其のうつに用ふるものをもいへり。

しものつるぎ 霜の劒 【句】 劒をいふ。霜は、刃の物凄きを形容して添へたる語。張衡の出塞の詩に「吳鉤明似レ月。楚劒利如レ霜」とも見えたり。また、秋霜ともいひて、劒の異名とす。

しもをふんで、げんぴやういたる 霜を踏んで堅氷至る 【文】 易經中の句にして、何事も、原因なくして、急に起るべきものにはあらず、あらかじめ、誡むる所あるべしとの意。淮南子にも「聖人見レ霜而知レ氷」の語あり。

しやあん 謝安 【名】 東晉の人。朝廷の柱石たり。

しやう 笙 【名】 樂器。

しやう 廁養 【名】 馬飼の如き下賤の者。史記張耳傳「厮養卒」。厮は集韻に「折レ薪養レ馬者」とあり。

じやういろん 攘夷論 【名】 外人うち拂ふべしとの議論。安政年間、米艦來航以後一時、一部の志士之を唱へたりき。

じやうが 嫦娥 【名】 月の異名。羿といふ人、不死の薬を西王母にうく。其の妻嫦娥、竊に之を食ひしに、たちまち、仙術を得て、月中に奔る。是より、月の異名とすといふ。

しやうがい 障碍 【名】 さはり。さまたげ。邪魔。障礙。碍は礙の俗字。

じやうかい 淨海 【名】 平清盛の法號。

しやうかうくわん 彰考館 【名】 徳川光圀卿が、常陸水戸の地に建て、史籍の編輯を行ひし舘舍なり。彰考の名は、左傳「彰レ往考レ來」に出づ。

しやうかく 掌客 【名】 接待役などの意。周禮「掌二四方之賓客一云々」。

しやうがくばう 正覺坊 【名】 海の龜。南洋に多く産す。肉は滋養の功あり。俗にうみがめといふ。

じやうかのちかひ 城下之盟 【句】 敵人に、己が城下まで攻め入られてする盟にて、諸侯の國辱とする所。左傳「楚伐レ衛大敗レ之、爲二城下之盟一而還」。

じやうき 常規 【名】 つねの法。普通のきまり。誰しも知り居る法則。

しやうぎたい 彰義隊 【名】 明治元年戊辰、徳川氏の旗下の臣等激して、其の徒を集め、上野東叡山寛永寺に據り、彰義隊と稱して、官軍に抵抗せしが、忽ち敗れて解散せり。

じやうきやう 上卿 【名】 禁中の公事の時、大臣、大納言、中納言等の中にて、其の奉行當番の人。また、其の日の出席者中の上座のもの。また、記錄所の長官。

しやうぐん 將軍 【名】 將軍の名は、崇神帝の四道將軍に始り、聖武帝のとき、陸奥に鎭守府を置かれて、鎭守府將軍あり。而して、征夷將軍の如きは、鎭守府將軍ある上に、重ねて、東國に將帥を下すとき、臨時に置かれし職にして、征夷將軍の號は文屋綿麿に始まり、征東將軍は坂上田村麿に始る。平將門叛亂のとき、藤原忠文征夷大將軍たり。降つて源義仲、旭將軍たり。次に源頼朝、征夷大將軍たりしよりは、武家の棟梁、世々襲職したりき。

しやうくわ 彰化 【名】 うんりんを見よ。

しやうげ 障礙 【名】 しやうがいに同じ。

じやうけい 上卿 【名】 じやうきやうを見よ。

しやうけつ 猖獗 【名】 惡しきもの、勢の甚だ盛なるをいふ。

しやうげん 昌言 【名】 昌は當に同じ。道理にかなへる言をいふ。善言。唐經「禹拜昌言」。

じやうけんゐん 常憲院 【名】 徳川五代將軍綱吉の諡號。

しやうこ 商估 【名】 商賈といふに同じ。あきなひする家。

しやうこ 鼓鉦 【名】 樂器の名、唐金にて圓く平に造り、架（カケヤ）に懸けて、大鼓の如く叩くもの。たたきがね又かねなどいふ。

しやうごく 相國 【名】 太政大臣をいふ。支那の秦の時の官名に、相國といふがありて、わが太政大臣に當れり。

じやうごく 上國 【名】 上方（カミガタ）といふに同じ。開化に近き方をいふ。又、國の種類を、大上中下の四等に別けてもいへり。

じやうこん、げこん 上根、下根 【句】 利根、鈍根といふが如し。根氣（こゝにては性質）の、よきとあしきとの二なり。佛典の語。

しやうごゐん 聖護院 【名】 寺の名。京都市下岡崎の西なる聖護院町にあり。世々、法親王の住跡たり。此の邊、もとは愛宕郡に屬せしを、今は市内上京區の屬地となせり。

じやうざんきだん 常山紀談 【名】 湯淺元禎（常山と號す）の著。天文、永祿の頃より、泰平に及ぶまでの將士の武功逸事を記せるもの。戰國時代の風俗、武將の氣風、戰況を知るに便なり。

しやうざんのしかう 商山四皓 【名】 東園公、夏黄公、角里先生、綺里季の四人。漢の高祖、及、惠帝時代の高德家。

じやうざんのだせい 常山の蛇勢 【名】 首尾相應ずるをいふ。孫子「善用兵者如二率然一。率然者常山之蛇也云々」。また、文章の評語にも用ふ。

じやうし 上梓 【名】 版木に彫ること、出版すること。じやうぼく（上木）といふも同じ。

しやうじん 正身 【名】 その實物。ほんもの。サウジミ。

しやうじん 匠人 【名】 大工のこと。

しやうじん　精進【名】佛典の語。意を專にして道に進む義。又、佛道を修むる者は、肉食などせぬ故に、轉じては、蔬菜のみの膳部をいふ。
しやうじんおち　精進落【名】精進をやめて肉食に復すること。解菜。開齋。開葷。
しやうしや　商社【名】商人の組合。商業の會社。
しやうじや　精舍【名】精練行者の舍の意。寺の異名。
しやうじやう　精淨【名】淸くしてけがれなきこと。「淸淨潔白」など。
しやうじやうひ　猩猩緋【名】織物の名。極めて濃き赤紅色の羅紗。
しやうじや、ひつめつ　生者必滅【句】佛經の語。生れ出でたるものは、必ず滅ぶとの意。「生者必滅、會者定離」。
じやうじゆん　上旬【名】かみの十日をいふ。上浣。上澣。
じやうじゆ　成就【名】出來あがる。成功。しとげる。
しやうしよ　尙書【名】書經に同じ。又、官名。魏書の藝文志に「古之王者、必有史官、君之擧必書。左史記言、右史記事。事爲春秋、言爲尙書」とあり。此の尙書は、即ち今の書經を指せり。後世、官省長吏の名となれり。尙書省は、我が國の太政官の如きものなり。
しやうじよ　庠序【名】學校の異名。學問藝術を敎ふる所。

孟子「設爲庠序學校以敎之云々」。禮記「家有塾、黨有庠、術有序」。
じやうしよ　情緒【名】心緒といふに同じ。心の義。
しやうせん　上僊【名】死ぬること。即ち、天に上りて僊と爲る義といふ。莊子に「千歲厭世、去而上僊」と見ゆ。
しやうぞく　戕賊【名】殺すこと。そこなふこと。孟子「戕賊杞柳而以爲桮棬、則亦將戕賊人以爲仁義」。
しやうだい　掌大【名】手のひらほどの大きさといふこと。小さきもののたとへにいふ。「掌大の土地」など。
しやうだい　章臺【名】華章臺といふに同じく、美をつくしたる室。左傳「楚子成章華之臺。願與諸侯落之」。
じやうたう　常套【名】ありふれたること。通例なること。
しやうたん　賞嘆【名】ほめはやすこと。感賞に同じ。
じやうぢう　常住【副】常に。不斷に。「常住不斷の烟」など。
じようちやう　冗長【名】言葉や文章などの、くどくどしくて、だらだらと長きこと。冗は必用の外、無益の物の、長長として餘れるをいふ。文賦「要辭達、而理擧。故無取乎冗長」。
じやうてん　上天【名】してんを見よ。
じやうど　淨土【名】佛教に極樂國をいへり。佛ありて、僅の溷惡もなき世界なりといふ。
しやうとくたいし　聖德太子【名】用明天皇の第二の皇

子、豐聰耳と稱す。推古帝の時に攝政たり。其の二十九年に薨ぜり。年四十九。
しやうなう　樟腦【名】樟の木より採る成分。白雪の如くして、香氣甚だ高し。醫藥其の他の用とす。
しやうなん　湘南【名】湘は、實は、支那の河の名。湘南省を流れて洞庭湖にそゝぐ。然るに、湘の字は、相の水に從へるを以て、わが國の相模國相模川（馬入川）をこれになぞらへ、この川以南、即ち大磯、平塚、小田原等一體の地をも、詩人などの唱へはじめしより、今も同地方のことを湘南といへるが、かれこれ多し。
じやうのすけよしかげ　城介義景【名】城介は、秋田城の介なり。安達氏。景盛の子。北條時賴の母なる松下禪尼の兄なり。後に出家して、明悳の弟子となり、大連房願智と稱す。
しやうばう　椒房【名】皇后の宮室をいひ、また直ちに、皇后をいふ。漢宮儀に「皇后稱椒房、取其實蔓延盈升。以椒塗室、取溫暖除惡氣也」。貞氏藻林にも、「椒房殿名、皇后所居」とあり。
じやうばう　淨房【名】かはや。厠。
しやうはうざんばのけん　尙方斬馬之劍【句】銳利なる刀劍をいふ。尙方は、支那にて天子の使用せらるゝ器具を作る所。斬馬は馬をも斬り得る由なれば、天子の用ひらるゝ程の名劍といふ義の稱。漢書「雲曰臣願賜尙方斬馬之劍」。

しやうはちまんぐう　正八幡宮【名】伊勢貞丈の隨筆に「古き軍談の册子等に、武士の誓言に正八幡宮も御覽あれといふ語あり。八幡の本地は阿彌陀なりとて、八幡大菩薩と號するによりて、神と佛と入り交り、紛らはしき故、本地を去りて、正八幡は、正眞の八幡太神宮といふ義なるべし。觀音は三十三身に變化すといふによりて、變化せざる時の觀音の正體を、正觀音と號するに同じ」とあり。
しやうはふ　商法【名】商業上の行爲に關して規定せる法律。又、商賈のことを、古くより商法といふこと、勿論なり。
しやうはふ　正法【名】正しきのり。
しやうばん　相伴【名】饗應の席に列りて、主人を助けて客の對手となるもの。伴食。陪食。
じやうはりのかがみ　淨玻璃の鏡【名】きよき硝子のかがみ。又地獄にて、罪人を照すに用ふといふ鏡。
じやうびへい　常備兵【名】現役兵、豫備兵を通じていふ。
じやうふ　城府【名】人の、心中に區畫を設けて、他人に立て隔てすることに借り用ふ。晉書「昔高祖宣皇帝以深阻有若城府而能寬綽以容納」。
しやうふう　正風【名】江戶時代に、松尾芭蕉の始めし俳諧の一派。西山宗因の談林風に對して、眞面目にして滑稽に流

れぬ風體のものをいふ。

しやうふくだう　昌福堂【名】はつしやうゐんのじふにだうを見よ。

しやうぶつ　生佛【名】人の名。初めは嶽山の檢校たりしが俄に明を失ひてより、琵琶にあはせて、平家物語をうたふを業とせり。琵琶法師の元祖にして後鳥羽天皇頃の人。

しやうへいばし　昌平橋【名】東京市神田にあり。もと相生橋といひしを、元祿の頃改めしなりとぞ。昌平黌の前なるを以てかく名づけたるなり。この橋一旦廢絶せしが、近年、萬世橋と御茶の水橋との間に一橋を架して、再び昌平橋の名を與したり。

じやうぼんじやうしやう　上品上生【句】くぼんじやうどを見よ。

じやうみのせつ　上巳の節【名】正しくはジヤウシと云べし。維新前、三月三日に行ひし節句。初めは三月上の巳の日を以て行ひしが、後に三月三日と定め、猶、上巳の名を存せるなり。宋書禮志に「自ㇾ魏以後、但用二三月一、不ㇾ以ㇾ巳也」とあり。わが國に行はれし頃は、已に三月三日なりしなり。

しやうみやう　聲明【名】佛法の聲韻の學にて、信頌（ダシヤウ）に節をつけて諷誦するものなり。梵唄（ボンバイ）も、其の一なり。

じやうらふ　上臈【名】二位三位の貴女の稱。また、身分よき女をいふ。女ならでも官位高き人をもいふ。

しやうらんろう　翔鸞樓【名】はつしやうゐんのしらうを見よ。

しやうりうろう　蒼龍樓【名】常にサウリウロウといふ。はつしやうゐんのしろうを見よ。

じやうるり　淨瑠璃【名】元祿中に、小野お通といふ女の、三河國矢矧宿の淨瑠璃姫といふ者の事を、十二段草子に作りたるがもとにて、總て三味線にあはせて語る語り物をいへり。現今は、義太夫節にのみいへり。

しやうゑん　莊園【名】中世に、朝廷より、皇子、功臣等に賜ひし田園をいひ、また、後には、私費にて開墾したる地をもいへり。されば、武力をもて、他人のを強奪せるものもあり。

しやうをおもくし、ばつをかろくす　賞を重くし罰を輕くす【句】書經大禹謨に「罪疑惟輕（ツミノハシキハカロク）、功疑惟重（イサヲノハシキハオモク）」とあるより出づ。

しやか　釋迦【名】佛教の開祖。摩迦陀國淨飯王の子。悉達太子と稱す。印度のヴラヴァスーツに生れ、十九年の時出家して深山に入り、婆羅門畢盤に從ひて法を學び、佛法を創めしなり。

しやが　車駕【名】天皇乘御の御車を申すにて、やがて、御體をもさし奉る。「車駕東巡す」など。又キヨガといふ譯みくせもあり。

しやかう　社交【名】社會の交際なり。

じやかご　蛇籠【名】籠の目を荒く長く編みて、中に石を入れて河の流れを堰き、堤防の崩るるなどを防ぐに用ふるもの。

しやく　錫【名】錫杖をいふ。

しやく　笏【名】笏の音コツなれども、さては、骨と同音なるにより、言忌みして、かく訓ぜり。和名抄「俗云ㇾ尺。手板。長一尺六寸、濶三寸、厚五分也」とあり。

じやく　寂【名】圓寂の略にて、涅槃の漢譯なり、僧侶の死をいふ。

じやくくわん　弱冠【名】齡二十になりたるものをいふ。曲禮に曰く「人生十年曰ㇾ幼學、二十曰ㇾ弱冠、三十曰ㇾ壯、有ㇾ室。四十曰ㇾ強而仕」とあり。わが國の冠者といふに同じ。

しやくしやくとして、よゆうあり　綽綽有ㇾ餘裕【文】綽綽も、裕も、寬の義。ゆるやかにして、なほ十分にゆとりのあること。孟子「進退豈不ㇾ綽々然有ㇾ餘裕一哉」。

しやくぜん　釋然【副、形】よくわかりて明になること。また、心の結ぼほれたるが釋けたるにもいふ。

しやくでん　釋奠【名】またセキテンともよむ。先聖（孔子）、先師（顏淵）、九哲（閔子騫、冉有、冉伯牛、仲弓、季路、宰我、子貢、子夏、子游等）を祀る儀式。陰曆二月、八月の兩度に、大學寮にて行はれしなり。諸侯以下の略式を以て行ふを釋菜といふ。公事根源に委し。

しやくどう　赤銅【名】銅百、金七分、アンチモニイ三十を混合したる合金の名。

しやくとりむし　尺蠖【名】夏秋の候、草木の葉に住む虫なり。長二寸ぐらゐ、前進する時、體を屈め、首尾相應じて屈伸する狀、恰も尺を取るに似たれば名づく。桑の幼芽に害をなすこと大なり。羽化すれば蛾となる。

しやくび　頸【名】しやツくび、そツくび、そツくび、などいへり。しやい、しやツ、そツなどは、卑しめていふ語にて、夫奴（ヤツ）の轉じたるものならんといへり。しやつら、しやツつらなどの語もあり。

じやくめつ　寂滅【名】佛典の語。物の自然に消滅するをいふ。滅ぶること。死ぬること。

じやくやく　雀躍【副、形】欣びて躍ること。雀の飛びをどるが如きより、いふなり。莊子「鴻蒙拊ㇾ脾、雀躍不ㇾ已」。

しやくやくのたはぶれ　芍藥の謔【句】詩經に「惟士與女、伊其相謔、贈ㇾ之以ㇾ芍藥」とあり。これ、鄭國の風俗にて、男女相共に戲謔し、芍藥の花を以て相贈答して、情交を

結ぶ意なり。

しやくらん 灼爛【副、形】きら〳〵として明なる貌。詩經の節南山の箋に、「言尹氏居二三公之位一天下之民俱視二女之所一爲、皆憂心如二火灼一爛之一矣」。

しやくわいがく 社會學【名】英語の Sociology の義譯。社會の發達、變遷、沿革を研究する學なり。社會とは、世間といふに同じく、多數の人民が、相頼りて生存せる世をいふ。

しやこ 鴟鴞【名】支那にある鳥の名。形は鷄の雌に似て、頭は鷲の如く、胸のあたりに丸く白き紋ありといへり。詩などには、よく詠まれたり。

しやしよく 社稷【名】社は土の神、稷は穀物の神。古は諸侯封を受くれば、必ず社稷を立てて之を祭り。國家と存亡を共にせり。因りて國家の義ともす。禮記「建二國之神位一右二社稷一而左二宗廟一」。

しやだつ 洒脫【名】洒落に同じ。さつぱりしたること。打ちとけて氣のおかれざること。俗氣なきこと。

しやてい 舍弟【名】舍は家の義、弟のこと。

しやば 娑婆【句】梵語にて、忍土、忍界などの義。即ち三毒諸煩惱を忍受するより起れる名。此の世。現在の世。

しやばけいきう 車馬輕裘【名】れがはくは、しやばいけいきうを見よ。

じやびせん 蛇味線、蛇皮線【名】琉球にて、えらぶうなぎの皮にて胴を張りたる樂器。もと二絃なりしを本土に渡りてより三絃とし、三味線といふ。

じやへき 邪僻【名】よこしまなる性質。ひがみ根性。ねちけたる心がら。

しやみ 沙彌【名】（梵語。息レ惡行レ慈の義）。始めて佛門に入り、剃髪したるものをいふ。僧行の熟せざる初心の僧。高僧にても、自ら云ふ時は、謙遜して、沙彌某といふ。

しやみに 沙彌尼【名】女の沙彌。前條の語釋を見よ。

しやむ 遮羅【名】國の名。亞細亞洲の南端にあり。東は安南に隣り、西北は緬甸に堺す。サイアンともいふ。

しやんはい 上海【名】支那の地名。申口、または、滬口とも稱す。支那揚子江口の南方に位し、水運の便殊によければ、支那の外國貿易は、過半、此の港にて行はる。五十年ばかり以前の開港にして、實に東洋第一の貿易場たり。

しやもん 沙門【名】梵語沙迦摩那の畧。僧侶をいふ。長阿含經に「沙門者、捨二離恩愛一、出家修道、攝二御諸根一、不レ染二外欲一、善心一切、無レ所二傷害一、遏レ樂不レ忻、逢レ苦不レ戚、能忍如レ地」とあり。また、釋氏要覽に「出家之都名也」といへり。

しやらく 洒落【副】打ちとけてさつぱりとして居るをいふ。「洒々落々」、「風流洒落の情」など。

しゆいん 朱印【名】足利氏より徳川氏の時代に、幕府より發する許狀には朱印をおしたりしかば、其の許狀を御朱印といへり。即ち、船舶の海外に航して貿易することを許されたるものを、御朱印船といひし類なり。

しゆいんぶね 朱印船【名】ごしゆいんぶねを見よ。

しゆうぎはん 衆議判【名】當座に詠出せる歌の優劣を、衆人の、相互に批判選評するをいふ。

しゆうしゆばうくわん 袖手傍觀【句】手を袖に入れたまゝ、傍より觀る意にて、他の出來事に關係せぬをいふ。

しゆうはい 崇拜【名】尊みあがむること。また、サウハイ、スウハイなどもいふ。

しゆうをけつす 決雌雄【文】勝負を決すに同じ、史記「願與漢王一挑戰決二雌雄一」。

しゆえい 輸贏【名】勝負と云に同じ。正字通に「凡攻戰博簺、勝曰レ贏、負曰レ輸」。正韻に「俗謂二勝負一爲二輸贏一」とあり。

じゆえいのあらし 壽永の嵐【名】源頼朝、義仲等起るに及びて、平氏は、安德天皇を奉じて西し、壽永四年三月、遂に帝は西海の水に入り給ひ、平氏の一族、また檀の浦の藻屑となりしをいふ。

しゆがく 朱學【名】支那の朱熹の學說をいふ。其の主張は、理氣心性の研究にありて、學びて聖人に至る說を立て、道學も、皆性に基く理を證するにあり。我が國にて、藤原惺窩、林羅山等、その學派なり。

しゆき 朱熹【名】字は元晦、晦庵と號す。宋の學者。寧宗の慶元六年歿す。年七十一。しゆがく參照。

しゆくがくこうじゆ 宿學鴻儒【名】宿學も鴻儒も、共に大學者の意。

しゆくきん 淑均【名】性行の善良にして公平なるをいふ。

しゆくし 宿志【名】かねてよりの希望。

しゆくしゆく 謖謖【副、形】拔け出でたる貌にいふ。字書に峻挺貌とあり。世說新語「世目二李元禮一謖謖如二勁松下風一」。

しゆくしん 肅愼【名】亞細亞の東北なる滿洲、韃靼の邊を占居せし種族の名。周の時よりありて、西漢に至りて亡ぶ。齊明帝の朝に、阿部比羅夫、數度これを伐つ。

しゆくせい 夙成【名】はやく出來上がること。

しゆくぜん 肅然【副、形】嚴然といふに同じ。正しき貌。

しゆくちのじゆつ 縮地の術【名】神仙傳に、後漢の費長房といふもの、神術ありて、能く地脈を縮めて、千里も目前に來むるよしを記せり。また、蘇子訓といひし仙人も、縮地の術を有せし由なり。共に、後漢書の方術傳、また、蒙求などに出でたり。我が萬葉集十五の卷に、中臣朝臣宅守、越前

に流されたるとき、狹野茅上娘子の詠める歌に「君が行く、道のながてを、繰り畳ね、焼き亡さむ、天の火もがも」とある上句は、けだし是等より取れるなるべし。歌の意は、道を焼きてなくするほどの天火が欲しいものである。さうしたならば、越前までの長き道中を繰り縮めやうものをとなり。近くば常に行き通ふべきに、道遠き故に逢ふことの難きを歎きたるなり。

しゆくばく　菽麥【名】菽は大豆、麥はむぎなり。物事の分別なきものを「菽麥をも辨ずること能はず」などいふ。左傳に「周子有二兄而無一慧、不レ能レ辨二菽麥一」。

しゆくはつ　祝髪【名】祝は斷つにて、髪毛を剃りおとして佛門に入るをいふ。薙髪。剃髪。落飾。

しゆくふん　宿憤【名】古きうらみをいふ。

しゆくめいろん　宿命論【名】人間一生の運命は、其の未だ生れぬ前より決定したるものにて、人力によりて、之を變化し得るものにあらずとの説。

しゆくわいあん　朱晦庵【名】朱熹の號なり。

しゆくゑん　淑媛【名】賢女をいふ。淑は善の義、媛は美女。

じゆごう　准后【名】皇后に准ずる意にて、女官の、皇子、皇女を生みまゐらせたるに、時として賜ふ稱號。また、准三后の略稱としても用ひらる。准三后は、准三宮に同じく、太皇大后、皇太后、皇后の三宮に准ずるにて、親王、大臣などに賜ふことある稱號。これ、其の位に准ぜらるるにはあらずして、三宮の給はるべき祿に准ぜられて、俸を賜はるなり。

しゆこう　殊功【名】殊に人に勝れたる功。絶異の勳功。

しゆざい　こうざい　首材、後材【名】船の龍骨の前後に立て、舳艫にすべき材。首材をステムス、後材をポストといふ。

じゆざう　壽藏【名】生前に營む墳墓をいふ。書言故事「稱二人生墳一曰二壽藏一。唐姚崇自立二壽藏於萬安山一」。

しゆし　殊死【名】必死のこと。死する覺悟などの意。史記「兵皆殊死而戰」。

じゆし　豎子、豎子【名】卑賤の少年をいふ。又、他を卑み罵りていふ詞。豎は字書に「童僕之未レ冠者」とあり。豎は豎の俗字。晉書の阮籍傳「時無二英雄一、使二豎子成一名」。

しゆしがく　朱子學【名】朱學に同じ。

しゆしきだう　修式堂【名】つれにジヤシキともよべり。ほつしやうゐんのじふにだうを見よ。

しゆしのがく　洙泗の學【名】洙水、泗水、二川共に、支那の魯の國を流る、河。孔子は魯人なるを以て、その學を洙泗の學といふ。

しゆじやう　主上【名】天子の御身を申しまつる語。

しゆじやうかい　衆生界【名】人間界といふに同じ。

しゆしゆ　朱子瑜【名】明人なり。字は魚瑜、舜水と號す、わが萬治二年長崎に來る。博學多能なるを以て、徳川光圀卿これを召して、自ら門人と稱せり。天和二年四月歿す。年八十三。光圀、文恭先生と諡し、水戸家の墓地、瑞龍山に葬る。

しゆしゆつ　輸出【名】正しくはシユスキといふべし。又、俗にユシユツともいふ。經濟學上の語にして、交易して、國産を海外諸國に送り出だすをいふ。彼れより取り入るるを輸入といふ。

しゆしゆんする　朱舜水【名】しゆしゆを見よ。

しゆしよう　殊勝【名】佛經の語。殊に勝れたるをいふ。奇特、神妙などの意。

しゆす　炷す【動佐變】燈をともす、火を焚く、薫らす、などの意。

しゆせん　酒仙【名】大酒家をいふ。杜子美の飲中八仙歌に「李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙」とあり。

じゆぜん　受禪【名】皇太子の、帝より位をゆづり受け給ふをいふ。邇體天皇の安閑天皇に譲り給ひしに始まれり。

しゆぜんじ　修善寺【名】伊豆國田方郡修善寺村にあり。源範頼の自殺せしも、源頼家の幽せられて殺されしも此の寺なり。また、此の地に温泉あり。世に名高し。

しゆぜんちう　朱全忠【名】五代の梁の太祖。初めの名は温。唐の叛賊黄巢が臣なりしが、後に唐に降り、名を全忠と賜はる。次第に權を得て、唐の天下に代れり。

しゆせんど　守錢奴【名】徒らに貨財を積むのみにて、之を施興することを知らざるもの。俗に「金の番人」といふ。

しゆせんりよ　守錢虜【名】守錢奴に同じ。後漢書馬援傳「凡殖貨財、貴能施賑、否則守錢虜耳」。

しゆそりやうたん　首鼠兩端【句】鼠は、性疑ひ多き故、穴を出づるに、まづ四方を覗望し、一進一却兩端を持するを以て、人の決斷に乏しきにいふ。漢書「田蚡怒曰、與二長孺（韓安國）一共一尤翁（竇嬰）一、何爲首鼠兩端」。

しゆちにくりん　酒地肉林【句】史記の殷本紀「紂好酒、淫樂、戯於沙丘、以酒爲池、懸肉爲林、使下男女裸相逐其間上爲長夜之飲、百姓怨望」。

しゆちんのたみ　朱陳の民【句】白氏文集卷十に朱陳村の詩あり。徐州古豐縣中の一村落に朱陳村ありて、朱氏陳氏の外には、他の種族を交へず。一村擧げて一家の如く、嫁娶もまた、他村に求むることなしといへり。依りて風俗淳朴にして、よく團欒せる僻村の民を、「朱陳の民」などいへり。

しゆついうす　率由【動サ變】循ひ由る。其のものよりて

行ふ。書經の微子之命「率二由典常一、以薦二王室一」。

じゆつこん　入魂【名】殊に親しく交るをいふ。

しゆつとうち　出頭地【句】他人よりも傑出せるをいふ。歐陽公、蘇軾の應擧文を見て曰く「老夫當二避一。此出二一頭地一」。

しゆつらんのほまれ　出藍の譽れ【句】弟子の師に勝れるをいふ。荀子「青出二於藍一而青二於藍一、氷出二於水一而寒二於水一」。

しゆにふ　輸入【名】俗にユニフとをいふ。しゆしゆつを見よ。

じゆぴとる　Jupiter【名】羅馬の神にして、希臘のジュウスを元とす。ジュウスは希臘の首神なり。

しゆみん　朱明【名】支那明朝をいふ。明の祖は朱元璋なる故、其の姓を冠らしめていへるなり。

しゆんいつ　儁逸【名】人物秀で、才能すぐれたるをいふ。秀逸、卓逸に同じ。後漢書袁紹傳に「故九江太守邊讓、英才儁逸、以二直言正色一論不二阿紹一、身被二梟懸之戮一、妻孥受二灰滅之咎一」とあり。但し、儁は俊に同じく、又、雋にも通ず。

じゆんきやう　順境【名】逆境の反對にして、位置、境遇、ともに、わが思ふ所になりゆく場合をいふ。

じゆんくわ　順化【名】地名。正しくはフウエと呼ぶ。安南國の都府なり。

しゆんくわう　春光【名】春の光。春の日。春の陽氣。春の風光。

じゆんさい　蓴菜【名】水草の名。池澤等の中に生ず。葉は水面に浮び、根は水中にありて、莖長し。春夏の頃新芽を採りて食す。

じゆんし　殉死【名】主君の死にたるとき、其の臣たるものか、後をおひて自殺するをいふ。

しゆんじうたかし　春秋高【文】高齢といふに同じ。年の老いたるなり。史記「高后用事、春秋高」。

しゆんじうとむ　春秋富【文】年少なり。年少きものは餘年多ければいふ。史記「皇帝春秋富、未能治二天下一」。但し太平記などに「一人として春秋に富むことを得す」などいへるは、行く末の安樂を期し難しの意に轉用せるなり。

しゆんじうのじふにしよこう　春秋の十二諸侯【句】春秋とは、支那周の平王四十九年より、敬王三十九年に至る二百四十二年間の時代をいふ。其の時の列國に、齊、楚、晉、秦、魯、衛、宋、燕、鄭、曹、陳、蔡の十二國あり。かくて、此の時代を經て、是等の諸國互に爭奪を恣にせる中に、勝れて強きは、秦、楚、齊、燕、韓、魏、趙の七國となす。之を戰國の世の七雄と稱す。

しゆんしんけいこう　春衫輕策【句】春の單服に輕き杖（イデタチ）との義にて、身輕なる出立にいへり。

しゆんしや　春社【名】春の社日。禮記に「仲春の月元吉を選び、民に命じ社せしむ」とある注に「社は后土なり。民をして之を祭り、以て農を祈らしむ。春分の前に近き戊の日を以て行ふ。」

じゆんじようをひだりにし、きくをみぎにす　左二準繩一右二規矩一【文】準は水平を計り、繩は直を計り、規は圓をなし、矩は方形を爲す器械。爲（ス）ることなすこと、必ず他の準繩規矩、即ち標準模範となるをいふ。

じゆんしやく　巡錫【名】僧侶の遊行するをいふ。飛錫に同じ。錫は錫杖にて僧のつく杖なり。杖の頭に數個の環をつけたるもの。地を突きて響をなさしめ、惡蟲、毒獸を警むといふ。

しゆんしゆたう　占守島【名】千島列島の中、東經百五十六度三十二分にある、わが國極東の島。近時、郡司大尉開拓に從事す。

しゆんじゆん　逡巡【名】しりごみ、あとしざり。

じゆんじゆん　諄々【副、形】つくづくと。れんごろに、ていねいになど。詩經「誨爾諄々」。

しゆんしよく　春色【名】春の景色。

じゆんしよく　潤色【名】つやを添ふること。文章などを、一層巧みに修飾するなどにいへり。

しゆんせう　峻峭【副、形】山岳の嶮絶なる貌。

しゆんせつ　浚渫【名】さらふこと。河底の泥など取り除くをいふ。「河底を浚渫す」は動詞に活きたるもの。

しゆんとく　俊德【名】德の高きをいふ。書經に「克明二俊德一」の註に「俊同峻」とあり。

じゆんとくゐんの、きんちゆうのごとさも、かかせたまへるふみ　順德院の禁中の事どもかかせたまへる書【句】順德帝の御著述なる禁秘抄をいふ。三卷あり。

じゆんなんろくかう　殉難錄稿【名】維新の前後に國難に殉せし者の傳記。今なほ、編纂中に係れり。

しゆんばのほね　駿馬の骨【句】しばのにれを見よ。

しゆんばん　春盤【名】蓬蒻飾りといひ、また食摘と稱するものなり。正月の祝の食料にて、盤に松竹梅鶴龜などを飾り、（シアハヒカチグリ）貽、勝栗、密柑、海藻など盛りたるもの。

じゆんび　淳美【名】心の清く美しきをいふ。淳一にして雜り氣のなきなり。

しゆんぶん　春分【名】二十四季の一。二月の中節、陽曆三月二十日前後に當る。

じゆんぼく　醇朴【名】素朴、質朴などいふに同じ。つくり